飛瀬・底津遺跡

国道256号道路改良工事に伴う

緊急発掘調査報告書

1995

岐阜県　美濃土木事務所

財団法人　岐阜県文化財保護センター

底津遺跡第３ａ号住居址出土異形土器

序

岐阜県洞戸村は岐阜市の北北東約30kmに位置します。村の北東にそびえる高峰高賀山より流れる岩清水が流れを大きくしてやがては板取川と合流して村の中心部を流れ、美しい渓谷など自然に恵まれた環境を今なお保持する“ふるさと”であります。この板取川に沿って走る国道256号は村内の重要な生活道路であると同時に観光道路としての役割も担っています。この国道256号が通る栗原・飛瀬地区内は、地形が急な上道路幅が狭く観光シーズンには渋滞を引き起こす場所でもありました。この渋滞を避けるために計画された国道改良工事は道路を大きく東へ迂回させて板取川を渡るコースをとることとなりましたが、この場所には飛瀬遺跡・底津遺跡の所在が知られており協議の結果事前に発掘調査を行い記録保存を実施することとなりました。

発掘調査の結果、飛瀬遺跡からは県内最初の良好な資料である縄文時代早期前半に属する押型文土器が、底津遺跡からは縄文時代中期後半に属する集落が確認される等予想以上の大きな成果を上げることができました。また、飛瀬・底津遺跡を結ぶ橋は縄文橋と名づけられ、ここを訪れる後世の子ども達がいつまでも我々の遠い祖先の生活の様子を思い浮かべる事ができることでしょう。

最後になりましたが、本報告書が刊行されるまでには、発掘作業・整理作業に直接参加された方々をはじめとして、専門的事項について多くの方々のご指導を賜わりました。また、関係諸機関、洞戸村教育委員会、地元の関係各位の皆様からは終始多大なご援助・ご協力を賜りました。

末尾ではありますが、改めて厚くお世話になった方々にお礼申しあげます。

平成７年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　吉　田　　豊

例　　言

1．本書は飛瀬遺跡（県遺跡番号1194）・底津遺跡（県遺跡番号6827）の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は一般国道256号改良工事に先立つ発掘調査である。岐阜県より委託を受け、調査を(財)岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は平成５年度に底津遺跡・飛瀬遺跡を、平成６年度に飛瀬遺跡を実施した。

4．発掘調査は、平成５年度は中島康夫が、平成６年度は佐野康雄が担当した。

5．方位は座標北を使用している。

6．本書の執筆は、第II章第１節を古田靖志が、第III章第３節包含層出土遺物の内第III期の遺物について小野木学が、その他を佐野康雄が担当した。また、編集は佐野が行った。

7．地形測量、航空撮影は(株)イビソクに委託して実施した。

8．遺物の写真撮影はスタジオ・ベガに委託して実施した。

9．自然科学分析は(株)パレオ・ラボに委託して実施した。第Ｖ章自然科学分析「底津遺跡竪穴住居址の熱残留磁化測定」はパレオ・ラボの藤根久氏よりの報告である。

10．調査及び整理参加者

安達さつ子・今村慶一・野村杉二・野村きよ子・武藤てる子・野村民子・野村きみ子・川合幸・篠田常雄・篠田わさ子・武藤政行・古田利三男・野村あやの・野村敏子・後藤芳子・田口睦子・大澤政夫・武藤ときえ・武藤常雄・林　武夫・野村志ゆう・瀬口節子・加納恭子・佐藤まさみ・山本旨穂・高島俊美・高嶌桂子・酒向邦子・進藤有美子・長坂　薫

11．発掘調査及び報告書作成にあたって下記の方々よりご指導、ご協力を賜りました。記して感謝を表します。（順不同、敬称略）

古田靖志・山田　猛・矢野健一・藤根久・春日井恒・藤田英博・富井眞・澤村雄一郎・小谷和彦・吉田英敏・後藤信幸・藤澤良祐・青木　修・内堀信雄・尾野善裕・増子　誠

12．本書に報告した遺跡の記録及び出土した遺物は（財）岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

例　言

第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過……1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　遺跡周辺の地形・地質……3
　第２節　周辺の遺跡……5

第Ⅲ章　飛瀬遺跡の遺構と出土遺物……7
　第１節　層序……7
　第２節　遺構……10
　第３節　包含層出土遺物……21

第Ⅳ章　底津遺跡の遺構と出土遺物……57
　第１節　層序……57
　第２節　遺構と出土遺物……60
　第３節　包含層出土遺物……101

第Ⅴ章　自然科学分析……147
　底津遺跡竪穴住居址の熱残留磁化測定……147

第Ⅵ章　まとめ……156
　第１節　飛瀬遺跡出土の大鼻式土器について……156
　第２節　底津遺跡における集落の変遷について……156
　第３節　飛瀬・底津遺跡における打製石斧の製作技法について……158

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺の第四紀層の地質……2
第２図　飛瀬・底津遺跡周辺の遺跡分布図……4
第３図　飛瀬・底津遺跡の地形測量図……6
第４図　飛瀬遺跡の土層断面図……8
第５図　飛瀬遺跡遺構平面図……9
第６図　第１号建物址・第１号不明遺構・第１号溝……12
第７図　Ａ区ピット……13
第８図　Ｂ区ピット・土坑……14
第９図　第２号不明遺構……16
第10図　Ｃ区土壙・集石遺構……17
第11図　土壙・土坑・第２号不明遺構出土陶器他……19
第12図　第２号不明遺構出土陶器他……20
第13図　包含層出土土器（第Ⅰ期）……21
第14図　包含層出土石器（第Ⅰ期）……22
第15図　包含層出土土器（第Ⅱ期）①……24
第16図　包含層出土土器（第Ⅱ期）②……25
第17図　包含層出土石器（第Ⅱ期）①……28
第18図　包含層出土石器（第Ⅱ期）②……29
第19図　包含層出土石器（第Ⅱ期）③……31
第20図　包含層出土石器（第Ⅱ期）④……32
第21図　包含層出土石器（第Ⅱ期）⑤……35
第22図　包含層出土石器（第Ⅱ期）⑥……36
第23図　包含層出土石器（第Ⅱ期）⑦……37
第24図　包含層出土石器（第Ⅱ期）⑧……39
第25図　包含層出土石器（第Ⅱ期）⑨……43
第26図　包含層出土石器（第Ⅱ期）⑩……44
第27図　包含層出土石器（第Ⅱ期）⑪……45
第28図　包含層出土土器・陶器（第Ⅲ期）①……47
第29図　包含層出土陶器（第Ⅲ期）②……48
第30図　包含層出土陶器他（第Ⅲ期）③……49
第31図　包含層出土陶器他（第Ⅲ期）④……50
第32図　底津遺跡土層断面図……58
第33図　底津遺跡遺構平面図……59
第34図　第１号住居址出土土器……61

第35図　第１・８号住居址……62
第36図　第１号住居址出土石器……63
第37図　第２号住居址……64
第38図　第２号住居址出土土器……66
第39図　第２号住居址出土石器（１）……66
第40図　第２号住居址出土石器（２）……67
第41図　第３ａ・３ｂ号・４ａ・４ｂ号住居址……69
第42図　第３ａ・３ｂ号出土土器（１）……70
第43図　第３ａ・３ｂ号出土土器（２）……71
第44図　第３ａ・３ｂ号出土土器（３）……72
第45図　第３ａ・３ｂ号出土石器（１）……73
第46図　第３ａ・３ｂ号出土石器（２）……74
第47図　第４ａ・４ｂ号住居址出土土器……76
第48図　第４ａ・４ｂ号住居址出土石器……77
第49図　第５号住居址……78
第50図　第５号住居址出土土器……79
第51図　第５号住居址出土石器……80
第52図　第６号住居址……82
第53図　第６号住居址出土土器……83
第54図　第６号住居址出土石器……83
第55図　第７号住居址……85
第56図　第７号住居址出土土器……86
第57図　第７号住居址出土石器……87
第58図　第８号住居址出土土器……88
第59図　第８号住居址出土石器……88
第60図　第９号住居址……89
第61図　第９号住居址出土土器……90
第62図　第９号住居址出土石器……91
第63図　第10号住居址……92
第64図　第10号住居址出土土器……93
第65図　第10号住居址出土石器……93
第66図　第11・12号住居址……94
第67図　第11号住居址出土土器……95
第68図　第11号住居址出土石器……95
第69図　第12号住居址出土土器……96
第70図　第13号住居址……97
第71図　第14号住居址……97

第72図　土坑群……99
第73図　土壙墓……99
第74図　土壙墓出土遺物……100
第75図　包含層出土土器（１）……103
第76図　包含層出土土器（２）……104
第77図　包含層出土土器（３）……106
第78図　包含層出土土器（４）……108
第79図　包含層出土土器（５）……110
第80図　包含層出土土器（６）……111
第81図　包含層出土土器（７）……113
第82図　包含層出土土器（８）……115
第83図　包含層出土土器（９）……118
第84図　包含層出土土器（10）……119
第85図　包含層出土土器（11）……121
第86図　包含層出土土器（12）……122
第87図　包含層出土土器（13）……124
第88図　包含層出土土器（14）……125
第89図　包含層出土土器（15）……127
第90図　包含層出土土器（16）……128
第91図　包含層出土石器（１）……129
第92図　包含層出土石器（２）……131
第93図　包含層出土石器（３）……132
第94図　包含層出土石器（４）……134
第95図　包含層出土石器（５）……135
第96図　包含層出土石器（６）……137
第97図　包含層出土石器（７）……138
第98図　包含層出土石器（８）……139
第99図　包含層出土石器（９）……141
第100図　包含層出土石器（10）……142
第101図　包含層出土石器（11）……143
第102図　包含層出土石器（12）……144
第103図　包含層出土石器（13）……145
第104図　６号住居址（No.04）の段階交流消磁結果……149
第105図　７号住居址（No.04）の段階交流消磁結果……149
第106図　７号住居址の残留磁化測定結果と永年変化曲線……150
第107図　打製石斧製作工程模式図……158

図　版　目　次

巻頭写真　底津遺跡第３ａ号住居址出土異形土器

図版１－１　飛瀬遺跡第１号建物址

－２　飛瀬遺跡第２号不明遺構検出状況

－３　飛瀬遺跡第２号不明遺構

－４　飛瀬遺跡ＳＫ１

－５　飛瀬遺跡ＳＫ２

－６　飛瀬遺跡ＳＫ３

－７　飛瀬遺跡ＳＫ４

－８　飛瀬遺跡ＳＫ５

図版２－１　飛瀬遺跡ＳＫ６

－２　飛瀬遺跡ＳＫ７

－３　飛瀬遺跡ＳＫ８

－４　飛瀬遺跡ＳＫ９

－５　飛瀬遺跡ＳＫ10

－６　底津遺跡調査前風景

－７　底津遺跡調査作業風景

－８　底津遺跡第１号住居址

図版３－１　底津遺跡第２号住居址

－２　底津遺跡第３ａ・３ｂ・４ａ・４ｂ号住居址

－３　底津遺跡第３号住居址石皿出土状況

－４　底津遺跡第３ｂ号住居址埋甕

－５　底津遺跡第５号住居址

－６　底津遺跡第６号住居址

－７　底津遺跡第７号住居址

－８　底津遺跡第６号住居址炉

図版４－１　底津遺跡第７号住居址炉

－２　底津遺跡第８号住居址

－３　底津遺跡第９号住居址

－４　底津遺跡第10号住居址

－５　底津遺跡第11・12号住居址

－６　底津遺跡第13号住居址

－７　底津遺跡第14号住居址

－８　底津遺跡土壙墓

図版５－１　飛瀬遺跡ＳＫ１出土遺物

－２　飛瀬遺跡ＳＫ２出土遺物

－3　飛瀬遺跡ＳＫ３出土遺物
－4　飛瀬遺跡ＳＫ３出土遺物
－5　飛瀬遺跡ＳＫ３出土遺物
－6　飛瀬遺跡ＳＫ４出土遺物
－7　飛瀬遺跡ＳＸ２出土遺物
－8　飛瀬遺跡ＳＸ２出土遺物
－9　飛瀬遺跡包含層出土常滑
－10　飛瀬遺跡包含層出土古瀬戸
図版６－１　飛瀬遺跡包含層出土土器（第Ⅰ期）
－2　飛瀬遺跡包含層出土石器（第Ⅰ期）
図版７－１　飛瀬遺跡包含層出土土器（第Ⅱ期）①
－2　飛瀬遺跡包含層出土土器（第Ⅱ期）②
図版８－１　飛瀬遺跡包含層出土石器（第Ⅱ期）①
－2　飛瀬遺跡包含層出土石器（第Ⅱ期）②
図版９－１　飛瀬遺跡包含層出土石器（第Ⅱ期）③
－2　飛瀬遺跡包含層出土石器（第Ⅱ期）④
図版10－１　飛瀬遺跡包含層出土石器（第Ⅱ期）⑤
－2　底津遺跡第１号住居址出土土器
図版11－１　底津遺跡第１号住居址出土石器
－2　底津遺跡第２号住居址出土土器
図版12－１　底津遺跡第２号住居址出土石器
－2　底津遺跡第３ａ・３ｂ号住居址出土土器①
図版13－１　底津遺跡第３ａ・３ｂ号住居址出土土器②
－2　底津遺跡第３ａ・３ｂ号住居址出土土器③
図版14－１　底津遺跡第３ｂ号住居址出土土器④（埋甕）
－2　底津遺跡第３ａ・３ｂ号住居址出土石器①
図版15－１　底津遺跡第３ａ・３ｂ号住居址出土石器②
－2　底津遺跡第４ａ・４ｂ号住居址出土土器
図版16－１　底津遺跡第５号住居址出土土器
－2　底津遺跡第４ａ・４ｂ・５号住居址出土石器
図版17－１　底津遺跡第６号住居址出土土器①（埋甕）
－2　底津遺跡第６号住居址出土土器②
図版18－１　底津遺跡第７号住居址出土土器
－2　底津遺跡第６・７号住居址出土石器
図版19－１　底津遺跡第８・９号住居址出土土器
－2　底津遺跡第10・11・12号住居址出土土器
図版20－１　底津遺跡第８・９・10・11号住居址出土石器
－2　底津遺跡第９号住居址出土石器

図版21－1　底津遺跡土壙墓出土遺物
－2　底津遺跡包含層出土土器①（第1群・第2群1類）
図版22－1　底津遺跡包含層出土土器②（第2群2類）
－2　底津遺跡包含層出土土器③（第3群・4群・5群）
図版23－1　底津遺跡包含層出土土器④（第6群1類）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑤（第6群2・3・4類）
図版24－1　底津遺跡包含層出土土器⑥（第7群1・2類）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑦（第7群3類）
図版25－1　底津遺跡包含層出土土器⑧（第7群4類）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑨（第8群1・2類）
図版26－1　底津遺跡包含層出土土器⑩（第8群3・4類）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑪（第8群5・6類）
図版27－1　底津遺跡包含層出土土器⑫（第8群7・8・9・10類）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑬（第9群1類）
図版28－1　底津遺跡包含層出土土器⑭（第9群2・3・4類）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑮（第9群5・6類、第10群）
図版29－1　底津遺跡包含層出土土器⑯（第11群）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑰（第12群縄文）
図版30－1　底津遺跡包含層出土土器⑱（第12群櫛描）
－2　底津遺跡包含層出土土器⑲（第12群無文）
図版31－1　底津遺跡包含層出土土器⑳（胴部1～3類）
－2　底津遺跡包含層出土土器㉑（胴部2類）
図版32－1　底津遺跡包含層出土土器㉒（胴部4類）
－2　底津遺跡包含層出土土器㉓（胴部5類）
図版33－1　底津遺跡包含層出土土器㉔（第13群1・2類）
－2　底津遺跡包含層出土土器㉕（第13群3・4類）
図版34－1　底津遺跡包含層出土土器㉖（第14群）
－2　底津遺跡包含層出土土器㉗（浅鉢）
図版35－1　底津遺跡包含層出土土器㉘（浅鉢）
－2　底津遺跡包含層出土石器①
図版36－1　底津遺跡包含層出土石器②
－2　底津遺跡包含層出土石器③
図版37－1　底津遺跡包含層出土石器④
－2　底津遺跡包含層出土石器⑤
図版38－1　底津遺跡包含層出土石器⑥
－2　底津遺跡包含層出土石器⑦

表　目　次

第１表　飛瀬遺跡　石鏃属性表……51
第２表　飛瀬遺跡　打製石斧属性表……52
第３表　飛瀬遺跡　第Ⅲ期遺物観察表……54
第４表　飛瀬遺跡　土錘計測表……56
第５表　底津遺跡　石鏃属性表 …… 152
第６表　底津遺跡　石錐計測表 …… 153
第７表　底津遺跡　クサビ形石器計測表 …… 153
第８表　底津遺跡　石錘計測表 …… 153
第９表　底津遺跡　打製石斧属性表 …… 154
第10表　底津遺跡住居炉址の熱残留磁化測定（100 Oe 消磁後） …… 155

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

一般国道256号は岐阜市を起点とし武儀郡洞戸村・板取村を経て郡上郡・益田郡・加茂郡・恵那郡を通り長野県に至る幹線道路である。また、この256号は豊かな自然に恵まれた山間地を結んでいるので武儀郡洞戸村・板取村地域にとっては重要な観光道路の役割も果たしている。このルート上の洞戸村栗原・飛瀬間は地形が急峻なため道路幅員が狭く見通しも悪いため観光シーズンには激しい渋滞を引き起こす地点ともなっていた。岐阜県美濃土木事務所はこの急峻な地形と集落を避けるために栗原バイパスを計画し、埋蔵文化財の有無について岐阜県教育委員会文化課に照会を行った。当該地には周知の遺跡として底津遺跡（県遺跡番号6827）・飛瀬遺跡（同1194）が存在し、平成４年10月12日に文化課より本格的調査が必要である旨を岐阜県美濃土木事務所に回答している。

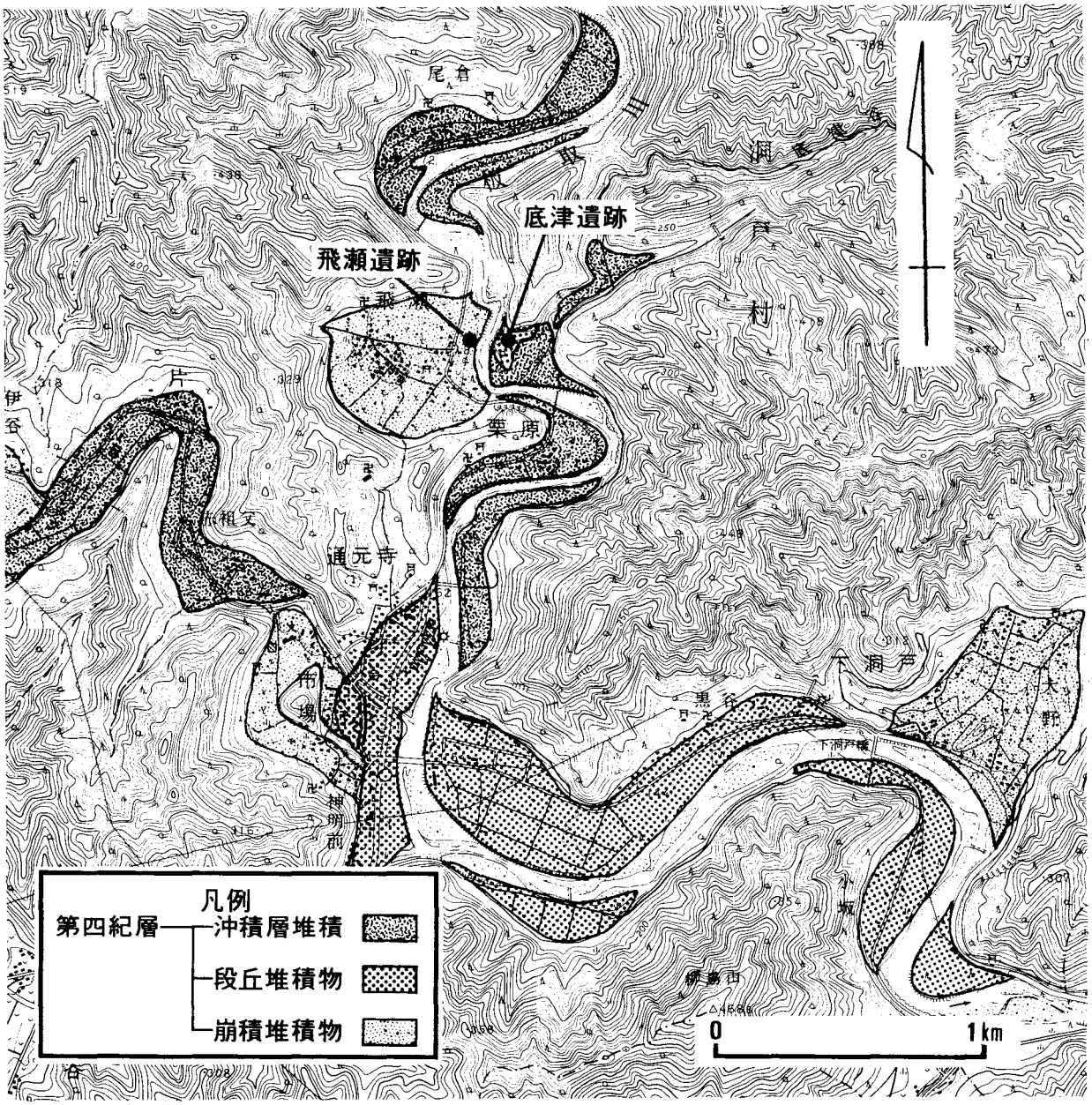
工事計画では建築工事の着手を底津遺跡側より設定しており、平成５年度に底津遺跡及び飛瀬遺跡の一部、平成６年度に飛瀬遺跡の発掘調査を行うこととした。底津遺跡の調査に先立ち山林の伐開、表土除去を実施し、平成５年４月20より調査を開始した。その結果予想を大きく上回る遺物・遺構が検出されたため底津遺跡の調査期間が延び、飛瀬遺跡の一部を同年７月14日より開始するが一時両遺跡の調査が並行する事となった。なお、底津遺跡の説明会を同年11月14日に実施し、遺跡に対する理解と啓蒙に努めた。平成６年度は５月16日より飛瀬遺跡の調査を引き続き実施した。同年９月８日に調査を終了後埋め戻しを行い以後整理・報告書作成に移行した。

第２節　発掘調査の経過

今回の調査は一般国道256号改良工事に伴う埋蔵文化財の事前調査である。底津遺跡は昭和54年の土地改良工事の際に東の崖面より多くの遺物が採集されたことにより周知された遺跡であり、板取川と底津川に挟まれた狭い段丘上に位置する。今回の計画路線はその段丘の東端を横断する形をとり東西は崖面で収束される。現況は杉林となっており調査に先立ち杉林の伐採を行い、遺構確認等の作業を迅速に実施するため表土は重機により排除した。ただし、抜根作業は遺構の破損を防ぐため人力により取り除いた。表土を除去した後で調査区の全体を面的におえるように磁北を基準として４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。グリッドの名称は南から北に向かってＡ～Ｈ区、東から西に向かって１～８区としたが、遺物包含層を掘り下げる過程で東の崖面に多量の遺物が流れ込んでいることが判明し、南・東側にＺ区、０区を設定した。調査は遺物包含層を掘り下げることから開始した。遺物を含む層は厚い所で40～50cmにも及ぶ箇所も存在したがすべて人力で掘り下げた。遺物包含層を取り除いた後で遺構の確認を行い、縄文時代中期後半の竪穴住居址、後期前半の竪穴状遺構等を確認し大きな成果を得ることができた。これらの遺構の精査と実測等を進め10月25日に航空撮影を行い、11月26日をもって遺跡内の作業を終了した。飛瀬遺跡は底津遺跡の調査延長のため調査開始がやや遅れ７月14日より開始した。現況は宅地、畑地により三段の平坦面に造成されており次年度の調査も鑑み三段の平坦面を東よりＡ・Ｂ・Ｃ区とし、平成５年度はＡ・Ｂ区の調査を実施した。底津遺跡に並行したグリッド

を設定し、東南から北西に向かってＡ～Ｗ区、北東から西南に向かって１～20区とした。調査は表土層よりすべて人力による掘り下げにより実施した。かなりの攪乱が入っていたが、建物址、ピット群、土坑を確認し平成６年３月24日をもって遺跡内作業を終了した（調査面積両遺跡合計2,900㎡）。

平成６年度は飛瀬遺跡Ｃ区の調査を５月16日より開始した。現況は桑畑となっており、まず伐採を実施した後重機により表土を除去した。遺物包含層を人力で掘り下げた後遺構確認を行い、中世に帰属する土壙、不明遺構等を検出した。これらの遺構の精査・実測等を行った後、平成６年９月２日に航空撮影を行い、９月８日をもって遺跡内の作業を終了し報告書作成に入った（調査面積1,000㎡）。



第１図　遺跡周辺の第四紀層の地質

第II章　遺跡の立地と環境

第1節　遺跡周辺の地形・地質

底津遺跡・飛瀬遺跡の所在する洞戸村は面積の大部分がいわゆる“美濃山地”の山々からなり、その谷間を流れる板取川や支流の高賀川、柿野川、菅谷川の流域にわずかながらの平坦面が存在している。

洞戸村の美濃山地は、標高500～1000mの急峻な山々からなり、南北方向に流路をとる板取川によって東西に寸断されている。板取川の西側では美山町へと連続しており大きな谷に刻まれることなくも少なく、600m前後の定高性の山地帯を形成している。また、板取川の東側では美濃市や美並村、八幡町へと連続しており、境界付近では標高が1000mを越え、険しい様相を呈している。

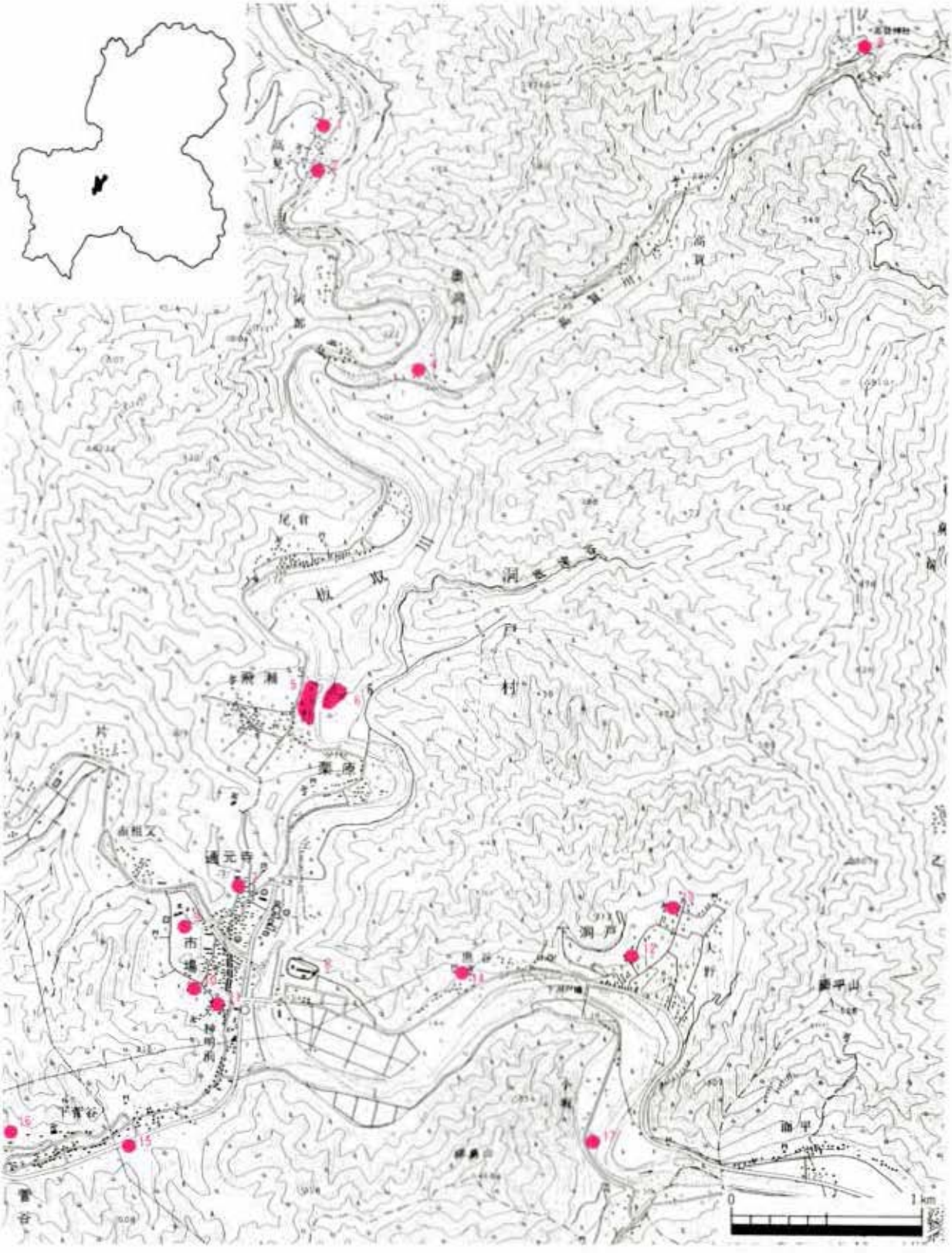
越美山脈の左門岳に源を発する板取川は、周辺の山地から派生する水系を一同に集め豊富な水量を有している。急峻な山々を開析し、大きく湾曲しながら村の中央部を北から南に流下し、市場地内で東方向に流向を変えて美濃市に流れ注いでいる。この間の流域は大部分が谷底状の地形となり、平坦部は曲流部分に発達するポイントバーに由来する堆積面や派生河川との合流部に見られる小規模な扇状地や崩積地の堆積面、そして低位の段丘面に限られている。

洞戸村周辺の地質は、美濃帯を構成する中生層、基盤の美濃帯を覆ったり貫入している奥美濃酸性岩類、そしてわずかに存在する第四紀層からなる。

美濃帯の中生層は、泥質岩・チャート・砂岩・石灰岩・泥質混在岩などの堆積岩からなり、おもに中生代の三畳紀からジュラ紀にかけて（およそ2億5千万年前～1億5千万年）形成された地層であることが明らかにされている。この中生層は村の中南部に広く分布しており、泥質岩やチャートが大部分を占めている。泥質混在岩は南部の菅谷川周辺と栗原地区周辺に分布している。また、砂岩は市場地区の西方に、石灰岩は板取川流域や村北部にそれぞれ小規模な岩帯を形成して分布している。美濃帯の岩石のうち、粘板岩・硬質砂岩・チャートが縄文時代の石材として使われており、飛瀬・底津遺跡からも出土している。

奥美濃酸性岩類は、板取村に近い村の最北部に分布しており、奥美濃地域に6か所分布する岩帯の中の“洞戸岩体”と呼ばれているものである。これは火山岩類に深成岩類が密接にともなわれる火山－深成複合岩体であることが明らかにされている。このうち火山岩類は独立したコールドロンが埋められて堆積したもので、おもに流紋岩質～流紋デイサイト質の溶結凝灰岩あるいは非溶結凝灰岩からなっている。また、深成岩類はコールドロンの形成にともなわれた断層にそって貫入したものであり、高賀花崗岩と命名されている。岩質は黒雲母花崗岩である。洞戸岩体中の流紋デイサイト質の溶岩の年代測定において、約6800万年前という結果が出ており、奥美濃酸性岩類の形成時期は中生白亜紀の最末期と考えられている。奥美濃酸性岩類の火山岩類や貫入岩類は固くて緻密であり、凝灰質砂岩も含めて縄文時代の石材として頻繁に使われている。

第四紀層は、板取川やその支流の高賀川、柿野川、菅谷川の流域に限られて小規模に分布している。板取川が大きく曲流する部分では、攻撃斜面の対岸に形成されるポイントバーの沖積層堆積物がわず



1. 鷹場遺跡(縄文)
2. 高見遺跡(縄文)
3. 高賀遺跡(縄文)
4. 笠神遺跡(縄文)
5. 飛瀬遺跡(縄文・中世)
6. 底津遺跡(縄文・中世)
7. 通元寺遺跡(縄文)
8. 市場遺跡(縄文)
9. 神明前遺跡(縄文)
10. 白山前遺跡(縄文)
11. 天神前遺跡(縄文)
12. 風穴遺跡(縄文)
13. 見性寺遺跡(中世)
14. 黒谷遺跡(縄文)
15. 矢木口遺跡(縄文)
16. 四つ切遺跡(縄文)
17. 小坂遺跡(中世)

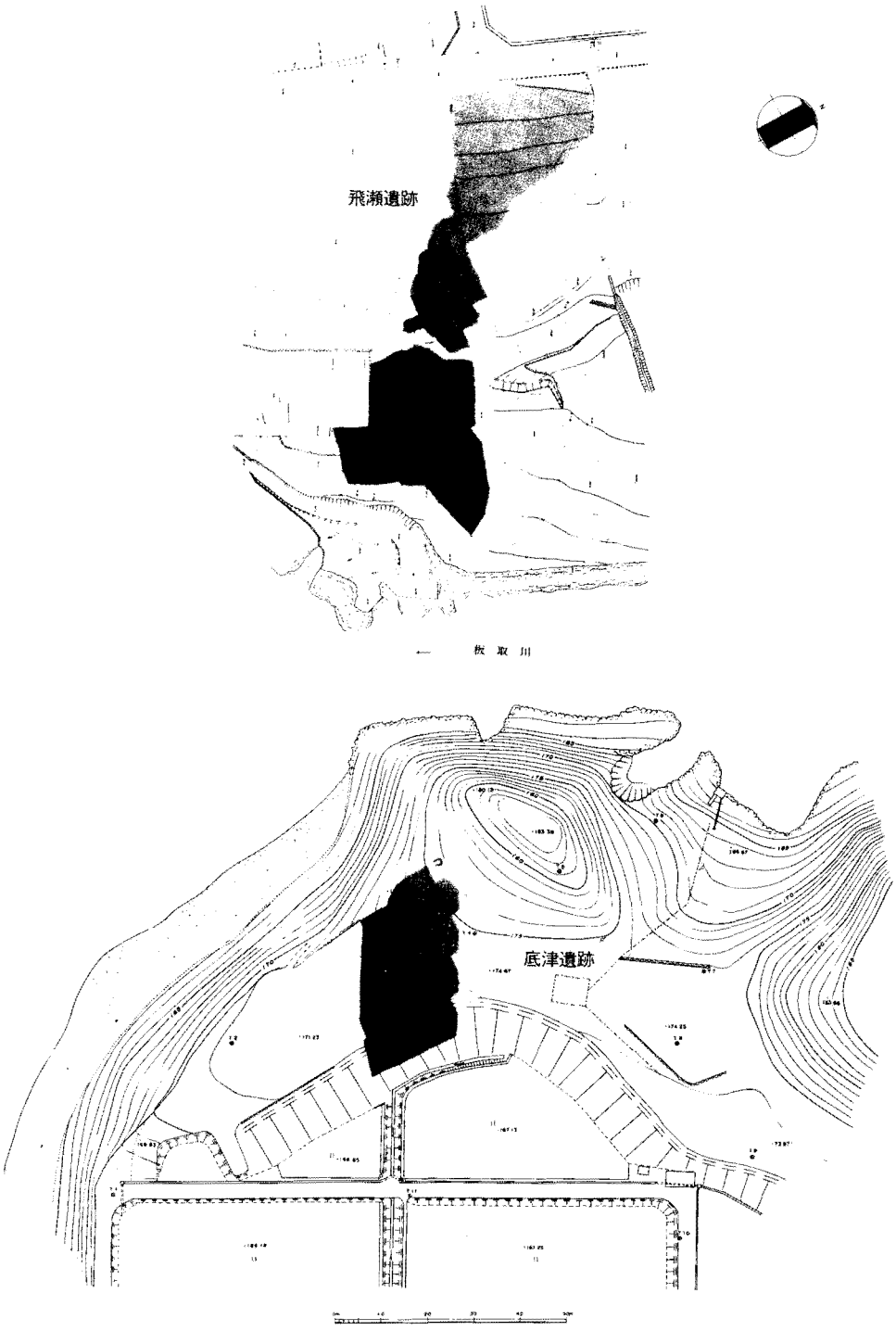
第2図　飛瀬・底津遺跡周辺の遺跡分布図

かながらの平坦面を形成している。また、板取川流域の白谷地区、飛瀬地区、大野地区などでは崩積堆積物や小規模な段丘堆積物が、市場地区から美濃市にさしかかるまでの流域には段丘堆積物が見られ、それぞれ平坦面を形成している。洞戸村周辺の山々はたいへん急峻なため、原始より人々の生活場所は河川の流域にできたわずかな平坦部に限られてきた。飛瀬遺跡や底津遺跡が形成した人々も同様な環境であり、板取川のこの平坦部に居住地を求めたのであろう。

飛瀬遺跡は洞戸村飛瀬地区に広がる25ha程の緩斜面の東側先端部に立地している。この飛瀬地区では板取川が大きく曲流しており、堆積物を残しながら流路を下名材の東側へと変遷してきたと考えられる。その結果、板取川の堆積物がまとまった平坦面を形成することとなり、やがて対岸の底津地区に対比される段丘面となった。この平坦面に対しては、その後さらに西方の谷や山の斜面より堆積物が供給されたり、クリープによる風化物の低位方向への移動堆積が進行したりして東南東方向に傾斜する現在の緩斜面が形成された。この緩斜面は遺跡の面前で板取川によって深く開析されており、斜面の先端部に位置している遺跡の立地面は板取川に対して見晴らしの良いテラス状の地形を呈している。飛瀬遺跡の対岸に位置する底津遺跡は、板取川と底津谷に挟まれた開析されずにわずかに残された段丘面に立地している。この段丘は基盤のチャートを被覆して堆積した砂礫層からなり、粒径が数mm～20cmの亜円礫～円礫が多量に含まれている。礫種は奥美濃酸性岩類・砂岩・チャート等で、特に奥美濃酸性岩類が卓越している。これらの礫にはインブリケーションが認められ、北北西への傾斜を有している。底津谷の上流部の地質がほとんど泥質岩からなり、現在の河床礫も泥質岩で占められていることに対して、板取川の現河床礫は上流の地質に由来する奥美濃酸性岩類や砂岩、チャートからなっており、礫種やインブリケーションから推測して底津遺跡の存在する段丘が板取川起源の堆積物によって形成されたと考えられる。この段丘面は後に底津谷によって大きく開析されており、現在のような両河川に挟まれたわずかばかりの平坦面として残された。板取川や底津谷の河床面との間に数mの比高をなしおり、飛瀬遺跡と同様に水辺に近い最適な居住地であったと考えられる。

第2節　周辺の遺跡（第2図）

洞戸村は大部分が“美濃山地”と呼ばれる山々からなるため確認されている遺跡（数点からなる遺物散布地を含む）は板取川やその支流である高賀川等が形成したわずかな平坦面に立地している。昭和53年前後より地元研究家による熱心な踏査が行われ現在16ケ所の遺跡が知られている。これらの多くの遺跡で旧石器時代～縄文時代に属する資料が知られている。縄文時代については、早期後半より前期初頭・中期後半・後期前半・晩期の資料が多くみられる。1987・88年には小学校建設に伴い市場遺跡の発掘調査が実施されている。本遺跡は有舌尖頭器等の石器が採集されていたが、調査の結果縄文時代早期末～前期にかけての土器､石器とともに住居址・配石遺構・集石遺構等が検出されている。配石遺構については脂肪酸分析を実施し早期末の埋葬施設について言及している。ただし、報告者は有舌尖頭器の存在を前提として頁岩・泥岩製の石器群をその石材から縄文時代草創期にその帰属を求めているが村内の頁岩・泥岩製の石器群をみる限りその可能性は少ない。1994年には林道開設工事に伴い底津遺跡川向林道地点が発掘調査されている。旧石器時代に帰属する剥器の他縄文時代早期後半・中期後半にかけての資料が確認されている。縄文時代以降の遺跡については不明な点が多く、中世（13世紀代）に属する山茶碗、常滑、四耳壺等（美濃須衛産）の資料が報告されているのみである。



第３図　飛瀬・底津遺跡の地形測量図

第Ⅲ章　飛瀬遺跡の遺構と出土遺物

第１節　層序

今回調査範囲となった飛瀬遺跡の立地する部分は、本来東南東方向を向く緩斜面地が宅地・畑地化等により数段の段差を有する平坦地に改変されており、また東側部分は前述の攪乱と伴にかなりの土層の流失がみられ岩盤が露出している箇所も存在した。調査時においては、前述した約２～５ｍの比高差をもつ三段の階段状の平坦地を便宜上東側からＡ・Ｂ地区（1994年度調査）・Ｃ地区（1995年度調査）と呼称した。三地区とも上層部は人為的な堆積である第Ⅰ・Ⅱ層が遺物包含層である第Ⅲ層の上部を削平した状態で堆積しているが、その状況は各地区によりそれぞれ異なりをみせる。また、Ａ地区Ｇ列７グリッド以北には縄文時代早期前半の遺物を包含する黄褐色土（第Ⅴ層）が第Ⅲ層下部に薄く堆積しておりさらに北側調査範囲外へ続く様相が観察されている。以下第４図を参照に説明を加える。

第Ⅰ層（7.5Ｙ Ｒ3/2　黒褐色土）　表土である。やや粗い砂質土であり、根痕が多く入っている。Ｃ区ではやや淡く7.5Ｙ Ｒ4/4（褐色）を呈す。第Ⅱ層と伴に第Ⅲ層上部を削る状態で堆積している耕作土である。

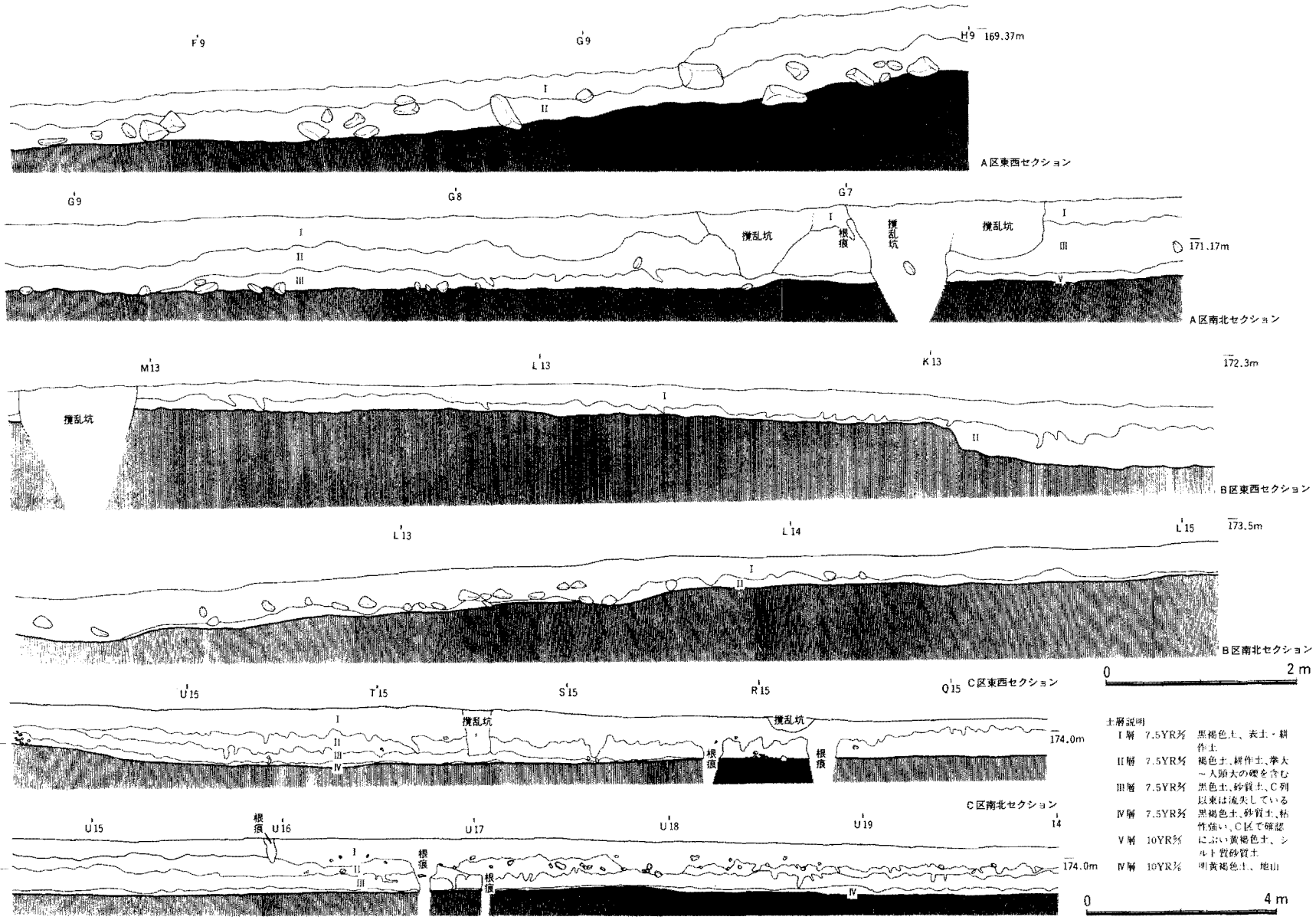
第Ⅱ層（7.5Ｙ Ｒ4/2　灰褐色土）　やや粗い砂質土である。第Ⅰ層と比べやや粘質である。Ａ・Ｂ区においてはサバ土を多く含む。10列以東においては黒味がやや強くなる。第Ⅰ層と伴に近代以降の耕作土層である。

第Ⅲ層（7.5Ｙ Ｒ2/1　黒色土）　粘質性の強い細かい砂質土である。主に縄文時代早期後半～中期後半及び中世の遺物を包含するが、第Ⅰ・Ⅱ層よりの根痕等攪乱が多く入っている。層厚は一定せず、特に東側部分へ向かうほど流失が著しく存在しない箇所もある。

第Ⅳ層（7.5Ｙ Ｒ2/2　黒褐色土）　Ｃ区において確認されている。第Ⅲ層とは明瞭な区分ではなく漸移的であり、他地区においても存在したと思われる。細かい砂質土であり、第Ⅲ層と同様に遺物を含んでいる。

第Ⅴ層（10Ｙ Ｒ5/3　にぶい黄褐色土）　Ｇ列７グリッド以北に認められた細かい砂質土である。層厚は薄いが、明らかに第Ⅲ層とは区分できる。第Ⅵ層がやや褐色をおびた土色を呈する。縄文時代早期前半の遺物を包含する。この第Ⅴ層は北側調査範囲外へ広がっていると思われる。

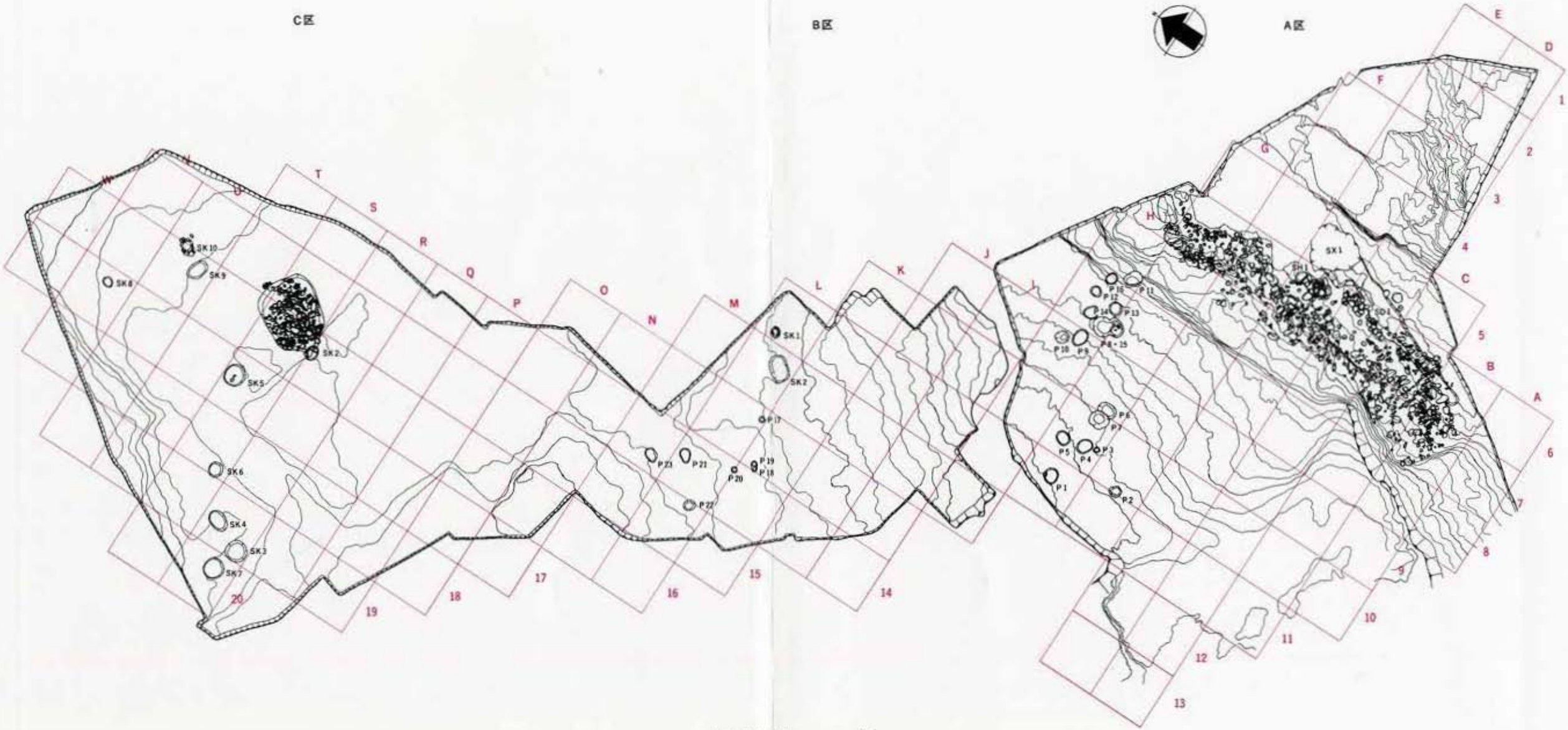
第Ⅵ層（10Ｙ Ｒ7/6　明黄褐色土）　シルト質の堆積土であり地山としたものである。Ａ区東部分ではこの第Ⅵ層が流失し岩盤の露出する部分が数カ所存在している。



土層説明

I層	7.5YR3/2	黒褐色土、表土・耕作土
II層	7.5YR3/4	褐色土、耕作土、拳大～人頭大の礫を含む
III層	7.5YR3/4	黒色土、砂質土、C列以東は流失している
IV層	7.5YR3/2	黒褐色土、砂質土、粘性強い、C区で確認
V層	10YR5/4	にぶい黄褐色土、シルト質砂質土
IV層	10YR5/6	明黄褐色土、地山

第4図　飛瀬遺跡の土層断面図



第5図　飛鳥遺跡遺構平面図

第２節　遺構

本遺跡は前述したとおり本来は板取川に向かって東南東方向に緩やかに傾斜する緩斜面を呈していたと考えられるが、調査時点には宅地化・畑地により約２～５ｍの比高差をもつ三段の階段状の棚地に改地されており、便宜上調査年次に伴い東からＡ・Ｂ（1994年度調査）・Ｃ地区（1995年度調査）と呼称した。確認した遺構は、各年度の調査担当者の呼称に従うならば、Ａ地区では建物址・溝１条・不明遺構１基・Pit 16基、Ｂ地区ではPit７基・土坑２基、Ｃ地区では土壙８基・集石遺構２基・不明遺構１基である。Ａ・Ｂ地区においては、各遺構に伴う遺物がなく所属時期・性格の確定が不明瞭であるが、多くが包含層出土遺物の内中世に伴う可能性が考えられる。Ｃ区の不明遺構・土壙は中世前半に、集石遺構は縄文時代に伴うと考えられる。

１　Ａ区

第１号建物址・溝・不明遺構（第６図、図版１）

Ｅ６グリッドに120cm×150cm規模で方形に扁平な河原石が平面的に組まれ、その北西隅よりやや大きめな河原石が西に向かって1.8m程延びた後90°方向を違え北へ約４ｍ程延びる。その先方、あるいは周辺には前述の遺構に関連したと思われる河原石の崩れの一群が散在し、前述の石を敷き詰めた遺構を伴う礎石を用いた建物の存在が考えられる。この建物址の一部と考えられる礎石とは方向性は少しずれるが１条の溝がＤ・Ｅ５～６グリッドを中心に南西にも延び、北東はＥ５グリッドで非常に浅いすり鉢形で土坑状の不明遺構に続いている。この不明遺構の西側部分底部には岩盤が露出するがにぶい黄褐色土を混ぜる黒褐色土が堆積している。この覆土は本遺跡ではみない堆積であり、この土坑が溜まり場的な機能をもつものであった可能性が考えられる。これら建物址・溝・不明遺構は一連のものと考えられるが後世の削平のため全貌は不明である。

ピット（第７図）

切り合い関係のあるものも含め16基のピットを検出している。多くが不定形の円形を示し、底部も平底や丸底があり統一的なものは認められない。覆土は黒褐色土及び黒色土が充填しており自然埋没したものがほとんどであろう。ただし、直接的に時期、性格を判断し得る資料はない。

ピットNo.	位　置	長径×短径×深さ(cm)	平面形	覆　　土
1	G11	１００×　９０×２６	不整円形	①黒褐色土
2	F10～11	８０×　７２×２８	不整円形	①黒褐色土
3	G10	３８×　３６×２８	円　形	①黒褐色土　③黒色土
4	G10	１０８×　８８×１８	楕円形	①黒褐色土　③黒色土

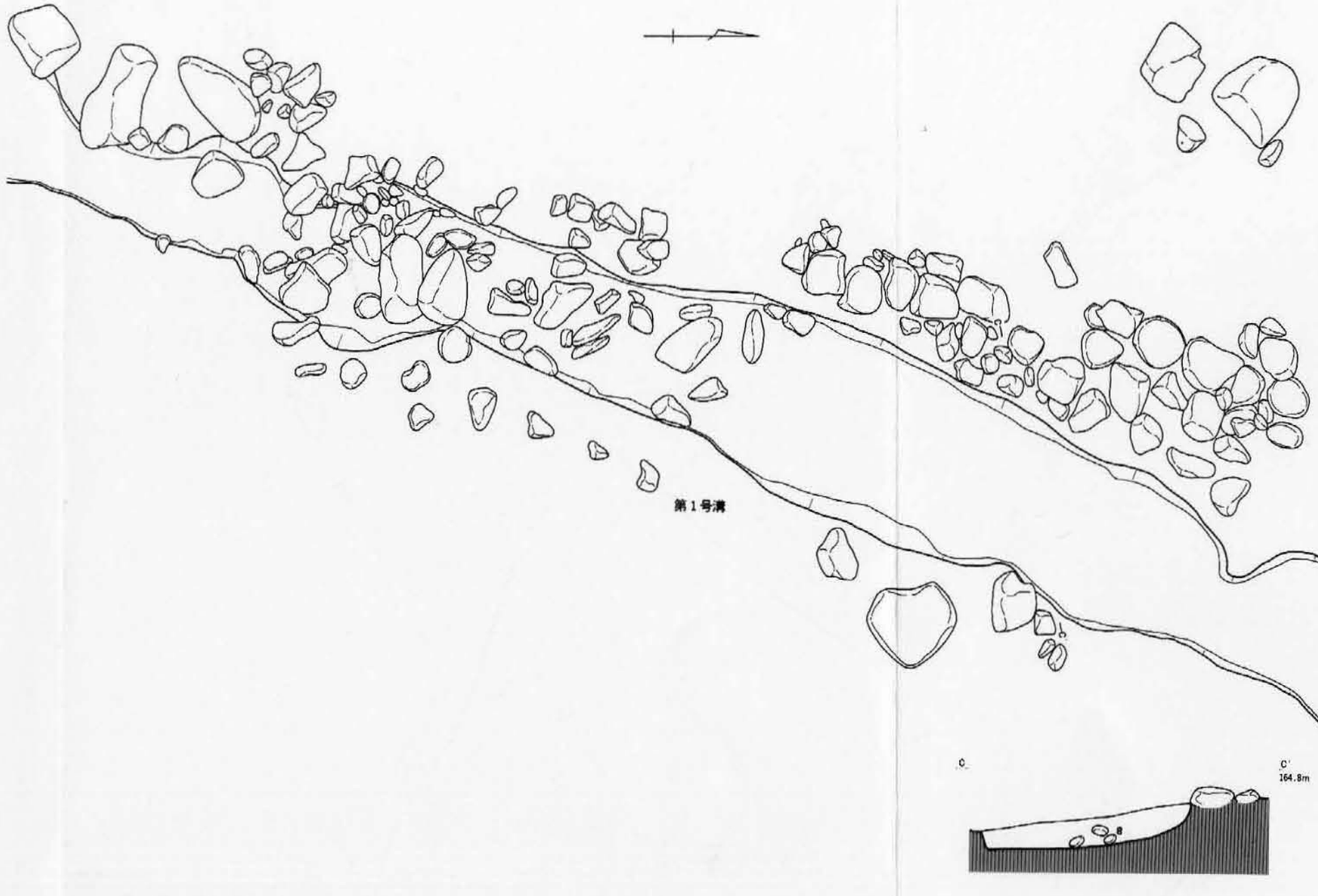
5	G10	98× 86×20	円 形	①黒褐色土 ③黒色土
6	G9	130×(94)× 8	楕円形	②黒褐色土
7	G10	130×116×32	不整円形	①黒褐色土
8	H8	100× 90×34	不整円形	①黒褐色土
9	H9	120× 94×28	楕円形	①黒褐色土 ③黒色土
10	H9	86× 74×72	円 形	①黒褐色土 ③黒色土
11	H7	124× 86×34	不整円形	①黒褐色土 ③黒色土
12	H8	74× 66×12	不整円形	①黒褐色土 ③黒色土
13	H8	92× 86×26	不整円形	①黒褐色土 ③黒色土 ④暗褐色土
14	H8	102× 82×22	不整円形	①黒褐色土 ③黒色土 ④暗褐色土
15	G8	104× 94×40	不整円形	③黒色土
16	H8	78× 72×18	不整円形	①黒褐色土

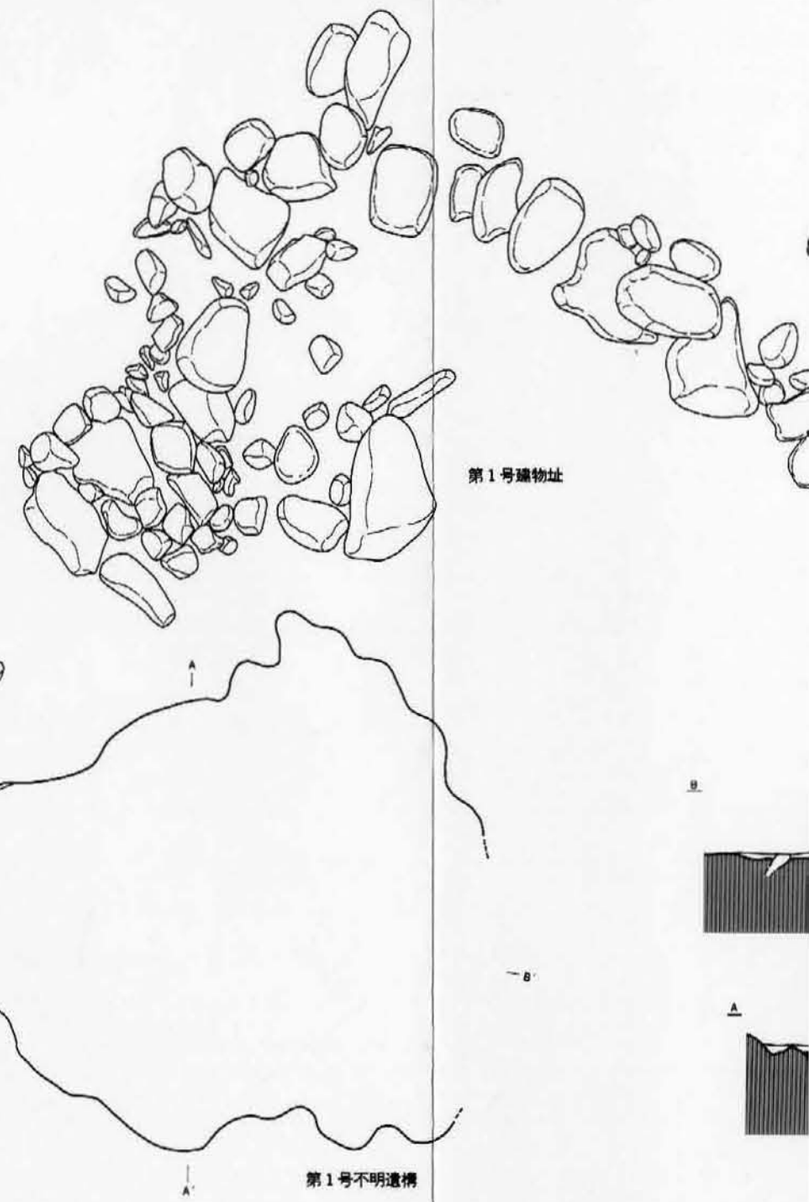
2 B区

ピット（第8図）

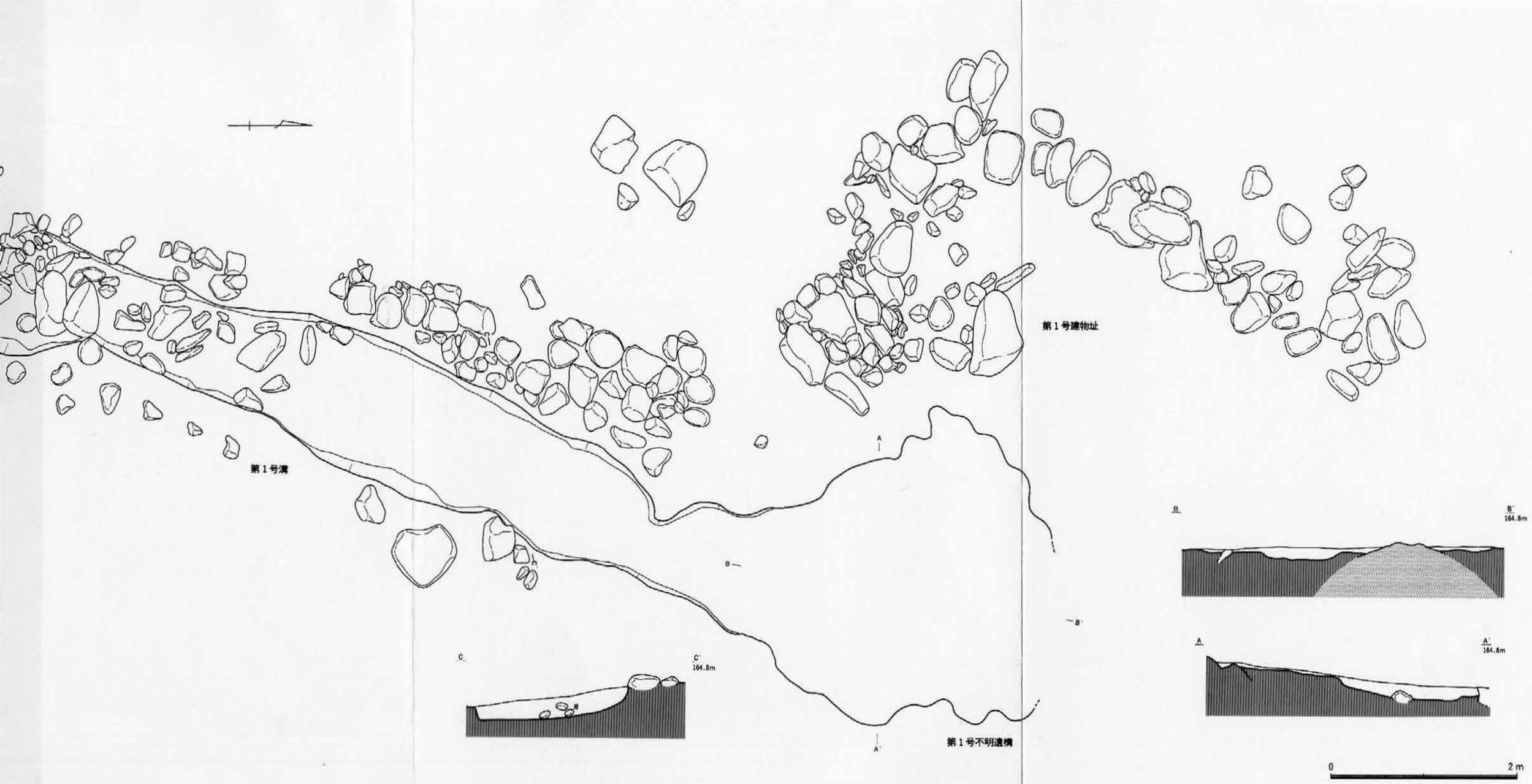
7基のピットを確認しているが検出状況はA区と同様である。ただし、Pit 22の最下層である黒色土より検出状況は悪い骨片が出土しており墓である可能性が考えられる。

ピットNo.	位 置	長径×短径×深さ(cm)	平面形	覆 土
17	L13	40× 42×16	円 形	①黒褐色土
18	K13	38× 34×12	円 形	①黒褐色土
19	K13	(48)× 40×40	不整円形	①黒褐色土 ②黒褐色土
20	K～L14	44× 38×28	不整円形	①黒褐色土
21	L14	102× 74×22	楕円形	①黒褐色土 ③黒褐色土
22	L14～15	78× 72×84	円 形	①黒褐色土 ③黒褐色土 ④黒色土
23	M14	98× 72×84	不整円形	①黒褐色土 ③黒褐色土

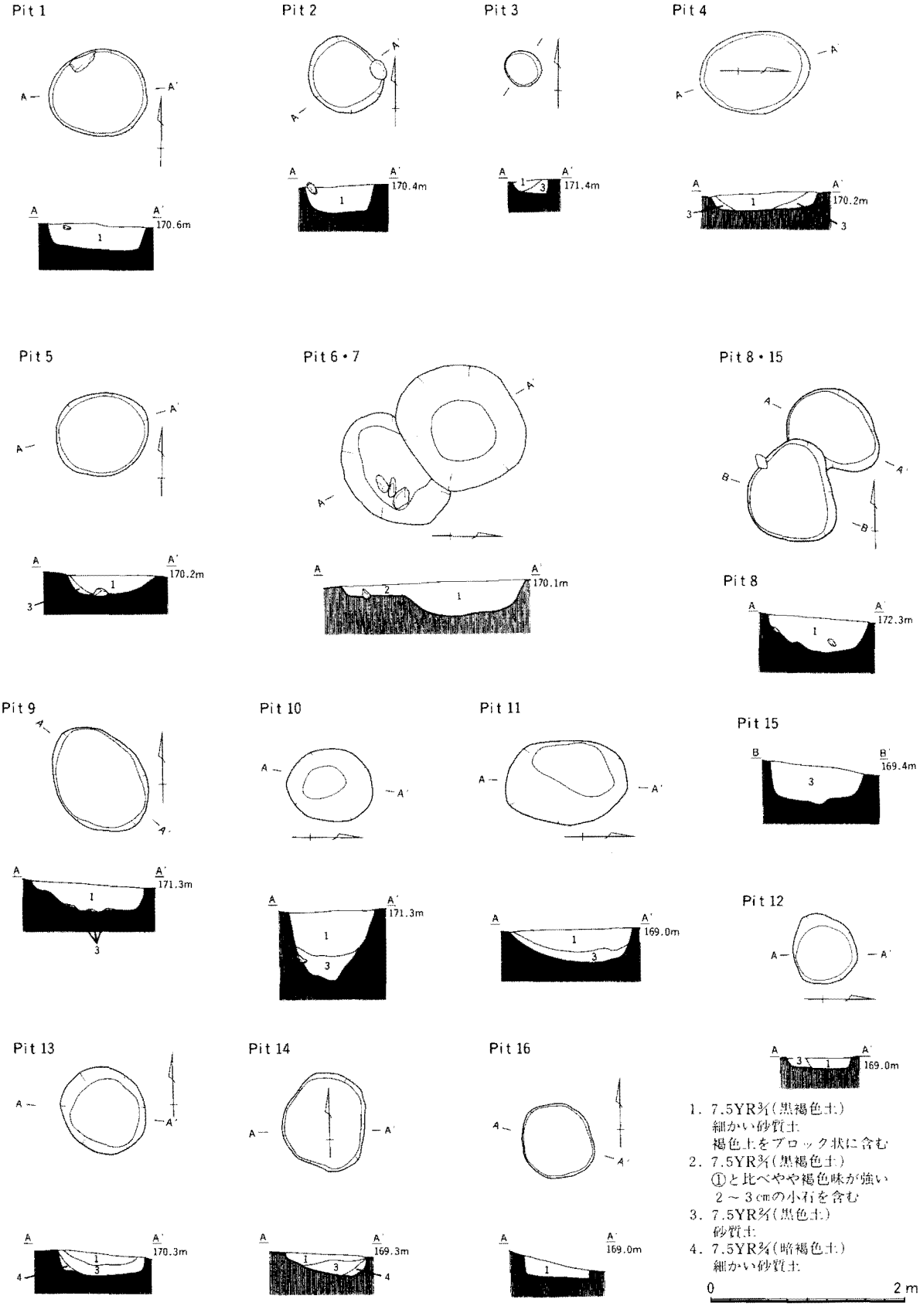




第6図　第1号建物址・第1号不明遺構・第1号溝



号建物址・第1号不明遺構・第1号溝

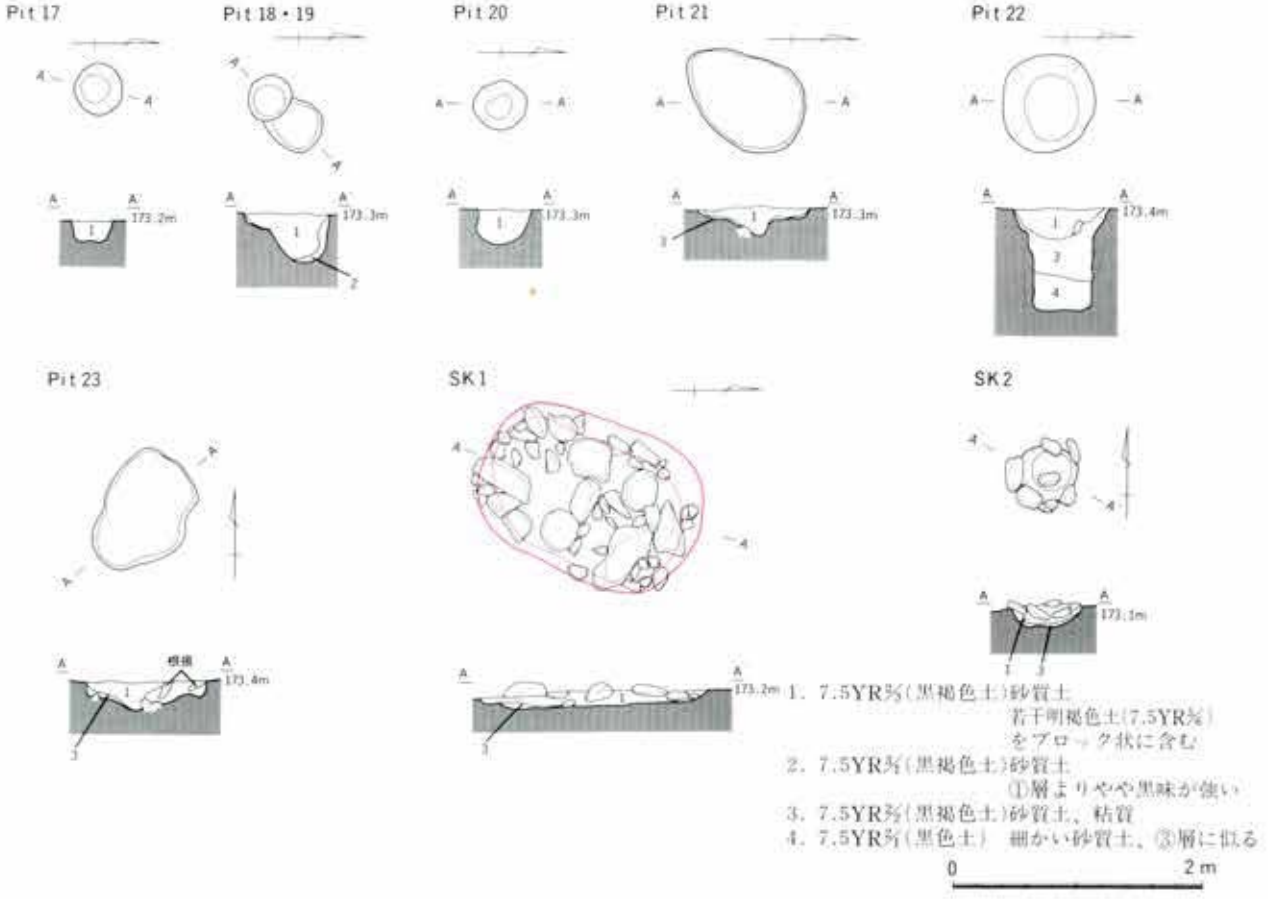

Pit 1
Pit 2
Pit 3
Pit 4
Pit 5
Pit 6・7
Pit 8・15
Pit 8
Pit 9
Pit 10
Pit 11
Pit 15
Pit 12
Pit 13
Pit 14
Pit 16
170.6m
170.4m
171.4m
170.2m
170.2m
170.1m
172.3m
171.3m
171.3m
169.0m
169.4m
169.0m
170.3m
169.3m
169.0m
1. 7.5YR3/1(黒褐色土)
細かい砂質土
褐色土をブロック状に含む
2. 7.5YR3/1(黒褐色土)
①と比べやや褐色味が強い
2～3cmの小石を含む
3. 7.5YR3/1(黒色土)
砂質土
4. 7.5YR3/1(暗褐色土)
細かい砂質土
0
2 m

第7図　A区ピット

土坑（第８図、図版１）

２基の土坑を確認している。ＳＫ２は土坑の底部からの立ち上がり部分に河原石を斜位にもたせかけ、検出状況が悪いがおそらく底部にも石をおき花弁状に河原石を立てかけていたものと考えられ、遺物の検出はないが縄文時代に属する焼石集積遺構と考えられる。ＳＫ１は覆土に人頭大の河原石を含み底部床面はかなり部分で硬化面を確認している。

土坑No.	位　置	長径×短径×深さ(cm)	平面形	覆　　土
1	L11	１８２×１２６×１４	楕円形	①黒褐色土　③黒褐色土
2	L12	５２×　３８×２０	円　形	①黒褐色土　③黒褐色土



第８図　Ｂ区ピット・土坑

3　C区

第２号不明遺構（第９図、図版１）

Ｓ15・16グリッドを中心に位置する。長径約10ｍ、短径約7.6ｍ、深さ40cmの規模をもつ。平面形は楕円形を呈し、平坦な内面底部から側壁が緩やかに立ち上がっている。長軸方向はＮ－30°－Ｅを示している。

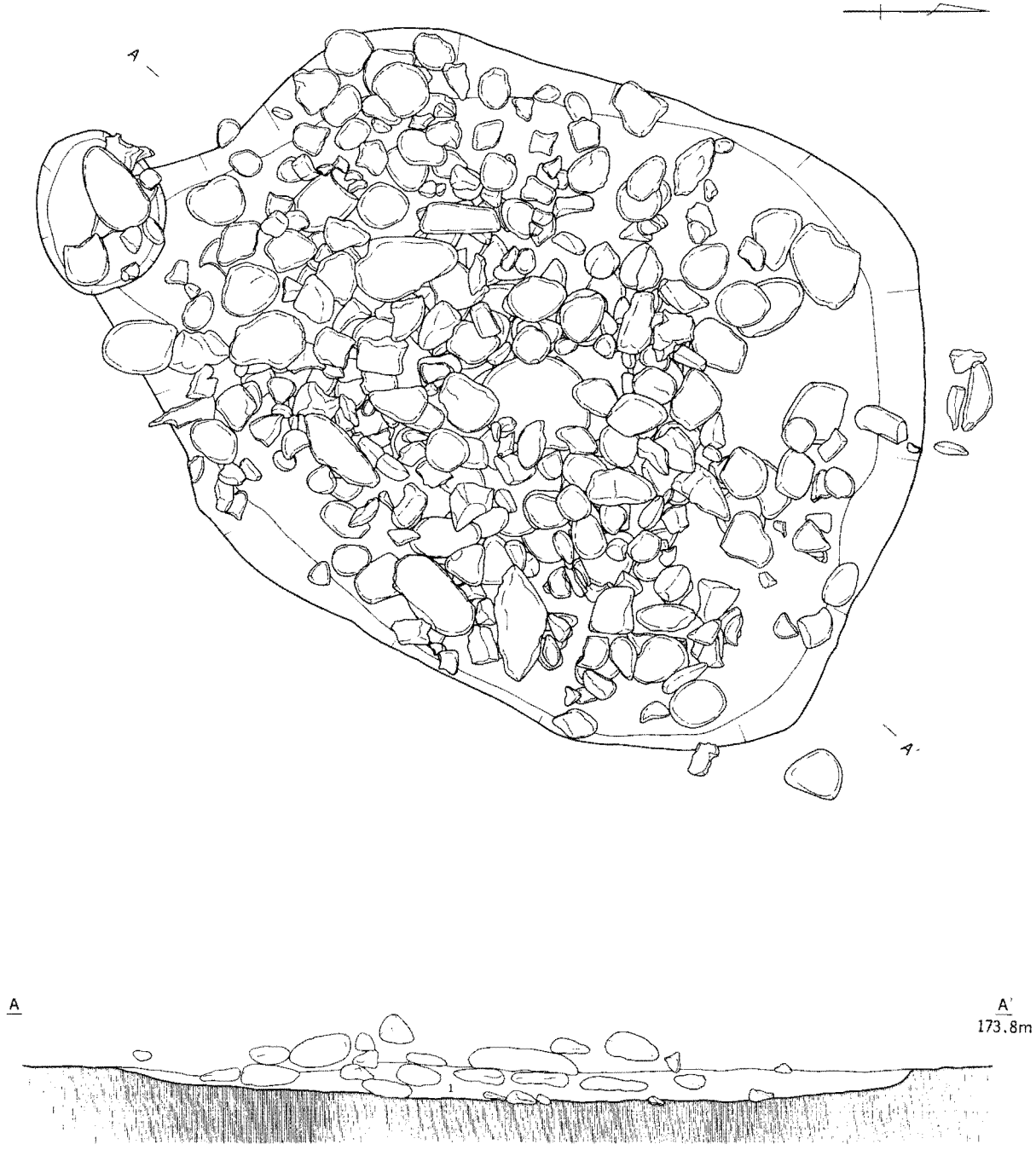
覆土は黒色土が充填するが、内部全体に人頭大の河原石が平坦な面を重ねるように重層的につめられている。石の間を固めるような状況はないが、炭化物、焼土が混入している。また、底部は全体的に硬化していた。覆土内には山茶碗・土錘等含んでいる。北側に接する土坑は同様な石の入り具合等その出土状況より第２号不明遺構に付随するものと考えられる。

土壙・土坑（第10図、図版１・２）

８基の土壙・土坑を検出している。多くが円形・楕円形の平面形を呈し、内面底部がほぼ平らである。また、下表より長軸方向を北へ向けるものが多く、共通項をもつ。覆土中に山茶碗等を含み墓である可能性が高く、これらの土壙が集中するＳ・Ｔ18～20グリッドを中心に墓域としての機能が考えられる。特にＳＫ５は焼土・炭化物を含む黒みをおびた褐色土層が重層し意図的な堆積と考えられる。また、ＳＫ６は平坦な内面底部直上に人頭大の河原石による石組み遺構をもつ。

ただし、ＳＫ10は例外で、Ｂ区のＳＫ２同様その石組みより縄文時代に属する焼石集積遺構と考えられる。

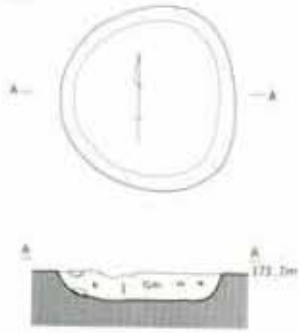
土坑No.	位置	長径×短径×深さ(cm)	平面形	長軸方向	覆　　土
3	R19	１５３×１４０×２２	楕円形	N-48°-W	①褐色土
4	R19	１５０×１０６×６０	楕円形	N-18°-E	①褐色土 ②灰褐色土 ③黒褐色土
5	S17	１５４×１４０×８０	楕円形	N-82°-E	①黒褐色土　②暗褐色土 ③褐色土　④黒色土　⑤暗褐色土
6	S18	９８×　９８×４０	楕円形	N-71°-W	①黒褐色土　②黒色土
7	R20	１４２×１３４×２０	楕円形	N-74°-W	①黒褐色土　②黒色土
8	V17	７４×　６８×２６	楕円形	N-28°-E	①黒褐色土　②黒褐色土
9	V15 ～16	１４６×１００×３０	楕円形	N-62°-W	①黒褐色土　②黒褐色土
10	V	８０×　４０×３６	楕円形	N-37°-E	①黒褐色土



土層説明
1、7.5YR$^{2}/_{1}$(黒色土)砂質土、焼土・炭化物を含む

第9図　第2号不明遺構

SK3

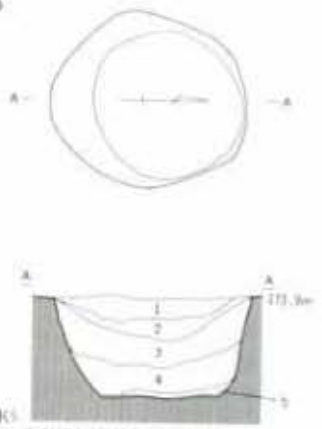


SK3
1．7.5YR5/1褐色土　目層相当
　多太～大径大の河原石を含む

SK4

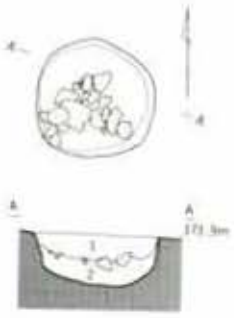
SK4
1．7.5YR5/1褐色土　目層相当
　多太～大径大の河原石を含む
2．7.5YR5/1褐色土　砂質土
　10YR5/1褐色土と
　10YR5/6明黄褐色土
　のブロック、炭化物を若干含む
3．7.5YR5/1褐色土　やや粗い砂質土

SK5



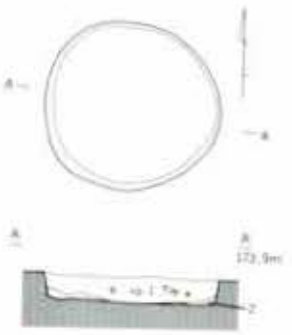
SK5
1．7.5YR5/1褐色土　やや粗い砂質土
　2～5mm程度の
　炭化物を
　多量に多く含む
2．7.5YR5/1褐色土　砂質土
　2～5mm程度の
　炭化物を
　多量に多く含む
1．7.5YR5/1褐色土　細かい砂質土
　粗砂が多く入る
　2～5mm程度の
　炭化物を多く含む
3．7.5YR5/1褐色土　砂質土
4．7.5YR5/1褐色土　やや粗い砂質土

SK6



SK6
1．7.5YR5/1褐色土　砂質土、1～2層にかけて
　河原石を多く含む
2．7.5YR5/1褐色土　細かい砂質土
　大径大の河原石を多く含む

SK7

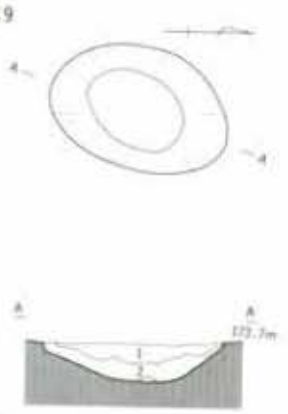


SK7
1．7.5YR5/1褐色土　砂質土、1～2層にかけて
　河原石を多く含む
2．7.5YR5/1褐色土　細かい砂質土
　大径大の河原石を多く含む

SK8

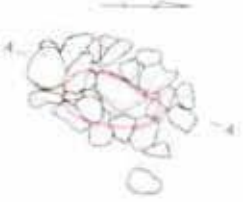
SK8
1．7.5YR5/1褐色土　砂質土
2．7.5YR5/1褐色土　砂質土
　砂質土
　炭化物(10YR5/1)
　をブロック状に含む

SK9



SK9
1．7.5YR5/1褐色土　砂質土
2．7.5YR5/1褐色土　砂質土
　炭化物(10YR5/1)
　をブロック状に含む

SK10



SK10
1．7.5YR5/1褐色土　無遺物な砂質土

0　2m

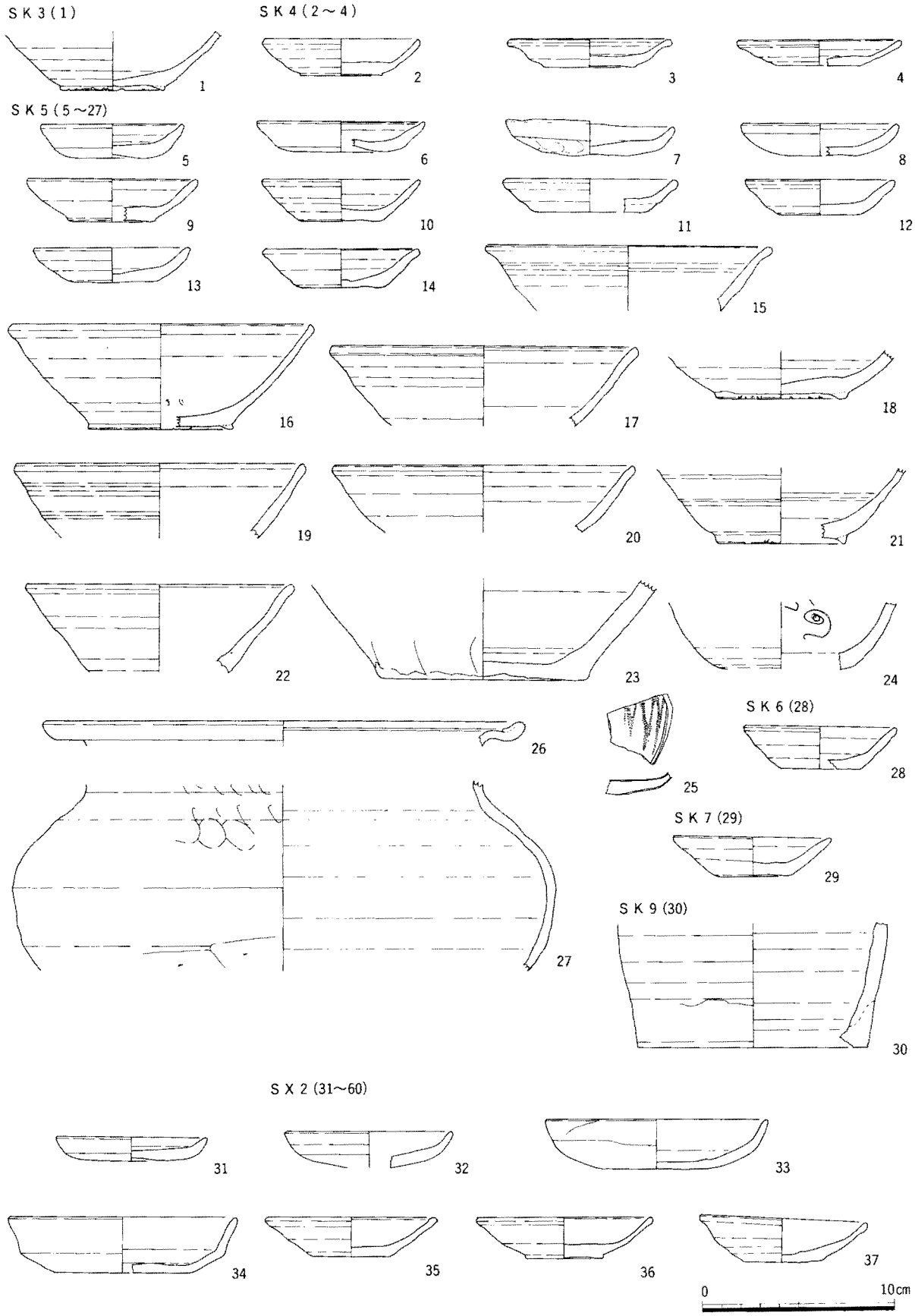
第10図　C区土壙・集石遺構

第２号不明遺構出土遺物（第11・12図31～60、図版第５）

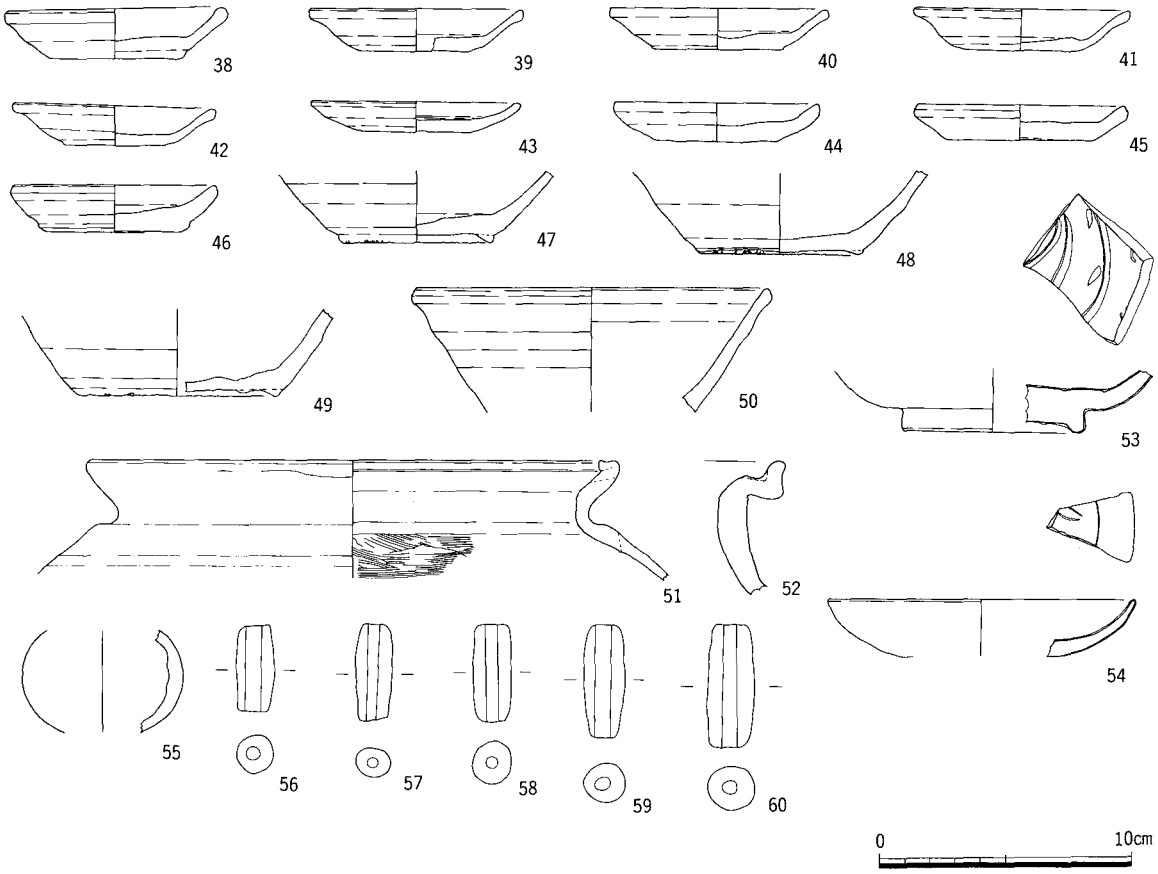
均質手山茶碗（以下山茶碗Ａ）40、荒肌手山茶碗（以下山茶碗Ｂ）29、均質手小皿（以下小皿Ａ）28、荒肌手（以下小皿Ｂ）６、鉢６、土師器皿19、土師器鍋７、常滑１、古瀬戸１、中国磁器２、土錘11、不明１、合計151点が出土し、そのうち30点（31～60）を図示した。31～34は土師器皿である。いずれも口縁部内外面に横ナデが施されているが、32は２段ナデ、その他は１段ナデである。また、底部内面の調整は34は残存している箇所は無調整、その他は一方向ナデが施されている。33の体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は尖がり気味である。34は底部と体部の境、および体部中程に明瞭な稜を有する。35～46は小皿である。このうち、38は体部内面に比べて底部内面が平滑である。44は体部～底部内面が平滑であり、その一部分に黒色の有機物が染み込んでいる。51は土師器鍋である。頸部下方は強いナデにより大きく屈曲し口縁部は外傾する。口縁端部は内側に短く折り返され、上面はわずかに凹む。体部外面はナデ調整、内面は横～斜め方向のハケメ調整で、頸部～体部上方内外面に煤が付着している。52は常滑甕であり、口縁部は受口状を呈し、受口の下端は角を有する。53は龍泉窯系青磁碗である。内面に片切彫りによる花文が施され、全面に施釉される。55は器種不明である。体部は球形を呈し、外面は比較的平滑である。内面は指圧による凹凸が残っており、部分的に褐灰色を呈する。胎土は赤褐色を呈し硬質である。56～60は土錘である。図示したものは５点だが、その他に欠損しているものが６個体あり、合計11個体出土している。これらは最大径の位置する箇所、端部の形態等バリエーションがみられる。

土壙・土坑出土遺物（第11図１～30、図版第５）

ＳＫ３より山茶碗Ａ５、山茶碗Ｂ４、土師器皿１、合計10点が出土し、その内１点（1）を図示した。１は山茶碗Ａであり、焼成が良好で、硬質である。ＳＫ４より山茶碗Ａ４、山茶碗Ｂ７、小皿Ａ５、小皿Ｂ２、土師器皿３、合計21点が出土し、その内３点（2～4）を図示した。この内３は底部内面の静止ナデ調整が板状工具により施されている。ＳＫ５より　山茶碗Ａ16、山茶碗Ｂ33、小皿Ａ５、小皿Ｂ４、鉢２、土師器皿７、土師器鍋７、常滑３、中国磁器２、合計79点が出土し、その内23点（5～27）を図示した。５～８は土師器皿である。５、６は底部外面中央付近に強い指圧が施され、上げ底となっている。体部内面の横ナデの境は稜を形成し、口縁端部は上方にわずかに屈曲する。７、８は底部外面中央付近に環状に指圧が施され、ほぼ平底を呈する。口縁部内外面のナデは明瞭に施されており、口縁端部は丸く収められている。５～８はいずれも浅黄橙色を呈し、胎土中に雲母を幾つか含む。また、底部周縁の器壁が厚く、底部内面は無調整である点が共通している。９～14は小皿である。このうち11は底部外面が無調整で、体部外面に回転糸切り痕が認められ、また、底部にほぼ水平に粘土接合痕がみられることから、糸切り後一枚の粘土板を貼り付け、底部の器壁を厚くしたと考えられる。15～22は山茶碗である。21は焼成が悪く淡黄色を呈し、体部内外面に煤が付着している。23は常滑甕である。24、25は龍泉窯系青磁である。ＳＫ６より山茶碗Ａ４、山茶碗Ｂ２、小皿Ａ１、合計７点が出土し、その内１点（28）を図示した。ＳＫ７より小皿Ｂ（29）が１点出土した。29は完形であり、体部内外面に黒色の有機物が付着している。ＳＫ９より山茶碗Ｂ３、産地不明１、合計４点が出土し、その内１点（30）を図示した。30は胎土中に直径１㎜程度の長石を幾つか含む。わずかに残存している底部は平底を呈し、体部はやや外傾気味に立ち上がる。



第11図　土壙・土坑・第２号不明遺構出土陶器他



第12図　第２号不明遺構出土陶器他

第３節　包含層出土遺物

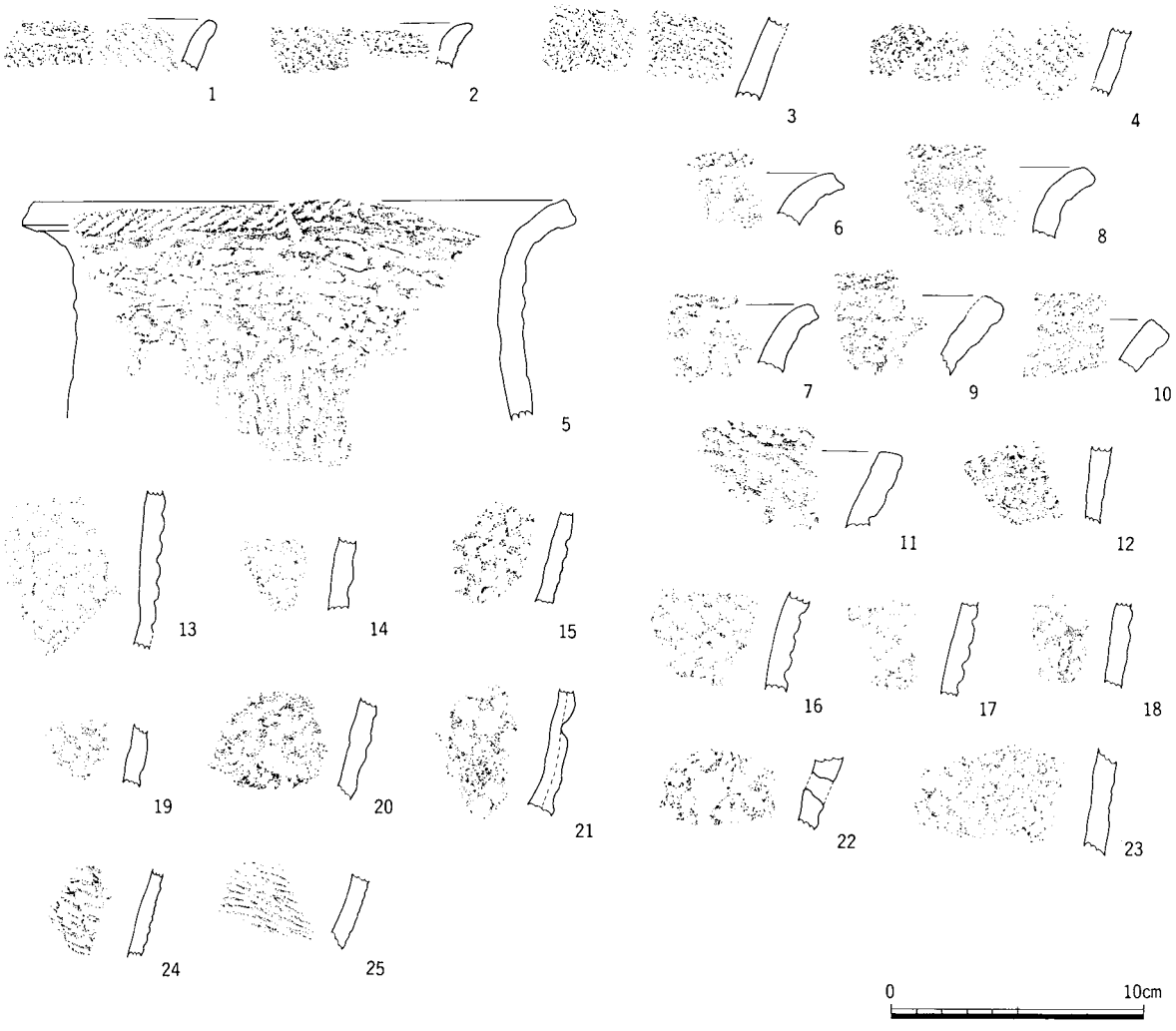
前述したとおり第Ⅴ層より縄文時代早期前半に帰属する遺物が、第Ⅲ～Ⅳ層にかけて縄文時代早期後半～弥生時代前期・中世に帰属する遺物が出土している。これら包含層出土遺物が多時期に分かれるため便宜的に第Ⅴ層出土遺物を第Ⅰ期、第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物の内縄文時代早期後半から弥生時代前期に属するものを第Ⅱ期、中世に属するものを第Ⅲ期として以下に説明する。

第Ⅰ期

土　器

第１群（第13図１～４、図版６）

いわゆる表裏縄文土器である。口縁部外面及び内面に斜行縄文（ＲＬ）を施すが残存状況は悪い。口縁端部は、１は角頭状とし狭小な口唇部にも縄文が施されるが、２は端部を丸くおさめ外反させている。３・４はやや分厚であり、残存する内面全体にも縄文が施される。また、３の外面には炭化物の付着が認められる。



第13図　包含層出土土器（第Ⅰ期）

第２群（第13図５～25、図版６）

第１類（第13図５～12）

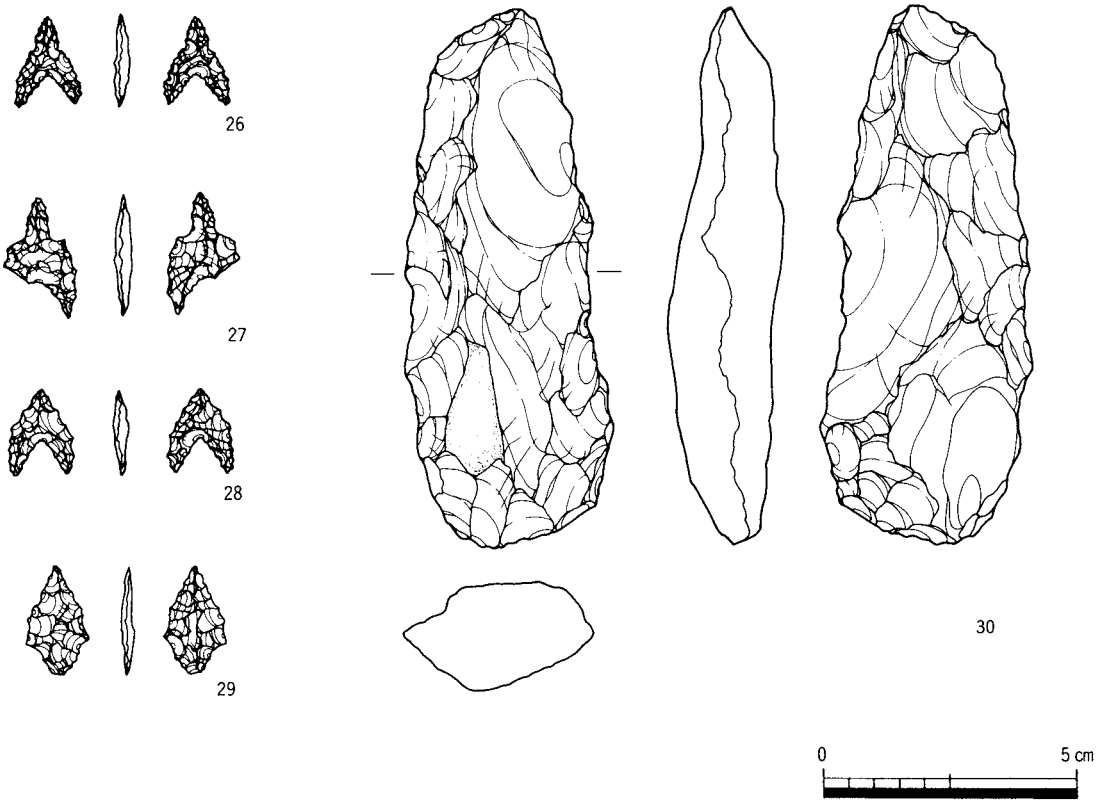
口縁形態が強く外反するすることを特徴とし、口縁端部を肥厚させ口唇部に平坦な面をもつ。５は口縁～胴上部にかけての資料である。折り返し状の口縁とし強く外反させている。平坦な口唇部に無節縄文Ｌを施し、口縁部外面に枝回転文類似？、頸部に縄文ＲＬ、胴部に扇形を呈する枝回転文を施す。口縁内面の屈折部分には強い横ナデが、その下位には指頭圧痕が認められる。口径は16cmで小型の部類に入るものと考えられる。６～12は口縁部である。外反度は５と比較すると弱い。いずれも口唇部に縄文を施す。口縁外面には６～８は上位から下位に向かう枝回転文が、９・10は横長の市松文が、11・12は太い縄文ＲＬが施される。11は下位に枝回転文の一部がみられる。

第２類（第13図13～23）

第１類の胴部と考えられる資料である。縦長・横長、浅い・深い等の市松文が施されるが、種々のバリエーションがみられかなりの個体数があると考えられる。また、21～23は原体端部の扇状面が認められ、22は補修孔と考えられる穿孔が存在する。いずれも内面には顕著な指頭圧痕が残る。

第３群（第13図24・25、図版６）

24・25は第２群２類と比較するとやや薄手であり、傾斜ぎみの格子目文が施されている。



第14図　包含層出土石器（第Ⅰ期）

石　器（第14図26～30、図版６）

石鏃４点、打製石斧１点が出土している。26・27は先端部と基部の接点にその前後の調整とは剝離の角度及び大きさを違えた調整を加え肩部を作出し先端部が突出する形態をとる。非常に丁寧な二次調整を加え、深いくの字状の抉り込みをもつ。表裏に残る素材剝片の剝離面の打点方向は、26は180°転移がみられ、27は同方向である。28は26・27程顕著ではないが施される調整から肩部を意識したものと考えられ、やはり先端部を短く突出させている。同様に基部にくの字形の深い抉り込みが入る。29は裏面に残る素材剝片の剝離面からおそらく貝殻状剝片を素材としたものであろう。尖頭部下端がやや張り出しその下部に茎部をもつ。26～29はすべてチャート製である。30は流紋岩製の打製石斧である。表面側はやや角度のある剝離が、裏面側は基部を除き平坦な剝離が加えられ断面がＤ字状となる特徴的な形態をもつ。

第II期

土　器

第１群（第15図31～43、図版７）

第１類（第15図31）

幅の狭い板状工具で格子目状の沈線を施文する。器壁は薄く黒褐色を呈する。

第２類（第15図32・33）

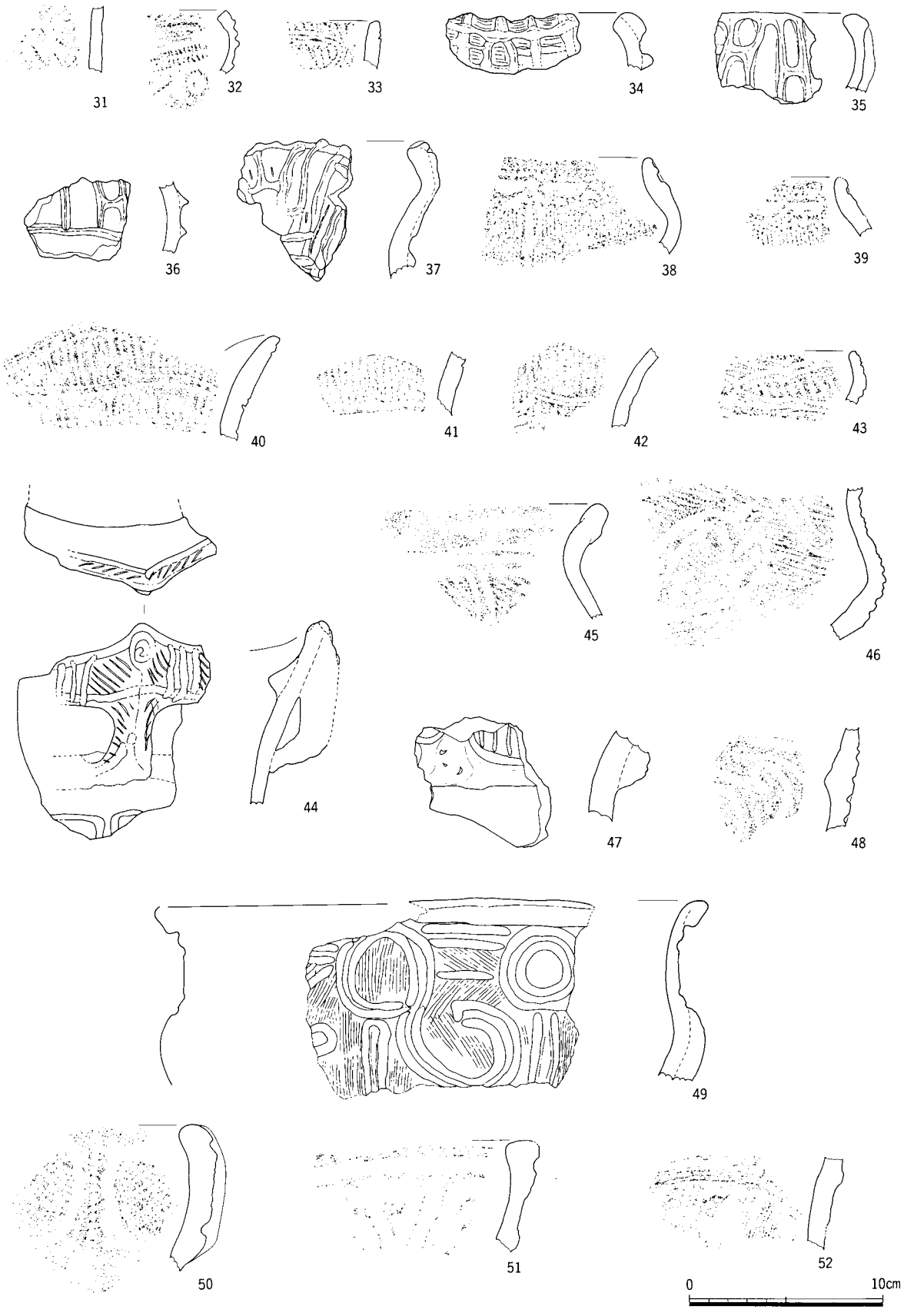
器壁が薄く縄文を地文とするものを本類とする。32はキャリパー形を呈し、口縁形態は波状を呈する。縄文ＬＲを地文として施し、細い隆帯を円環・曲線状に貼付し連続爪形文を施す。口縁端部及び内面に粘土帯を貼りつけ、面を形成した口唇部に内外面から半截竹管状工具による連続刺突を、内面肥厚帯に縄文ＬＲを施す。33は口縁形態は平縁を呈す。縄文ＬＲを横位に施し地文とし半截竹管状工具により楕円区画を描く。

第３類（第15図34～37）

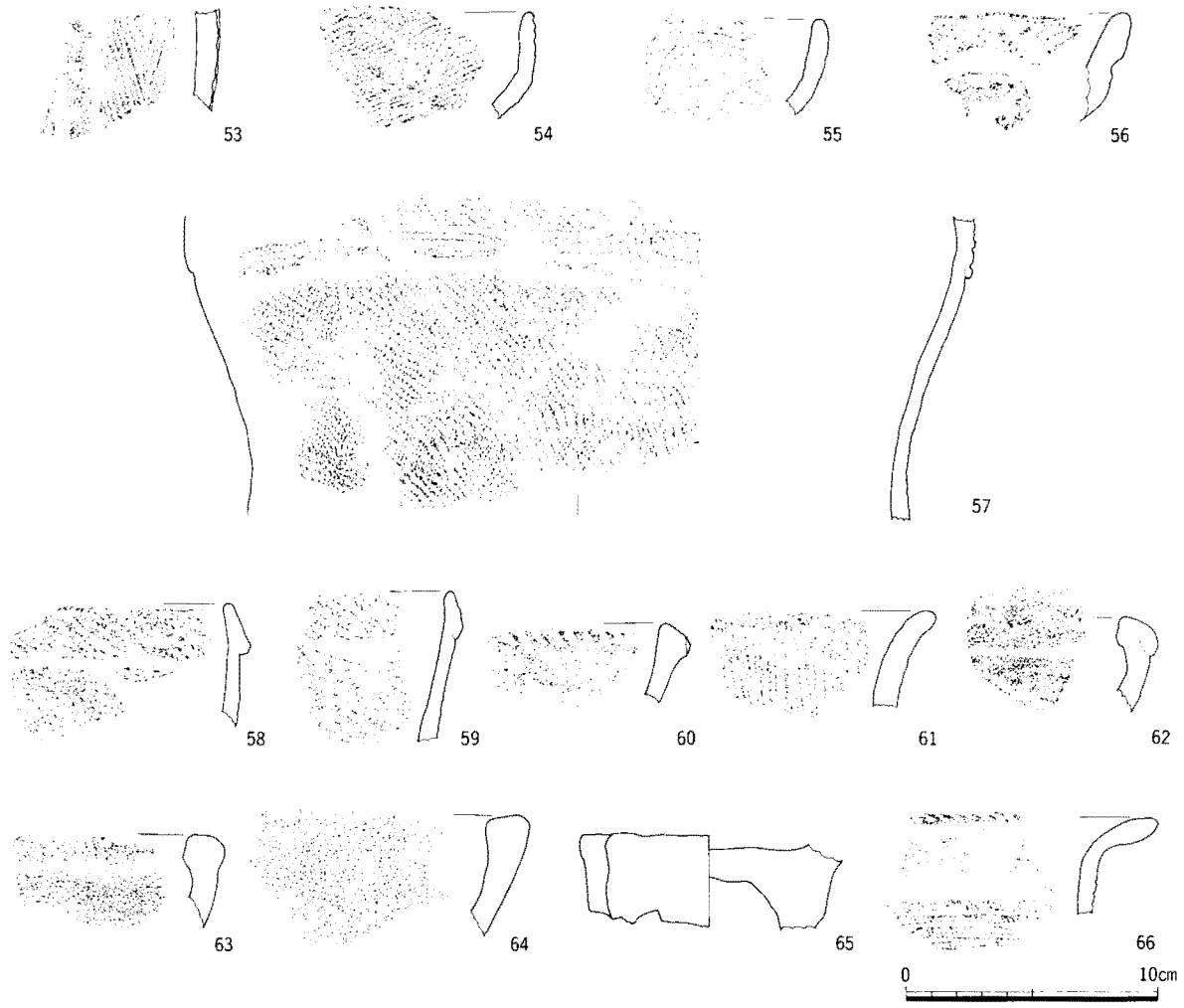
貼付隆帯による施文を基調とするものを本類とする。口縁部形態はキャリパー形を呈す。隆帯を縦横、あるいは斜めに貼付し文様を描く。35は隆帯間を棒状工具により縦位に押し引き赤彩を施している。

第４類（第15図38～43）

撚糸を地文とするものを本類とする。38・39の口縁部形態はキャリパー形を呈す。口縁直下に半截竹管状工具による押し引きを施し、その下位に口縁に平行する１条の隆帯を横走させ、基点となる円



第15図　包含層出土土器（第II期）①



第16図　包含層出土土器（第II期）②

環文を隆帯で連孤状に連結させる。また、円環文から２条の隆帯を垂下させ連孤状隆帯直下に半截竹管状工具による波状文をおいている。40は口縁部が緩く外反し山形口縁を呈す。半截竹管状工具により頸部に横走する、あるいは緩やかな連孤状の沈線、口縁部には曲線文を描く。41・42も同様な資料である。43は地文に撚糸をもたないが、強いキャリパー形を呈し区画内外を沈線で充填している。類似するものとして本類に含めておく。

第２群（第15・16図44～61、図版７）

第１類（第15・16図44～49、65）

口縁部に立体的な橋状把手、特徴的な方形の区画帯をもつものを本類とする。口縁形態は平縁、波状縁がある。44は立体的な橋状把手がつく方形区画部分であり、小山形波状縁を呈す。口縁内外面に隆帯を貼付し口唇部に平坦面を形成しヘラ状器具による刺突を施す。把手は素麺状粘土紐でふちどり、

波頂下に隆帯による渦文をおく。渦文の両側に3条の隆帯を垂下させ、区画内を右傾するヘラ描き短沈線で充填している。また、口縁内面に1条の隆帯を横走させている。49は弯曲部分より口縁が外反しながら立ち上がり複合口縁となる。橋状把手に代え厚い瘤状の粘土帯を貼付し、間に2条の横位の沈線で結んだ逆S字文をおき縦位・右傾・左傾する櫛歯状工具による条線で充填している。ただし、逆S字文内は1つおきに無文としている。45・46は同一個体資料と考えられ、やはり弯曲部から口縁が外反しながら立ち上がり複合口縁となる。弯曲部のやや角がたつ部分に沈線による渦文をおき、渦巻＋方形区画？を描きヘラ描斜線で充填する。47は把手間の方形区画部分を縦位の沈線で充填している。頸部以下は無文となるものか。48は沈線による楕円区画間に蕨手状を配置するもの考えられ、棒状工具による刺突がみられる。内面に1条の隆帯をめぐらすことにより本類に含めておく。

65は脚部であり、本類、あるいは第2類に伴うものと考えられる。楕円形の透かし孔を穿孔するものである。

第2類（第15・16図50～53）

隆帯による区画帯をもつものを本類とする。口縁部は緩やかに弯曲する器形を呈す。隆帯により楕円区画等を描き、区画内を沈線による格子目状文、無文で充填する。50は縦位の隆帯上に押し引きがみられ、その延長上にあたる口唇部に1つの刺突を施す。51は隆帯上、隆帯両側にも沈線を施す。52は頸部片であり胴部は縦位の沈線間を矢羽根状の櫛描沈線文で充填している。53は胴部片である。垂下する隆帯による区画間を矢羽根状沈線文で充填しており本類、あるいは第3類の胴部と考えられる。

第3類（第16図54～56）

沈線による区画帯をもつものを本類とする。54・55は縄文ＬＲ、あるいはＲＬを地文として半截竹管状工具で大きなうねりの波状文を描く。器壁は薄く口縁部形態は緩く内弯している。56は沈線で渦巻文を描き、複合口縁部には縄文が施されているが残存状況が悪く詳細は不明である。

第4類（第16図57～61）

無文土器・縄文土器・櫛描沈線文土器を一括した。57～59は口縁部が緩やかに内弯する。平縁であり、口縁を折り返し複合口縁とする。縦位に縄文ＲＬを施すが、57は複合口縁部にヘラ状工具による二重の楕円文を配置する。60は口縁部を肥厚させ外面にキザミをいれ以下無文としている。61は口縁部直下より縦位直線状の櫛描沈線文を施す。口縁部は緩く外反する。

第3群（第16図62～64、図版7）

浅鉢形土器を本群とする。口縁部は緩く内弯し、口縁端部を肥厚させている他は無文としている。

第4群（第16図66、図版7）

亜流の遠賀川系の甕である。1点のみ出土している。

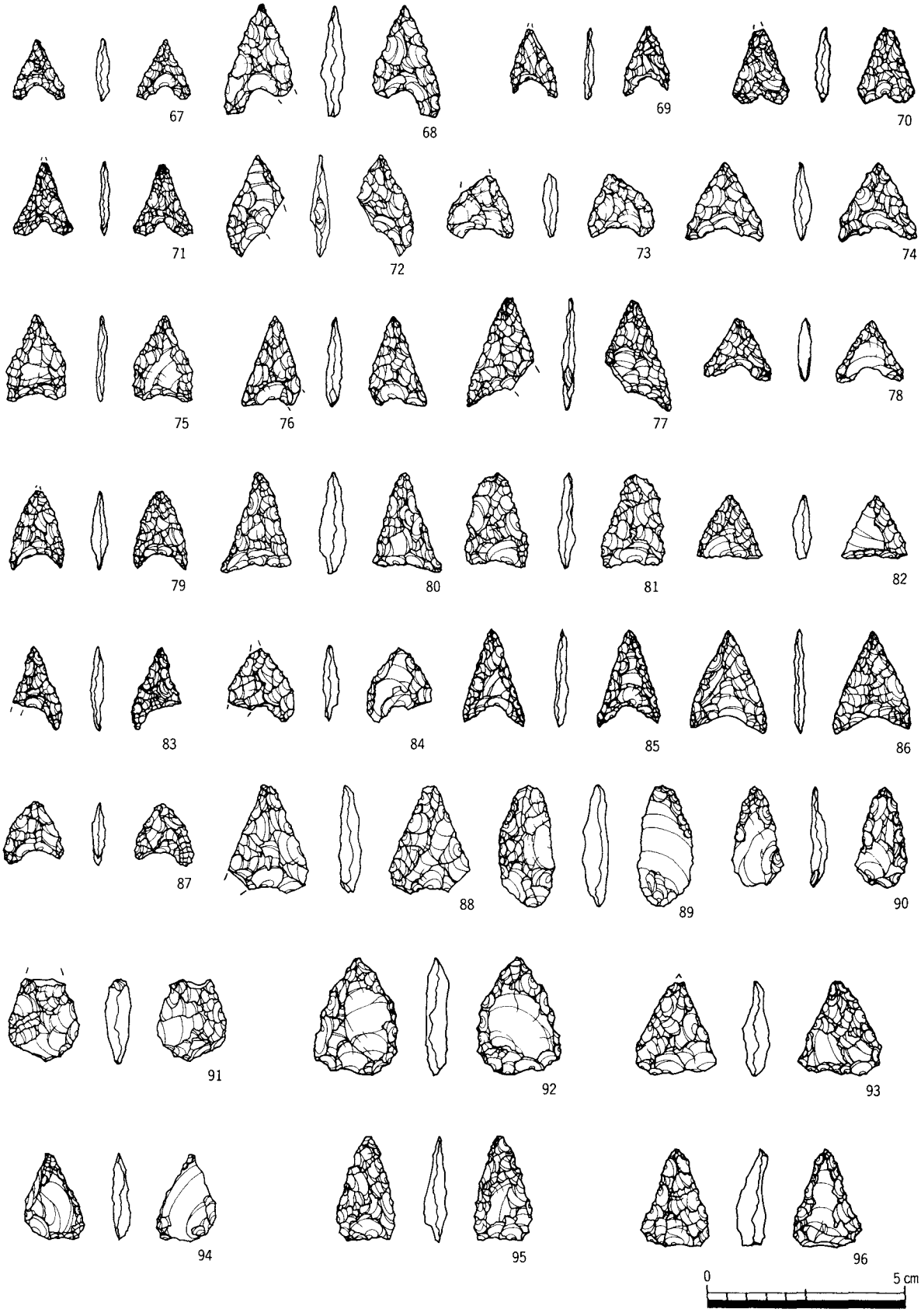
石　器

本遺跡の包含層（第Ⅲ・Ⅳ層）から出土した石器は1,805点である。その内訳は石鏃121点、石錐7点、石匙1点、削器6点、掻器5点、ＲＦ5点、ヘラ形石器3点、ＵＦ5点、クサビ形石器9点、磨製石斧1点、打製石斧134点、石核14点、石錘5点、敲石2点、叩き石1点、磨石1点、砥石5点、凹石4点、石皿1点、剥片・砕片1,475点である。剥片石器では石鏃・打製石斧の占める割合が非常に多い。

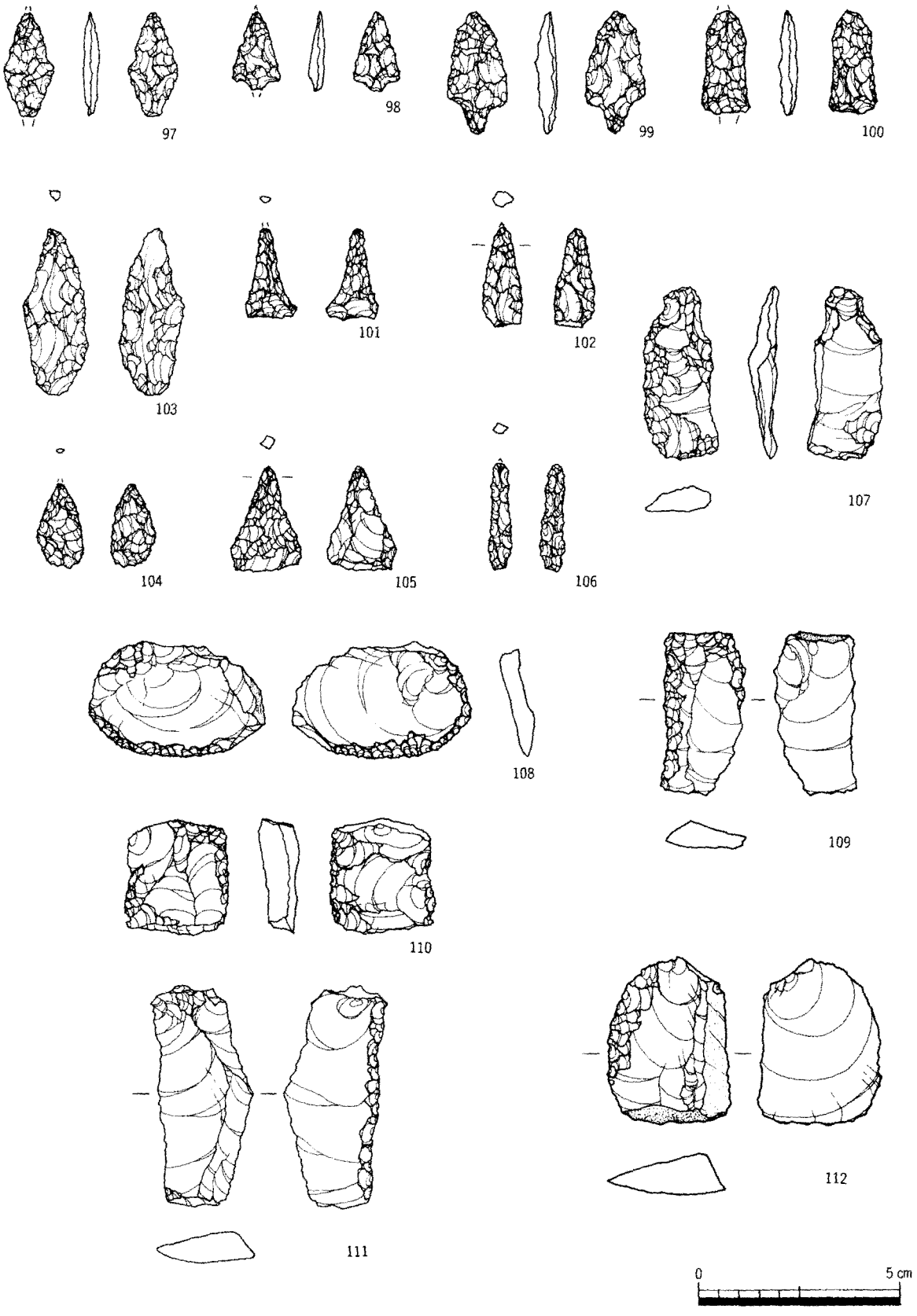
石　鏃（第17・18図67～100、図版8）

折損品等の一群を含め出土数は121点である。石鏃に関しては機能・装着方法等を鑑み種々の形態分類が報告されているが、恣意的な分類にならざるを得ないものもあり、そのデータ化に統一性がいまだにみられていない。本遺跡出土の石鏃に関しては、まず形態的には従来よりの分類－Ⅰ類－基部側に抉り込みの入るもの（凹基）、Ⅱ類－基部側が円くやや突出するもの（円基）、Ⅲ類－基部が直線上となるもの（平基）、Ⅳ類－基部に茎をもつもの（有茎）、Ⅴ類－その他（折損品を含む）に大分類し、その他の属性に関してはできる限り数値化に努め属性表に掲載した。Ⅰ類は84点出土しており、22点図示した（67～88）。Ⅰ類中においてもより細かい形態的な属性により細分が可能であるが、ここでは法量の他に先端角・側辺部の形状・抉入部の深さ（抉深・基長）より機能的側面を考察したい。まず先端角については、25°～30°に中心があり、30°以下となるものには83のように上半部に肩がつき尖頭部が突出する形態をもつものであり、他に6点ある。側辺部の形状については、直線状に開くものが67点（80%）を占めるが、内2点（75）は鋸歯状となるものである。他に凹状となるもの3点（80）、凸状となるもの14点（73・84・87）があるが、この属性は前述の先端角と伴に直接その形態を反映している。抉深は72のように深く入るものは少なく、0.3～0.5cm程度の浅いものが多い。なお、83はその形態より第Ⅰ期に属する資料である。Ⅱ類は9点出土している（89～92）。いわゆる尖基鏃（89・90）と円基鏃（91・92）に大別できる。先端角は34°～37°でありⅠ類と比較してやや広めである。側辺部は凹状となるもの5点（90）、やや角のたつもの3点（91・92）がある。89・90は裏面に素材剥片のネガ面を残し、また、90は線状打面及びバルブも観察され、表面のみ調整を加え形状を整えている。共に尖頭部は丸みを帯びている。基部については、最大幅より下位の長さを基長とし測定した。平均値は0.5cmである。Ⅲ類は10点出土している（93～96）。基部の属性を除きⅠ類に似るが、96のように打面・バルブを残したものが3点あり、基部側に厚くやや雑な調整を施している。先端角は34°～37°に中心があるがやや広く、Ⅱ類に近い数値を示す。Ⅳ類は7点出土しているが（97～100）、97のようにかえしが僅かにしか認められないもの、98～100のようにかえしのあるものに大別でき、後者が6点ある。先端角は30°に中心があり、側辺部はすべて直線状となる。茎部は折損するものが多く、99が0.6cm、97は1.1cmを測る。

Ⅰ～Ⅳ類に共通して伺われる特徴として、表裏に素材剥片時のポジ、あるいはネガ面を残すもの



第17図　包含層出土石器（第II期）①



第18図　包含層出土石器（第II期）②

59点（54%）が認められることである。内、前述したが、II・III類の中には打面及びバルブを残すものも存在する。素材の用い方が窺い知れる資料であるが、その素材となった剥片の多くが貝殻状剥片であり、規則性は認められない。V類は未製品・折損品を一括した。未製品の中には素材剥片の打面側を切断し石鏃の基部とし、側辺部に角度のある調整を加えたものが認められる。また、折損品は先端部、脚部片が多い。石材に関しては、チャートが93%を占め、下呂石が僅かな残りの部分を充塡するが、本遺跡で剥片素材として多く用いられている流紋岩製は1点も存在せず石材の選択性が窺われる。

石　錐（第18図101～106、図版8）

7点出土（6点図示）しており、すべてチャート製である。形態的には、I類－剥片の一部に刃部をもつもの2点（103・104）、II類－長い尖頭部と基部を合わせもつもの4点（101・102・105）、III類－棒状となり尖頭部と基部が不明瞭なもの1点（106）に大別できる。103は裏面右側縁中央付近に打面部がある横長剥片を素材としている。数回の調整により打面及びバルブ付近の厚みを減じようとしている他は素材剥片の形状をあまり変えていない。尖頭部は欠損しており、断面は三角形を呈している。104は小型で尖頭部分の厚みも薄い。101・102・105も横長剥片、あるいは貝殻状剥片を素材とし、おそらく打面に対し直交方向の幅の薄い縁辺部に長い尖頭部を作出したものと考えられる。尖頭部と基部側とは僅かに調整の角度を替えその区分を意識している。尖頭部の断面はすべて菱形を呈する。106は尖頭部を僅かに欠損し、断面は菱形を呈する。両面調整が施されるが基部側はやや調整が浅い。

石　匙（第18図107、図版8）

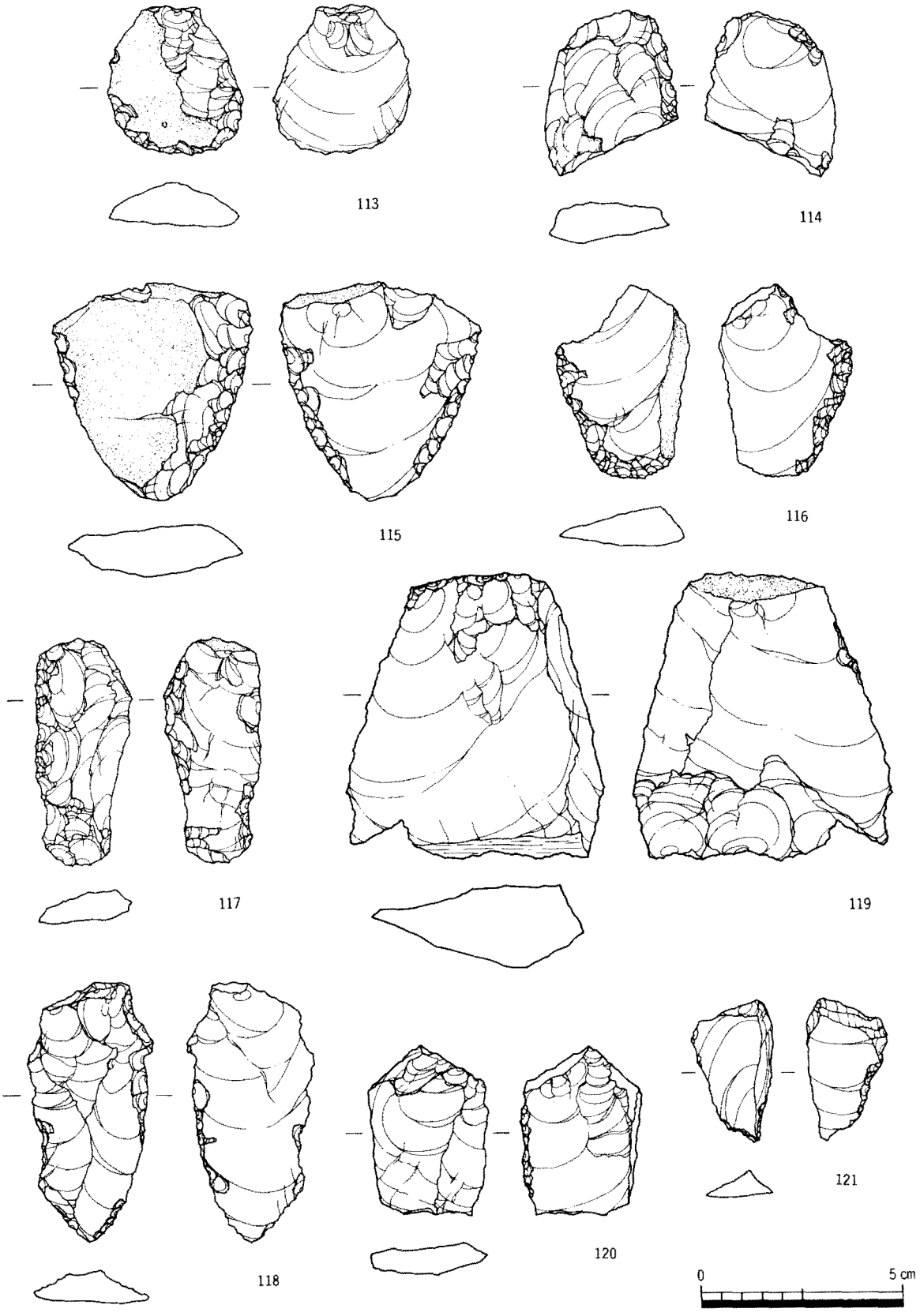
1点出土している。チャート製である。縦長の剥片を素材とし右側縁に折断面をもつ。この折断面はおそらく製作途中での折れと考えられる。左側縁及び基部部分は腹面側から調整を加え刃部を作出しており、本来は左右対称の縦型の石匙となるものであろう。なお、先端部は細かな調整が施されているが、素材剥片の末端部はややヒンジ気味の様相を呈し、角度が大きく刃部にはなり得ていない。打面側の作出したつまみ部を除き裏面側の調整は施されていない。

削　器（第18図108～112、図版8）

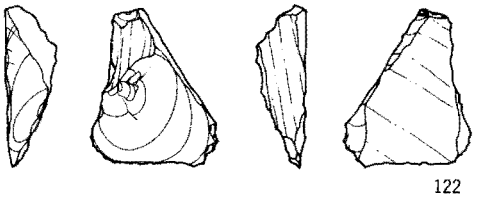
剥片の縁辺に連続的な調整加工を施し刃部としたものである。6点出土しており、内5点図示した。まず素材の面から、縦長の剥片を素材とするもの（109～112）と横長の剥片を素材とするもの（108）の大きく分けられる。刃部作出方法の面からは、縦長剥片を素材とするものは108・112が背面側左側縁片面加工、109は両側縁両面加工、111が腹面側右側縁片面加工としている。横長剥片を素材とする108は下端部は両面加工、腹面側右側縁部は片面加工となっている。すべてチャート製である。

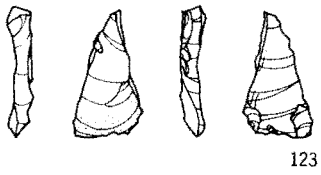
掻　器（第19図113～117、図版8）

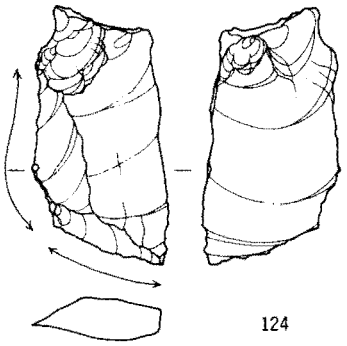
剥片の縁辺に急角度な調整を加え刃部としたものである。5点出土している。113は背面に自然面を残す初期剥片を素材とする。打面側を基部とし、両側縁の下部から下端部にかけて刃部を作出し

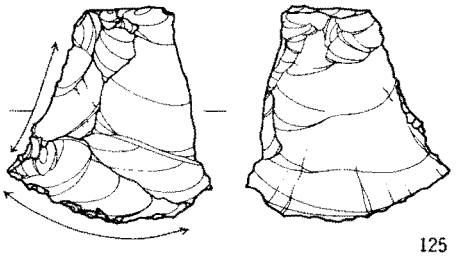


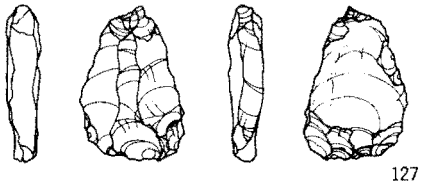
第19図　包含層出土石器（第II期）③

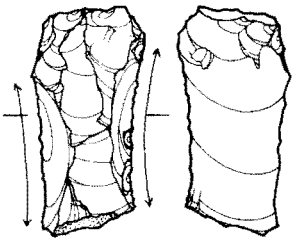

122


123

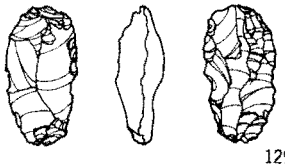

124

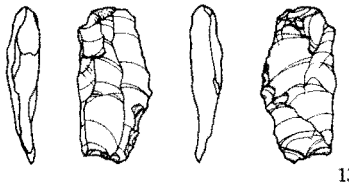

125

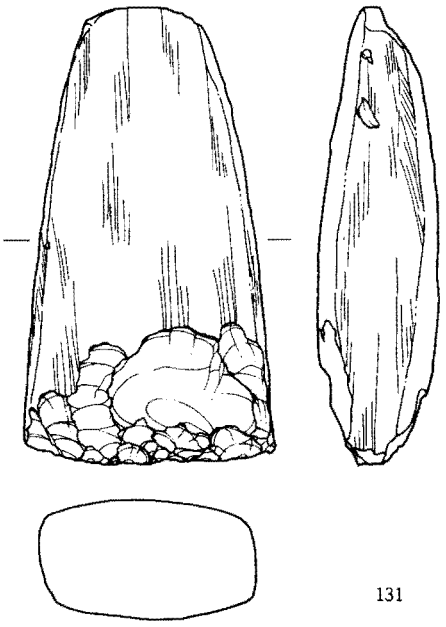

127


126

128


129


130


131

第20図　包含層出土石器（第II期）④

ている。114は縦長の剥片を素材とするが、下部は節理面により折れている。右側縁部を折断し、刃部に適する角度面を形成後腹面側より調整を加えている。115は背面に大きく自然面を残す幅広な剥片を素材とする。116・117は縦長の剥片を素材とするが、116は左側縁から下端部に両面加工の刃部を、117は左側縁に片面加工の刃部をもつ。すべてチャート製である。

R　F（第19図118～121、図版８）

二次加工を加えるが連続性・統一性に乏しく、刃部を形成するような大きな調整を施していないものをＲＦとした。５点出土しており、４点図示した。118は縦長の剥片の両側縁に剥離痕が認められるが、左側縁の剥離は特に不揃いで背面側のみに認められ、使用の結果として理解した方がよいと考える。右側縁は上端部はノッチ状に、中央から下端部は凸状の刃部を形成するように腹背面側に大小の調整を加えている。119は上下及び右側縁に自然面・節理面を残す分厚な剥片を素材とする。ただし、腹面側下端部に節理面を打面として少なくとも３枚の剥片が剥離されており、石核として機能していたと思われる。その後、腹面側右側縁上端部に不揃いな調整を加えたものである。120も縦長の剥片を素材とするが、下端部は背面側より折り取られている。腹面側に小さく不揃いな剥離痕が認められる。121はポジ面を両面に持つ剥片を素材とし、刃部以外は折断面、やや幅を持つ自然面で構成される。裏面側に僅かにノッチ状を呈する調整が加えられている。すべてチャート製である。

ヘラ形石器（第20図122・123、図版８）

貝殻状剥片、あるいはやや縦長の剥片を素材とし、両側辺を折り取り平面形をヘラ形としたものである。[1)]「小の原遺跡」でまとまった資料として認識し、一つの定型的な剥片石器として考えている。先端部（下端部）には微細な使用痕、調整痕が認められる。３点出土しており、内２点図示した。すべてチャート製である。122は粗悪な節理面に覆われているので腹面側を中心に図化してある。左側辺部は背面側からの折り取りである。下端部腹面側に微細な剥離痕が見られる。123は表裏ともポジ面で構成され、両側辺は截断面となり、基部（上端部）はやや尖り気味となる。やはり下端部には刃こぼれが認めらる。

１）佐野・西村『石器類』「小の原遺跡・戸入障子墓遺跡」岐阜県教育委員会　1993

U　F（第20図124～126、図版８）

５点出土している。すべてチャート製であり、３点図示した。いわゆる「刃こぼれ」状の細かい非連続な剥離痕が認められるものである。124は自然面を打面とする縦長の剥片を素材とするが、右側辺部は背面側より折り取られている。左側縁部から下端部にかけて微細な剥離痕が認められる。

125は末端部がややヒンジ気味に収束する縦長の剥片の左側辺裏面部及び下端表面に刃こぼれが認められる。126は両側辺部が凹気味となるが、その部分に裏面側よりの微細な剥離が認められる。

クサビ形石器（第20図127～130、図版８）

加撃と衝撃による剥離痕が対象的な位置に認められる石器である。９点出土しているが、すべてチャート製である。４点図示した。127は裏面に主剥離面を大きく残すが、節理が入り粗雑なチャー

トを素材としている。右側辺に截断面をもつ。上端は折れ面となるが、下端裏面にツブレ状の微細剥離が見られる。128は裏面上部に主剥離面を残す。両側辺部にも横方向からの小さな剥離痕が存在し、短軸方向もクサビとして使用されたものと考えられる。129は表裏に90°直交するポジ面をもつ凸レンズ状の厚手の剥片を用いている。表面上端にバルブの発達しない剥離が入る。下端部はツブレ状の剥離が集中する。130は礫面を一部残す縦長剥片を素材とする。裏面下端にバルブの発達しない剥離が入る。

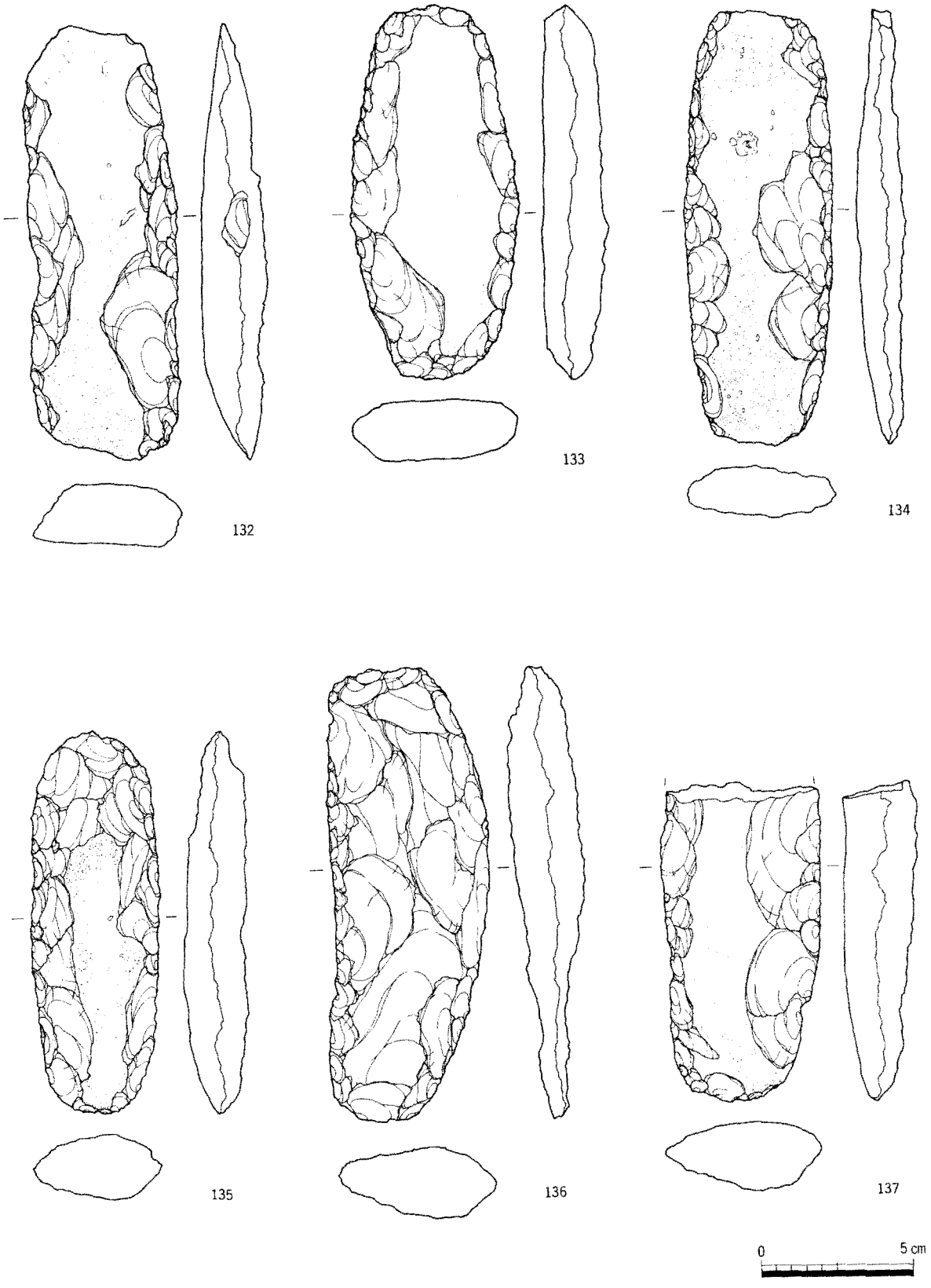
磨製石斧（第20図131、図版９）

１点出土している。形態的には断面が隅丸長方形を呈する定角式の範疇に含まれる。刃部を欠損しているが、おそらく両刃なるものであろう。全面に縦方向の研磨痕が認められる。結晶片岩製である。刃部欠損後叩き石として転用されたらしく、大きな数枚の剥離痕とツブレ状の細かい剥離痕が顕著である。

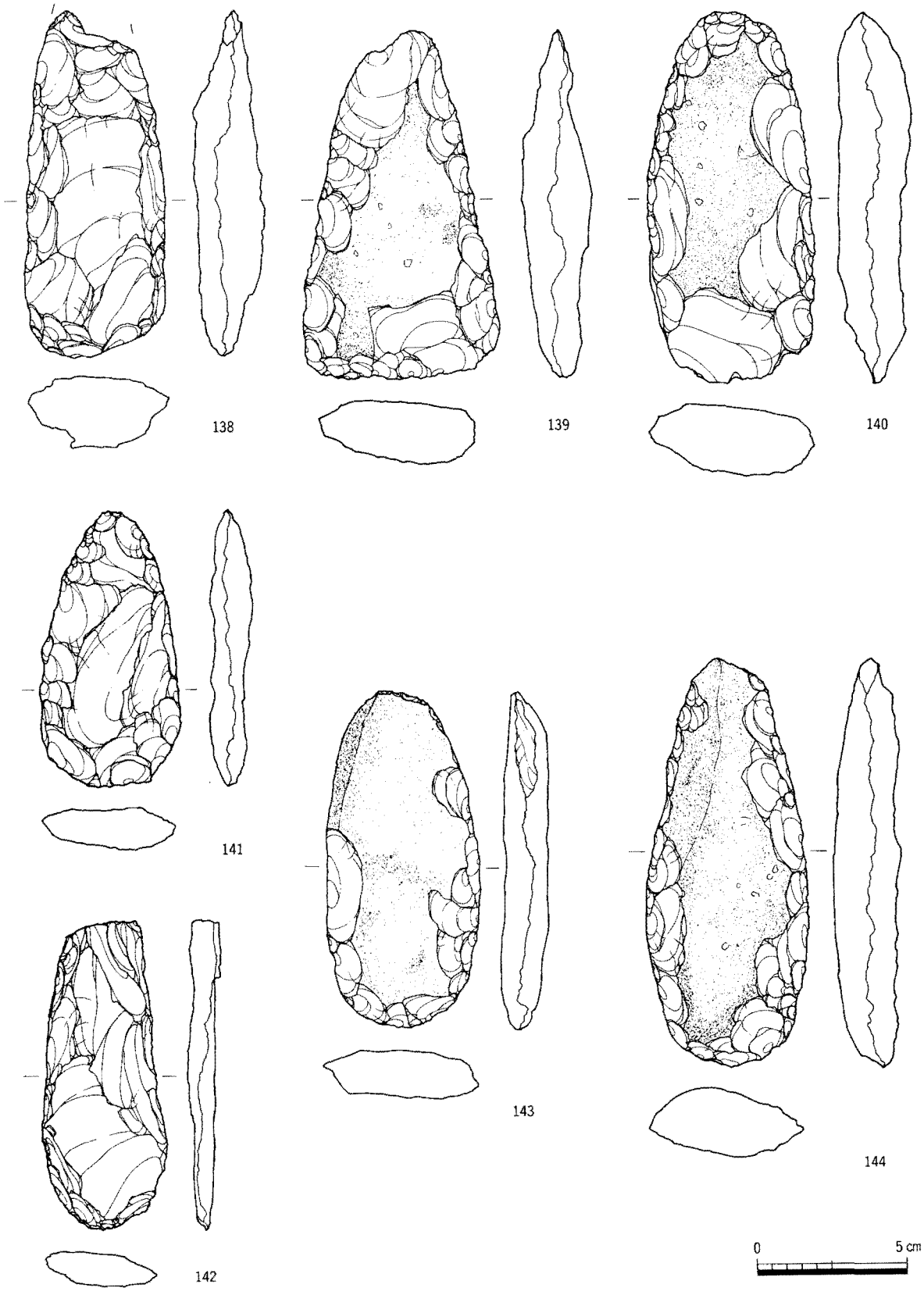
打製石斧（第21・22図132～144、図版９）

全調査区より134点の出土しており、内13点図示した。その平面形は、従来の区分に従うと大きくはいわゆる短冊形と撥形の範疇に入ると考えられるが、詳細に見るならば基部（あるいは刃部）が丸く（尖る）収束する等どちらとも云いがたい曖昧な形態も存在する。また、二次（整形）調整に関しても石斧製作者が規範的なあるイメージを描きつつ意図的に素材剥片の形状を二次調整によって変えているような調整痕が窺いしれる資料は僅かであり、逆に素材剥片の形状に左右されている資料が多く認められる。故に、石斧の形態（平面形）にはここでは言及しないで、まずその製作方法から考えることにしたい。本遺跡において、打製石斧に用いられている石材は流紋岩・砂岩・粘板岩があり、中でも流紋岩が半数以上（59%）を占める。また、背面（表面）に自然面を残すもの（132～135等）が76点（62%）存在し、その形状から円礫の平坦部を取り込む剥片剥離が行われていたことが考えられるが、140のようにやや湾曲する部分を用いたものも存在する。次に腹面側を観察すると、腹面（裏面）の右あるいは左側縁中央部付近に打点部をもつ横長剥片を素材とするものが多い。打点部は二次調整によって除去しているが、バルブ付近の厚みを取りきれずに中央部に最大厚をもつものが多く存在する要因となっている。

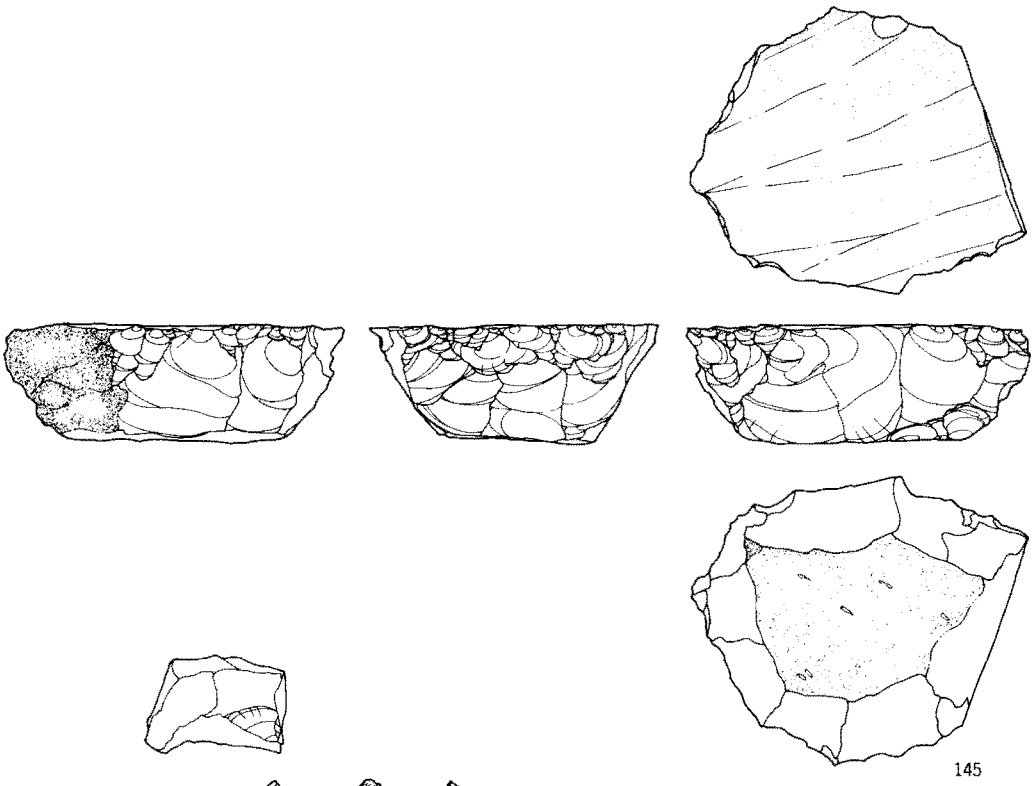
以上より石斧製作工程を復元してみると、**第Ⅰ工程－円礫の採集、打面部作製**（剥離する方向と直交する位置に平坦面をもつ場合はそのまま打面として利用）、**第Ⅱ工程－素材剥片剥離**（横長剥片剥離を目的とし、その形状は翼状、横長楕円状となる。ただし、143に見られるように剥片の末端部に折断面を有するものも数点あり、大型の剥片も剥離されている可能性もある。）**第Ⅲ工程－整形**（ただし、二次的に入る調整剥離に関しては細かいものが多く、素材剥片の変形度という観点から見ると打点部のバルブの厚みを減じる他は形態をある程度整える程度のものである。）また、139は基部に大きな調整を数回加え明らかに撥形を意識している。143も基部の左辺は稜の変換点、右辺は切断により同様な効果をねらっているが、これらは本遺跡資料に限っては逆に例外的な資料といえる。ただし、136・138・141のように腹面が１、２枚の剥離面で構成され、背面も数枚の剥離面で構成される資料も存在する。この背面側の剥離面が素材剥片の持っていた剥離面であるのか、調整による

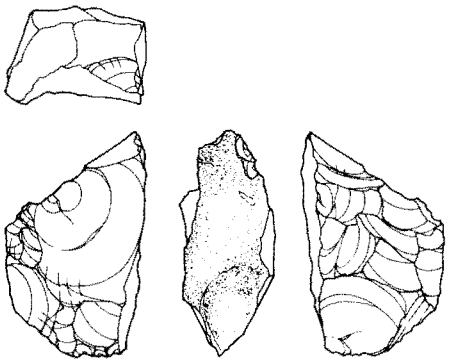


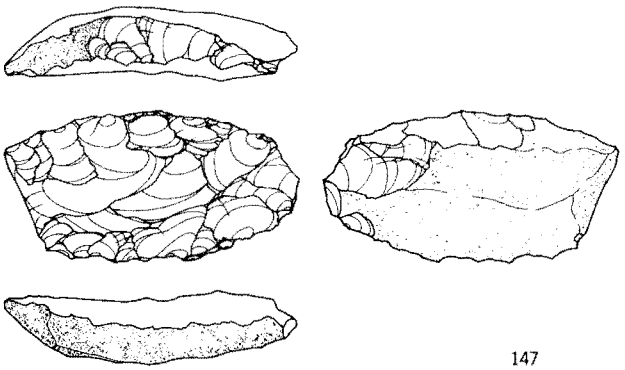
第21図　包含層出土石器（第II期）⑤



第22図　包含層出土石器（第II期）⑥







第23図　包含層出土石器（第II期）⑦

剝離面であるのか、その判断が困難なものが多いが、第II工程において連続的に素材剝片が剝離されている可能性も考えておく必要があるが主体的ではないようである。第II工程における目的的な素材剝片は自然面を背面に持つ横長の剝片であり、一石核から一ないし二枚の素材剝片という一見非能率的な剝片剝離技術の存在を認めざるを得ない。この剝片剝離技術が存在するためには石核(河原石)の採取が容易かつ多量であることが前提条件であり、遺跡の眼前を流れる板取川の河原等での打製石斧製作が行われた可能性が考えられる。また、本遺跡内で第I工程における石核が存在しないこと、また、調整剝片が見当たらないこと等からも先の可能性が示唆され、打製石斧は製品として本遺跡内に持ち込まれたと見るべきであろう。

次に、縁辺部にツブレ状の敲打痕の認められる資料が71点(53%)存在する。内、基部に見られるもの39点、体部に見られるもの32点である。これらのツブレ状敲打痕は打製石斧の厚みを減じるために施された可能性も考えられるが、その調整が横方向への剝離ではなく、側辺部においていわゆる面を作製する(このためツブレ状とする)ために行われている可能性が考えられ、柄部への装着のための調整である可能性がある。今後の検討が必要であろう。

刃部について観察可能な資料は45点(34%)であり、他は刃部及び基部を折損する。刃部を素材剝片剝離時にできたままとするもの19点、調整を加え刃部を形成しているもの25点であり、前者の刃角は25°～45°の間に、後者はやや大きく50°～65°に間にある。後者には僅かに磨耗痕が認められる資料もあるが、前者には認められない。刃角からも両者の間に機能的な差異が存在したのであろうか。また、刃部におけるリダクションが行われている資料は本遺跡では存在しない。

石　核(第23・24図145～149)

石核は14点出土している。内、1点のみチャート製で他は流紋岩製である。本遺跡出土の小型剝片石器の大部分がチャート製であることを考えると奇異に感じるが、剝片数から見ると流紋岩製のものが非常に多いのにもかかわらず、定型的な石器としては利用されていないことに起因する。まず残核としての石核の観察を行う前に、素材・打面・作業面を基準にして分類したい。

I類　分割礫を素材とする。平坦な自然面(節理面)等1ケ所のを打面を設定し剝片剝離作業を行う。剝片剝離作業面の設定位置によりに細分する。

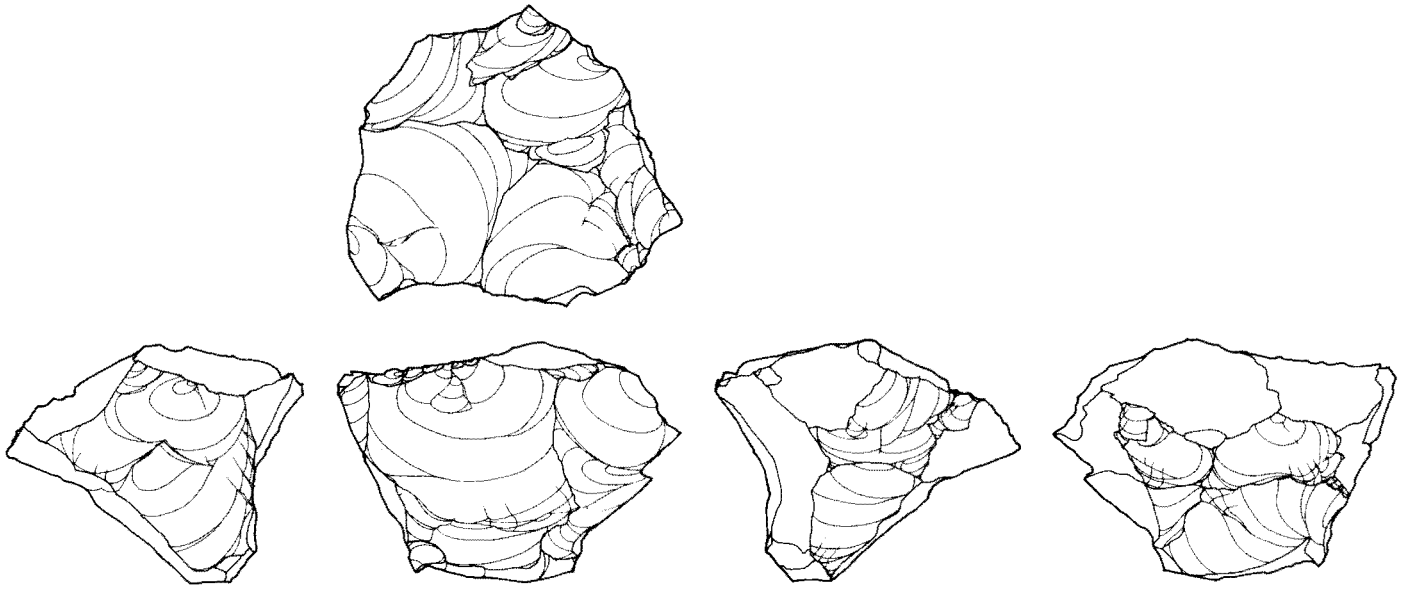
I a類　作業面が正面(1面)で行われるもの。

I b類　作業面が全周するもの。

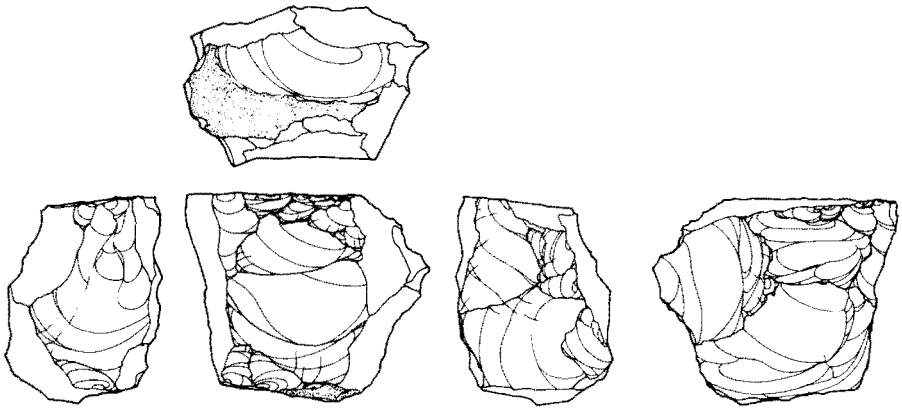
II類　板状剝片を素材とし、上下両端に打面が設けられ剝片剝離作業が交差するもの。

III類　分割礫、あるいは厚みのある板状剝片を素材として、頻雑に打面転移がみとめられるもの。

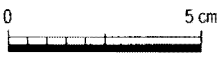
以上に分類したが、中でもII類に分類した資料が5点ある。147は裏面に自然面を残す板状剝片の長軸を横位に用いて、上端は後方に傾斜する自然面+剝離面を打面として、下端は裏面(自然面)を打面として剝片剝離作業を行っている。新旧関係は上端→下端へと移行しており、特に下端部か



148



149



第24図　包含層出土石器（第II期）⑧

らの剥離は寸ずまりな貝殻状を呈している。前作業面の稜状を打撃しており、打角は65～80°である。Ⅰ類に属する資料は2点図示した（145・147）。145（Ⅰb類）は節理面を打面とし、左側面部分を除き剥片剥離作業が行われている。打角は90°に近く、石核のもつ高さに制限されるが、両側縁の平行した縦長の剥片が剥離されている。ただし、この剥片は下端部に自然面をもつ。Ⅰa類に属する資料は図示していないがⅠb類とほぼ同じく90°に近い打角をもち、やや縦長、あるいは貝殻状の剥片が剥離されているが、一石核に対する剥離される剥片の割合はあまり多くないと推測される。146・148・149はⅢ類に属する。146は上端の剥離面打面から裏面側で剥離を行い、90°打面を転移し右側縁の自然面を打面として作業を行い、最初の作業面を打面として正面側で一枚の幅広な剥片を剥離している。148はかなり頻雑に打面転移を行っている。まず正裏面の剥離面を打面として上端部で剥片剥離作業を行い、その作業面を打面として左側縁→裏面→右側縁→正面と剥片剥離を進行させている。打角は75°～90°である。149は厚手の剥片を素材とし、上端の打面部を除いた全周で打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離を行っている。その作業の過程は裏面上端から→（90°打面転移）裏面右側縁部から→右側縁裏面から→（90°打面転移）正面上端から→左側縁上端から→裏面上端からと考えられるが、最後の上端部からの剥離はヒンジフラクチャーとなり廃棄されたと考えられる。

石　錘（第25図150～154、図版9）

礫石錘4点、切目石錘1点の出土がある。前者はすべて砂岩製、後者は粘板岩製である。礫石錘はすべて小型の円礫を素材とする。150・153は上下端に裏面より1～3回の剥離を施して紐掛け部を作り出している。152は短軸方向に、左側辺は裏面部より、右側辺は表裏面より剥離を施し紐掛け部を作出している。いずれも紐づれ痕等使用痕は明瞭ではない。なお、150は被熱している。

切目石錘（154）は礫石錘と比較して細身での長軸方向に長い素材が用いられている。火熱により裏面側を半截している。

礫石錘計測表[2)]

No.	出土区	a（mm）	b（mm）	L_1（mm）	L_2（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	挿　図
1	S19II	13.0	9.0	68.0	65.0	60.0	25.0	120.1	第25図150
2	S19III	5.0	9.0	66.0	64.0	30.0	16.0	46.8	第25図151
3	S19III	12.0	6.5	48.5	44.0	57.0	11.0	47.0	第25図152
4	R19III	16.0	18.0	78.5	76.0	50.0	19.0	114.7	第25図153

2）計測方法については渡辺誠氏（1985、1988）の提唱案による。

切目石錘計測表

No.	出土区	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	挿　図
1	Q14II	78.0	21.0	13.0	24.6	第25図154

敲　石（第25・26図157・160、図版９）

２点出土しており、共に長楕円礫（砂岩製）である。157は長軸両端部に平坦面を形成する程度の敲打痕が認められ、特に下端部において顕著である。160は長軸及び短軸両端部にアバタ状の敲打痕が認められるが面的広がりは不定形である。

敲石計測表

No.	出土区	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	挿　図
1	R21II	131.0	55.0	40.0	454.6	第25図157
2	Q20II	77.5	46.0	34.0	180.2	第26図160

叩き石（第25図155、図版９）

形態的には礫石錘に似るが、下端に入る剥離が大きく上端部の剥離も裏面側よりのみで敲打痕的なツブレが認められることより叩き石と判断した。あるいは153も同じ範疇で理解すべき石器かもしれない。砂岩製。

叩き石計測表

No.	出土区	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	挿　図
1	S19III	97.0	64.0	29.0	244.1	第25図155

磨　石（第25図156、図版９）

１点出土している。多孔質の河原石（花崗閃緑岩製）を素材とし、表裏及び長軸方向両側縁に磨面をもつ。

磨石計測表

No.	出土区	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	挿　図
1	Q15III	100.5	85.0	45.0	620.0	第25図156

砥　石（第26・27図161・163、図版９）

５点出土しているが、すべて被熱により破損している。完形時の重量は推定になるが、161のような持ち砥石と162のような置き砥石という分類は可能である。表裏面及び側面に砥面を持つが、いずれの砥面にも金属器の使用結果にによる線状痕が残存しており帰属時期の推定は可能である。

凹石（第26・27図158・159・162、図版９）

4点出土している。流紋岩、あるいは砂岩製の円礫を用いて、表裏両面にそれぞれ1ケ所の凹みをもつもの（158）、連続した2ケ所の凹みをもつもの（159・162）がある。凹み部分の平明形、深度については共通性は窺われないが、いずれも敲打によるものと考えられ、底部部分にアバタ状の凹凸が観察される。162の表面側凹み部分の底部には短軸方向に平行する線状痕的な使用痕が認められる。他の平坦部及び側縁部には使用の痕跡は認められない。

凹石属性表

No.	出土区	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	挿　図
1	F 7 III	100.0	80.0	48.0	573.8	流紋岩	第26図158
2	M10 I	101.0	74.0	49.0	548.8	砂岩	第26図159
3	E4III1190	123.0	99.0	55.0	900.0	砂岩	第27図162
4	R16III	113.0	101.0	55.0	880.0	砂岩	

石　皿（第27図164、図版10）

1点出土している。半存しているが、わずかに周縁を残し中央部分に皿状の凹みをもつ。凹み部分底部は擦られて整形された、あるいは擦る行為を伴う作業の結果か滑らかな面を形成している。砂岩製。

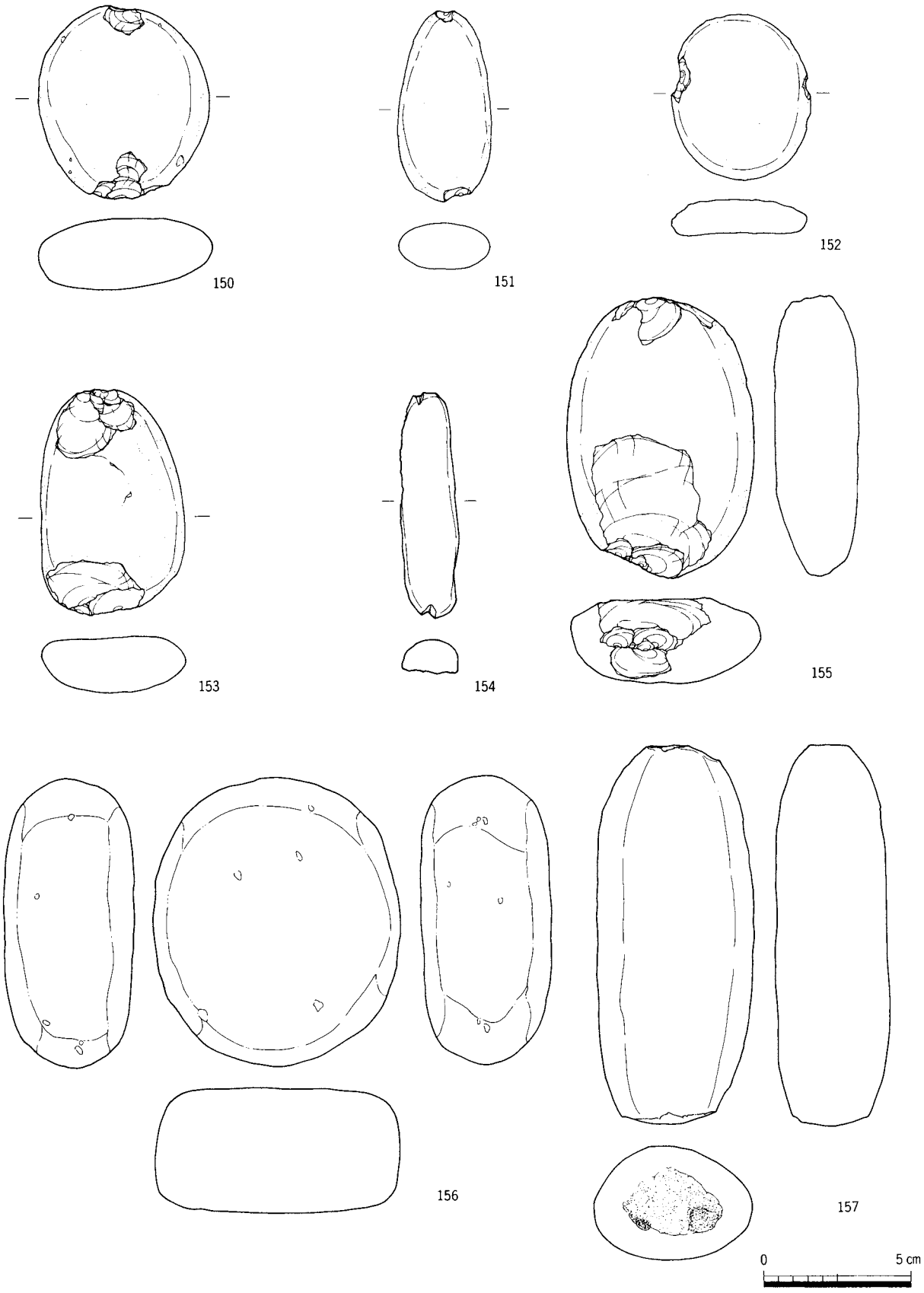
石皿計測表

No.	出土区	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(kg)	挿　図
1	V17III	(198)	(184)	(68)	3.5	第27図164

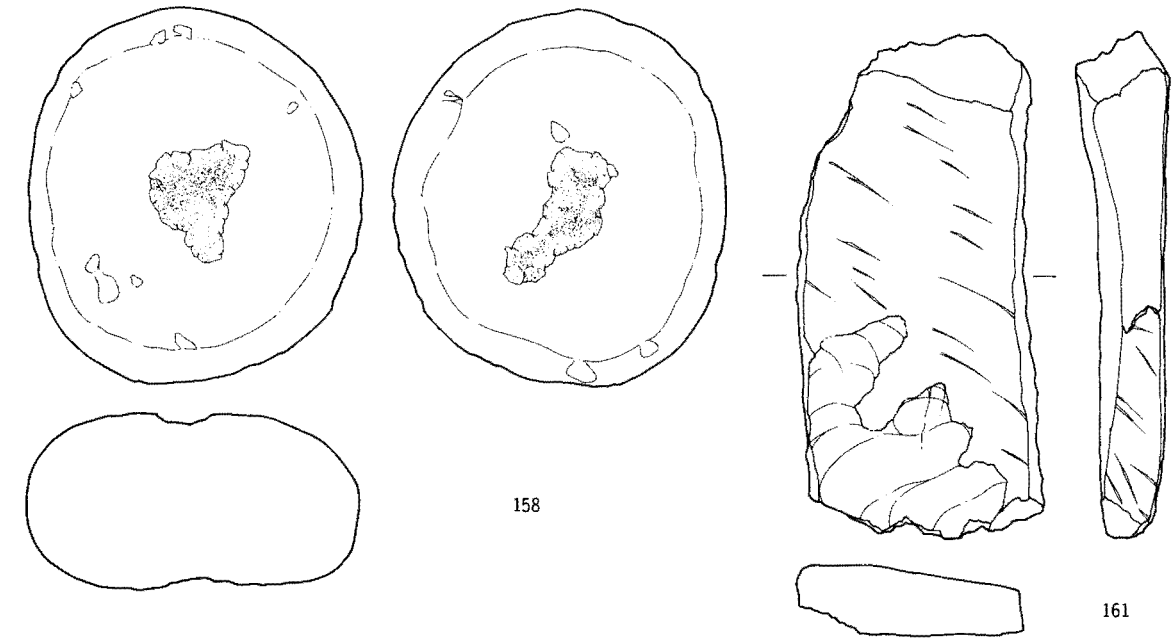
第III期

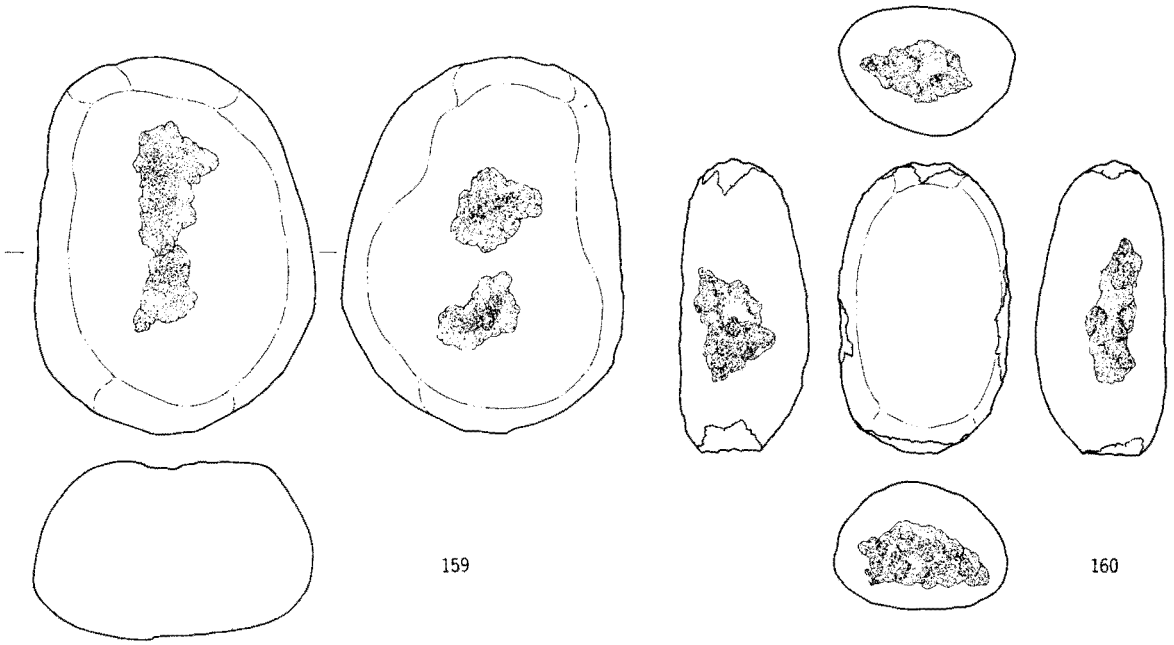
土　器（第28～31図165～306）

165～172は土師器皿である。166、168は他の個体と異なり、胎土がにぶい橙色と呈し、器壁が全体的に厚い。172は口縁部全周に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。底部は平底で、体部は短く立ち上がる。また、体部内外面に横ナデが施されておらず、指頭圧のみで成形されている。173～228は小皿である。体部内面に比べ、底部内面が平滑であるものは7個体（180・184・186・216・219・223・226）確認された。そのうち、180は底部内面に黒色の有機物が付着している。212も180と同様な黒色の有機物が付着しているが、底部内面は平滑ではない。なお、小碗は210の1点のみである。229～259は山茶碗である。230、257の底部外面には墨書が施され、257は「大」と読める。231は180、212と同様な黒色の有機物が内面に付着しており、器面は平滑である。その他、黒色の有機物がみられるものとして247、255、259などがあり、247、259は体部内面に染み込んでおり、255は体

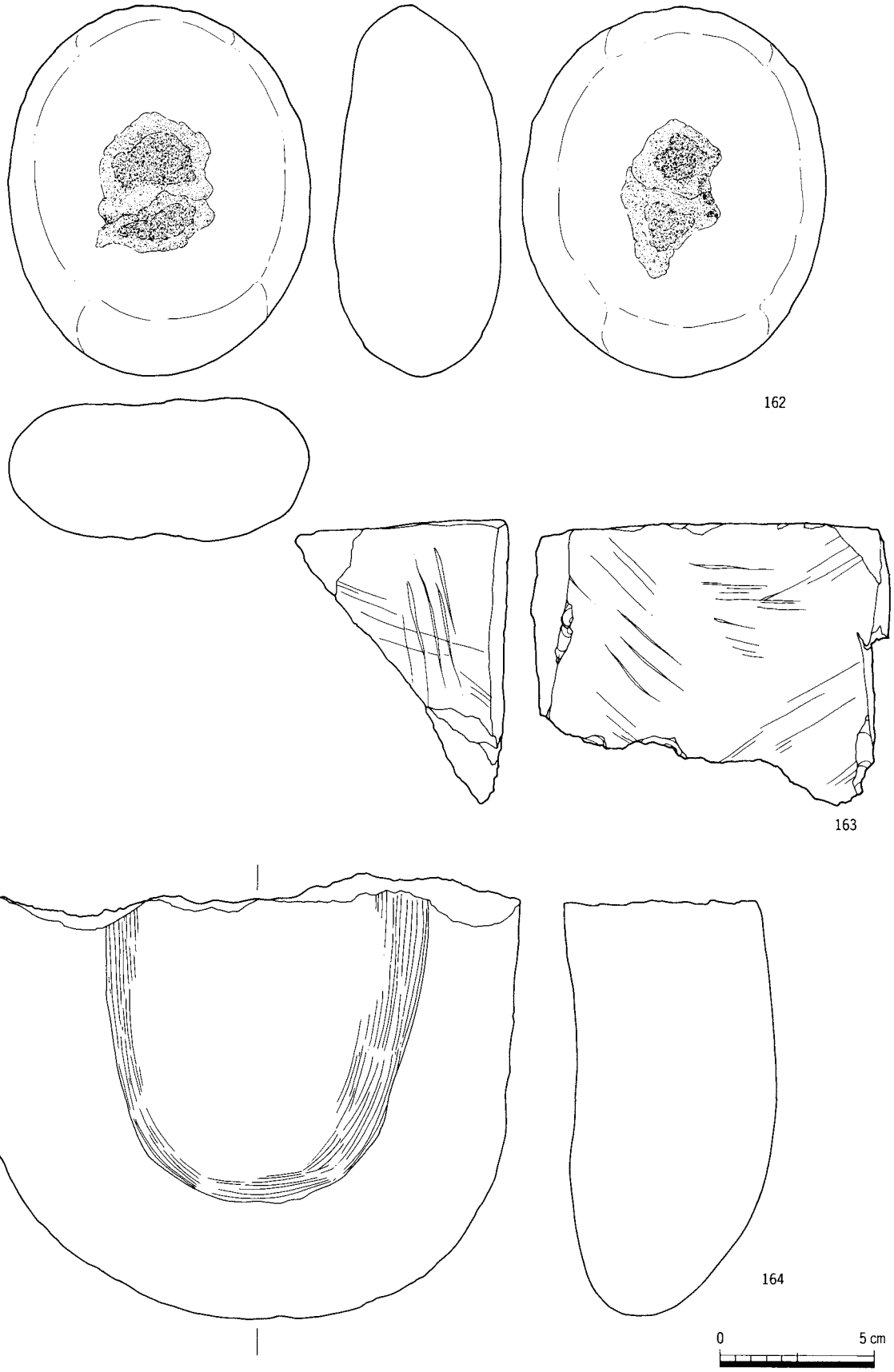


第25図　包含層出土石器（第II期）⑨





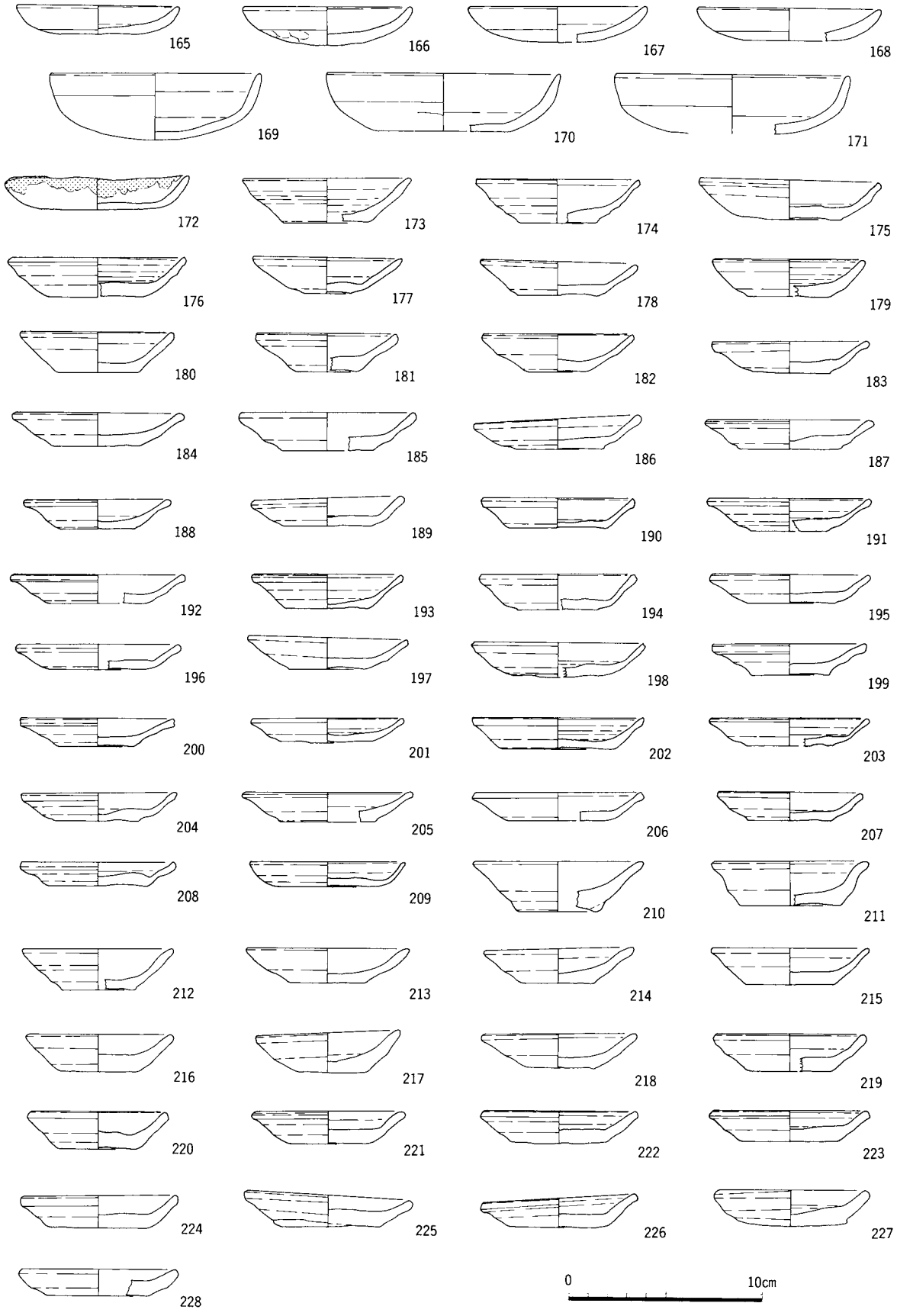
第26図　包含層出土石器（第II期）⑩



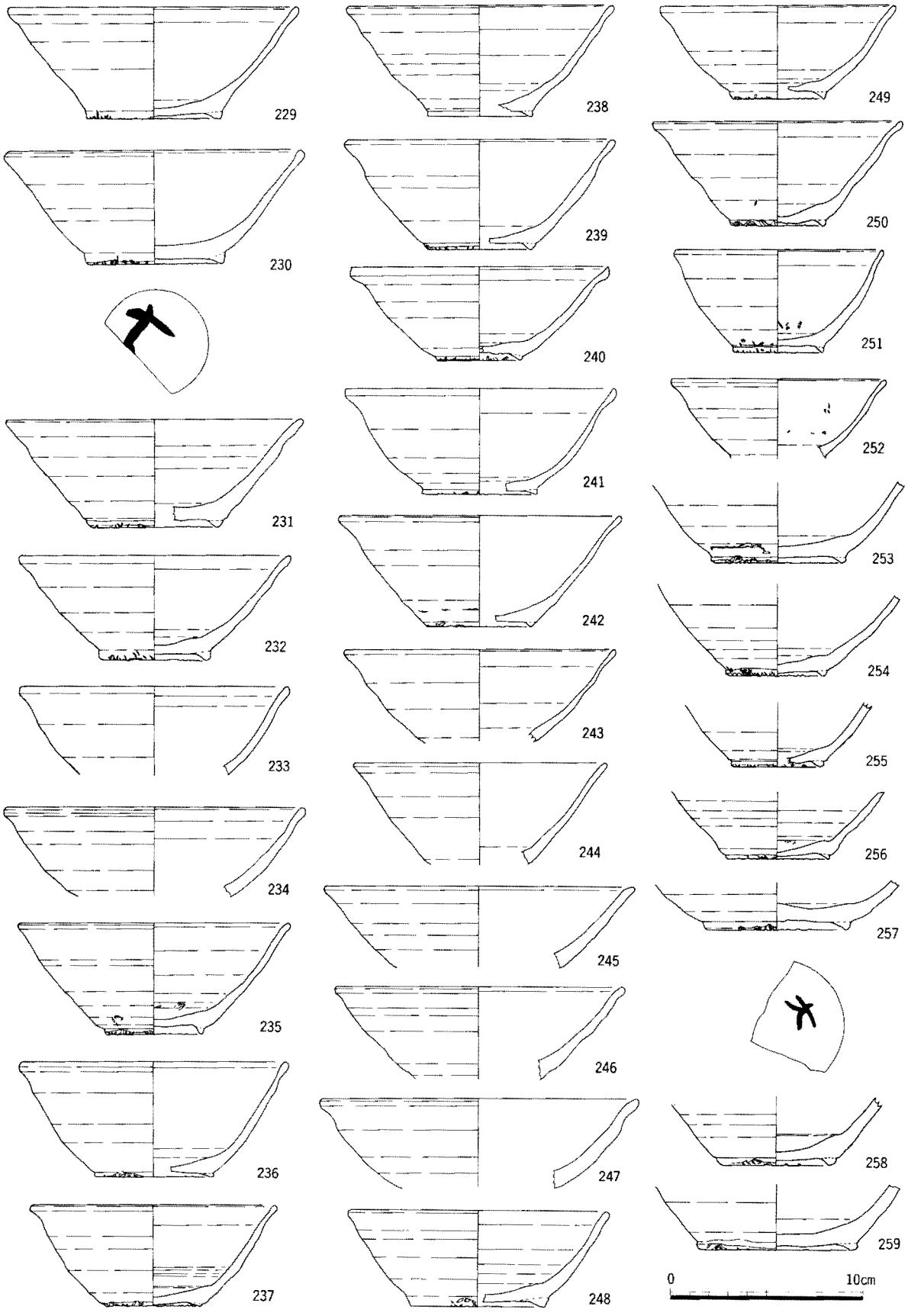
第27図　包含層出土石器（第II期）⑪

部内面下方にリング状に広がる。また、259は底部内面が平滑である。260～266は鉢である。260は口縁部が外傾して面取りされ、261、262は丸く収められる。また、261は外面に、262は上面に一条の凹みを有する。263～266はいずれも体部外面下方に回転ヘラ削りが施されている。267～276、279、280は中国磁器である。267、268、272、273、280は白磁、269、270、274は同安窯系青磁、271、275、276、279は龍泉窯系青磁である。中国磁器は遺構、包含層出土遺物を合わせて184点出土しており、そのうち壺（280）と青白磁はそれぞれ破片が１点確認された。今回出土の中国磁器184点のうち、破片同士が接合したものは１例のみであり、山茶碗などの接合率と比べるとその比率は極めて低いといえる。277、278は常滑の小瓶ないしは長頸壺と考えられ、内面に暗赤褐色の有機物が付着している。283は滑石製の鍋ないしは鉢である。内面は粗い削り、外面は丁寧な磨きが施され、口縁部に直交する面を有する。281、282、284、285は古瀬戸有耳壺であり、いずれも古瀬戸前II期に該当する。[3)]284は内外面とも外傾する付高台を有し、体部は倒卵形を呈し、肩部の張り出しは強い。頸部は外傾し、口縁部は折り返され玉縁状を呈する。耳は板状の粘土を曲げて貼り付けられており、４条の小突線をほぼ平行に配している。体部内面および高台内面を除き灰釉が刷毛塗りされており、体部外面上方は回転ナデ調整、下方は回転ヘラナデ調整、体部内面上方は回転ナデ調整、下方は回転ヘラ削り調整と不定方向のナデ調整が施されている。286～289は常滑甕である。286は中野編年２～３型式、287は５型式、288は６型式、289は７～８型式に該当する。289は肩部外面に矢羽文が１ヶ所押印されている。

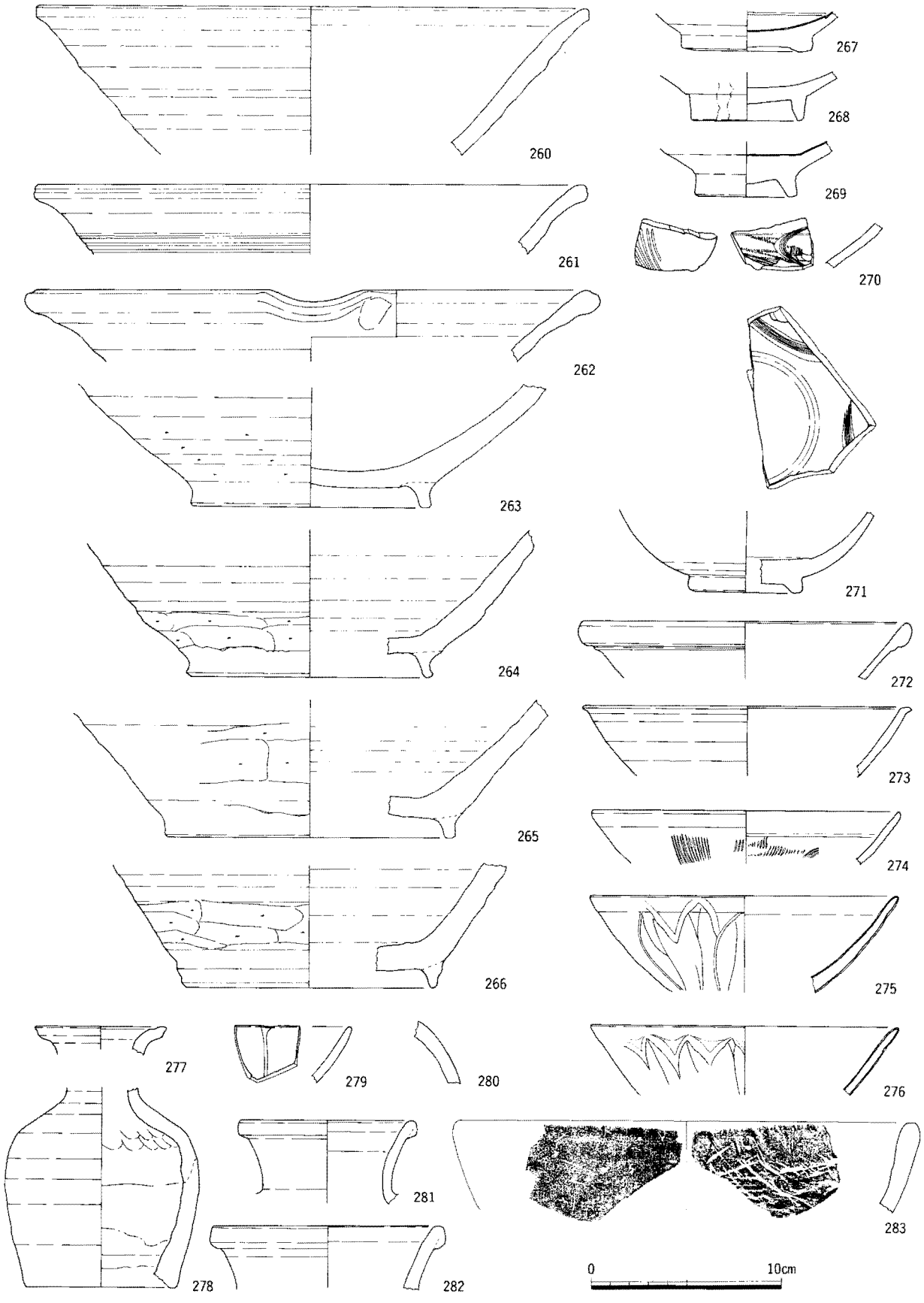
３）藤澤良祐氏の御教示による。



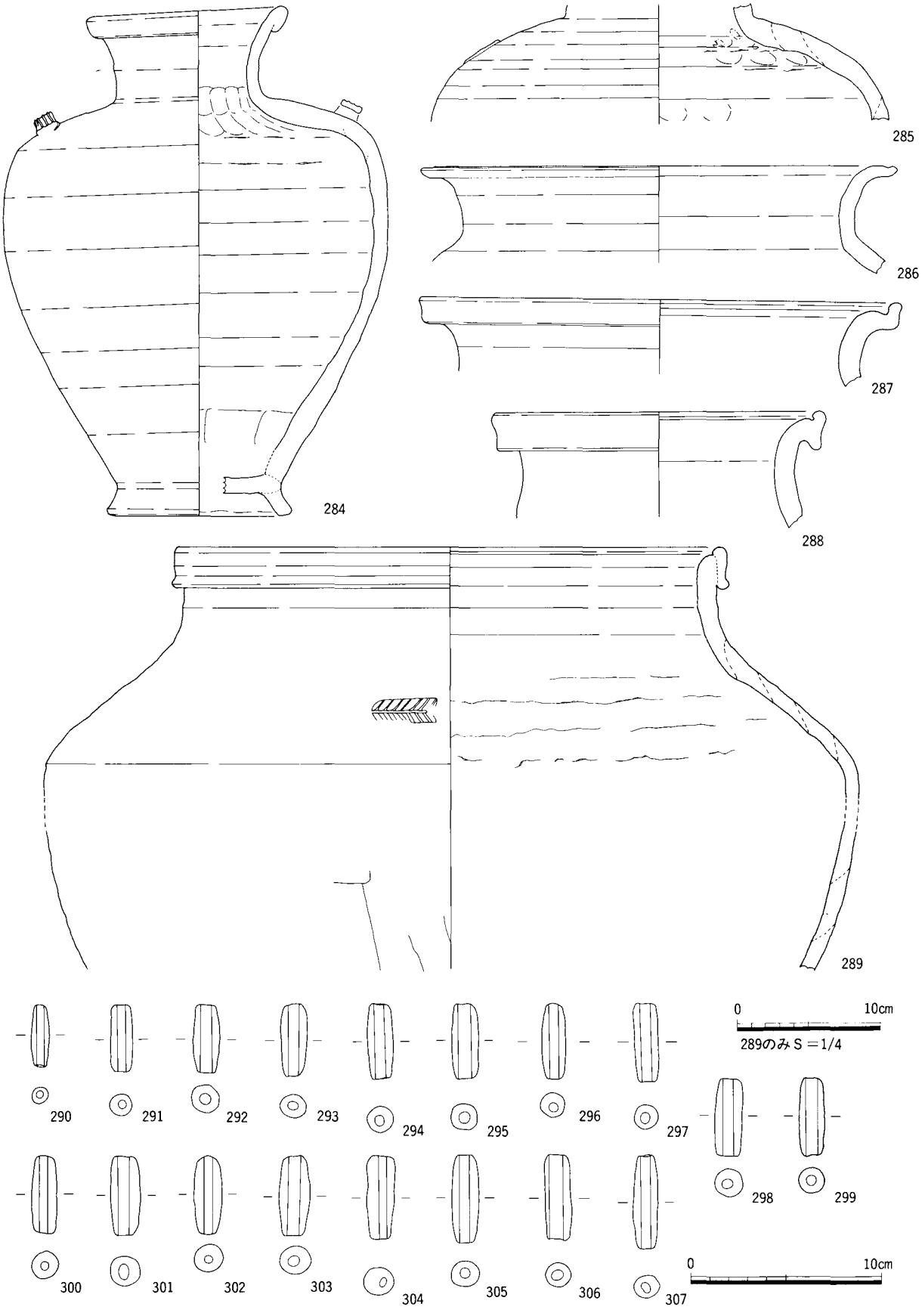
第28図　包含層出土土器・陶器（第Ⅲ期）①



第29図　包含層出土陶器（第III期）②



第30図　包含層出土陶器他（第III期）③



第31図　包含層出土陶器他（第Ⅲ期）④

第1表　飛瀬遺跡石鏃属性表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	先端角	抉深(基長)	最大幅の位置	折損部位	基部形態	側縁部形態	備考
1	D 4 III	チャート	1.5	1.3	0.4	0.5	33	0.4	基部	—	凹基	A 1	67
2	O11 I	チャート	1.4	(1.3)	0.3	0.3	36	0.3	基部	左脚	凹基	A 1	
3	D 6 II	チャート	(1.6)	(1.0)	0.4	0.5	29	0.4	基部	左脚	凹基	A 2	
4	P11 II	チャート	(4.5)	(1.2)	(0.4)	0.4	30	0.4	基部	先端	凹基	A 1	
5	F 7 III	チャート	(1.5)	(1.3)	0.4	0.6	—	0.5	基部	先端	凹基	A 1	
6	E 2 III	チャート	2.1	(1.5)	0.3	0.9	38	0.4	基部	左脚	凹基	A 1	
7	E 4 II	チャート	(1.4)	1	0.2	0.4	—	0.4	基部	先端	凹基	A 1	
8	O10 I	チャート	2	(1.5)	0.5	1.2	38	0.6	基部	—	凹基	A 1	
9	D 6 III	チャート	1.3	(0.9)	0.2	0.2	31	0.3	基部	左脚	凹基	A 1	
10	H 3 III	チャート	(2.9)	(1.3)	0.6	2	29	0.5	基部	左脚	凹基	A 1	68
11	D 3 II	下呂石	(1.2)	1.4	0.3	0.5	—	0.2	基部	先端	凹基	A 1	
12	D 4 III	チャート	1.9	(1.1)	0.3	0.6	26	0.4	基部	先端・左脚	凹基	A 1	
13	E 6 III	チャート	(1.7)	(1.1)	0.3	0.5	26	0.5	基部	—	凹基	A 1	69
14	F 5 II	チャート	1.7	(1.2)	0.3	0.4	26	(0.3)	基部	右脚	凹基	A 1	
15	H 8 II	チャート	2	(1.2)	0.3	0.4	27	(0.2)	基部	右脚	凹基	A 1	
16	O 9 I	チャート	(2.0)	1.2	0.3	0.5	35	0.4	基部	先端	凹基	A 1	
17	E 2 III	チャート	(1.9)	(1.4)	0.3	0.8	27	0.3	基部	先端・両脚	凹基	D	70
18	E 6 II	チャート	1.8	(1.0)	0.3	0.3	27	0.3	基部	左脚	凹基	A 2	
19	E 4 III	チャート	(1.4)	(1.0)	0.2	0.2	29	0.4	基部	右脚	凹基	A 1	
20	G 5 III	チャート	(1.5)	(1.1)	0.3	0.4	26	0.4	基部	両脚	凹基	B	
21	D 4 III	チャート	(1.5)	1.2	0.2	0.5	—	0.5	基部	先端	凹基	A 1	
22	E 4 II	チャート	(2.0)	(1.4)	0.3	0.6	—	0.3	基部	先端・両脚	凹基	A 1	
23	E 5 III	チャート	(1.8)	1.5	0.3	0.5	25	0.3	基部	先端	凹基	B	71
24	C 6 II	チャート	(1.6)	(1.5)	0.3	0.5	29	0.5	基部	先端・両脚	凹基	A 1	
25	D 5 II	チャート	(1.8)	(1.2)	0.5	1	29	0.5	基部	両脚	凹基	A 1	
26	P12 II	下呂石	(1.5)	(1.2)	0.4	0.4	29	0.4	基部	先端・両脚	凹基	A 1	
27	G 8 III	チャート		1.4	0.2	0.6	—	0.3	基部	上半	凹基	A 1	
28	G 7 III	チャート	2.5	(1.5)	0.5	1.3	26	0.7	下半部	右脚	凹基	C	72
29	E 3 III	チャート	(1.7)	1.3	0.4	0.7	—	0.5	下半部	先端	凹基	C	
30	G 4 II	チャート	2.5	(1.4)	0.5	1.3	25	0.3	下半部	右脚	凹基	C	
31	B 3 II	チャート	2.6	(2.0)	0.6	2.6	39	0.3	下半部	右脚	凹基	A 1	
32	E 5 I	チャート	2.1	(1.1)	0.4	0.8	34	(0.3)	下半部	左脚	凹基	A 1	
33	G 7 III	チャート	(1.9)	(1.4)	0.3	0.7	31	0.6	下半部	両脚	凹基	A 1	
34	B 4 III	チャート	2.6	1.6	0.6	3.4	43	0.1	下半部	先端	凹基	A 1	
35	C 4 II	チャート	(2.0)	(1.8)	0.6	2	45	0.1	下半部	—	凹基	A 1	
36	C 3 III	下呂石	(0.6)	1.7	0.4	0.9	—	0.7	下半部	先端	凹基	A 1	73
37	F 6 II	チャート	(1.3)	1.6	0.3	0.5	—	0.5	基部	先端	凹基	A 1	
38	D 3 III	チャート	2	1.9	0.5	1.2	35	0.5	基部	—	凹基	A 1	74
39	F 7 III	チャート	1.4	1.4	0.3	0.3	34	0.5	基部	—	凹基	A 1	
40	D 4 III	チャート	2.2	1.5	0.3	1	21	0.5	体部	—	凹基	D	75
41	F 7 III	チャート	2.2	(1.4)	0.4	0.9	29	(0.3)	基部	右脚	凹基	A 1	
42	D 4 III	チャート	(1.2)	(1.7)	0.5	1.2	—	0.1	基部	先端・両脚	凹基	A 1	
43	D 4 II	チャート	(1.5)	(1.3)	0.2	0.4	—	(0.4)	基部	先端・両脚	凹基	B	
44	B 4 III	チャート	2.4	(1.5)	0.4	1.1	28	0.5	基部	右脚	凹基	A 1	76
45	F 1 III	チャート	(2.9)	(1.6)	0.4	1.2	28	(0.5)	基部	先端・左脚	凹基	A 1	77
46	D 4 III	チャート	(1.5)	(1.3)	0.3	0.4	23	0.4	基部	左脚	凹基	D	
47	G 5 III	チャート	1.4	(1.4)	0.4	0.4	29	0.4	基部	右脚	凹基	A 1	
48	D 6 III	チャート	1.5	1.3	0.3	0.4	26	0.5	基部	—	凹基	A 1	
49	B 3 II	チャート	(1.2)	(1.1)	0.3	0.3	—	0.3	基部	上半	凹基	A 1	
50	C 4 II	チャート	1.6	1.7	0.3	0.6	27	0.5	基部	—	凹基	A 1	78
51	Q12 II	チャート	2.1	1.3	0.4	0.9	30	0.7	基部	—	凹基	A 1	79
52	F 7 IV	チャート	(1.7)	1.5	0.4	0.9	—	0.4	基部	先端	凹基	C	
53	P11 I	チャート	(1.3)	1.4	0.2	0.3	—	0.4	体部	先端	凹基	A 1	
54	P12 II	チャート	2.1	(1.4)	0.3	0.7	30	0.5	基部	先端・右脚	凹基	A 1	
55	E 3 III	チャート	(2.1)	(1.6)	0.5	1.4	30	(0.6)	基部	先端・右脚	凹基	A 1	
56	L11 II	チャート	(2.0)	(1.4)	0.5	1.4	—	(0.5)	基部	先端・左脚	凹基	A 1	
57	L 9 I	チャート	(1.8)	(1.2)	0.3	0.5	26	0.3	基部	両脚	凹基	A 1	
58	E 4 II	チャート	(1.8)	(1.5)	0.4	1	—	0.1	基部	先端・左脚	凹基	A 1	
59	H 3 III	チャート	2.5	1.8	0.7	2.4	26	(0.5)	基部	—	凹基	B	80
60	D 6 III	チャート	(1.8)	(1.5)	0.4	0.8	—	(0.4)	基部	先端・右脚	凹基	A 1	
61	G 7 III	チャート	2.4	(1.5)	0.4	1.4	36	0.2	基部	右脚	凹基	A 1	81
62	H 3 III	チャート	1.6	1.6	0.5	1	34	0.1	基部	—	凹基	A 1	82
63	E 5 II	チャート	1.6	(0.9)	0.4	0.4	30	(0.3)	基部	左脚	凹基	D	
64	G 4 II	チャート	2.2	(1.2)	0.3	0.6	30	0.6	基部	左脚	凹基	D	83
65	F 5 III	チャート	(1.2)	(1.2)	0.4	0.6		0.1	基部	左脚	凹基	A 1	
66	E 3 III	チャート	1.5	1.2	0.2	0.2	30	(0.4)	基部	—	凹基	A 1	
67	F 2 II	チャート	(1.8)	(1.4)	0.4	0.9	—	0.1	基部	先端	凹基	A 1	
68	G 7 III	チャート	(1.8)	(1.4)	0.5	1	—	0.5	基部	先端・右脚	凹基	C	
69	C 7 II	チャート	(1.5)	1.6	0.3	0.5	—	0.6	基部	先端	凹基	A 1	
70	B 5 II	チャート	(1.2)	(1.2)	0.4	0.6	—	0.1	基部	先端	凹基	A 1	
71	S21 II	チャート	1.7	1	0.4	0.7	32	0.4	基部	—	凹基	A 1	
72	Q18III	チャート	(2.3)	1.5	0.5	1.3	—	0.5	基部	先端・右脚	凹基	A 1	
73	P17III	チャート	(1.9)	(1.7)	0.4	1	33	(0.4)	基部	先端・左脚	凹基	C	84
74	Q17III	チャート	(2.3)	(1.1)	0.4	0.9	28	(0.5)	基部	先端・両脚	凹基	D	
75	Q15III	チャート	2.5	1.6	0.3	1	28	0.5	基部	—	凹基	A 1	85
76	P15 II	チャート	2.6	1.9	0.3	1	26	0.7	基部	—	凹基	A 1	86
77	Q15III	下呂石		(1.9)	0.2	0.6	—	0.5	基部	先端・両脚	凹基	A 1	
78	Q20III	チャート	(0.9)	(1.2)	0.2	0.3	—	0.1	基部	上半	凹基	B	
79	Q17III	チャート	1.6	1.5	0.4	0.8	30	0.6	基部	—	凹基	C	87
80	P18 I	チャート	(1.8)	(1.1)	0.4	0.5	—	(0.3)	基部	先端・右脚	凹基	A 1	
81	P16III	チャート	0.6	(1.0)	0.4	0.5	—	0.5	基部	左脚	凹基	A 1	
82	O13 II	チャート	(2.0)	(1.5)	0.3	0.7	—	0.6	基部	先端・右脚	凹基	A 1	
83	S20 II	チャート	(2.8)	(2.0)	0.6	2.6	—	(0.9)	基部	先端・下半	凹基	A 1	88

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	先端角	抉深(基長)	最大幅の位置	折損部位	基部形態	側縁部形態	備考
84	R17III	チャート	(2.1)	(1.2)	0.5	1.2	—	0.1	基部	先端・右脚	凹基	A1	
85	D5III	チャート	2.2	0.9	0.6	1.3	—	0.6	体部	—	円基	C	
86	F6II	チャート	(2.2)	1.2	0.4	1	34	0.7	体部	先端	円基	E	
87	E4II	チャート	(3.1)	1.5	0.6	2.7	37	0.8	体部	先端	円基	C	89
88	F3II	チャート	2.6	1.3	0.4	1.3	36	0.4	基部	—	円基	E	90
89	F1III	チャート	(2.1)	1.8	0.6	2.6	—	0.5	基部	先端	円基	C	91
90	E6III	チャート	(1.9)	(1.3)	0.3	0.5	34	0.4	基部	下半	円基	E	
91	B4III	チャート	(1.8)	1.4	0.3	0.9	34	0.3	基部	先端	円基	C	
92	E6III	チャート	(2.1)	(2.0)	0.5	2	—	0.4	基部	先端・基部	円基	A1	
93	O13I	チャート	3	2.1	0.5	4.5	35	0.5	基部	—	円基	C	92
94	H7II	チャート	2.4	1.5	0.5	1.3	33	—	体部	—	平基	A1	94
95	F1III	チャート	2.5	2	0.7	3.1	34	—	基部	—	平基	A1	93
96	C3III	チャート	2.3	1.6	0.4	1.2	34	—	体部	—	平基	A1	
97	D6III	チャート	2.7	1.5	0.3	2	32	—	基部	先端	平基	A1	95
98	D3III	チャート	(1.8)	1.8	0.4	1.3	—	—	基部	先端	平基	A1	
99	C4II	チャート	2.4	2.1	0.6	4.6	39	—	体部	—	平基	C	
100	F6IV	チャート	1.9	1.3	0.3	0.6	35	—	体部	—	平基	E	
101	H7II	チャート	(1.3)	1.1	0.2	0.4	—	—	基部	先端	平基	A1	
102	D4III	チャート	1.7	1.7	0.5	1.1	36	—	基部	—	平基	A1	
103	R19III	チャート	(2.6)	1.7	0.7	2.9	37	—	基部	先端	平基	B	96
104	F7IV	下呂石	(2.6)	1.3	0.4	1.1	34	1.1	基部	基部	有茎	E	97
105	D5II	チャート	2	1.1	0.4	0.7	30	0.8	体部	—	有茎	A1	
106	—	下呂石	2	1.2	0.4	0.8	30	(0.2)	体部	—	有茎	A1	98
107	D6III	チャート	(1.8)	0.9	0.4	0.6	—	(0.4)	体部	先端	有茎	A1	
108	O9II	チャート	(3.1)	1.5	0.5	2.2	30	0.6	基部	先端	有茎	A1	99
109	C6II	チャート	(1.4)	1	0.3	0.4	—	(0.7)	基部	先端・基部	有茎	A1	
110	T18III	チャート	(2.7)	1.2	0.4	1.4	—	—	基部	先端・基部	有茎	A1	100
111	E3III	下呂石	(2.6)	(1.2)	0.6	1.6	34	—	—	—	折損品・未製品	—	
112	T13III	チャート	(2.3)	(1.4)	0.3	1	—	—	—	下半	折損品・未製品	—	
113	F6III	チャート	(2.1)	(1.5)	0.3	1.1	—	—	—	下半	折損品・未製品	—	
114	F4III	チャート	(2.2)	(1.3)	0.3	1	—	—	—	先端・脚	折損品・未製品	—	
115	F1III	チャート	(1.7)	(1.5)	0.5	1	33	—	—	下半	折損品・未製品	—	
116	F6III	下呂石		(1.4)	0.2	0.4	37	—	—	下半	折損品・未製品	—	
117	E4II	チャート	(1.9)	(1.4)	0.7	0.5	—	—	—	下半	折損品・未製品	—	
118	D6III	チャート	(1.6)	(1.0)	0.6	0.8	30	—	—	下半	折損品・未製品	—	
119	E3III	チャート	(1.3)	(1.1)	0.3	0.4	30	—	—	下半	折損品・未製品	—	
120	D5III	チャート	(2.0)	(1.0)	0.5	1.3	31	—	—	下半	折損品・未製品	—	
121	C3III	下呂石	(1.7)	(0.9)	0.3	0.4	30	—	—	両脚	折損品・未製品	—	

注：側縁部形態については以下のとおりである。A1→/\ A2→/\ B→)(C→( ) D→╭╮ E→〈 〉

第2表 飛瀬遺跡打製石斧属性表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	摩耗痕	備考
1	Q17III	流紋岩	122	52	22.5	180.5	55	B	—	体部	自然面有
2	S16II	流紋岩	133	51	20.4	177.1	38	A	—	体部	自然面有
3	R21I	流紋岩	135	46	25.1	154.7	33	A	—	対部	自然面有
4	Q18III	流紋岩	148	51	22.7	190	38	A	—	対部	自然面有
5	S17III	砂岩	120	53	164	158.5	—	C	刃部	基部	自然面有
6	S15II	砂岩	128	60	21.1	206.7	—	B	—	体部	自然面有
7	Q17III	砂岩	147	51	165	147.9	30	A	—	体部	自然面有
8	F5II	流紋岩	94	43	21.6	111.8	59	B	—	基部	自然面有
9	R16III	流紋岩	106	46	24.8	127.6	—	C	刃部	体部	
10	R16III	流紋岩	118	46	21.9	113.7	46	B	—	基部	
11	R17I	流紋岩	140	41	20.8	129.6	49	B	—	体部	自然面有
12	R21I	流紋岩	108	43	21.2	111.6	—	C	刃部	基部	
13	R17I	流紋岩	130	44	22.1	148.6	55	B	—	体部	自然面有
14	S20II	流紋岩	178	67	20.2	219.6	—	?	—	—	
15	P17III	流紋岩	153	54	23.5	195.3	30	B	—	—	
16	T14II	流紋岩	100	49	18.9	110.2	—	C	刃部	体部	自然面有
17	U14II	砂岩	125	45	19.5	136.5	38	A	—	基部	
18	S13II	流紋岩	105	56	21.3	130.9	—	A	基部	—	
19	U14II	流紋岩	(58)	(42)	18	40.9	—	C	刃部	—	
20	S13II	流紋岩	(118)	(48)	18.4	136	—	C	刃部	基部	
21	R16III	流紋岩	(42)	(47)	11.5	33.5	—	C	刃部	—	自然面有
22	R17III	流紋岩	(55)	(38)	10.7	23.8	—	C	刃部	—	
23	S21II	流紋岩	(126)	(41)	14.2	83.1	39	B	基部	—	
24	Q17III	流紋岩	(103)	(42)	16	74.1	27	A	基部	—	自然面有
25	Q20III	流紋岩	(109)	(60)	36	285.1	36	B	基部	体部	自然面有
26	T20I	流紋岩	(61)	(53)	24.4	75.8	55	B	基部	—	
27	P16II	砂岩	(124)	(42)	15.9	107.2	30	A	—	体部	自然面有
28	P17II	流紋岩	(108)	(51)	15.8	116.2	—	B	—	—	
29	S19II	砂岩	(60)	(44)	22.9	65.3	—	B	—	体部	自然面有
30	S15II	砂岩	(116)	(51)	18.2	132.8	28	A	—	—	自然面有
31	Q20III	砂岩	(38)	(43)	12.6	21.6	—	C	刃部	—	自然面有
32	S13I	流紋岩	(112)	(48)	16.2	109.1	—	C	刃部	体部	自然面有
33	S13II	砂岩	(70)	(57)	15.1	72.9	31	A	基部	—	自然面有
34	Q12I	砂岩	(81)	(47)	17.9	93.8	36	A	基部	—	自然面有
35	S20II	流紋岩	(99)	(52)	29.4	146.8	—	C	刃部	—	
36	P14III	流紋岩	(53)	(45)	15.7	50.8	—	C	刃部	—	自然面有

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	摩耗痕	備考
37	R18III	流紋岩	(64)	(41)	12.8	40	50	A	基部	—	自然面有
38	Q15II	砂岩	(75)	53	16.8	76.7	32	A	基部	基部	自然面有
39	T18III	流紋岩	(108)	53	24.4	176	45	A	基部	基部	自然面有
40	S18I	砂岩	(70)	(51)	26.8	95	33	A	基部	—	
41	T20III	砂岩	(110)	(48)	18.2	109.2	—	C	刃部	基部	
42	R20III	砂岩	(113)	53	20.6	161.8	38	A	基部	基部	自然面有
43	R17III	砂岩	(48)	(48)	17	43.7	—	B	刃部	—	
44	P17III	流紋岩	(118)	49	23.3	140.7	=	B	—	—	
45	R20III	砂岩	(87)	(56)	17.5	132.1	—	C	刃部・基部	基部	自然面有
46	R20III	流紋岩	(91)	(52)	17.3	89.6	—	C	刃部・基部	—	
47	T19III	流紋岩	(50)	(44)	13.2	33.4	—	C	刃部・基部	—	自然面有
48	S21III	流紋岩	(83)	(42)	12.5	62.6	—	C	刃部・基部	—	自然面有
49	B13III	流紋岩	(114)	(58)	20.6	172.5	—	C	刃部・基部	—	
50	S13II	砂岩	(97)	(50)	16	110.8	—	C	刃部・基部	基部	自然面有
51	A3III	砂岩	(86)	(47)	20.4	91	—	C	刃部	基部	自然面有
52	R19III	流紋岩	(78)	(48)	16.1	65.3	—	C	刃部	—	
53	T18III	砂岩	(103)	(51)	14.3	99.6	23	A	刃部	体部	自然面有
54	R17III	流紋岩	(92)	(40)	19.3	75.3	—	C	刃部	—	
55	R17II	流紋岩	(71)	(40)	18.6	63.2	—	C	刃部	基部	
56	Q20III	砂岩	(123)	(62)	19.4	197.6	—	C	刃部	基部	自然面有
57	P18I	流紋岩	(71)	(53)	13	55.4	—	C	刃部	—	
58	R20III	砂岩	(51)	(49)	16.4	41.3	—	C	刃部	—	自然面有
59	S15II	砂岩	(76)	(55)	21.4	113.2	—	C	刃部	基部	自然面有
60	S17III	流紋岩	(94)	(48)	19.5	114.6	—	C	刃部	基部	
61	O13II	砂岩	(93)	(48)	13.5	74.5	—	C	刃部	—	自然面有
62	S21III	砂岩	(98)	(60)	28.5	186.7	—	C	刃部	基部	自然面有
63	T18III	流紋岩	(88)	(49)	19.2	96.2	—	C	刃部	基部	自然面有
64	Q16II	流紋岩	(98)	(57)	19.1	138.2	—	C	刃部	基部	
65	S16II	流紋岩	(50)	(52)	18.3	57.6	—	C	刃部	—	
66	C3III	流紋岩	(85)	(48)	12.9	62.8	—	C	刃部	体部	自然面有
67	T14II	砂岩	(111)	(69)	38	35.3	—	C	刃部	基部	自然面有
68	P12I	砂岩	(62)	(54)	22.8	84.8	—	C	刃部	—	自然面有
69	T19III	流紋岩	(71)	(46)	14.5	44	—	C	刃部	—	
70	T20III	流紋岩	(26)	(46)	10.8	16.5	—	C	刃部	—	
71	R19III	流紋岩	(109)	(53)	19.8	122.3	—	B	—	—	
72	Q19II	流紋岩	(83)	(45)	225.7	89.4	—	C	刃部	—	
73	Q18III	流紋岩	(90)	(50)	20.3	124.2	—	C	刃部	体部	
74	T19III	流紋岩	(92)	(52)	22.1	120.7	—	C	刃部	基部	
75	T19III	流紋岩	(82)	(55)	17.8	93.5	—	C	刃部	基部	
76	S19III	流紋岩	(93)	(36)	15.3	46.5	—	C	刃部	—	自然面有
77	R19II	流紋岩	97	47	13.9	92.4	—	C	刃部	—	自然面有
78	Q17III	流紋岩	(66)	(51)	12	53.4	—	C	刃部	—	
79	S19III	流紋岩	123	58	19.1	164.5	—	C	刃部	基部	自然面有
80	S18II	砂岩	(99)	(55)	18.7	108.6	—	C	刃部	基部	自然面有
81	T18III	流紋岩	(121)	(58)	15.3	141.3	—	C	刃部	基部	
82	S20II	流紋岩	(80)	(52)	17.3	102.4	—	C	刃部	—	自然面有
83	Q19II	流紋岩	120	49	18.4	103.4	62	B	—	体部	
84	Q12II	粘板岩	(89)	(44)	11.2	64.2	40	B	—	—	
85	Q13II	粘板岩	(106)	(42)	10	55.9	—	B	—	—	
86	O14I	粘板岩	(97)	(42)	10.1	58.4	—	C	刃部	—	
87	O14I	粘板岩	(86)	(40)	7.3	36	—	C	刃部	—	
88	O14I	粘板岩	(84)	(40)	6.2	25.6	—	C	刃部	—	
89	O14I	粘板岩	(101)	(46)	16.6	66.5	—	C	刃部	—	自然面有
90	P13II	粘板岩	(100)	(42)	8.4	52.7	—	C	刃部	—	
91	S13I	粘板岩	(86)	(41)	5.1	23.5	—	C	刃部	—	
92	R13II	粘板岩	(84)	(42)	9.9	37.5	—	C	刃部	—	
93	S13I	粘板岩	(90)	(44)	11.3	55.5	—	C	刃部	—	
94	Q20III	砂岩	118	65	21	184.4	60	B	—	基部	自然面有
95	T17II	流紋岩	126	58	25	219.9	49	B	—	基部	自然面有
96	P16III	流紋岩	147	54	30.6	248.5	—	C	刃部	体部	
97	S14II	流紋岩	94	48	15	72.5	63	B	—	基部	
98	R19III	流紋岩	120	49	18.4	103.4	62	B	—	体部	
99	P12III	砂岩	(62)	(69)	22.8	75.5	—	C	—	—	自然面有
100	S21III	流紋岩	(78)	(53)	22.1	97.9	—	C	刃部	基部	自然面有
101	T17II	流紋岩	(73)	(48)	23.8	82.2	—	C	刃部	—	自然面有
102	S18I	流紋岩	(89)	(52)	20	121	—	C	刃部	体部	
103	R21I	流紋岩	104	46	18.8	114.7	—	C	刃部	基部	自然面有
104	Q13III	流紋岩	(82)	(44)	15.1	62.8	—	C	刃部	—	自然面有
105	S19II	砂岩	(134)	(65)	16.6	188.8	—	C	刃部	体部	自然面有
106	Q20I	砂岩	(119)	(59)	17.5	157.6	—	C	刃部	基部	自然面有
107	Q20II	流紋岩	(92)	(60)	31.3	194	—	C	刃部	体部	自然面有
108	R21I	流紋岩	(107)	(52)	14.9	103.9	—	C	刃部	基部	自然面有
109	S18I	流紋岩	(67)	(39)	13.6	36.7	—	C	刃部	—	
110	T20III	流紋岩	(88)	(54)	19.4	95.9	—	C	刃部	基部	自然面有
111	S21III	流紋岩	(91	(48)	16.2	82.7	=	C	刃部	体部	
112	R21II	流紋岩	(73)	(44)	10.9	54.8	—	C	刃部	—	自然面有
113	P16III	流紋岩	(85)	(50)	19.1	71.9	—	C	刃部	—	自然面有
114	Q13II	流紋岩	(105)	(59)	19.2	142.4	—	C	刃部	体部	自然面有
115	R19III	砂岩	(112)	(59)	25.1	222.7	—	C	刃部	体部	
116	R20III	砂岩	(51)	(45)	13.2	32.8	—	C	刃部	—	自然面有
117	R11III	流紋岩	(57)	(36)	13.1	34.3	—	C	刃部	—	自然面有
118	P18II	流紋岩	(75)	(53)	16.3	69.1	—	C	刃部	体部	自然面有
119	R20III	砂岩	(95)	(61)	30.4	213.3	—	C	刃部	体部	自然面有
120	R19II	砂岩	(91)	(51)	20.1	104.3	—	C	刃部	基部	自然面有

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	摩耗痕	備考
121	O13III	流紋岩	(95)	(44)	16.4	75.6	−	C	刃部	基部	
122	P18II	砂岩	(92)	(43)	15.4	63.8	−	C	刃部	−	自然面有
123	P15II	砂岩	(77)	(48)	16.9	67	−	C	刃部	−	
124	S15III	砂岩	(108)	(56)	29.5	183	−	C	刃部・基部	体部	自然面有
125	R13II	砂岩	(85)	(62)	19.3	112.1	−	C	刃部	基部	自然面有
126	U14II	砂岩	(90)	(53)	18.1	119.5	−	C	刃部	基部	自然面有
127	E6III	砂岩	(95)	(51)	19.8	80.5	50	A	−	体部	自然面有
128	U14I	砂岩	118	67	27.9	232.6	70	B	−	体部	自然面有
129	R13II	流紋岩	(86)	(65)	17	110.1	−	C	刃部	−	自然面有
130	U14I	流紋岩	119	47	19.8	137	57	B	−	−	
131	T13II	砂岩	(119)	(56)	13	122.32	−	C	刃部	基部	自然面有
132	S13I	流紋岩	96	52	22.1	107	58	A	−	−	
133	U14II	砂岩	115	50	15.5	137.1	50	B	−	−	自然面有
134	Q12II	流紋岩	138	54	22.3	207.1	63	B	−	−	自然面有

注：刃部については以下のとおりである。A→素材時のままのもの　B→調整を加えるもの　C→欠損するもの

第3表　飛瀬遺跡第III期遺物観察表

挿図番号	整理番号	遺構名	器種	法量(cm)			残存率(×/12)		備考
				口径	底径	器高	口縁	底部	
1	50	SK1	山茶碗A		(5.4)			2.8	静止指ナデ調整、板目、籾殻痕
2	185	SK2	小皿A	(8.0)	4.3	2.0	0.7	12.0	静止指ナデ調整
3	135	SK2	小皿A	(8.4)	4.4	1.5	4.3	9.2	床部内面板状工具による静止ナデ、板目
4	134	SK2	小皿A	(8.4)	(4.4)	1.4	4.4	5.7	
5	148	SK3	土師器皿	(7.5)		1.7	2.8		体部内外面横ナデ
6	142	SK3	土師器皿	(8.6)		1.7	2.4		体部内外面横ナデ
7	21	S3K	土師器皿	8.5		1.7	10.5		体部内外面横ナデ
8	147	SK3	土師器皿	(8.0)		1.6	2.9		体部内外面横ナデ
9	149	SK3	小皿A	(8.8)	(4.4)	1.7	2.0	2.2	
10	152	SK3	小皿A	(8.1)	3.8	2.1	4.6	12.0	
11	48	SK3	小皿B	(8.8)	(5.8	1.7	2.5	2.4	底部外面に一枚の粘土版を貼り付けた痕跡あり
12	146	SK3	小皿B	(8.0)	5.0	1.6	3.0	7.5	
13	144	SK3	小皿B	8.0	4.2	1.8	8.9	12.0	静止指ナデ調整、底部内面平滑
14	145	SK3	小皿B	8.0	4.0	2.1	7.0	6.3	
15	153	SK3	山茶碗B	(14.6)			2.5		
16	141	SK3	山茶碗A	(15.7)	(7.4)	5.5	2.7	3.4	静止指ナデ調整、板目
17	156	SK3	山茶碗A	(15.8)			1.4		
18	151	SK3	山茶碗B		(6.8)			4.2	
19	154	SK3	山茶碗B	(15.1)			1.2		口縁部内外面に2次的に煤付着
20	155	SK3	山茶碗B	(15.6)			1.4		
21	150	SK3	山茶碗A		(6.6)			3.3	静止指ナデ調整、体部内外面に煤付着
22	49	SK3	山茶碗B	(14.0)			2.0		
23	140	SK3	常滑甕		(10.1)			4.8	砂粒圧痕、体部下方縦方向のヘラ削り
24	62	S3K	龍泉窯系青磁碗						体部内面に飛雲文
25	65	S3K	龍泉窯系青磁皿						体部内面に点描文、底部外面露胎
26	143	SK3	土師器鍋	(25.0)			1.2		伊勢型鍋、口縁部内外面に煤付着
27	115	SK3	土師器鍋						伊勢型鍋、最大径28.5cm、体部下方内外面削り、体部内外面煤付着
28	133	SK4	小皿A	(8.0)	(4.2)	2.2	2.2	3.1	
29	125	SK7	壺？		(12.0)			0.7	胎土が砂っぽく青灰色を呈する
30	162	SX2	小皿B	8.0	4.0	2.0	12.0	12.0	静止指ナデ調整、前面に黒色の有機物付着
31	23	SX3	土師器皿	(8.0)		1.3	2.2		体部内外面横ナデ
32	19	SX3	土師器皿	(8.6)			3.0		体部内外面横ナデ(2段ナデ)
33	28	SX3	土師器皿	11.4		2.6	3.9		体部内外面横ナデ
34	17	SX3	土師器皿	(12.0)	7.0	3.0	4.6		体部内外面横ナデ
35	4	SX3	小皿A	(8.6)	4.0	2.1	5.4	6.2	静止指ナデ調整
36	7	SX3	小皿A	(9.0)	4.0	2.2	1.5	12.0	静止指ナデ調整、板目
37	3	SX3	小皿A	8.6	4.0	2.5	6.5	7.2	静止指ナデ調整、板目
38	37	SX3	小皿B	8.4	5.2	2.0	7.6	12.0	静止指ナデ調整、板目、底部内面平滑
39	6	SX3	小皿A	(8.4)	(4.4)	1.7	4.5	4.	静止指ナデ調整
40	5	SX3	小皿A	(8.0)	5.6	1.8	4.2	7.1	静止指ナデ調整、板目
41	2	SX3	小皿A	8.4	4.4	1.7	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
42	1	SX3	小皿A	8.0	3.9	1.7	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
43	8	SX3	小皿A	(8.2)	(4.0)	1.212.0	4.5	5.1	静止指ナデ調整、板目、外面に煤付着
44	11	SX3	小皿B	(7.7)	4.0	1.7	2.8	7.8	静止指ナデ調整、内面に黒色の有機物がしみこんでいる
45	9	SX3	小皿B	8.5	5.6	1.4	9.0	12.0	静止指ナデ調整
46	10	SX3	小皿A	8.0	(5.6)	1.9	2.5	4.1	静止指ナデ調整
47	13	SX3	山茶碗A		5.8			6.4	静止指ナデ調整、板目
48	15	SX3	山茶碗A		(6.2)			4.8	
49	14	SX3	山茶碗B		(7.8)			3.0	
50	12	SX3	山茶碗A	(14.0)			2.5		
51	113	SX3	土師器鍋	(21.0)			1.1		伊勢型鍋、体部内面刷毛目
52	126	SX3	常滑甕						
53	63	SX3	龍泉窯系青磁碗		(7.0)			1.4	底部内面に片切彫りによる花文
54	54	SX3	白磁皿	(12.0)			0.8		体部内面に沈線、草花文
55	16	SX3	土師器不明						赤褐色を呈し、堅くしまる
165	22	包含層	土師器皿	(8.4)		2.5	2.1		体部内外面横ナデ
166	29	包含層	土師器皿	(8.6)		2.0	3.4		体部内外面横ナデ
167	31	包含層	土師器皿	(9.2)		1.9	4.7		体部内外面横ナデ
168	30	包含層	土師器皿	(9.0)		1.5	5.5		体部内外面横ナデ
169	25	包含層	土師器皿	(11.0)		3.4	2.1		体部内外面横ナデ

挿図番号	整理番号	遺構名	器種	法量(cm)			残存率(×/12)		備考
				口径	底径	器高	口縁	底部	
170	26	包含層	土師器皿	(12.0)		3.0	2.7		体部内外面横ナデ
171	20	包含層	土師器皿	(12.0)			1.4		体部内外面横ナデ
172	138	包含層	土師器皿	9.4		1.6	12.0		口縁部内外面全周に煤付着
173	75	包含層	小皿A	(8.6)	(4.6)	2.3	2.0	4.8	
174	199	包含層	小皿A	(8.4)	(4.2)	2.3	4.4	4.1	静止指ナデ調整、板目、体部内外面をヘラ状工具で横ナデ
175	81	包含層	小皿A	9.2	5.4	2.1	7.1	12.0	静止指ナデ調整、板目
176	80	包含層	小皿A	(9.2)	(5.0)	2.1	3.1	3.1	静止指ナデ調整、体部内外面に煤付着
177	180	包含層	小皿B	(7.8)	(3.6)	1.9	2.2	4.5	静止指ナデ調整、板目
178	90	包含層	小皿A	8.0	4.2	1.7	6.8	6.3	静止指ナデ調整、板目
179	160	包含層	小皿A	(7.9)	(4.2)	2.0	5.2	5.5	
180	166	包含層	小皿B	7.9	4.2	2.1	12.0	12.0	内面に黒色の有機物付着、底部内面平滑
181	181	包含層	小皿A	(7.2)	(3.0)	2.0	2.0	5.3	
182	158	包含層	小皿A	7.8	3.4	2.1	2.9	7.8	静止指ナデ調整、板目
183	85	包含層	小皿A	8.0	4.2	1.7	9.6	12.0	静止指ナデ調整、板目
184	84	包含層	小皿A	(8.6)	4.8	1.9	5.7	12.0	静止指ナデ調整、板目、底部内面平滑(摩滅)
185	87	包含層	小皿A	(8.8)	(4.8)	1.8	3.9	5.3	静止指ナデ調整
186	168	包含層	小皿A	8.2	4.1	1.8	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目、底部内面平滑
187	159	包含層	小皿A	(8.0)	(4.8)	1.5	4.2	5.3	静止指ナデ調整、板目
188	161	包含層	小皿A	(7.4)	1.9	1.7	5.3	6.6	板目
189	163	包含層	小皿A	7.6	4.5	1.5	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
190	178	包含層	小皿A	8.2	5.2	1.4	6.8	7.7	静止指ナデ調整、板目
191	179	包含層	小皿A	8.4	4.0	1.8	2.6	5.5	静止指ナデ調整、板目
192	188	包含層	小皿A	(8.8)	(5.0)	1.6	1.1	2.4	
193	183	包含層	小皿A	(8.2)	(4.7)	1.8	2.0	3.7	静止指ナデ調整、板目
194	184	包含層	小皿B	(8.0)	4.2	1.9	3.8	12.0	静止指ナデ調整
195	67	包含層	小皿A	8.3	4.8	1.5	9.0	12.0	静止指ナデ調整
196	66	包含層	小皿A	(8.4)	(5.0)	1.4	4.6	4.9	静止指ナデ調整
197	86	包含層	小皿A	8.2	(4.0)	1.7	6.7	9.4	静止指ナデ調整、板目
198	203	包含層	小皿A	(8.4)	(4.8)	1.7	2.8	4.6	静止指ナデ調整、板目
199	79	包含層	小皿A	(8.0)	4.0	1.7	2.6	6.6	静止指ナデ調整
200	77	包含層	小皿A	8.0	4.2	1.5	7.2	12.0	静止指ナデ調整、板目
201	182	包含層	小皿A	(7.9)	2.8	1.3	3.7	6.7	静止指ナデ調整、板目
202	186	包含層	小皿A	(8.8)	5.8	1.6	5.6	6.1	静止指ナデ調整、板目
203	175	包含層	小皿A	(8.2)	(2.4)	1.4	4.6	4.8	静止指ナデ調整、板目
204	164	包含層	小皿A	7.9	4.5	1.6	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
205	189	包含層	小皿A	(8.6)	(5.0)	1.6	1.6	2.3	
206	187	包含層	小皿A	(8.6)	(4.8)	1.5	1.1	2.4	床部外面煤付着
207	88	包含層	小皿A	(7.4)	4.4	1.6	2.0	8.6	静止指ナデ調整、板目
208	91	包含層	小皿A	(8.0)	5.2	1.3	2.9	12.0	静止指ナデ調整、板目
209	171	包含層	小皿A	(8.0)	5.0	1.2	3.7	12.0	
210	33	包含層	小皿B	(8.6)	(4.0)	2.6	3.0	3.6	
211	32	包含層	小皿B	(8.2)	5.2	2.2	4.5	7.2	
212	83	包含層	小皿B	(7.8)	(3.8)	2.2	5.5	5.0	内面に黒色の有機物付着
213	36	包含層	小皿B	(8.2)	(3.6)	1.8	3.8	5.4	
214	35	包含層	小皿B	7.8	4.0	1.8	7.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
215	34	包含層	小皿B	(8.2)	4.6	1.9	3.2	6.8	
216	165	包含層	小皿B	7.4	4.3	2.0	12.0	12.0	静止指ナデ調整、底部内面平滑
217	165	包含層	小皿B	7.3	3.8	2.1	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
218	172	包含層	小皿B	7.8	3.5	2.0	12.0	12.0	静止指ナデ調整
219	176	包含層	小皿B	(7.9)	5.0	1.8	5.3	12.0	静止指ナデ調整、底部内面平滑
220	173	包含層	小皿B	7.2	4.2	1.9	8.0	12.0	
221	41	包含層	小皿B	(8.0)	4.4	1.7	5.5	12.0	静止指ナデ調整
222	177	包含層	小皿B	(7.8)	(4.3)	2.0	5.4	4.4	
223	174	包含層	小皿B	(8.0)	5.0	1.6	5.6	12.0	静止指ナデ調整、底部内面平滑
224	40	包含層	小皿B	8.0	5.6	1.8	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
225	169	包含層	小皿B	8.4	5.0	1.8	12.0	12.0	静止指ナデ調整、板目
226	200	包含層	小皿B	.8	5.2	1.6	9.2	12.0	静止指ナデ調整、底部内面平滑
227	170	包含層	小皿B	7.7	5.8	1.8	12.0	12.0	静止指ナデ調整
228	42	包含層	小皿B	(8.0)	(5.4)	1.4	2.5	3.0	
229	92	包含層	山茶碗A	(15.0)	(7.0)	5.8	2.5	3.7	
230	72	包含層	山茶碗A	(15.2)	7.0	5.9	1.5	7.7	底部外面に墨書
231	193	包含層	山茶碗A	(15.3)	(6.4)	5.6	1.9	5.9	内面に黒色の有機物付着、板目
232	70	包含層	山茶碗A	(14.0)	(5.4)	5.5	6.5	7.1	静止指ナデ調整
233	71	包含層	山茶碗A	(14.0)			1.8		
234	73	包含層	山茶碗A	(15.4)			2.0		
235	191	包含層	山茶碗A	(14.0)	5.0	5.7	5.5	6.4	静止指ナデ調整、板目
236	95	包含層	山茶碗A	(13.8)	(6.0)	6.0	3.5	3.8	静止指ナデ調整
237	96	包含層	山茶碗A	(12.6)	(5.0)	5.3	3.2	3.6	静止指ナデ調整
238	157	包含層	山茶碗A	(13.0)	(5.7)	6.2	3.4	0.5	
239	93	包含層	山茶碗A	(13.8)	5.4	5.7	5.2	8.0	静止指ナデ調整
240	190	包含層	山茶碗A	(13.4)	(4.4)	5.0	3.6	3.7	静止指ナデ調整、板目
241	94	包含層	山茶碗A	(14.0)	(6.0)	5.5	3.5	2.0	静止指ナデ調整
242	97	包含層	山茶碗A	(14.6)	(5.4)	5.8	1.0	5.2	静止指ナデ調整
243	197	包含層	山茶碗A	(14.0)			2.7		
244	102	包含層	山茶碗A	(13.0)			1.0		体部体面下方に黒色の有機物付着
245	44	包含層	山茶碗B	(16.0)			3.8		
246	45	包含層	山茶碗B	(15.0)			1.5		
247	46	包含層	山茶碗B	(16.4)			1.7		体部内面に黒色の有機物付着
248	47	包含層	山茶碗B	(13.2)	(7.0)	5.1	4.5	5.7	
249	74	包含層	山茶碗A	(12.0)	(4.6)	4.8	1.8	3.7	静止指ナデ調整
250	98	包含層	山茶碗A	(12.8)	4.8	5.4	2.5	6.5	静止指ナデ調整、板目
251	100	包含層	山茶碗A	10.6	4.5	5.4	0.8	5.5	静止指ナデ調整
252	99	包含層	山茶碗A	(11.0)			4.0		
253	105	包含層	山茶碗A		6.8			7.8	板目、高台周辺に黒色の有機物付着

挿図番号	整理番号	遺構名	器種	法量(cm)			残存率(×/12)		備考
				口径	底径	器高	口縁	底部	
254	104	包含層	山茶碗A		4.8			12.0	静止指ナデ調整、板目
255	202	包含層	山茶碗A		(4.8)			4.8	静止指ナデ調整、板目、内外面に黒色の有機物付着
256	196	包含層	山茶碗A		5.2			7.1	静止指ナデ調整、板目
257	195	包含層	山茶碗B		(7.3)			4.2	底部外面に「大」の墨書
258	194	包含層	山茶碗B		(5.4)			3.8	静止指ナデ調整
259	103	包含層	山茶碗B		7.8			6.1	静止指ナデ調整、底部内面平滑、内面に黒色の有機物付着
260	111	包含層	鉢	(29.0)				1.8	
261	112	包含層	鉢	(29.0)				1.0	
262	110	包含層	鉢	(29.0)				1.8	
263	204	包含層	鉢		(12.4)			4.5	体部下方回転ヘラ削り、砂底、内体面平滑
264	107	包含層	鉢		(12.4)			4.0	体部下方回転ヘラ削り、内面平滑
265	109	包含層	鉢		(15.0)			2.1	体部下方回転ヘラ削り、内面平滑
266	108	包含層	鉢		(10.8)			3.5	体部下方回転ヘラ削り、内体面平滑
267	58	包含層	白磁碗		6.8			6.2	高台周辺露胎、見込内面に一条の沈線
268	56	包含層	白磁碗		6.0			8.5	高台周辺露胎
269	59	包含層	同安窯系青磁碗		5.4			12.0	高台周辺露胎
270	64	包含層	同安窯系青磁碗						外面ヘラ状工具による沈線、内面櫛状工具による草花文と点描文
271	61	包含層	龍意窯系青磁碗		(5.8)			5.3	体部内面に櫛状交付による草花文、高台内面釉の拭い取り
272	57	包含層	白磁碗	(17.0)			1.2		
273	137	包含層	白磁碗	(17.0)			1.0		
274	136	包含層	同安窯系青磁碗	(16.0)			1.4		内外面に櫛目、内面上方に一条の沈線
275	52	包含層	龍泉窯系青磁碗	(16.0)			1.7		体部外面に鎬蓮弁文
276	53	包含層	龍泉窯系青磁碗	(16.0)			2.0		体部外面に鎬蓮弁文
277	127	包含層	常滑小瓶	(7.0)			0.4		179と同一個体の可能性あり
278	128	包含層	常滑小瓶		(8.0)			2.9	内面に暗赤褐色を呈する有機物付着
279	60	包含層	龍泉窯系青磁碗						
280	55	包含層	白磁壺						
281	117	包含層	古瀬戸壺	9.0			7.1		灰釉刷毛塗り、口縁部下端に面取り
282	118	包含層	古瀬戸壺	(12.0)			1.0		灰釉刷毛塗り
283	131	包含層	滑石製鉢？	(24.6)			1.0		内面粗い削り、外面丁寧な磨き
284	120	包含層	古瀬戸有耳壺	9.8	9.6	26.9	10.8	7.0	高台を除き灰釉刷毛塗り
285	119	包含層	古瀬戸有耳壺						耳が欠落した跡あり、外面回転ヘラナデ調整、内面指頭列痕、灰釉刷毛塗り
286	129	包含層	常滑甕	25.0			2.9		
287	130	包含層	常滑甕	25.0			2.4		
288	124	包含層	常滑甕	17.5			2.7		
289	121	包含層	常滑甕	(38.0)			3.7		2ヵ所に矢羽の押印文

第4表　飛瀬遺跡土錘計測表

挿図番号	遺構名	長さ(cm)	重さ(g)
56	SX3	3.5	7.6
57	SX3	3.9	7.9
58	SX3	3.9	10.4
59	SX3	4.5	12.4
60	SX3	4.9	17.5
290	包含層	3.3	2.5
291	包含層	3.5	4.8
292	包含層	3.6	6.8

挿図番号	遺構名	長さ(cm)	重さ(g)
293	包含層	3.8	6.2
294	包含層	4.0	7.2
295	包含層	4.0	7.1
296	包含層	4.0	5.5
297	包含層	4.1	6.2
298	包含層	4.1	9.3
299	包含層	4.1	7.0
300	包含層	4.2	8.4

挿図番号	遺構名	長さ(cm)	重さ(g)
301	包含層	4.3	10.6
302	包含層	4.3	7.6
303	包含層	4.3	8.7
304	包含層	4.4	11.3
305	包含層	4.7	9.4
306	包含層	4.7	9.7
307	包含層	5.1	7.7

第Ⅳ章　底津遺跡の遺構と出土遺物

第１節　層序

今回調査範囲となった底津遺跡の立地する箇所は斜面肩口から緩斜面にかけてである。現在は杉林となっていたが、以前は畑地として利用されており、耕作土である黒色土が南側へ向かうほど厚く堆積している。また、東側の底津川により開析された崖面方向へ谷状の地形が広がり、40～50cmの層厚を形成する程この黒色土が流れ堆積しているが、縄文時代中期～後期の遺物もかなり含む。この表土を形成する黒色土内にもかなりの遺物を包含するが、耕作等により攪乱を受けていることも明瞭であり今回は除去して調査に入った。第32図を参照に説明を加える。

第Ⅰ層（10Ｙ Ｒ2/1　黒色土）

表土であり、包含層である第Ⅳ層が近代以降の耕作等によって有機質土化したものと考えられる。斜面下方にあたるＡ列へ向かうほどその堆積は厚くなり第Ⅲ層との区分も漸移的で不明瞭となる。また、Ｇ・Ｈ５～７グリッドを中心により黒味を増したような漆黒土（7.5Ｙ Ｒ1.7/1）が広がっていた。細分も可能であるが、報告が縄文時代を対象とするためあえて細分していない。一部角礫を含んでおり北部からの山土も供給されている可能性がある。縄文時代遺物を含むがいわゆる浮き上がりである。

第Ⅱ層（10Ｙ Ｒ5/3　黄褐色土）

Ｃ・Ｄ５～７グリッド周辺に見られる。拳大以下の小亜円礫を非常に多く含む砂質土である。同層が見られる地点においては遺構の検出はない。第Ⅴ層の隆起部分が第Ⅰ層の影響化により有機質土化したものと考えられる。

第Ⅲ層（10Ｙ Ｒ4/1　褐灰色土）

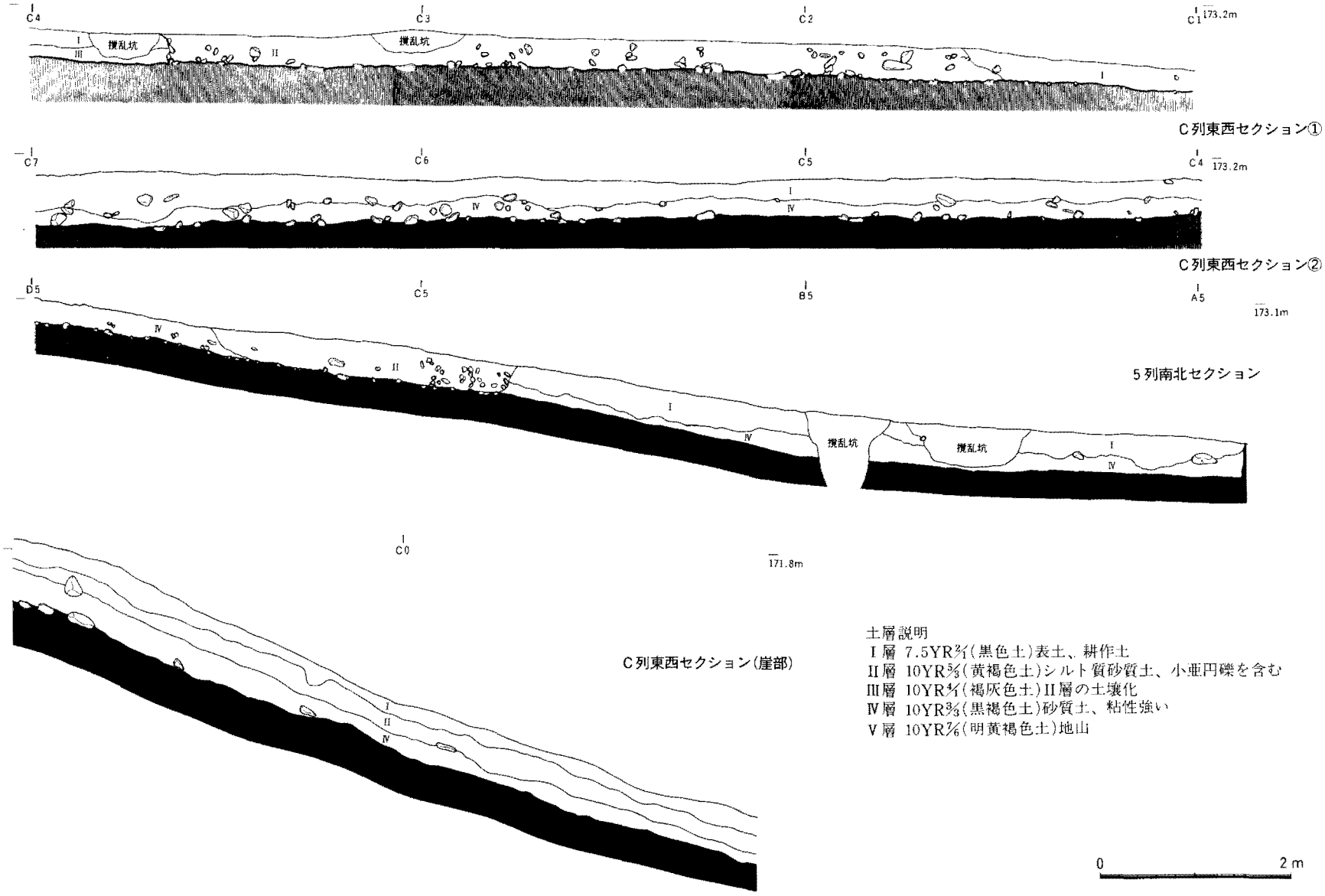
基本的には第Ⅱ層に似る。礫の混入は少ない。Ｄ～Ｇ８・９グリッドを中心に分布するが、畦道に伴う石列が構築されていた部分と地点とほぼ重なり、第５号住居址上部を攪乱していたことより人為的堆積土と考えられ他地点には存在しない。

第Ⅳ層（10Ｙ Ｒ3/3　黒褐色土）

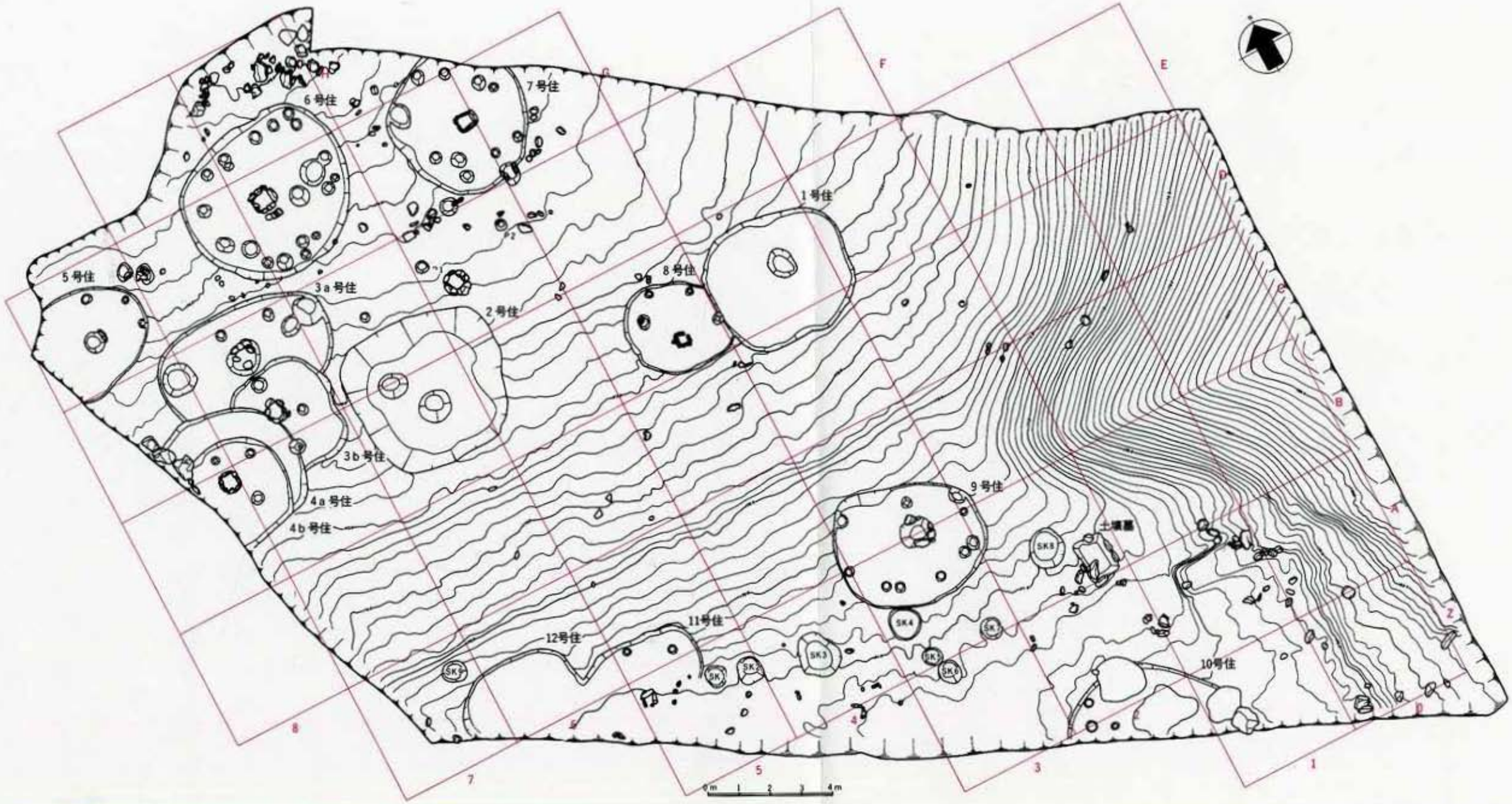
縄文時代早期後半～後期前半を中心とする遺物を含む包含層である。前述したとおり第Ⅰ層との区分は不明瞭である。また、縄文時代後期に属する住居址は同層中内に構築されており、同層中レベル中に生活面が存在したと考えられるが明らかにはし得なかった。Ｂ列以南においてはその堆積は厚くなるが第Ⅰ層との区分はより不鮮明となる。やや粗い砂質土であり、粘性をおびる。

第Ⅴ層（10Ｙ Ｒ7/6　明黄褐色土）

板取川が形成した段丘堆積物である。基盤のチャートの上部にのるシルト質砂質土の堆積土であり、地山としたものである。調査範囲中央に部分的に小亜円礫が表出する箇所が存在するが、この地点はコンタがややつまり遺構の空白地帯となっている。



第32図　底津遺跡土層断面図



第33図　底津遺跡遺構平面図

第２節　遺構と出土遺物

本遺跡では縄文時代中期後半から後期前半にかけての住居址14軒、中世に属する土壙墓１基の他土坑９基を確認している。今回報告する住居址については、調査時点における住居番号順に説明を行い、各住居址に共通する属性については表形式で提示する。表内の住居址の帰属時期については第Ⅵ章で詳述するが、当地域の中期末編年が確立し得ない現時点においてここでは便宜的に加曽利Ｅ２式併行をⅠ期、加曽利Ｅ３古式併行をⅡ期、加曽利Ｅ３新式併行をⅢ期、加曽利Ｅ４古式併行をⅣ期、加曽利Ｅ４新式併行をⅤ期、後期前半（四ツ池～中津式併行）をⅥ期として表記する。

多くの住居址が斜面上に立地するため斜面下方側の壁の立ち上がりが流失、あるいは僅かしか認められず断面が塵取り状となるものが多いのが特徴である。また、中にいわゆる「竪穴状遺構」等と呼ばれる炉等を伴わない遺構も存在するが、性格等不明な部分も多いのでここでは便宜的ではあるが、住居址の説明と併せて報告する。

１　住居址

第１号住居址（第35図、図版３）

位　置	Ｄ３・Ｅ２～３	**平面形**	楕円形	**主　軸**	Ｎ－21°－Ｅ		
規　模	４７２×３９４×　４８cm		**面　積**	１６．０㎡	**時　期**	Ⅵ　期	

緩斜面地に立地し、南壁側はかなり削られている。すり鉢状を呈する。柱穴・炉跡はない。ほぼ中央に235cm×155cm×16cmの土坑を検出している。

覆土は北部からの流れ込みによる砂質の黒褐色土が厚く堆積しており、多くの遺物は覆土上層より出土している。西壁側で第８号住居址を切る。

出土遺物

土　器（第34図、図版10）

１・３は縦位直線的な櫛描沈線文が施される。おそらく同一個体で、頸部でやや内弯し口縁部が外反するものであろう。２は口縁直下に無文帯をもちその下位に粗略な条線が施される。直立する口縁形態を有し口唇部に面をもつ。４～６は波状縁を呈し１列の横位縄文帯を巡らすものであるが、５は他に比較して緩やかな波状縁をもつ。４は波頂部に刺突を有し、その波頂部から区画沈線を垂下させ縄文ＲＬを充填しているのに対し、６は口縁側部を横走する沈線が波頂部端部まで上らず縄文ＬＲが充填される。７は平縁、８は波状の口縁形態をもち３条の沈線が横走する。９・10は胴部資料と考えられ、７の横位沈線下同様曲線的・直線的文様が描かれる。11は平縁の肥厚した口縁部に１条の沈線を施し口唇外側を刻む上面施文を特徴とする。

石　器（第36図、図版11）

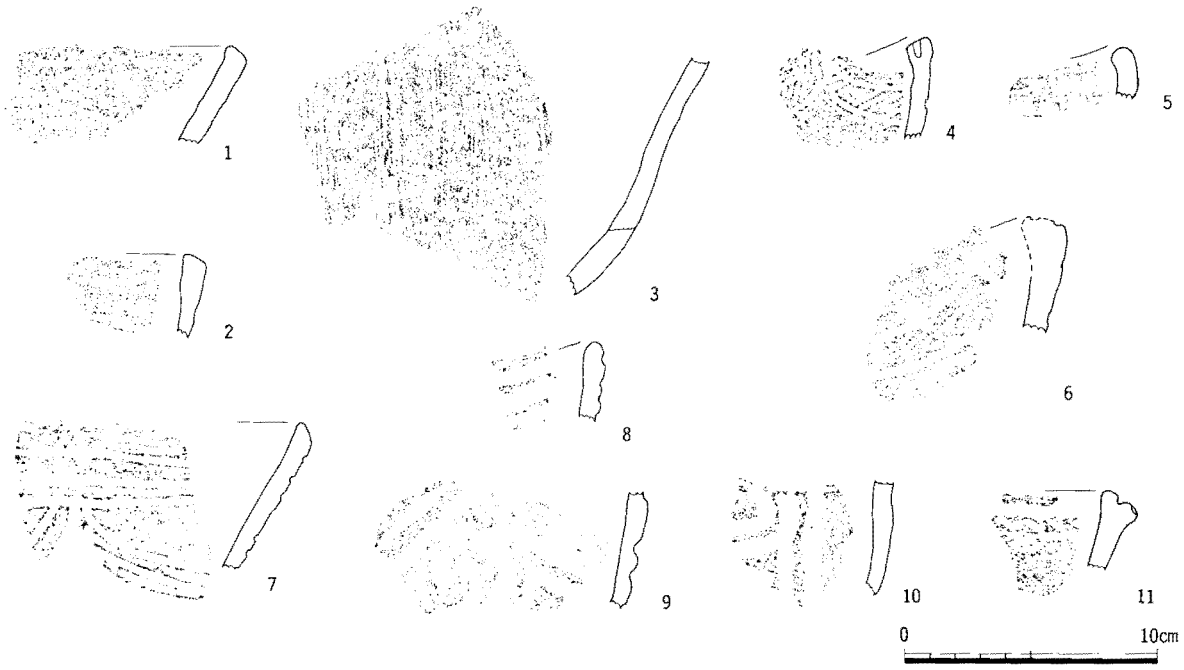
スクレイパー２点（チャート製）、ＵＦ３点（チャート製２点、流紋岩製１点）、叩き石２点、剥片47点（流文岩６製点、チャート41製点）が出土している。１は表皮を残す素材剥片の右側縁に両面加工により、２は節理の多く入る粗悪な素材剥片の左側縁に片面加工により刃部が作出されている。ＵＦと認定したものは３点出土しているが２点図示した。４は流紋岩製で、左側縁部に微細剥離痕が認められるが連続性に乏しくＵＦとした。５は砂岩製の打製石斧である。本遺跡において特徴的にみられるのであるが表面に表皮を残し、厚手であり、先端部は磨耗している。叩き石は２点出土している。６はデイサイト製であり、先端部に衝撃による大きな剥離痕が１枚入っている。他の１点は流紋岩製製であるが、同様な剥離痕を先端部にもつ。

第２号住居址（第37図、図版３）

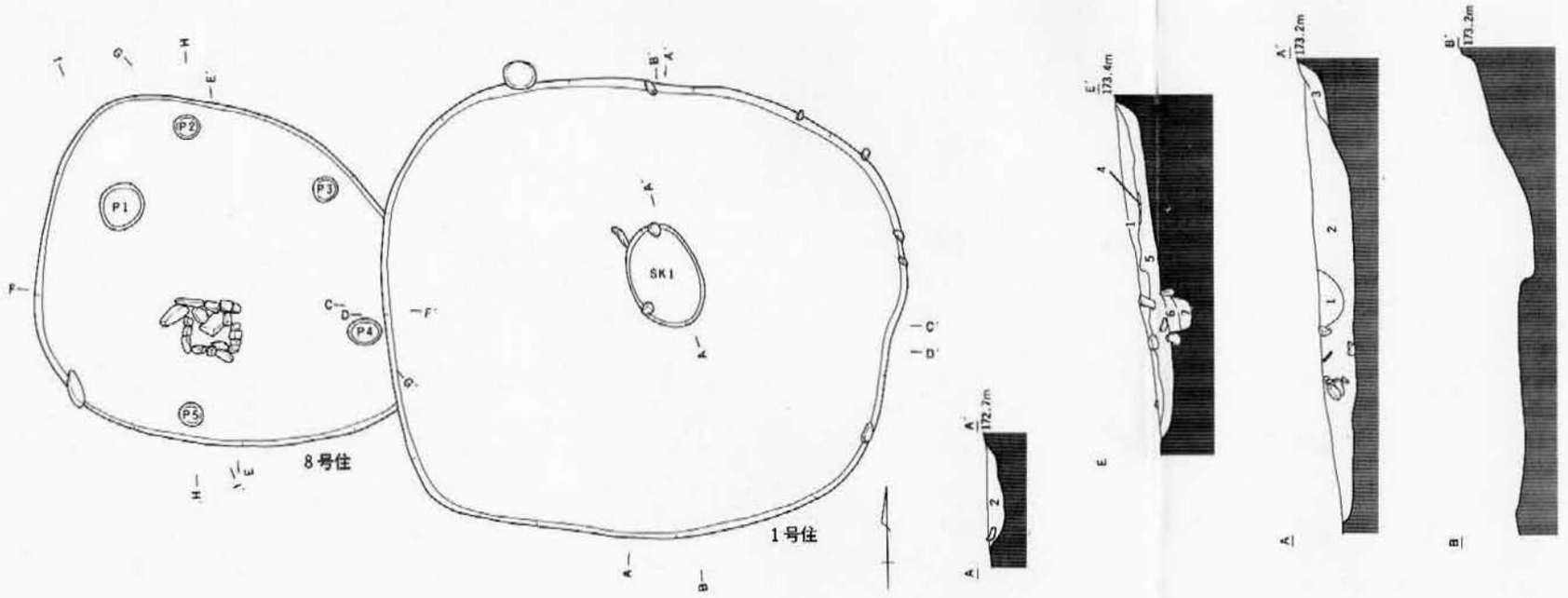
位　置	Ｅ・Ｆ５・６	**平面形**	不整方形	**主　軸**	Ｎ－20°－Ｅ	
規　模	４７４×４８０×　８１cm		**面　積**	２０．３㎡	**時　期**	Ⅵ　期

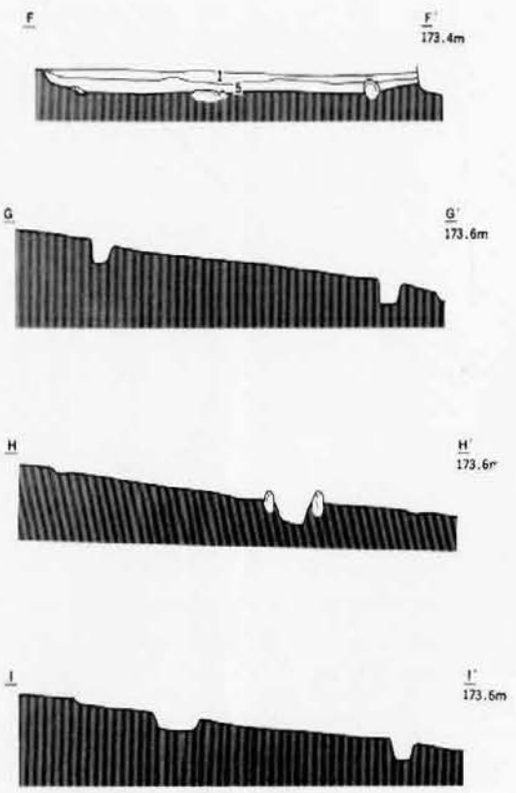
斜面肩口に立地し、残存状態は良好である。深いすり鉢状を呈し、第１号住居址同様柱穴・炉跡は認められない。中央及び北東隅で107cm×87cm×19cm、92cm×70cm×20cm程度の２基の土坑を確認している。

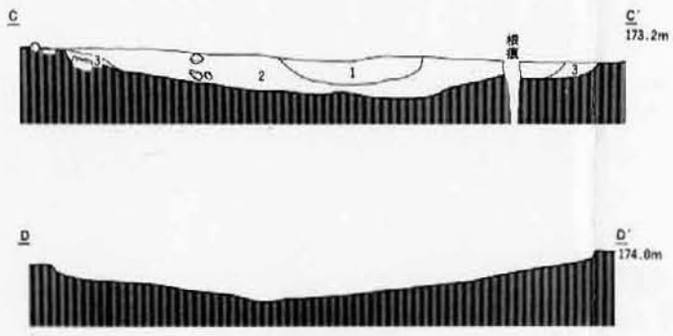
覆土はやはり東部側からの流れ込みによる砂質の黒色土・黒褐色土が厚く堆積している。西壁側で第３ｂ号住居址と接する。



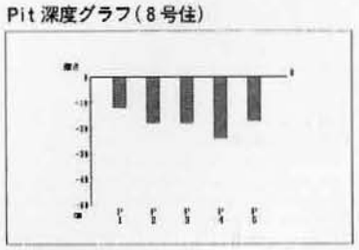
第34図　第１号住居址出土土器







Pit 深度グラフ(8号住)

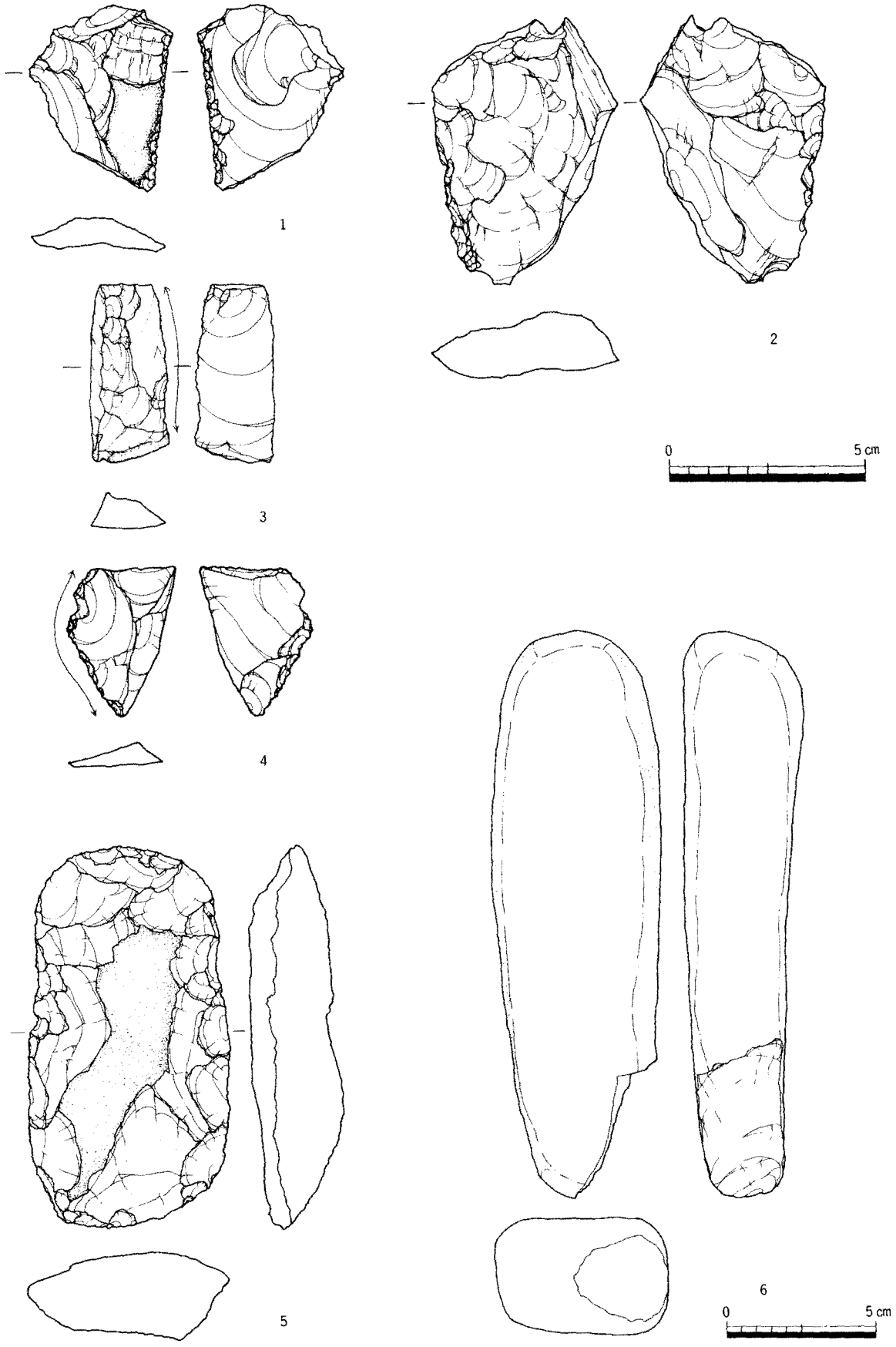


土層説明

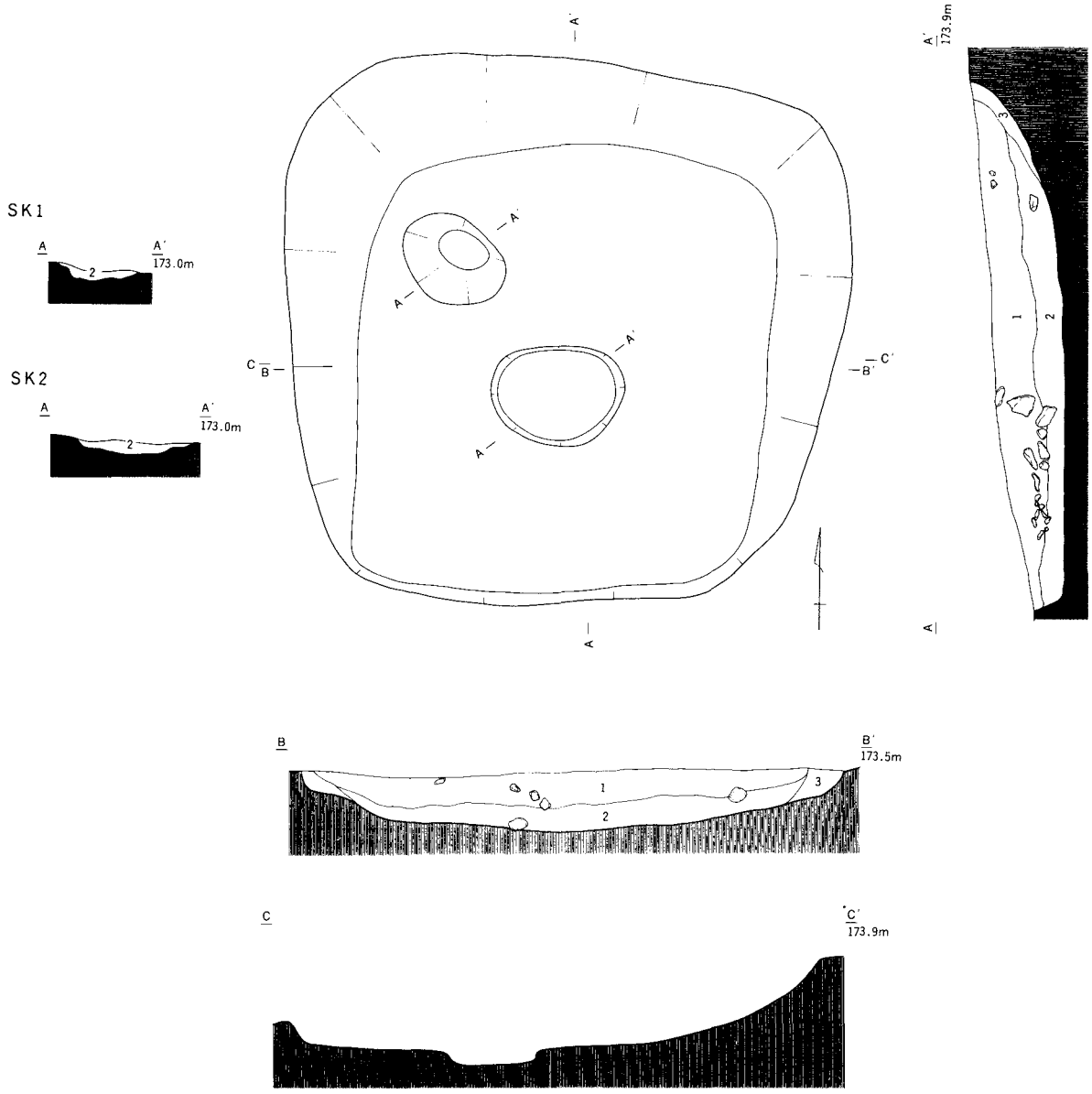
1. 7.5YR3/1(黒色土) 細かい砂質土
2. 7.5YR3/2(黒褐色土)砂質土
   SB1覆土
   拳大～人頭大礫を含む
   遺物を含む
3. 7.5YR3/3(暗褐色土)砂質土
   南壁を除く壁ぎわに残る
4. 2.5YR3/4(赤褐色土)焼土
5. 7.5YR3/3(暗褐色土)砂質土
   炭化物を含むSB8覆土
   炉周辺は特に固くしまる
6. 7.5YR5/2(灰褐色土)砂質土
   炉覆土
7. 7.5YR3/1(黒褐色土)細かい砂質土
   炭化物を含む

0 2m

第35図 第1・8号住居址



第36図　第１号住居址出土石器



土層説明
1. 7.5YR2/1(黒色土)細かい砂質土、下部に拳大～人頭大礫を含む
2. 7.5YR3/2(黒褐色土)粗い砂質土、遺物を含む、SB2主覆土
3. 7.5YR4/3(褐色土)砂質土、北、南、西壁よりに残る

0 2 m

第37図　第2号住居址

出土遺物

土　器（第38図、図版11）

1～3はやや内弯・外反・直立した口縁形態をもち、口縁部に1条の沈線を横走させるものである。1は沈線下に直・曲線を併用した櫛描沈線文を垂下させている。4は胴部片であり釣手状の磨消区画文（縄文RL）の一部がみられる。5は平縁を呈し、肥厚した口唇部に1条の沈線を巡らし口唇部外側を刻んでいる。口縁部に縦位・斜行する沈線で文様を描いている。6は垂下する沈線を軸に曲線文が描かれる。7・8は磨消区画文を施す土器であり、8は注口土器と考えられる。伴に縄文RLが充塡される。

石　器（第39・40図、図版12）

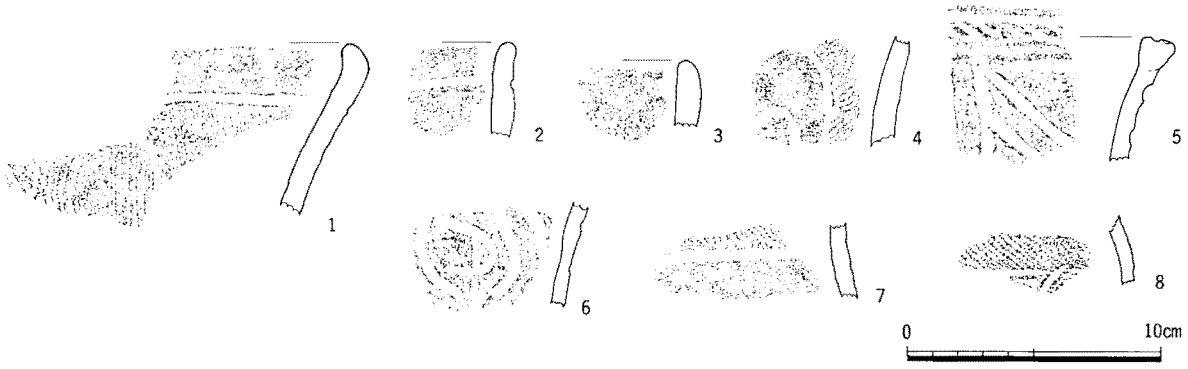
石鏃1点、スクレイパー1点（チャート製）、RF1点（流紋岩製1点）、UF2点（チャート製1点、流紋岩製1点）、クサビ形石器2点（チャート製）、打製石斧3点、磨石1、剥片108点（流文岩17製点、チャート91製点）、砕片5点（チャート製）が出土している。3は透明感のあるチャート製である。貝殻状剥片を素材とし、周辺部に調整を加えほぼ三角形鏃とする。4は素材剥片の上端・左側縁部に背面側はやや角度のある粗い調整を、腹面側には平坦な調整を加えておりスクレイパーとして分類した。5・6は縦長剥片の側縁部に微細な刃こぼれが認められる。7は裏面に大きく表皮を残す。両側縁部は折断面で、剥片の末端部に微細な剥離痕がみられる。RFの範疇で捉えられる石器であるが、ヘラ形石器としているものである。8・9は上下端に微細なツブレ状の剥離痕が発達するもの、あるいは上下端より剥離、截断面のはいるものでありクサビ形石器とした。中にはいわゆるクサビ形石器に限定せず両極打法による剥片も含む。打製石斧は1・10が流紋岩製で、調整がステップ状となり大きく厚みを残す。基部、あるいは刃部を欠損するが新しい折れである。10の刃部には磨耗がみられる。11は砂岩製で大きな横長剥片素材である。表皮を一部残し、刃部を欠損する。2は流紋岩製の磨石である。表面に著しい磨耗が認められる。

3a・3b号住居址（第41図、図版3）

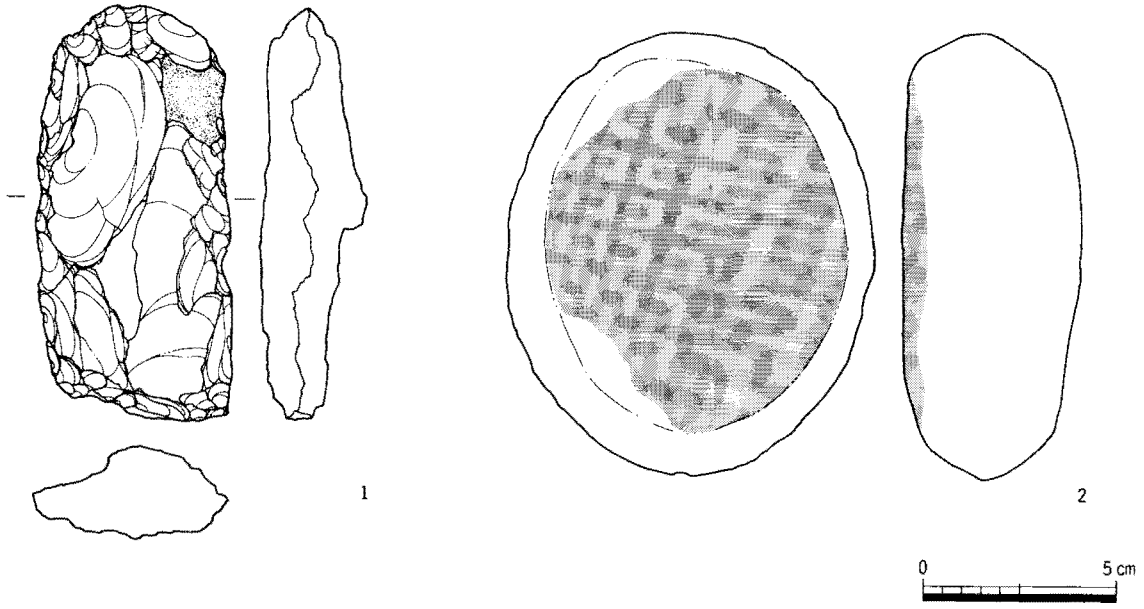
第3a住居址

位　置	E・F6～8	**平面形**	楕円形	**主　軸**	N－7°－E		
規　模	600×　　×　23cm		**面　積**	－　㎡	**時　期**	Ⅲ～Ⅳ　期	

緩斜面地に立地し、南壁側を第3b号住居址に切られる。柱穴は5本確認しているが、住居長軸両側に長径100～110cm×短径80～90cm、深さ40cm前後を測るP1・P5が存在し、覆土上部には炭化物を含む。P2・3が主柱穴か。また、P4上で平板状の石皿を検出している。ほぼ中央と考えられる位置に石囲い炉を持つ。北側の炉石はほぼ原位置を保つが、他は若干移動している。炉形成前に130cm×115cm×25cm程度の土坑を堀込み、この土坑より一回り小さく炉石を組み炉を作り出している。なお、



第38図　第２号住居址出土土器



第39図　第２号住居址出土石器（１）

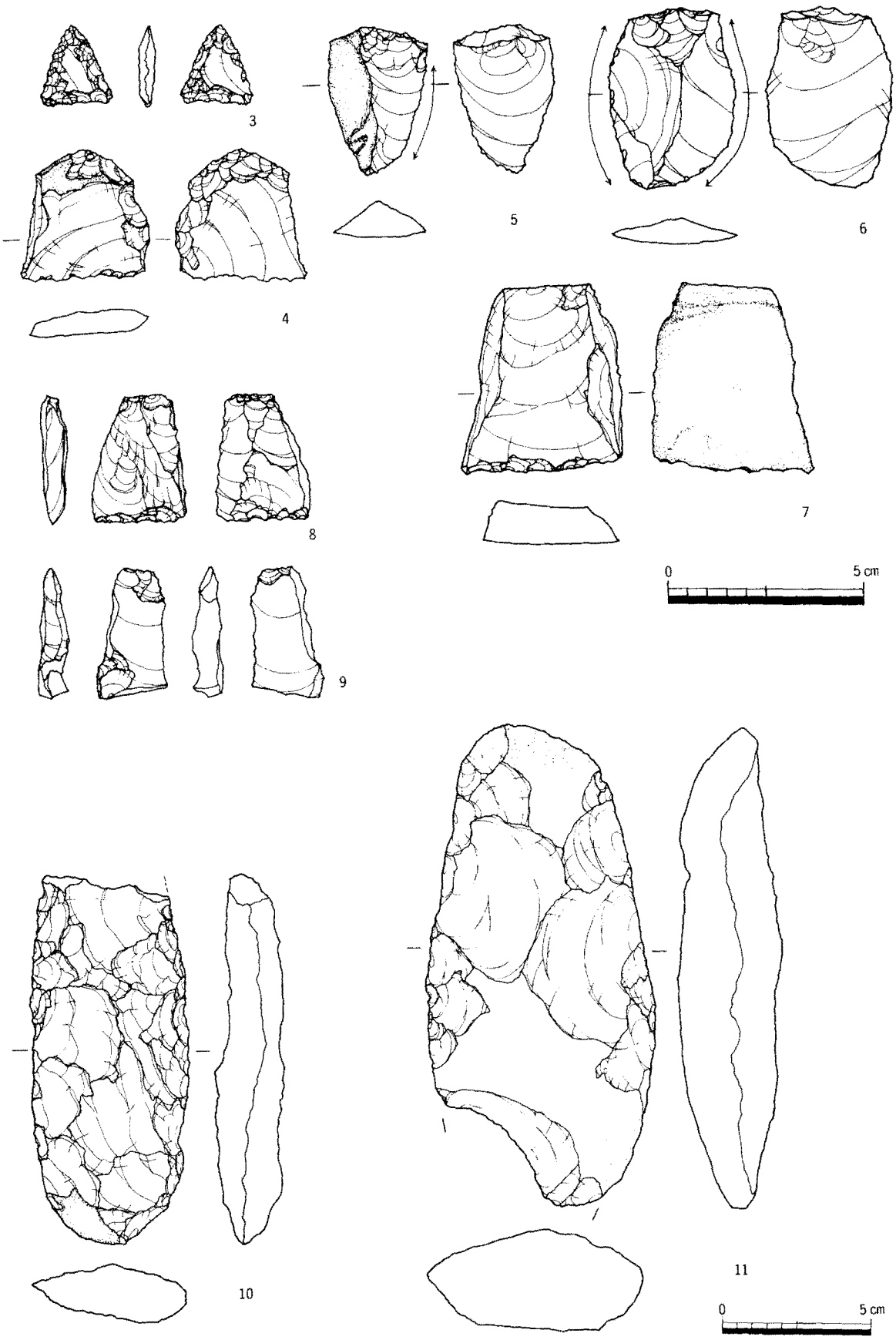
石囲い炉内より異形土器を検出している。（第44図26）

覆土は北部側から流れ込みによる褐灰色砂質土であるが、かなり３ｂ号住居址側へ流失しており、両住居址の区分は不明瞭である。

第３ｂ号住居址

位　置	Ｅ・Ｆ７	平面形	不整方形	主　軸	Ｎ－6°－Ｅ
規　模	３４４×　　×　　９cm	面　積	－　㎡	時　期	Ⅳ　期

斜面地に立地し、南壁側はほぼ流失している。また、東壁側を根痕により消滅しており、依存状態は悪い。Ｐ１が主柱穴の一部か。Ｐ３より埋甕を検出しているが、上部は欠失したものと考えられる。やや北寄りに石囲い炉を持つ。炉石の上部がほぼ同一レベルとなるように、平面形は楕円形に組ま



第40図　第２号住居址出土石器（２）

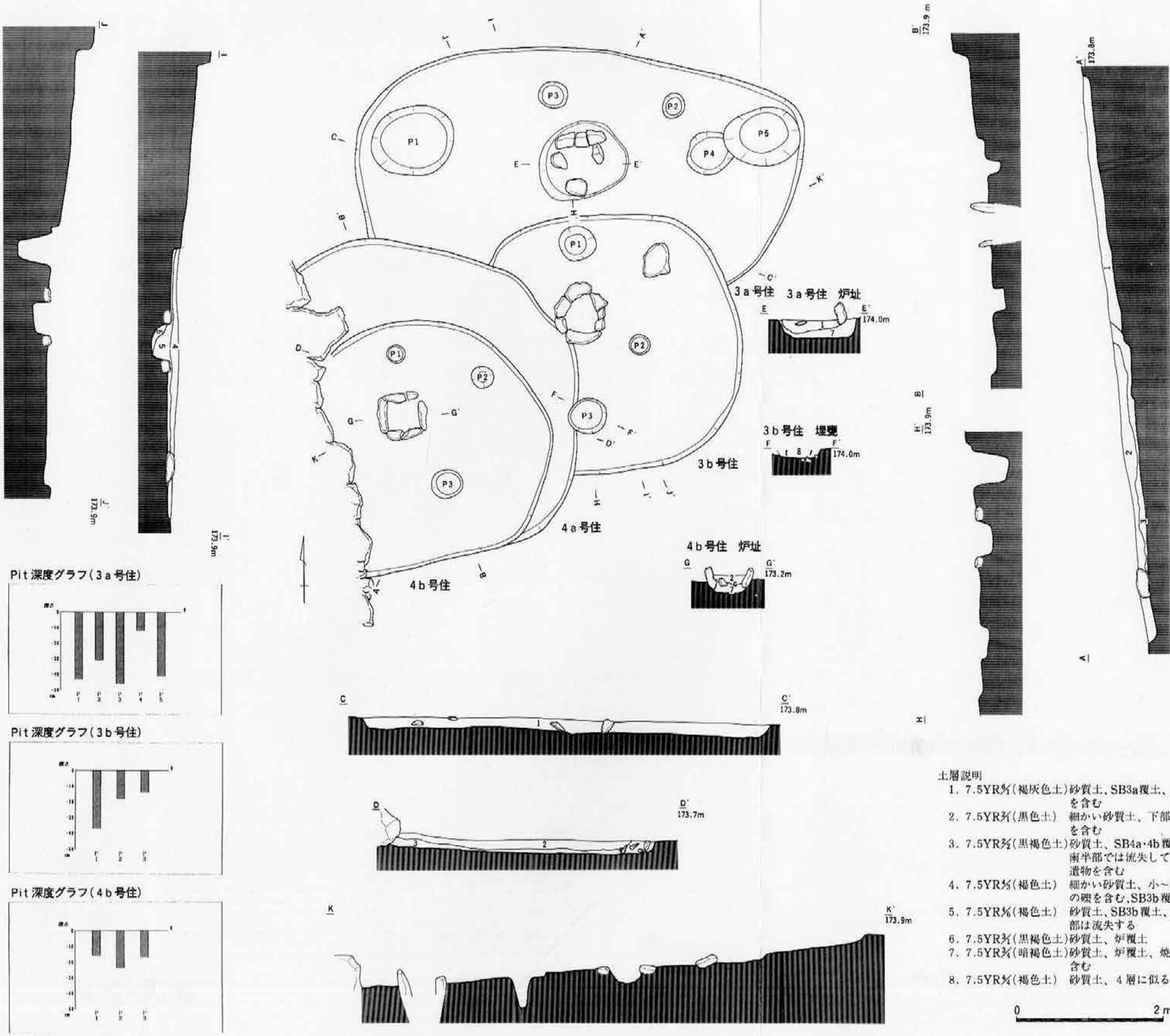
れている。炉石は良く焼成を受けた痕跡が見られる。

覆土は薄く褐灰色土が堆積するが、第３ａ号住居址覆土との区分は認められず、床面のレベル差による切り合いにより新旧を判断している。

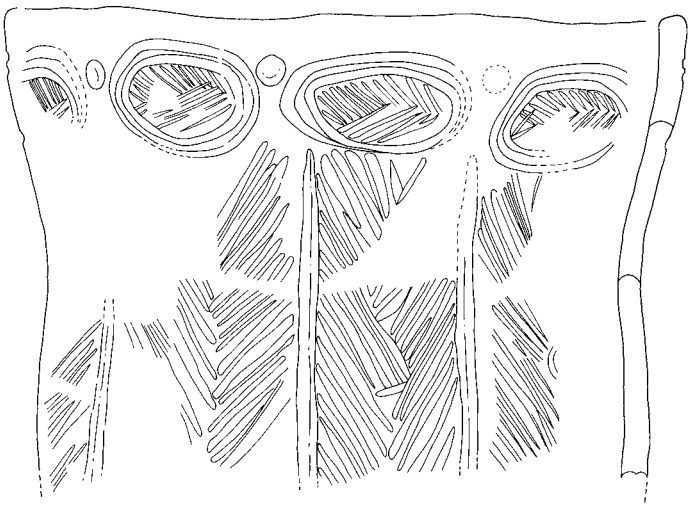
出土遺物

土　器（第42～44図、図版12～14）

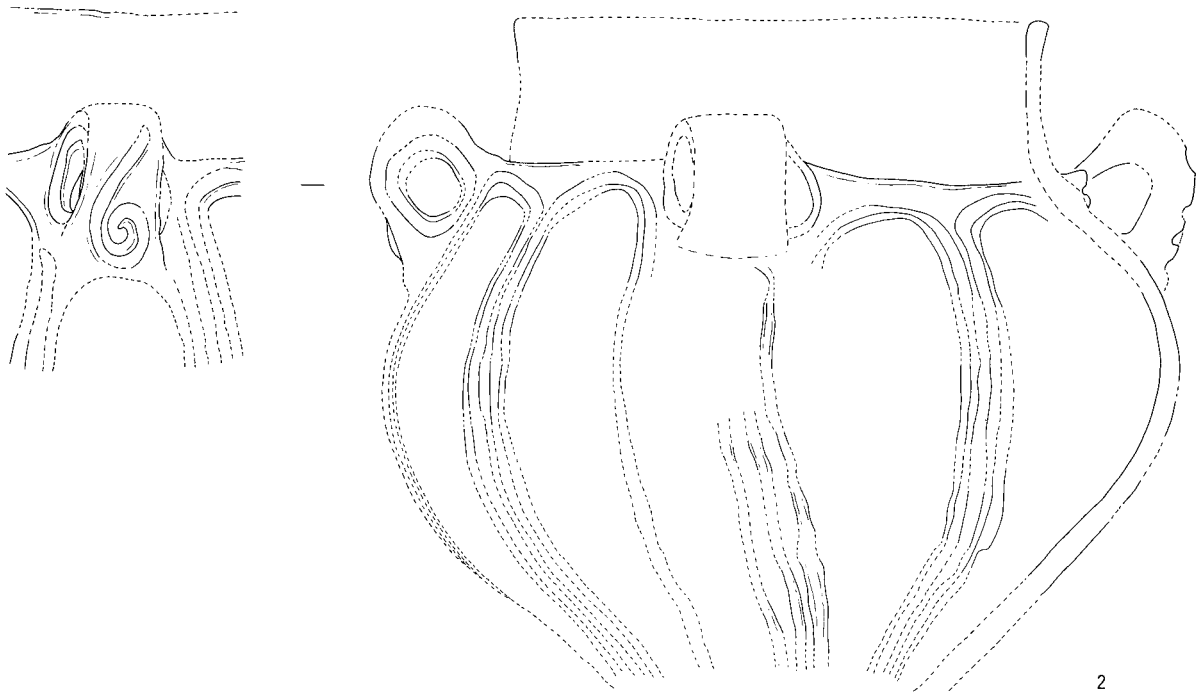
23の３ｂ号住居址の埋甕、24の３ａ号住居址炉内出土異形土器以外は覆土下層を中心として出土している。土器出土の平面的分布は確認しており平面的プロットによる両住居址出土土器の区分も可能であるが、前述したとおり覆土のセクションによる区分は不明瞭であり、地形の傾斜による土器の流れも認められるので３ａ・３ｂ号住居址出土土器を一括して取り上げる。１・２は底部を欠失するがほぼ復元し得た資料である。１は頸部でややくびれ口縁部は緩く内弯する。口縁形態は平縁である。口縁部に二重の沈線による楕円区画をもち区画内を矢羽根状沈線文で充填する。楕円区画間に円状の刺突をおく。口縁部文様帯直下より１条の沈線を垂下させ縦区画をつくり、やはり矢羽根状沈線文で充填している。２は胴部か球状に膨らみ口縁部はわずかに外弯する。頸部に断面三角形状の隆帯を横走させ、４ヶ所に耳環状の把手をおいている。頸部隆帯及び把手より隆帯を垂下させ縦区画をつくり、区画内にやはり隆帯で方形区画をつくり、区画内を無文としている。把手上には逆Ｓ字状の渦巻紋を配置している。３～９は口縁部に隆帯による区画文を配するものである。渦巻＋楕円形の区画を基本としてもつが、渦巻文が区画内に入り込みややくずれたかんじのもの（４）、円環文を連結させたもの（５）がある。区画内は矢羽根状沈線文、斜行沈線文、無文で充填する。また、６・９は隆帯上、あるいは隆帯間に刺突を施す。７・８は同一個体資料であり、遺存状況が悪く不明瞭であるが、隆帯上には縄文ＬＲを施している。口縁形態は平縁、波状縁である。10～13は口縁部に沈線による文様帯を配するものである。10・12はおそらく楕円形区画をもち、区画内及び区画間を矢羽根状沈線文、あるいは斜行沈線で充填するものである。ただし、10は波状縁を呈し波頂部直下を除く口縁部に幅広で低い隆帯を貼付し右傾する沈線を施している。また、12は口縁部文様帯直下には胴部に垂下する２条の沈線が認められる。11は口縁に平行し１条の沈線を横走させ、その下位に退化した渦巻文を描く。平らな口唇部には縄文Ｌｒ？を施している。13は波状縁を呈し口縁部端を丸く収める。波状縁直下に曲線的な矩形を描き両側に相対する蕨手状文をおいている。14は頸部に刺突を有する隆帯が横走する。15は口縁部に隆帯による渦巻文をもち、16も同様に刺突をもつ隆帯が渦巻状にめぐるものであろう。17は口縁部を折り返し複合口縁とし、刺突をもつ１条の沈線が横走しており、その直下に右傾する棒状工具による沈線が認められる。18～23は胴部片である。18は２本の隆帯で縦区画をつくるが区画内は無文としている。19・20は同一個体資料であり、２本隆帯により縦区画をつくり蛇行隆帯を中心に矢羽根状沈線を描く。21・22は２本、あるいは３本沈線で縦区画を行い、蛇行する隆帯を中心に矢羽根状沈線文で充填している。23は３ｂ号住居址の埋甕であり、２～４条一組の沈線により縦区画を行い櫛歯状工具による斜行沈線で区画間を充填するが、残存部分における沈線の斜行方向はランダムである。また、部分的に充填文としての沈線を施さず斜めに垂下する棒描沈線をもつ区画を置いている。24・25は底部であり、伴に平底を呈す。26は３ａ号住居址炉内出土の異形土器である。直立すると考えられる環状



第41図　第3a・3b号・4a・4b号住居址



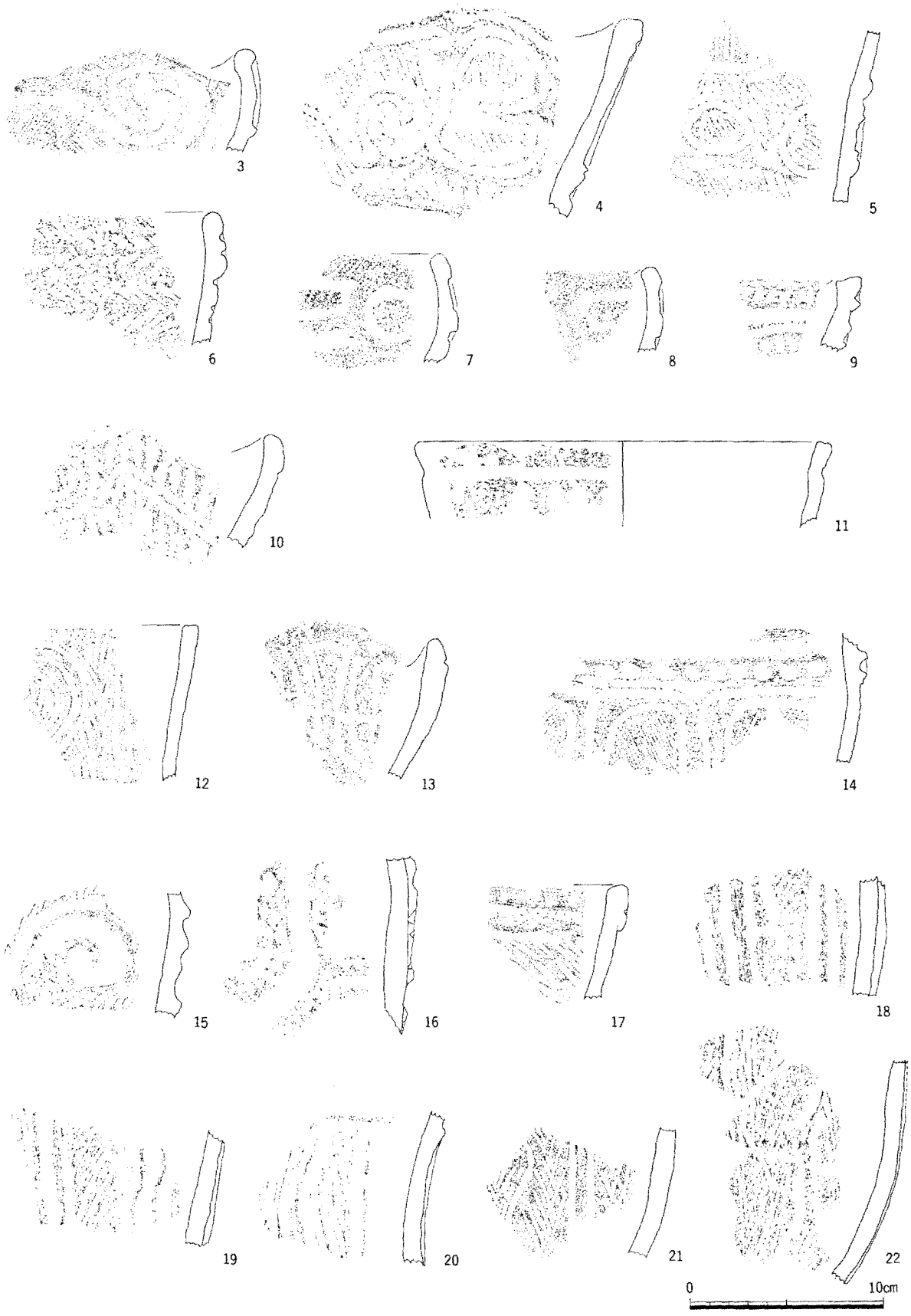
1



2

0 10cm

第42図　第３ａ・３ｂ号出土土器（１）

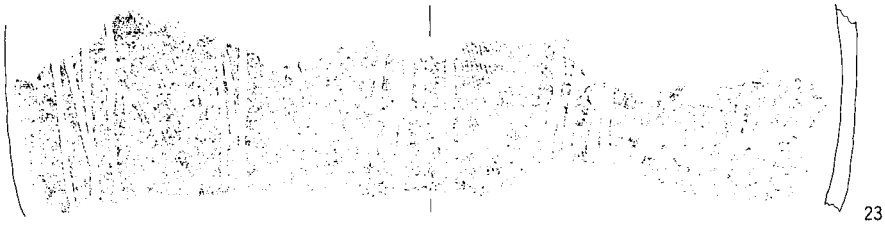


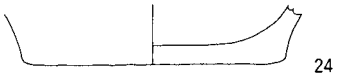
第43図　第３ａ・３ｂ号出土土器（２）

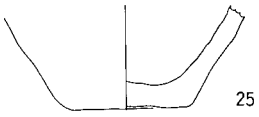
の口縁部を（注口部）欠失している。円環状の把手部となる部分には刺突列をもつ渦巻文を置き、胴部（渦巻文様下より底部まで）には棒描沈線を垂下させている。

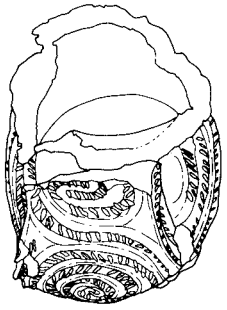
石　器（第45・46図、図版14・15）

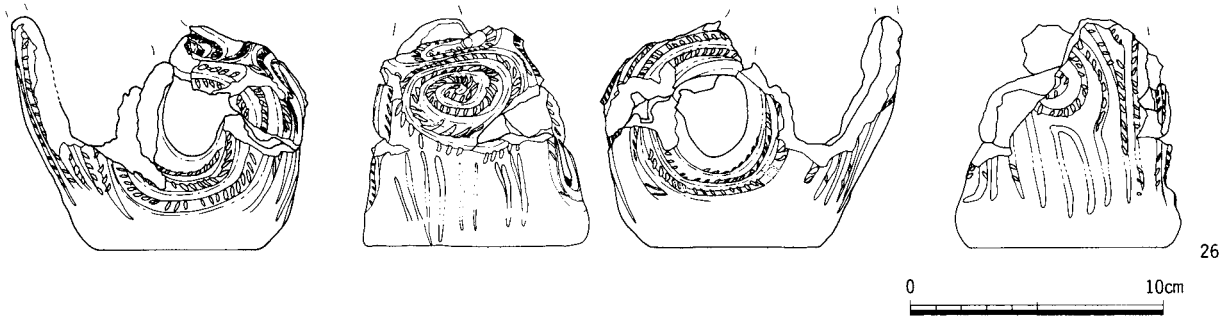
３ａ・３ｂ号住居址からは石鏃８点（内３点尖頭部片）、クサビ形石器１点、磨製石斧１点、叩き石１点、磨石１点、剥片17点（流文岩４製点、チャート13製点）が出土している。やや「く」の字状の抉り込みをもつ２～４は形状が脚部に向けてひらく三角形を呈する点で共通するが、２・３はチャート製、４は下呂石製である。１は尖頭部が伸び石錐状を呈するが、尖頭部に磨耗痕が認められず石鏃とした。５は尖頭部端を直線状とする。やや調整は粗いが完形品である。６はチャート製のクサビ形石器である。両側縁は伴に切断面からなる。７はやや厚みのあるチャート製の剥片を素材とした石核である。上端部及び左側面の狭い剥離面を打面として剥片剥離作業を行っている。８は結晶片岩製の



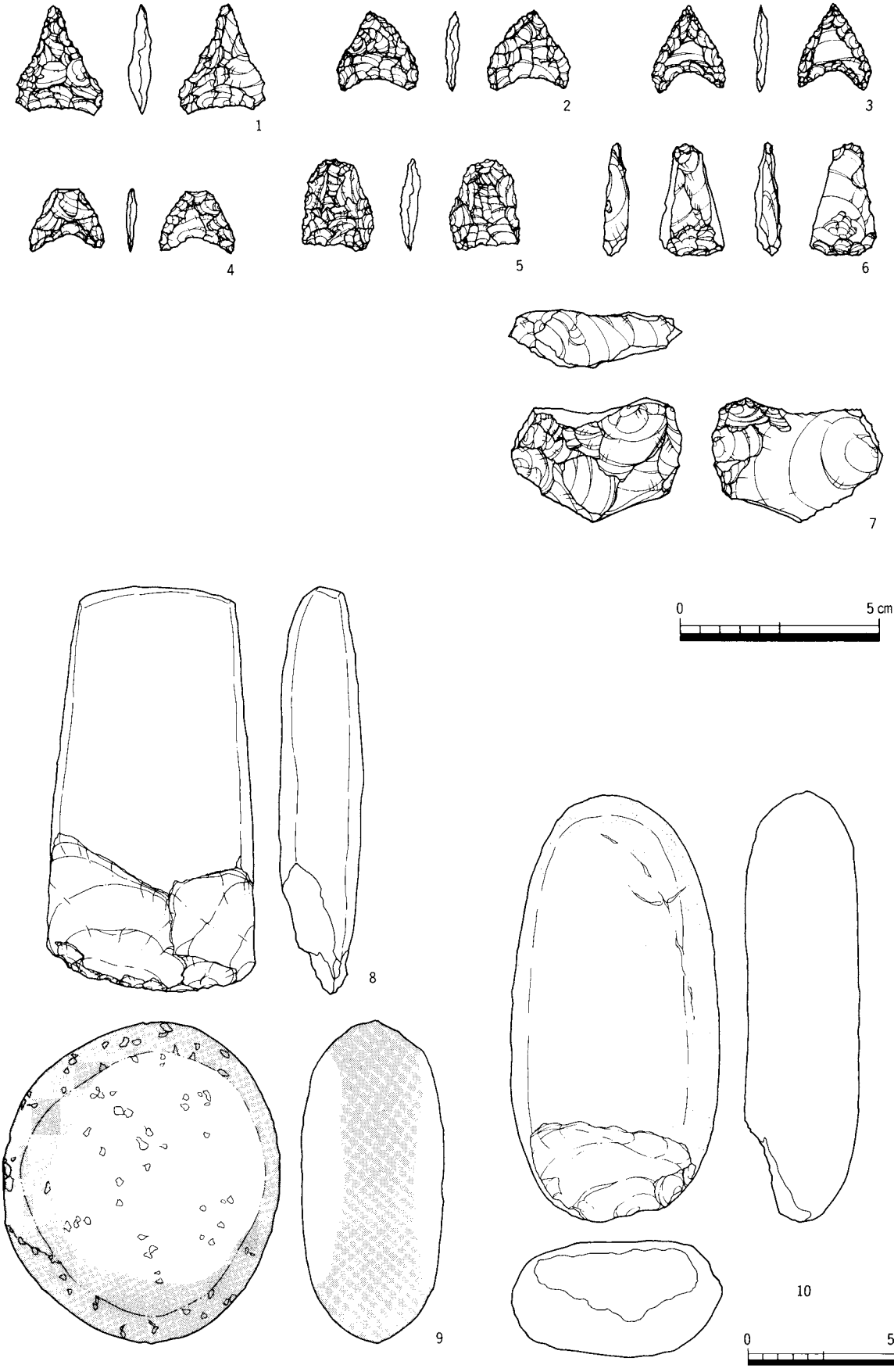




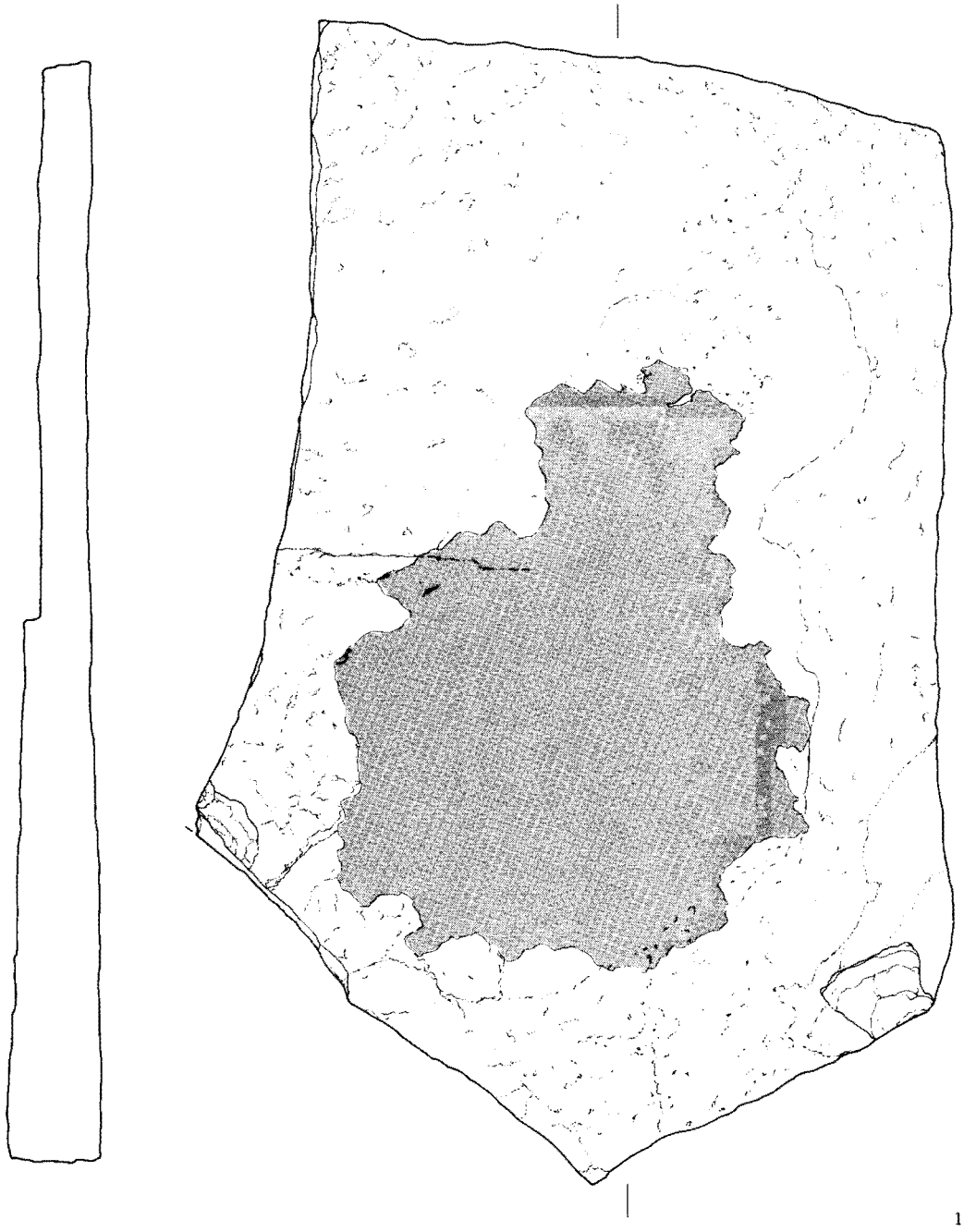




第44図　第３ａ・３ｂ号出土土器（３）



第45図　第３ａ・３ｂ号出土石器（１）



第46図　第３ａ・３ｂ号出土石器（２）

磨製石斧である。定角式であり、研磨は非常に細かく丁寧に施され両側縁の面取りも明瞭であるが、刃部に大きな２枚の剝離痕が入った後小剝離痕が集中して形成されており、刃部破損後叩き石として機能した可能性が考えられる。９は花崗閃緑岩製の扁平な自然礫を素材とした磨石である。側面を中心に磨痕が認められる。10は砂岩製の叩き石である。１枚の大きな剝離がステップ状に入る。11は板状を呈す石皿である。表面側に不規則な磨耗痕が広がっている。側辺部は平面形態を意識し折りとり加工した可能性がある。３ａ号住居址の炉横床面直上の出土である。凝灰岩製。重量約32kg。

第４ａ・４ｂ号住居址（第41図、図版３）

位　置	Ｅ・Ｆ７～８	**平面形**	円　形	**主　軸**	Ｎ－6°－Ｗ		
規　模	５９４×　　×　２０cm		**面　積**	－　㎡	**時　期**	Ⅲ～Ⅳ　期	

斜面地に立地し、南壁側の立ち上がりは僅かに残るのみである。また、西側は現畑道により消滅している。北側・東側で３ａ・３ｂ号住居址を切る。プラン検出段階においては１軒と捉えたが、床面のレベル差及び石囲い炉設置場所より建て直し、あるいは拡張が行われた可能性が考えられ、北側部分より南側部分を第４ａ→第４ｂ号住居址と呼称する。なお、規模に示した数値は最終的な第４ｂ号住の数値である。ただし、覆土の依存状態の悪さからセクション等でその新旧を追認することはできなかった。第４ａ号住の床面南寄りには焼けて硬化している部分が認められ、４ｂ号住居址掘方により切られている。Ｐ１～３は主柱穴か。配置的には４本柱となるものと考えられる。やや北部寄りに石囲い炉を持ち、炉底部には焼土が多く堆積していた。

覆土は黒色土・黒褐色土が堆積するが、やはり北部からの流れ込みである。

出土遺物

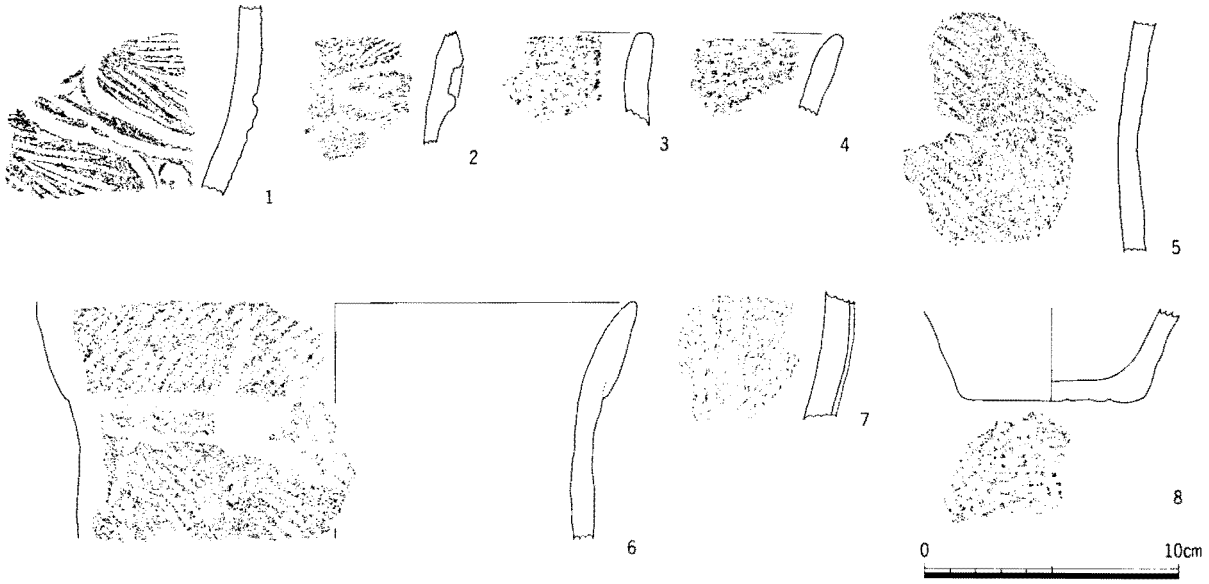
土　器（第47図、図版15）

１は隆帯により楕円形区画を上下に配置し棒描沈線で充填する。下端に蕨手状文がみられる。２も隆帯により口縁部に楕円形区画をつくり、区画内は無文としている。隆帯上には縄文ＬＲを施文している。３・４は無文土器である。口縁部形態は３がほぼ直立し、４が外反する。５・６は縄文土器である。縦位の縄文ＬＲが帯状に施文されるが、６は口縁部端を広く外面に折り返し肥厚帯をつくり、その下位に結節部の回転施文が認められる。７は胴部片で垂下する隆帯を中心にヘラ状工具による矢羽根状沈線文がみられる。８は底部であり網代痕がみられる。圧痕が不明瞭であるが、２本越え１本潜り１本送りか。

石　器（第48図、図版16）

石鏃１点、石錐１点、スクレイパー１点、ＵＦ１点、敲石１点、剝片26点（流文岩製５点、チャート製20点、下呂石製１点）が出土している。１は砂岩製の敲石である。下端部にアバタ状の凹凸が認

められる。２は流紋岩製のＵＦである。打面及び分厚な打瘤部を残す。剥片の末端部に不揃いな微細剥離痕が不連続に残る。３は非常に小型の貝殻状剥片を素材とする石鏃である。形状を整える程度の二次調整によって作出されている。４はチャート製の石錐である。尖頭部は右側縁部の折断面より調整を加え断面三角形状の錐部としている。５は分厚な剥片の左側縁に粗い両面加工によって作出された刃部をもつスクレイパーである。



第47図　第４ａ・４ｂ号住居址出土土器

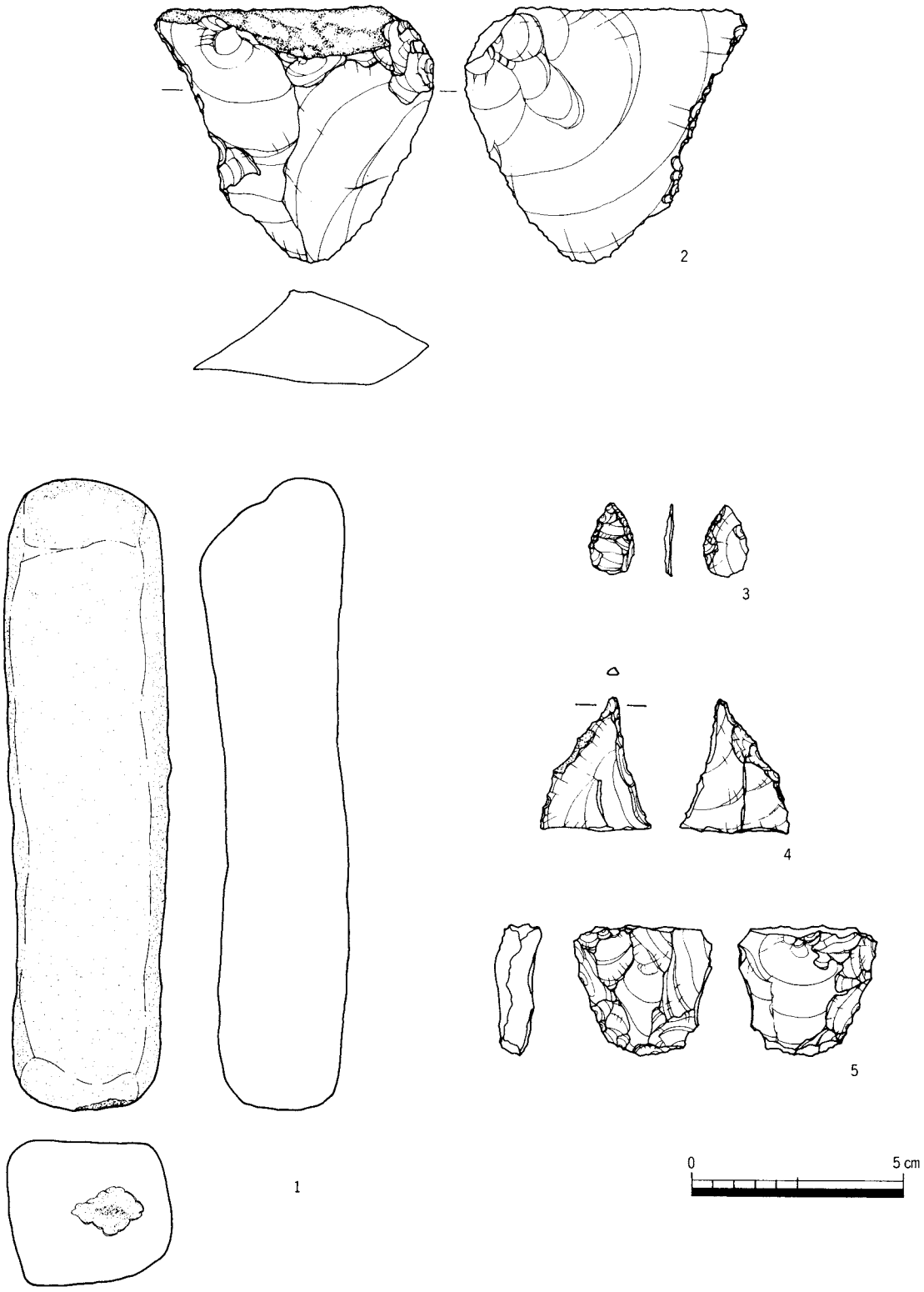
第５号住居址（第49図、図版３）

位　置	Ｆ・Ｇ８	平面形	楕円形	主　軸	Ｎ－0°－Ｅ	
規　模	６９８×　　×　３０cm		面　積	（１３）㎡	時　期	Ⅲ～Ⅳ　期

斜面肩口に立地するが、南壁側の立ち上がりは僅かに残るのみである。また、西側は現畑道により消滅している。平面形はやや押しつぶされたような楕円形を呈す。Pit１～３は深さ20cm程度で、壁際に沿って巡っており主柱穴と考えられる。なお、南壁沿いは検出できなかった。ほぼ中央に石囲い炉をもつが、東側に炉石を１点残すのみで、他は覆土の状態等から推測して抜き取りの可能性を残すが判然としない。

本来の覆土である暗褐色土は僅かに残るのみで、石囲い炉以北西は後世の攪乱による黄褐色土が堆積している。

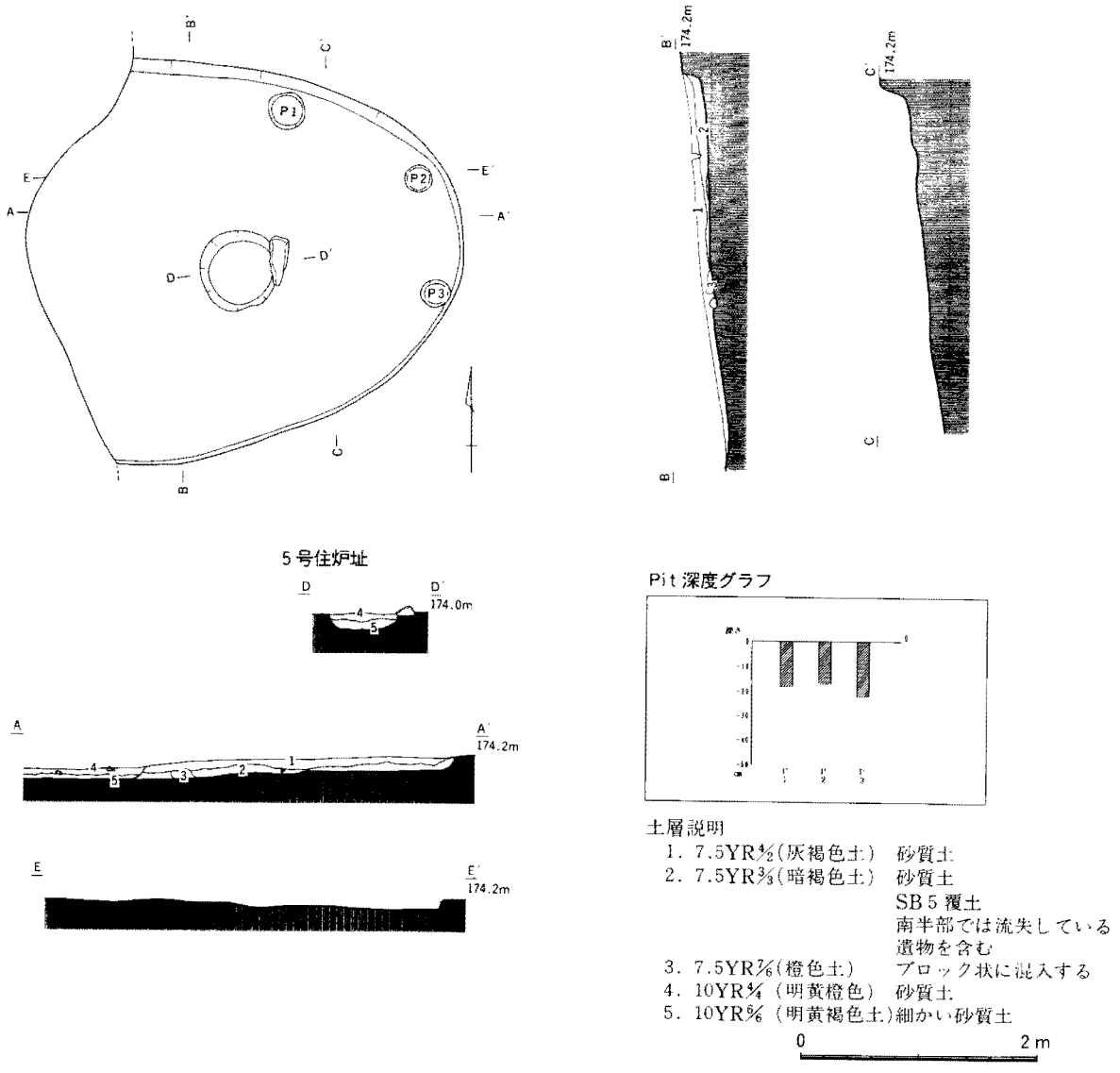
出土遺物



第48図　第４ａ・４ｂ号住居址出土石器

土　器（第50図、図版16）

1は覆土上層から出土している。図面上において復元しているが、推定口径15cm程の小型なものである。櫛歯状工具により口縁部に楕円区画を描き、楕円区画両端は同工具により直立する逆S字状文で連結するものと考えられる。楕円区画より櫛描沈線文を垂下させ胴部に縦区画を配するが、口縁部文様帯と同様区画内は無文とする。2～5はただ1点炉に残された炉石直下より出土したもので、同一個体資料である。2～4は口縁部であり、隆帯による渦巻＋楕円区画を配するものと考えられ、隆帯間及び口唇部にに棒状工具による刺突をもつ。5は頸部及び胴上部にあたる。頸部にキザミをもつ隆帯を横走させ、胴部に隆帯を垂下させ縦区画を形成している。区画内を棒描沈線で充填している6・7は頸部片であり、6は口縁部に隆帯による楕円区画を配し、区画内に縄文RLを施している。口縁部文様帯直下より沈線を垂下させている。7はえぐり状のキザミをもつ低い隆帯を横走させてい



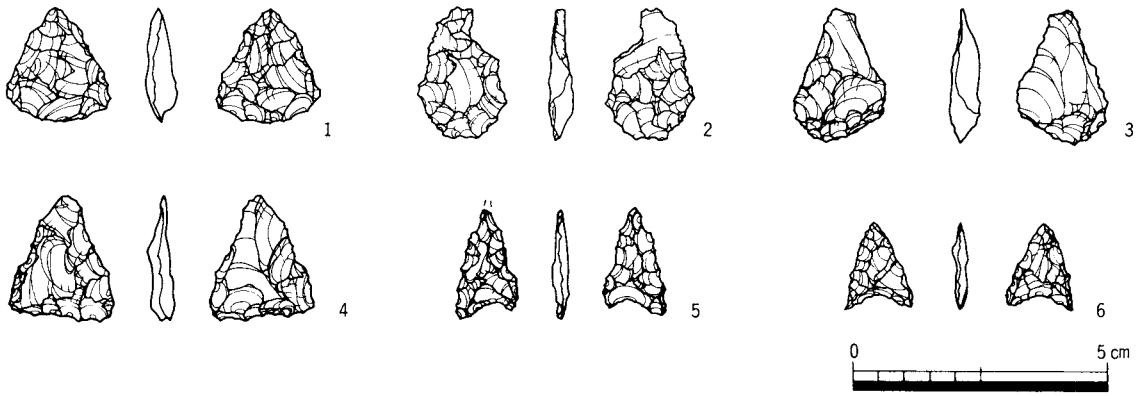
第49図　第5号住居址

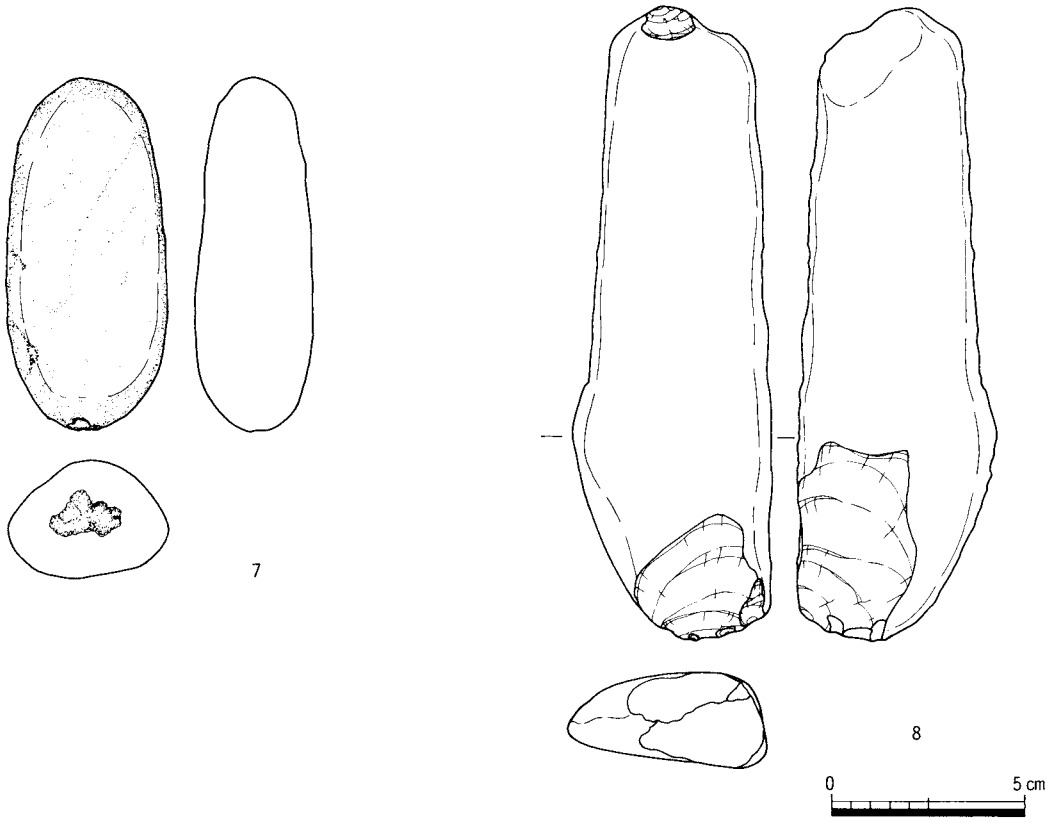
第50図　第5号住居址出土土器

る。9～13は胴部片であり、11・13は同一個体資料である。いずれも沈線（8）、隆帯（9～13）で縦区画をつくり、矢羽根状沈線文・沈線文で充填している。

石　器（第51図、図版16）

石鏃7点、敲石1点，叩き石1点、剥片65点（流文岩製2点、チャート製63点）、砕片39点（下呂石製1点、チャート製38点）が出土している。石鏃は基部に着目するならば、凹基鏃3点、円基鏃3点、平基鏃1点となり、すべてチャート製である。1～3は円基鏃で、1を除き素材時の剥離面を大きく残し、二次調整は形状を整える程度である。4は基部側が素材剥片剥離時の打面側にあたり厚みを残す。5・6はもう1点の資料と伴に半円状の抉りが入るが、ややいびつであり左右対称形とはならない。7は砂岩製の敲石である。長軸方向下端部にアバタ状の使用痕が認められる。8は流紋岩製の叩





第51図　第5号住居址出土石器

き石である。下端部表裏にそれぞれ大きな１枚の剥離痕がはいる。

６号住居址（第52図、図版３）

位　置	G・H６～７	平面形	楕円形	主　軸	N－0°－E	
規　模	５５２×４９２×　５２cm		面　積	２１．８㎡	時　期	III　期

斜面肩口に立地し、依存状態は良好であるが、上部を耕作土である黒色土が厚く覆いプラン検出には困難を究めた。ピットは壁際に沿って巡るが、深浅に統一性は見られない。Pit 10は貯臓穴である可能性がある。なお、Pit４からは埋甕を検出している（第53図１）。なお、部分的に硬化した床面が認められた。石囲い炉はほぼ中央にあり、平面形は方形を呈する。炉石は強く焼成を受けた痕跡が窺われ、下底部はほぼ平らで厚い焼土層を形成していた。また、石囲い炉南側手前約10cmに50cm×20cm程度の上面平らなチャート礫が床面に下部を埋め込んで設置してあり、炉との互換的な機能が想起される。ただし、検出時には焼成を受けてひび割れが認められた。北東コーナー付近において、丁度1/4周縁部分を占めるのであるが、幅約30～40cm程度で他の床面より約10～20cm程高い部分が認められ特異な構造を有している。

覆土は前述したとおり上部を厚く黒色土が覆うが、本来の覆土である黒褐色土がその下部に堆積する。やはり自然埋没と考えられるが、覆土は大きく攪乱を受けており出土遺物が意外と少ない。

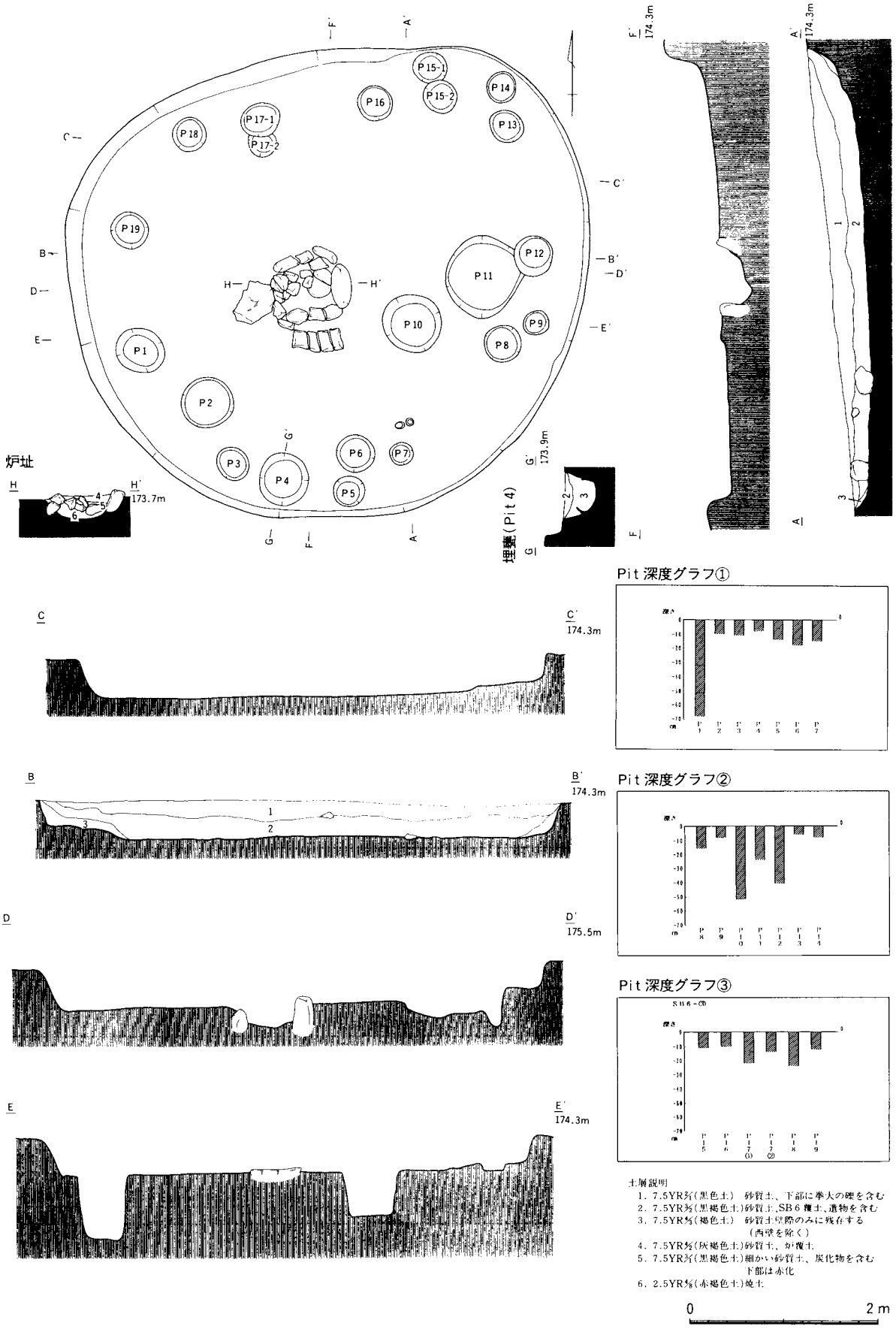
出土遺物

土　器（第53図、図版17）

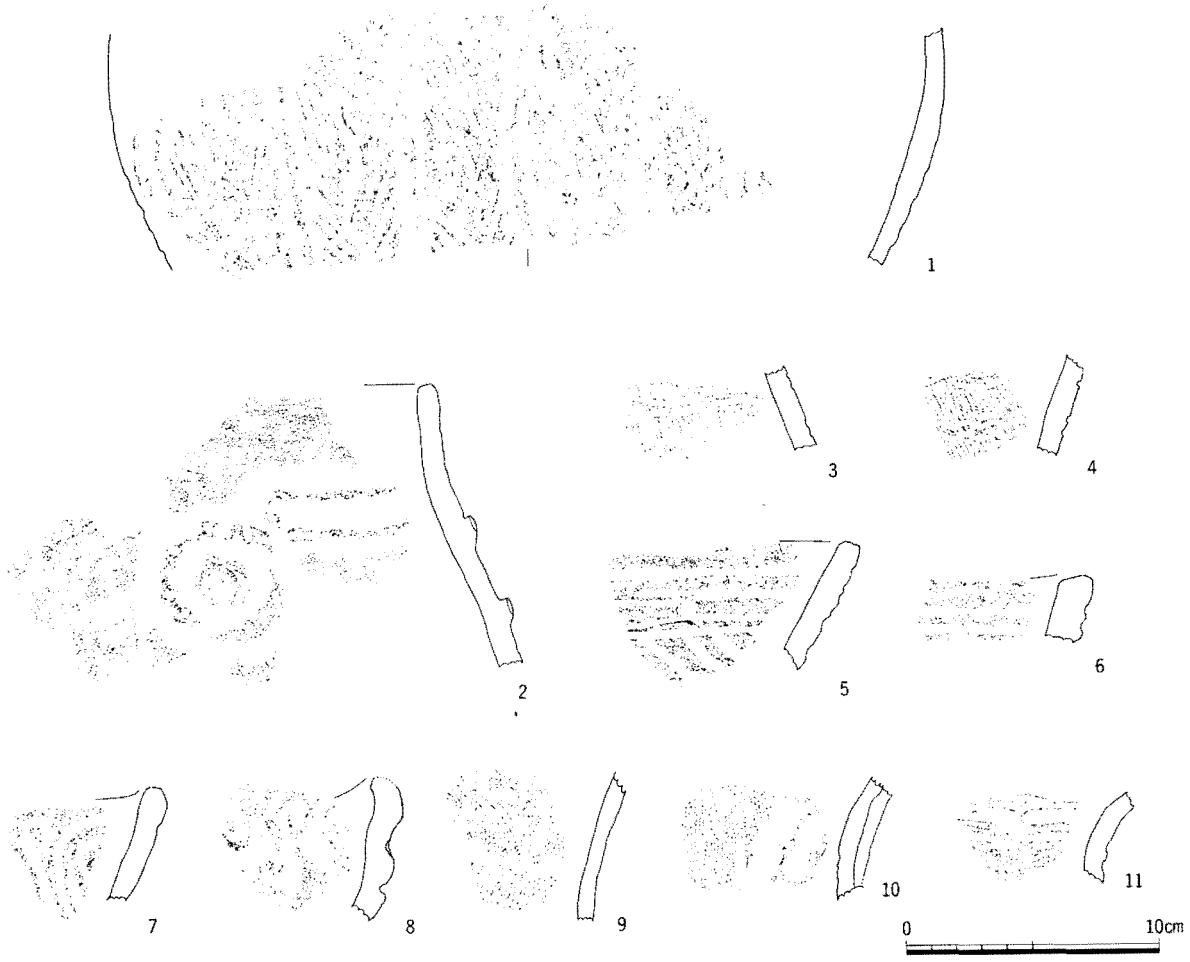
１は胴部片のみであるが埋甕の資料である。隆帯による縦区画をつくり、区画内を蛇行垂線を中央にして矢羽根状沈線文で充塡している。２は内傾する口縁形態をもつ。キザミをもつ隆帯で円環、長楕円形区画をつくる。３・４は地文に撚糸をもち、コンパス文、連弧文がみられる。また、３の上部中央に涙滴文が認められる。５～８は口縁部文様帯が沈線で描かれる。ほとんどが楕円形区画が配置されると考えられるが、７・８は楕円形区画間に蕨手状文ががおかれる。６は区画内を斜行する棒描沈線でで充塡している。９・10は胴部片で、曲線的、あるいは斜行する櫛描沈線文が垂下している。11は頸部片で、連弧文が認められる。

石　器（第54図、図版18）

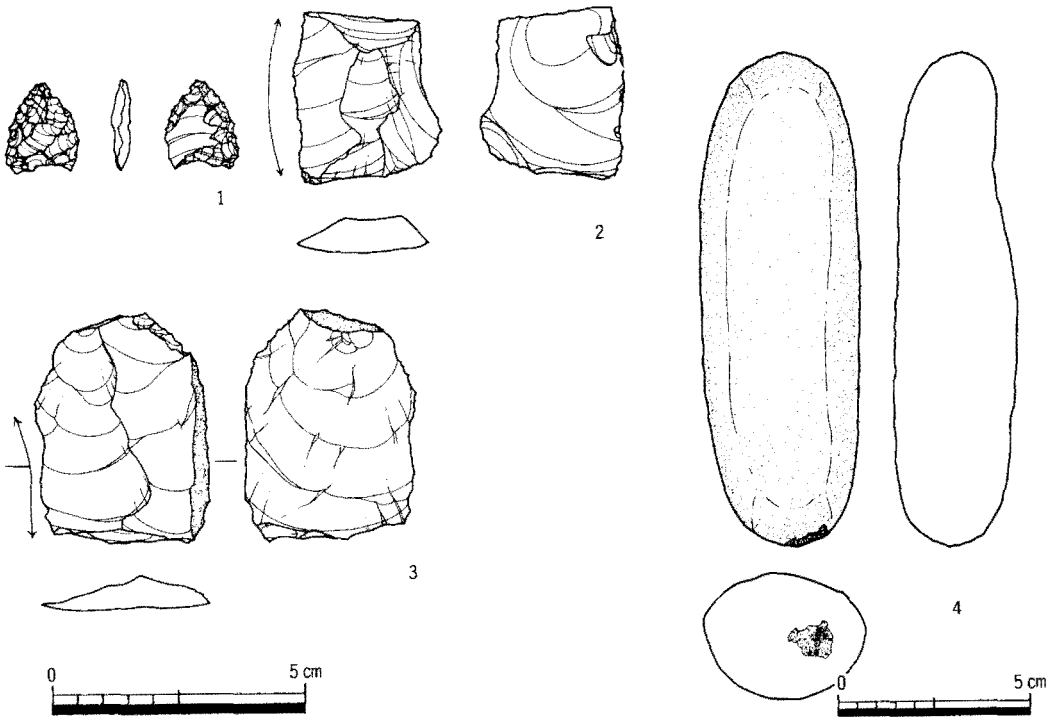
石鏃１点、敲石１点，ＵＦ２点、剥片34点（流文岩製１点、石英製１点、チャート製32点）が出土している。１は石鏃で、裏面に残る素材時の剥離面より小型の貝殻状剥片が用いられたと考えられる。チャート製である。２・３はＵＦである。２は下呂石製、３はチャート製であり、伴に左側縁に微細な剥離痕が認められる。４は砂岩製の敲石である。下端部の突端部よりややずれた位置にアバタ状の使用痕が存在する。


P15-1
P15-2
P16
P14
P13
P18
P17-1
P17-2
P19
P12
P11
P10
P9
P8
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
炉址
H
H'
173.7m
埋甕(Pit 4)
G'
173.9m
F'
174.3m
A'
174.3m
C
C'
174.3m
B
B'
174.3m
D
D'
175.5m
E
E'
174.3m
Pit 深度グラフ①
Pit 深度グラフ②
Pit 深度グラフ③
土層説明
1. 7.5YR3/1(黒色土) 砂質土、下部に拳大の礫を含む
2. 7.5YR3/2(黒褐色土)砂質土、SB6覆土、遺物を含む
3. 7.5YR3/3(暗褐色土) 砂質土壁際のみに残存する
(西壁を除く)
4. 7.5YR4/2(灰褐色土)砂質土、かく乱土
5. 7.5YR3/1(黒褐色土)細かい砂質土、炭化物を含む
下部は赤化
6. 2.5YR4/6(赤褐色土)焼土
0
2 m

第52図　第6号住居址



第53図　第 6 号住居址出土土器



第54図　第 6 号住居址出土石器

第７号住居址（第55図、図版３）

位　置	Ｇ４～５・Ｈ５	平面形	楕円形	主　軸	Ｎ－4°－Ｗ	
規　模	４５０×　　×　４１cm		面　積	（１６）㎡	時　期	Ⅲ　期

斜面肩口に立地し、北東隅は調査区域外に及ぶが、依存状態はほぼ良好である。Pit１・３・６・７・９の５本が主柱穴で、深さはいずれも50～70cmを測りしっかりとした作りである。また、入り口部において両側に立てた状態で検出された河原石を持つ土坑は本住居に伴う遺構であると考えている。石囲い炉はほぼ中央に位置し、横長の河原石を方形に組み、狭間を拳大程度の円礫で補強している。下底部はほぼ平らで焼土層を厚く形成していた。位置的にも形態的にも第６号住と酷似するが、埋甕は検出していない。

覆土は上部に黒色土、下部に本来の覆土である黒褐色土が堆積するが、この黒褐色土は炭化物を含むが南側部分では流失している。

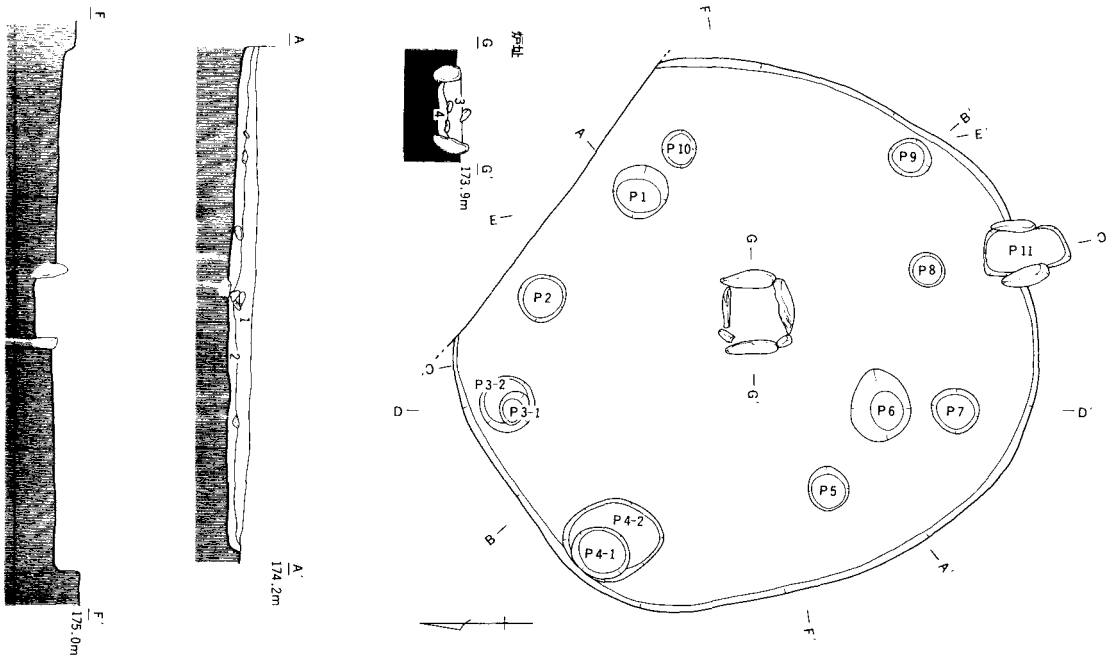
出土遺物

土　器（第56図、図版18）

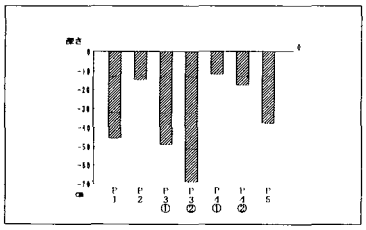
９・10がPit３から出土している以外は覆土下層を中心に出土している。１は撚糸を地文にもち連弧文がみられる。２～４は口縁部に沈線による文様帯をもつものである。２は口縁形態が小波状縁を呈し、波頂下に蕨手状文が配置されると考えられる。５は口縁に平行して横走する沈線と隆帯により渦巻＋楕円区画をつくり矢羽根状沈線文、斜行沈線文で区画内を充填する。口縁部文様帯直下より胴部を区画する隆帯が垂下している。６は口縁端部は丁寧なナデが施される。残存状況が悪く判然としないが斜行する縄文を施したものか。７・８は同一個体資料で、小波状縁を呈す。口縁部は緩く外反し、粗い条線が全面に施される。９～13は胴部片である。９・10はPit３覆土中層より出土しており同一個体資料である。多くが隆帯による縦区画をもち、区画内を矢羽根状沈線文で充填している。17は底部資料であり、やや上げ底ぎみとなる。網代痕が残るが、網み方は判断しがたい。

石　器（第57図、図版18）

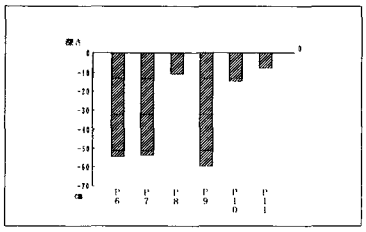
石鏃１点、石錐１点、敲石１点、ＵＦ１点、打製石斧１点、剥片14点（黒曜石製１点、チャート製13点）、砕片１点（チャート製）が出土している。１は石鏃で、粗い調整を加えほぼ三角形状としている。チャート製である。２はチャート製の石錐である。素材剥片剥離時に節理により折れた貝殻状剥片の末端部の鋭角な部分を用い錐部を作出している。３は厚い打瘤部をもつ剥片の末端部に不連続な微細剥離がみとめられるＵＦである。チャート製。４は基部側を欠失する流紋岩製の打製石斧である。粗い調整が施されるが、表面に礫皮を残す。５は砂岩製の敲石である。尖鋭となる下端部側にアバタ状の使用痕が認められる。

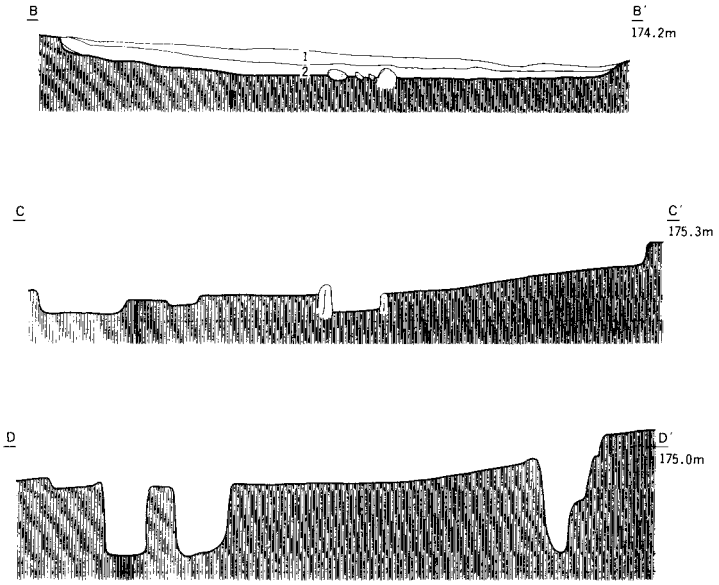


Pit 深度グラフ①



Pit 深度グラフ②

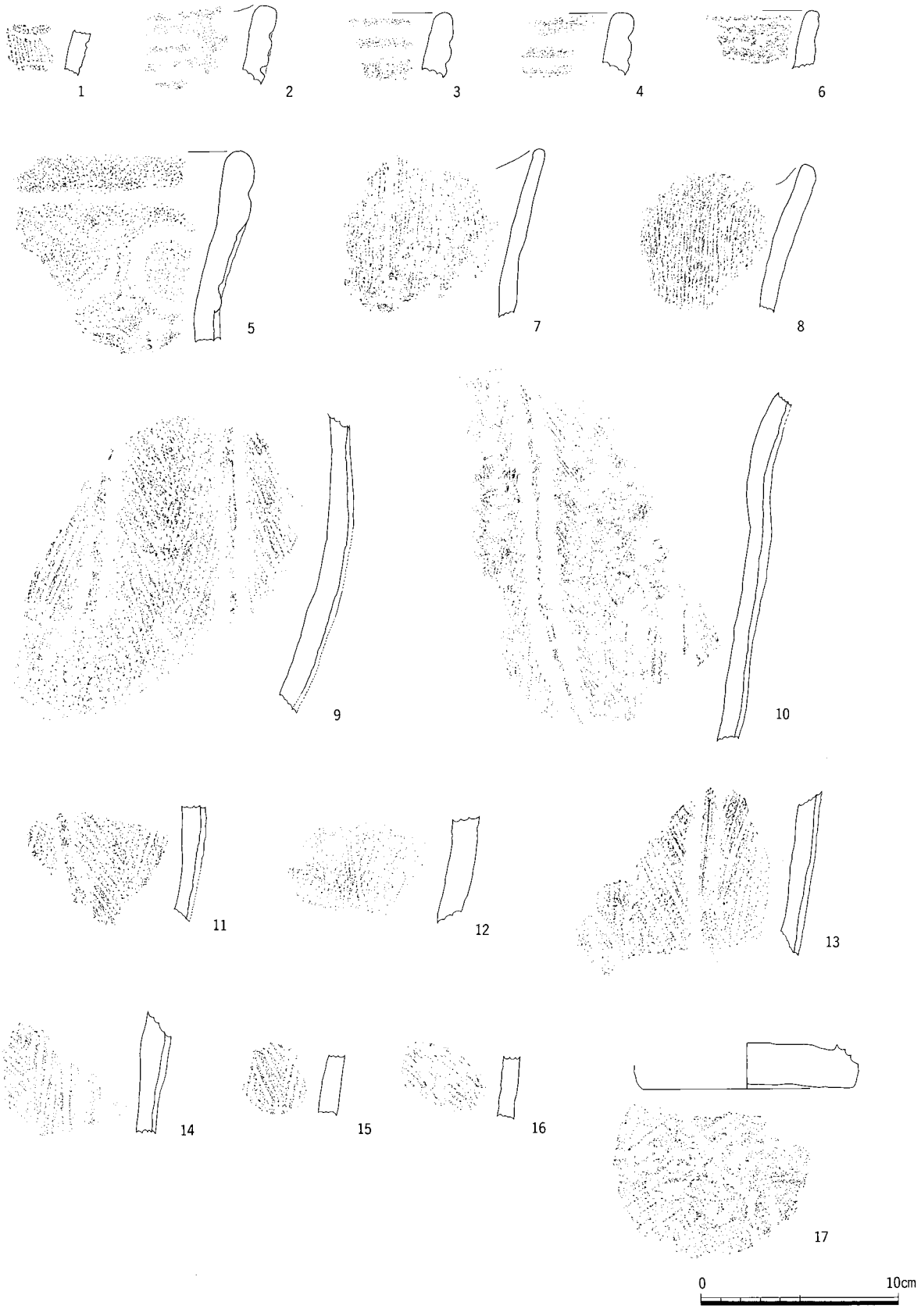




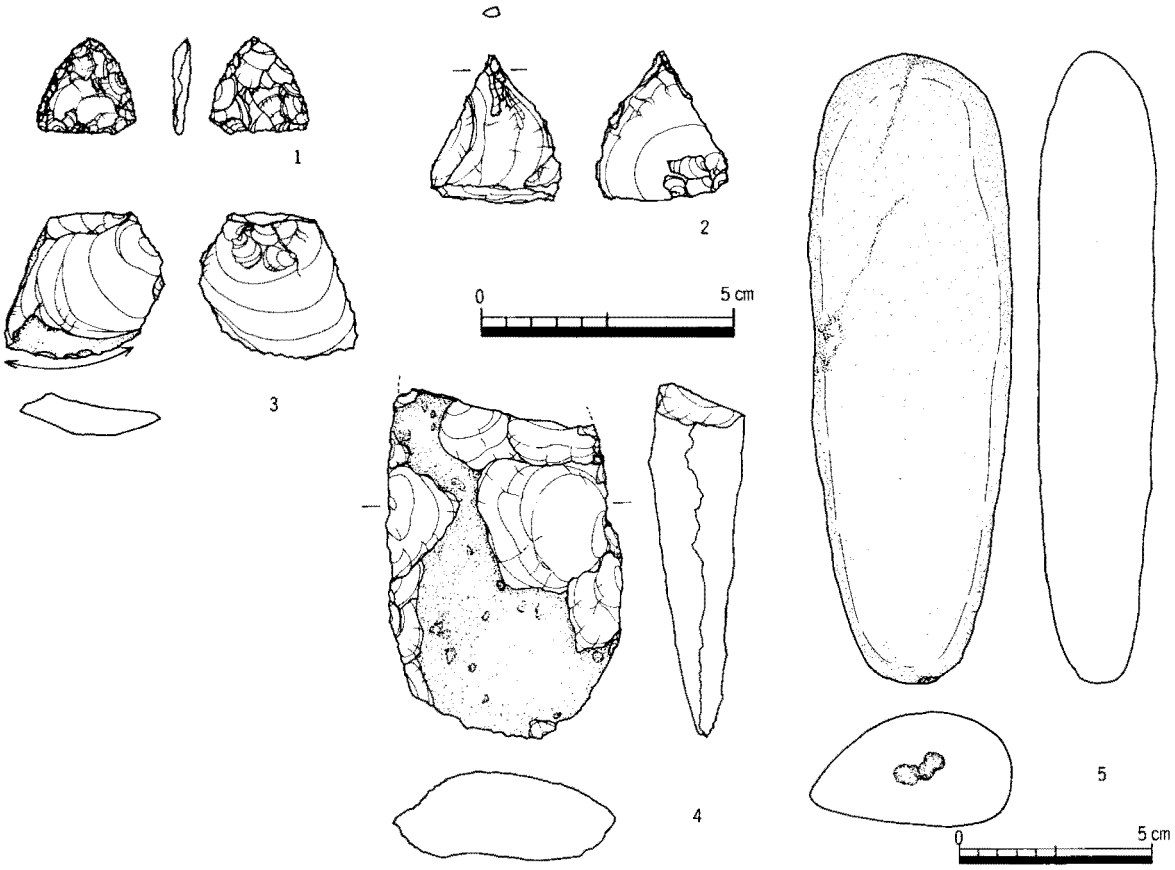
土層説明

1. 7.5YR3/1(黒色土)　砂質土
　下部に小礫を含む
2. 7.5YR3/2(黒褐色土)　細かい砂質土
　SB 7 覆土
　1～3㎜の炭化物を含む
　南半部は流失している
3. 10YR4/4 (褐色土)　砂質土
　炉覆土
4. 10YR5/6 (明黄褐色土)細かい砂質土
　炉覆土
　遺物を含む
　下部は焼土層(2.5YR4/8赤褐色土)となる

第55図　第7号住居址



第56図　第７号住居址出土土器



第57図　第７号住居址出土石器

第８号住居址（第34図、図版４）

位　置	Ｅ４	平面形	楕円形	主　軸	Ｎ－14°－Ｗ	
規　模	２９４×　　×　２０cm		面　積	（１０）㎡	時　期	Ⅳ　期

斜面地に立地し、南壁側を流失している。また、東壁側は第１号住に切られている。主柱穴はPit１～５の５本と考えられるが、深さは12～20cm程度である。石囲い炉はやや南壁側にあり、炉石は強い焼成を受けて破損していた。炉下底部はほぼ平らである。

覆土は２層に分かれるが、薄い下層の暗褐色土には多くの炭化物を含んでおり、炉周辺では顕著に認められた。概して依存状況は悪く遺物出土量も少ない。

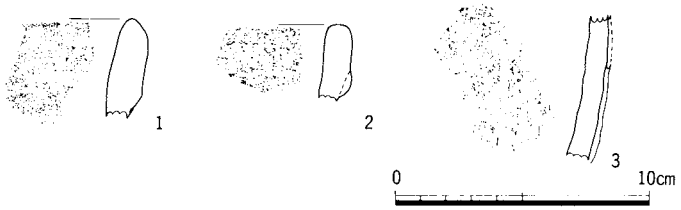
出土遺物

土　器（第58図、図版19）

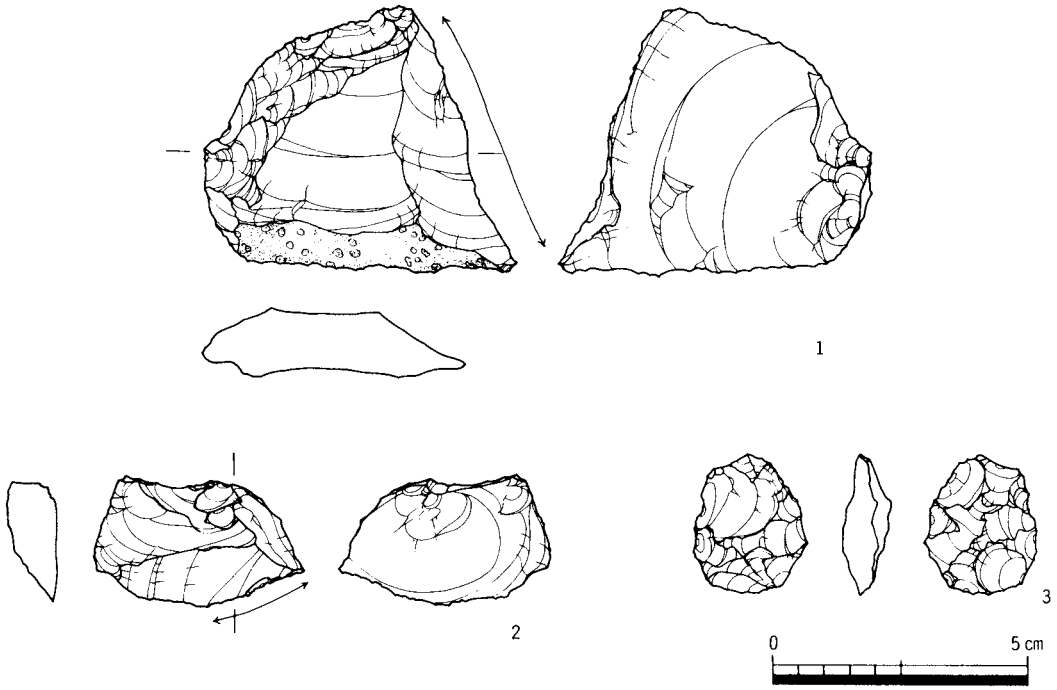
１・２とも口縁端部に無文部が存在するが、その下位に沈線、あるいは隆帯による口縁部文様帯をもつものと考えられる。３は胴部片で、隆帯により縦区画をつくり櫛描沈線文で充填している。

石　器（第59図、図版20）

ＵＦ１点、未製品１点、剥片19点（流紋岩製４点、チャート製15点）、砕片３点（チャート製）が出土している。１は表皮を残す分厚な剥片の下端部に不連続な微細剥離がみられる。２も同様な使用痕が貝殻状剥片の末端部にみられる。３は周辺に二次調整を加え石鏃を意識したものであろうか。ただし、裏面の素材時の分厚な部分は除去し得ていない。



第58図　第８号住居址出土土器



第59図　第８号住居址出土石器

第９号住居址（第60図、図版４）

位　置	Ｂ・Ｃ２～４	**平面形**	楕円形	**主　軸**	Ｎ－37°－Ｅ		
規　模	４９４×３９４×　５０cm		**面　積**	１５．７㎡	**時　期**	Ⅱ～Ⅲ　期	

緩斜面地に立地し、南壁側はほぼ流失している。Pit２・５・６・９の４本が主柱穴と考えられ、いずれも深さ40～52cmでしっかりした作りである。Pit３・４は入り口の施設に関連するものであろうか。

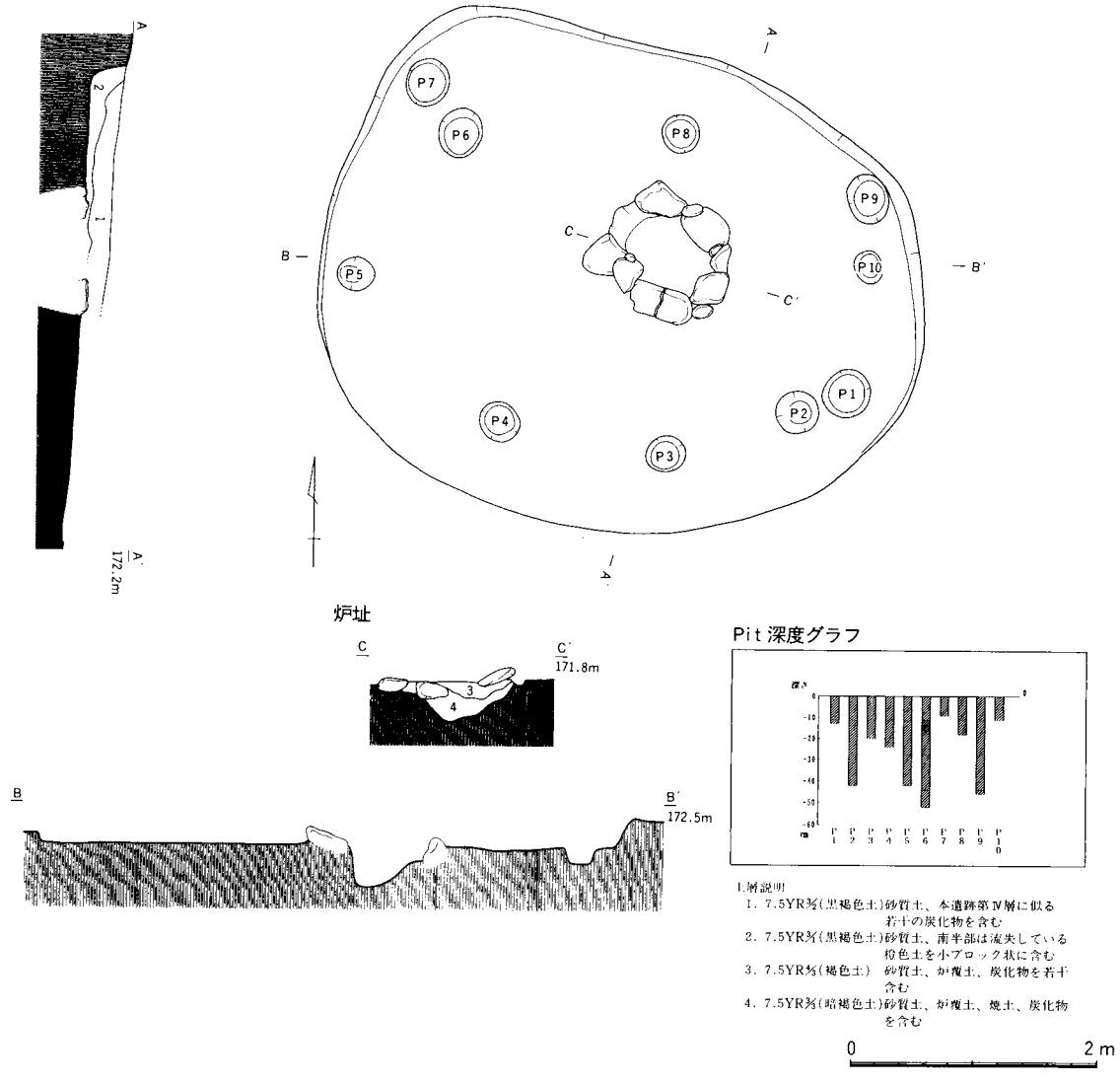
石囲い炉はやや北東寄りにあり、河原石を楕円形に組むが、西側の１つだけ抜き取られた痕跡が認められた。炉下底部はスリ鉢状を呈し、底面から壁面にかけてよく焼成を受けガチガチに変質している。

覆土は２層の黒褐色土が堆積するが、南半部は流失しており、遺物量も少ない。

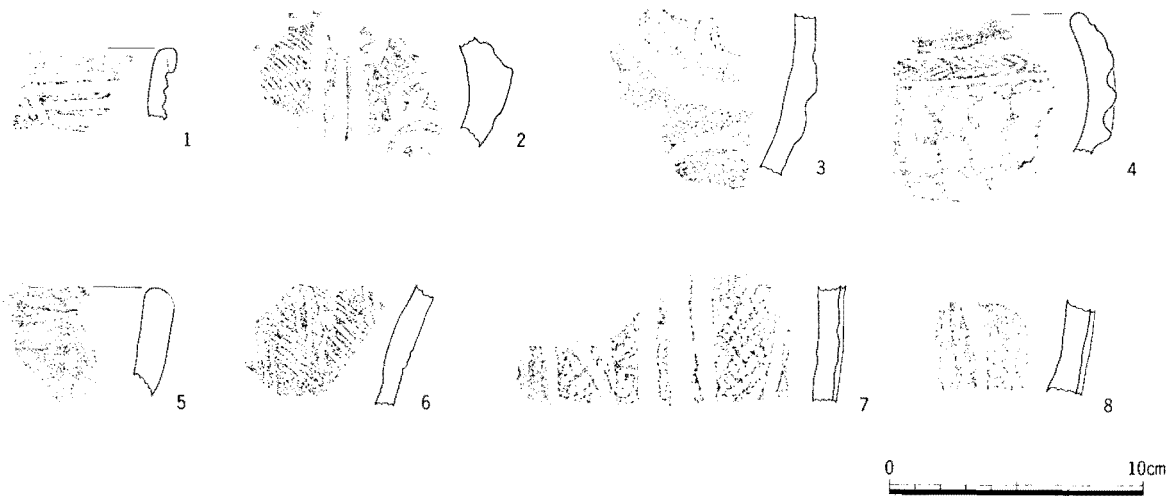
出土遺物

土　器（第61図、図版19）

１は強くくびれるキャリパー部分から立ち上がる口縁部にあたる。複合口縁とし、３条の沈線が横走する。２は口縁部が強く弯曲するキャリパー部分に厚い粘土帯を貼付し角をもたせＳ字文をおいている。欠失部分が多く文様区画は不明であるが、縄文ＲＬ及び刺突文という異なる充填方法を用いている。３は隆帯による渦巻文を口縁部におく。４は弱く内弯するキャリパー形を呈し、口縁形態は小



第60図　第９号住居址



第61図　第９号住居址出土土器

波状縁となる。口縁に平行する２条の沈線間に横位の矢羽根状沈線文をおき、その下位に縦・横の隆帯を貼付した後えぐり状に調整を加え３列の刺突風文列を配置する。５は無文の口縁部片である。ゆるく外反する形態と考えたが浅鉢である可能性もある。６～８は胴部片である。隆帯、あるいは沈線で縦区画をつくり縄文ＲＬ、矢羽根状沈線文、条線で充填している。

石　器（第62図、図版20）

ＵＦ１点、磨石１点、剥片８点（流紋岩製１点、チャート製７点）が出土している。１は質の悪いチャート製で、剥片の末端部表裏に不揃いな小剥離痕が入っておりＵＦとして分類した。２は砂岩製の河原石を用いた磨石である。ほぼ側縁部全周に磨耗が認められる。３は河原石（砂岩製）素材の石皿である。表面側にほぼ平らな磨耗痕が認められ不規則な広がりをみせている。

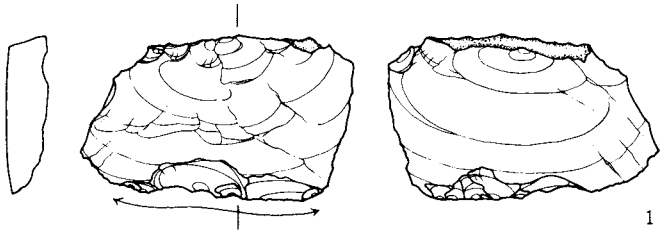
第10号住居址（第63図、図版４）

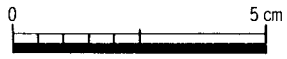
位　置	Ａ１～３・Ｚ１	**平面形**	楕円形？	**主　軸**	Ｎ－33°－Ｅ		
規　模	５４４×　　×　２６cm		**面　積**	－　㎡	**時　期**	Ⅳ　期	

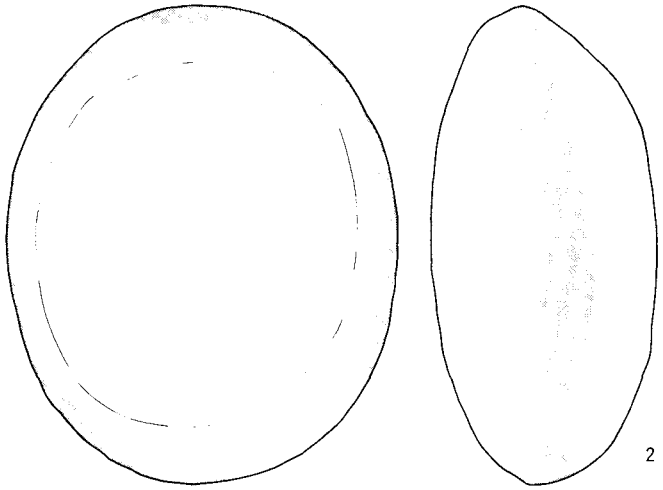
緩斜面地から平坦地への変換点に位置するが、南半部は調査区域外にある。残存する北半部も現代の竪穴状の堀込みの攪乱が入り依存状態は悪い。明確な柱穴及び炉址は検出できなかったが、北側の壁の立ち上がり付近に硬化した床面が部分的に残存することから住居址と認定した。

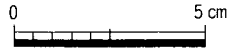
覆土には攪乱が多く入っており、黒色土は北壁側に僅かに残る。

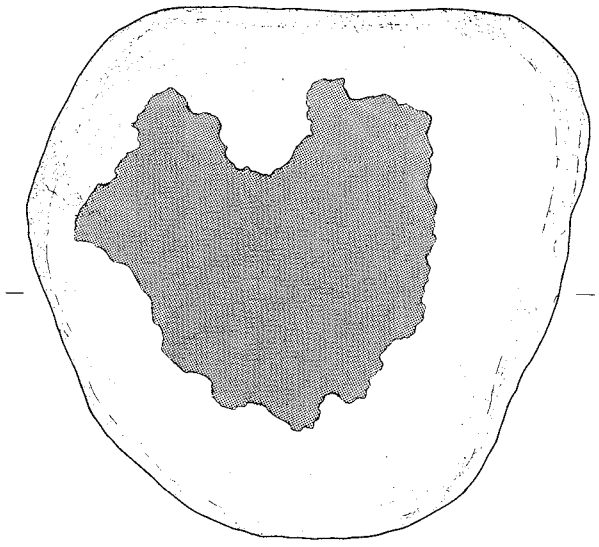
出土遺物

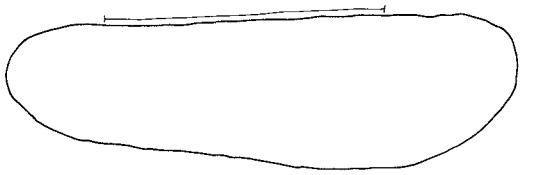




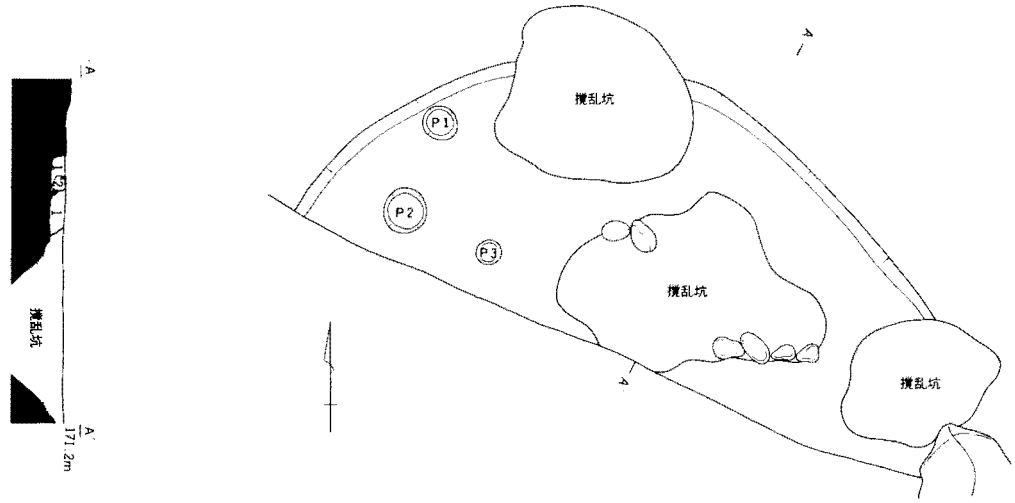




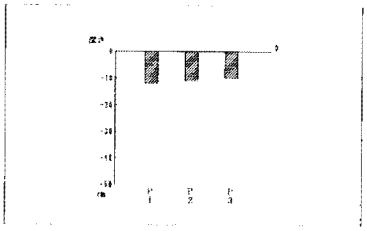




第62図　第 9 号住居址出土石器



Pit深度グラフ



土層説明
1. 7.5YR3/1(黒色土)やや粗い砂質土
遺物を含む
2. 7.5YR5/8(橙色土)砂質土
小礫を含む

0 2m

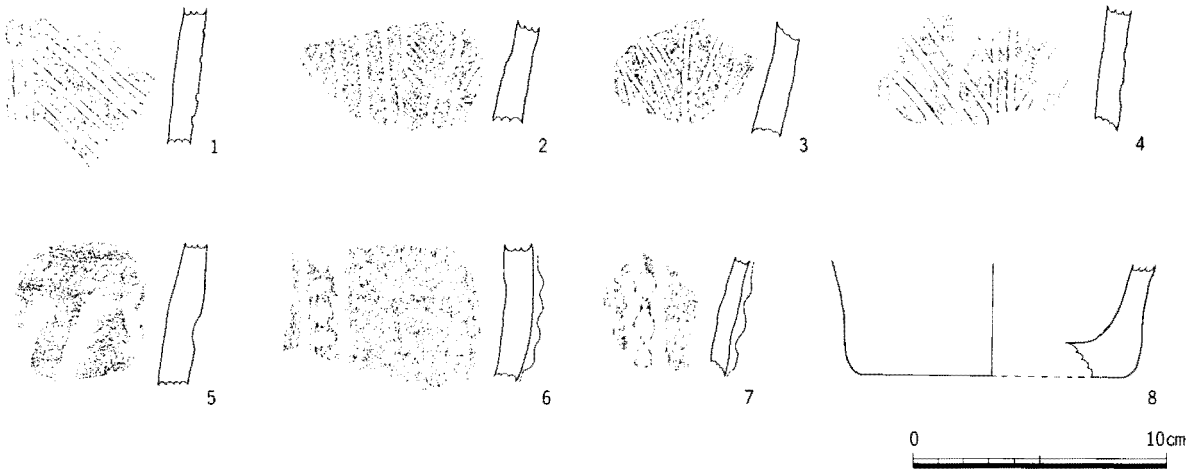
第63図　第10号住居址

土　器（第64図、図版19）

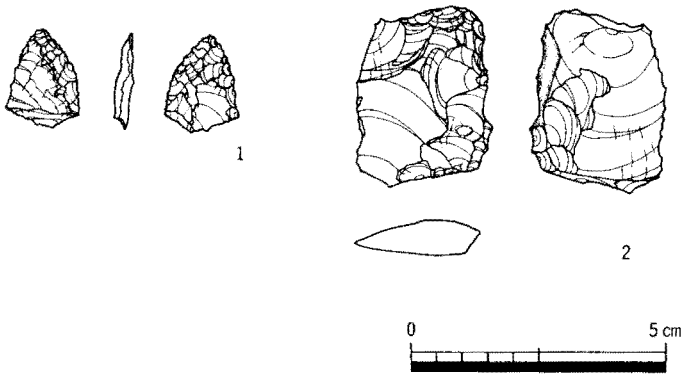
1～4は胴部に沈線による縦区画を行った後区画内を矢羽根状沈線文等で充填している。2には蛇行垂線もみられる。5は厚い器壁をもち、太い棒描き斜行沈線がみられる。6・7は器形等異なるがキザミをもつ隆帯が垂下している。8は底部で、やや上げ底となるものと考えられる。

石　器（第65図、図版20）

石鏃1点、石核1点、剥片8点（すべてチャート製）が出土している。1の石鏃は基部側を欠損している。両面に素材時の剥離面を大きく残し、尖頭部に調整が集中している。2はやや厚みを残す剥片の左側縁部節理面を打面として背腹両面において剥片剥離作業を行う。その後上端より剥離面打面からの剥片剥離作業もを行うが階段状剥離となり目的とする貝殻状剥片が得られず放棄されたものと考えられる。



第64図　第10号住居址出土土器



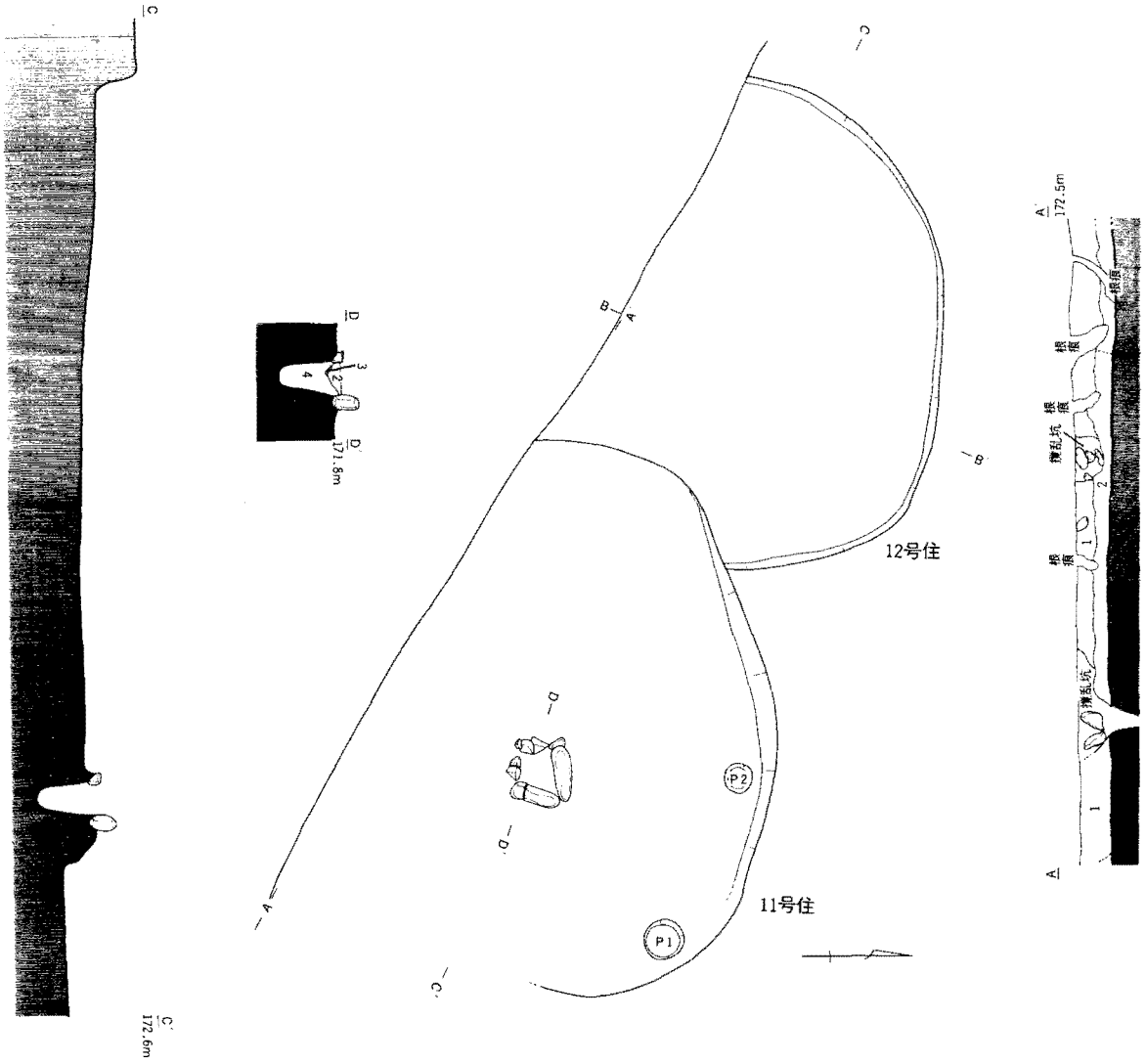
第65図　第10号住居址出土石器

第11号住居址（第66図、図版４）

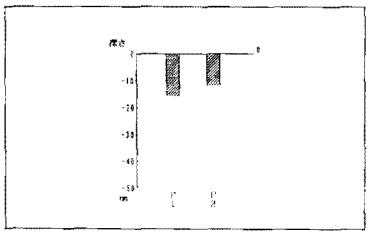
位　置	B・C５～６	平面形	楕円形？	主　軸	N－13°－E		
規　模	４４０×　　×　３４cm		面　積	－　㎡	時　期	V～VI　期	

緩斜面地から平坦地への変換点に位置するが、東半部は黒色土が厚く堆積し、ほぼ流失している。西側で第12号住と接する。僅かに残る東壁の一部と石囲い炉から住居址と判断した。炉址周辺レベルに本来の床面が存在したと考えられるが、軟弱化しており確認はできなかった。石囲い炉は平面形は四角形で強い焼成を受けた痕跡が窺われる。焼土層が見られる位置が本来の下底部であろうか。Ｐ１・２は柱穴の一部であろう。他は未検出である。

覆土は前述のとおり黒色土が厚く覆い、西寄り部分に暗褐色土が一部残る。



Pit深度グラフ

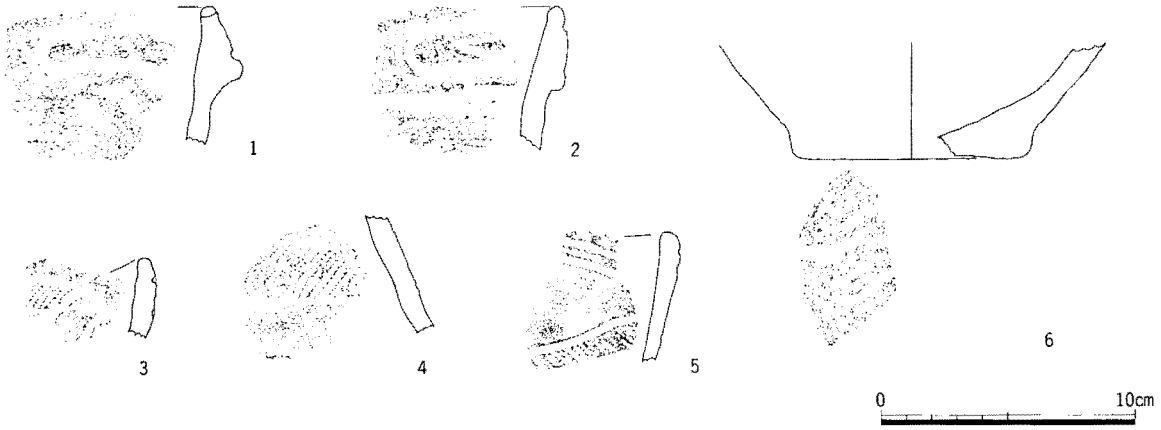


土層説明

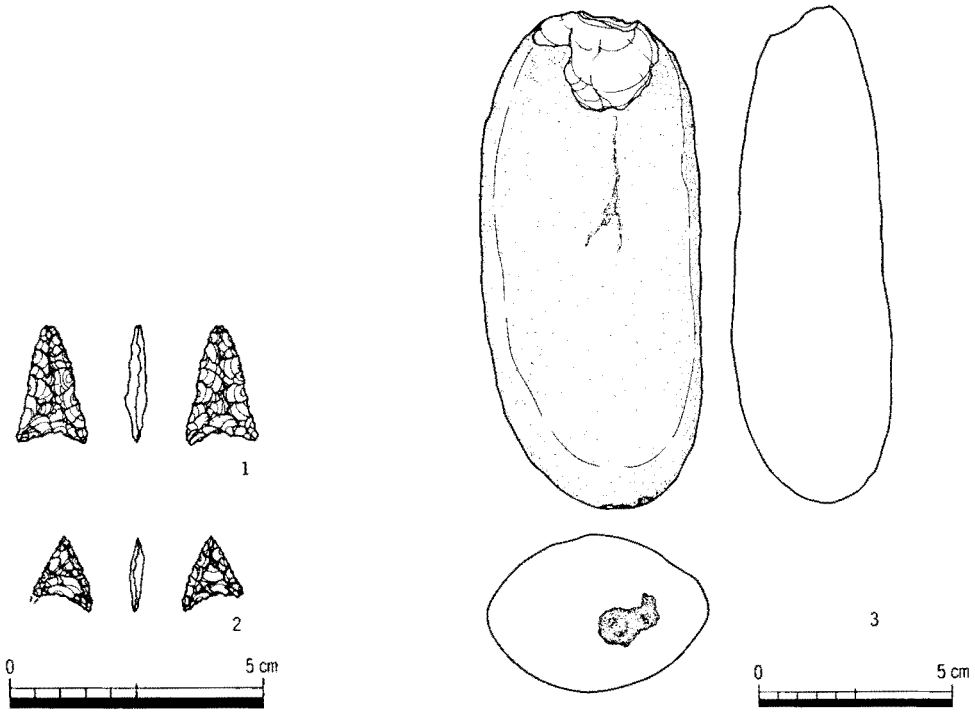
1. 10YR2/1（黒色土） 砂質土、本遺跡第Ⅰ層、耕作土であり、根の攪乱が多く入る
2. 10YR3/3（暗褐色土）砂質土、本遺跡第Ⅲ層
3. 2.5YR4/8（赤褐色土）焼土
4. 7.5YR3/2（黒褐色土）砂質土、竪穴覆土、3層に似る

0 2m

第66図　第11・12号住居址



第67図　第11号住居址出土土器



第68図　第11号住居址出土石器

出土遺物

土　器（第67図、図版19）

1・2は同一個体資料でほぼ直立する口縁形態を呈す。肥厚させた口縁部に棒状工具により楕円形区画を描き、同一施文具により口縁端部を刻んでいる。3は楕円区画内に縄文ＬＲを施す。4・5は磨消区画文を施す土器である。4は横位で縄文ＬＲを充填、5は斜位で縄文ＲＬを充填している。6は底部でやや上げ底となる、網代痕を残し、網み方は1本越え1本潜り1本送りである。

石　器（第68図、図版20）

石鏃２点、敲石１点、剥片６点（１点流紋岩製の他すべてチャート製）が出土している。１・２ともチャート製であり、くの字形の抉り込みがはいる。２は長さ14mm、幅12mmと非常に小型である。３は砂岩製の敲石である。上端部に入る剥離は新しいものである。

第12号住居址（第66図、図版４）

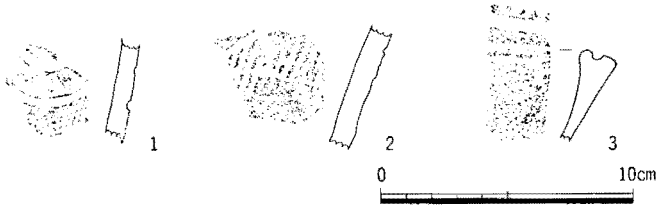
位　置	Ｆ６		**平面形**	不整方形？	**主　軸**	Ｎ－13°－Ｅ	
規　模	×	× cm		**面　積**	－ m²	**時　期**	Ⅵ　期

緩斜面地から平坦地への変換点に位置するが、第11号住同様詳細は不明である。柱穴及び炉址は未検出である。床面は中央に向かいすり鉢状に傾斜しており第１・２号住と同様な性格を持つ可能性を考えるべきかもしれない。

出土遺物

土　器（第69図、図版19）

１・２とも全体の文様構成は明らかではないが、沈線による曲線的文様の一部がみられる。１は沈線下に縄文ＬＲが施される。３は口唇部を肥厚させ口唇上に１条の沈線を巡らす他は口縁部を無文としている。



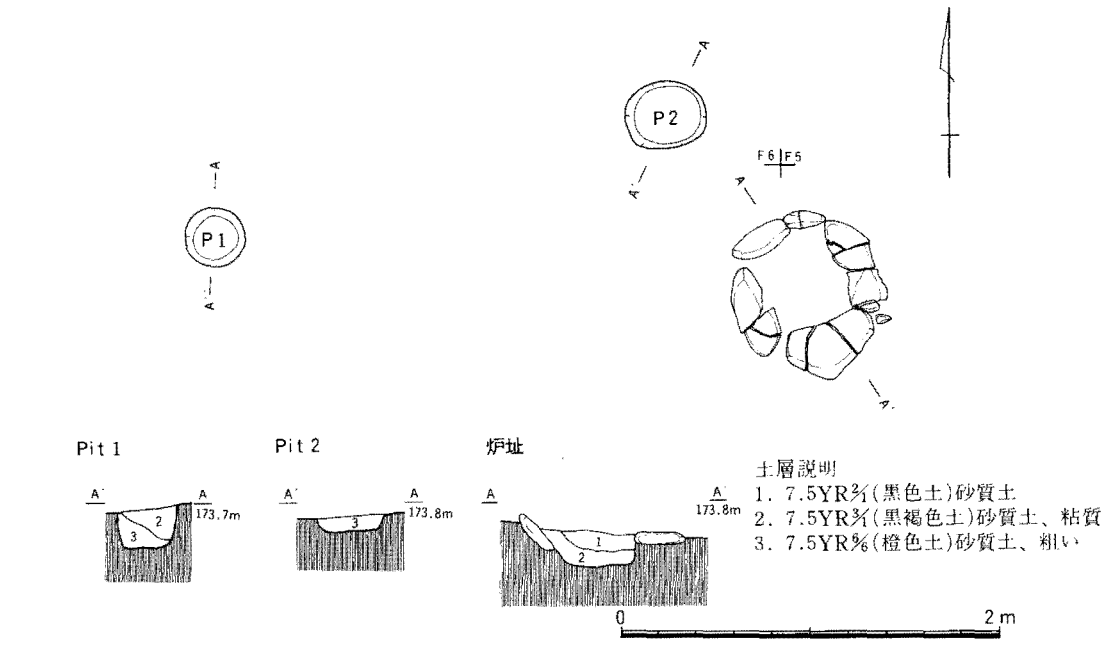
第69図　第12号住居址出土土器

第13号住居址（第70図、図版４）

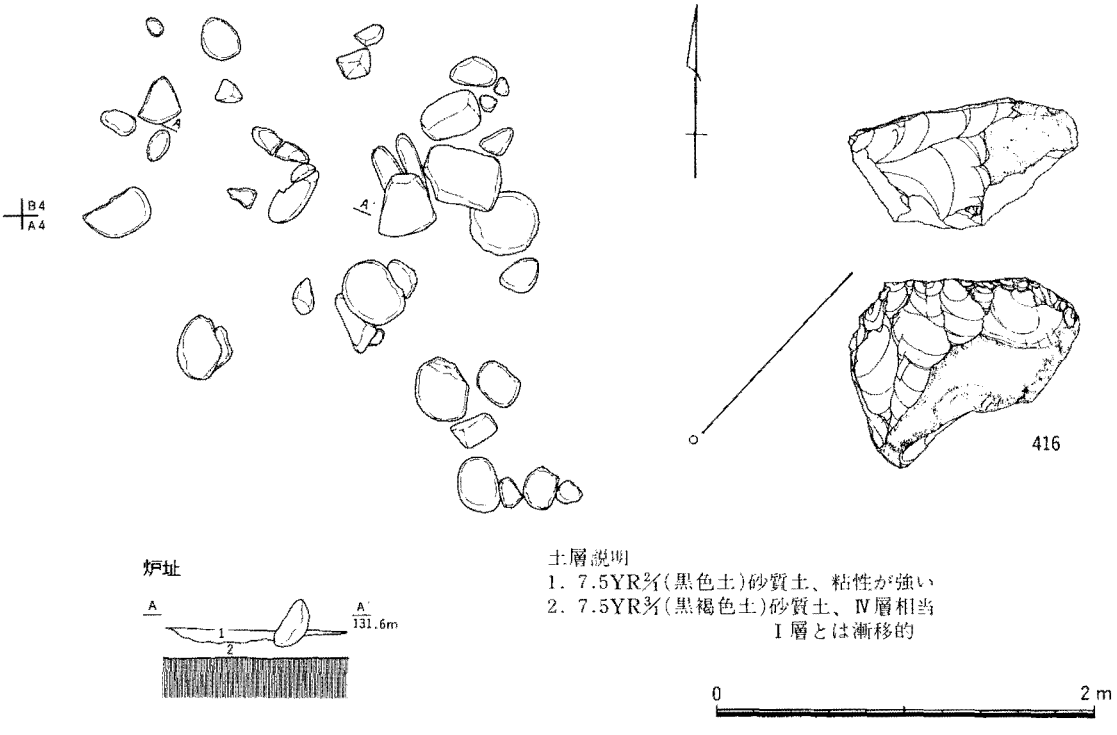
斜面肩口に立地する（Ｆ５・６）。石囲い炉が単独で検出されたのみで、竪穴の堀込み等は一切検出されなかったが、炉址を中心に部分的に他の面と比べて硬化した面が広がっていることから住居址として認定した。周辺に存在する２基のPitは本住居址に伴う可能性がある。

第14号住居址（第71図、図版４）

緩斜面地から平坦地への変換点に位置するが（Ａ・Ｂ４）、第Ⅲ層を掘削中に石囲い炉を検出し、以後慎重に進めたが竪穴の堀込み、柱穴等は未検出である。石囲い炉周辺に床面レベルが存在すると考えられるが、黒色土が厚く堆積し周辺全体が軟弱化している。また、石囲い炉も北及び東辺を残すのみで下底部も確認し得ていない。ただし、残存する炉石は強い焼成を受けてヒビ割れを生じている。炉址から約250cm南西にほぼ床面レベル相当と同位置から流紋岩製の石核（416）を検出している。



第70図　第13号住居址



第71図　第14号住居址

2　土坑（第72図）

調査区内より９基の土坑を検出している。ほとんどが緩斜面地から平坦地への変換点に位置するが、墓壙・陥し穴・貯蔵穴等といった性格づけの可能なものはない。形状（平面形）はいずれも円形、あるいは楕円形を呈するが、径は１ｍ強のものと60～80cmのものに分別できそうである。断面は深いタライ状を呈するが、深さは12cm～65cmとまちまちである。第14号住居址同様掘り方は確認面より上部の第Ⅳ層中にあった可能性が高い。

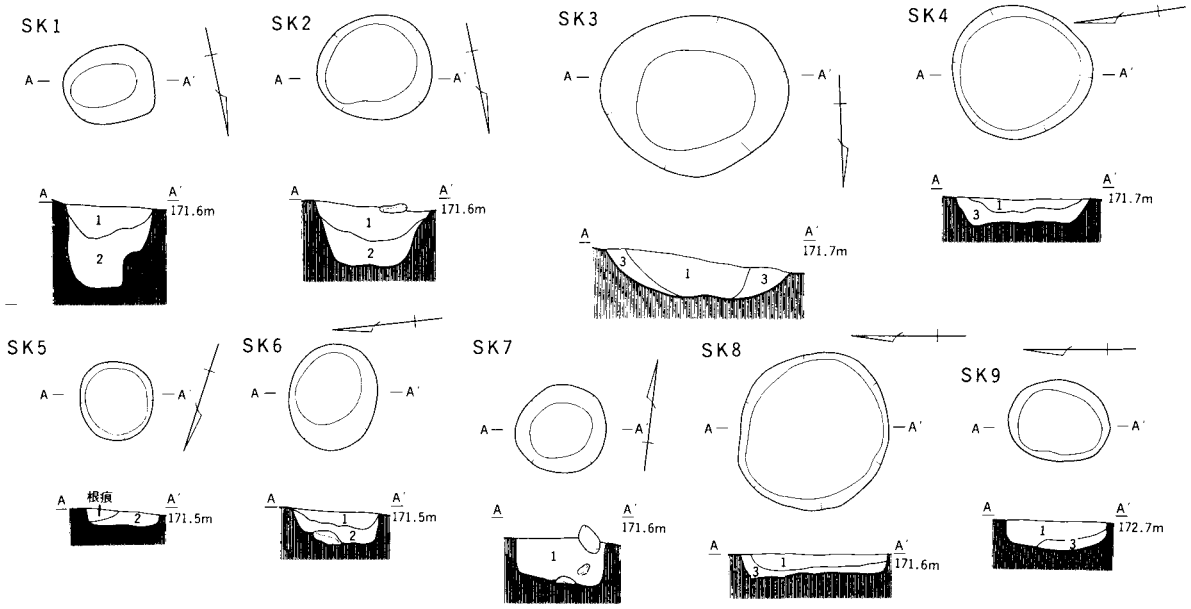
覆土は他の多くの住居址と同様黒色土及び黒褐色土が充填されており、自然埋没である可能性が高いと考えられる。伴出遺物は少なく、あるいは磨滅が著しく、直接的に時期・性格を判断する材料はない。

土坑No.	位　置	長径×短径×深さ(cm)	平面形	覆　　土
1	Ｂ５	７３×　６０×６５	楕円形	①黒褐色土　②黒色土
2	Ｂ５	８７×　８５×４８	円　形	①黒褐色土　②黒色土
3	Ｂ４	１４５×１２５×３５	楕円形	①黒褐色土　③黒色土
4	Ｂ３	１０５×　９７×１８	円　形	①黒褐色土　③黒色土
5	Ｂ３	６０×　６０×１２	円　形	①黒褐色土　②黒色土
6	Ａ３	８４×　７０×２２	楕円形	①黒褐色土　②黒色土
7	Ａ～Ｂ３	７２×　６８×３５	円　形	①黒褐色土
8	Ｂ２	１２３×１１９×１４	楕円形	①黒褐色土　③黒色土
9	Ｃ７	７８×　６３×２２	楕円形	①黒褐色土　③黒色土

3　土壙墓（第73図、図版４）

位　置	Ｂ２	平面形	長方形	主　軸	Ｎ－8°－Ｅ	
規　模	１４７×１０５×　２５cm		面　積	1.5㎡	時　期	13世　期

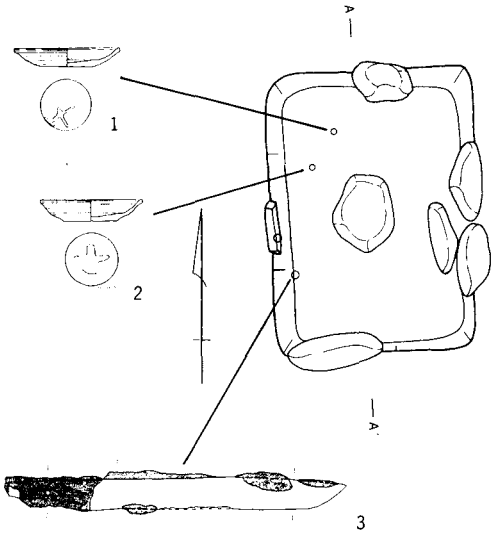
緩斜面地に位置する。本来の覆土の上部は流失し黒色土が流れ込んでいるが、下部には地山面よりやや黒みを帯びる明黄褐色土が充填され、地山のローム質砂質土を人為的に埋め戻した痕跡が窺われる。断面はタライ状を呈し、内面底部は平らである。床面よりやや上部、明黄褐色土中より山皿（墨書有り）２点、刀子１点を検出している。それらの出土位置より人体の埋納位置が推測できそうである。また、それぞれの側壁には１～２点の河原石を立て掛けているが、北壁のものは縄文時代に帰属する板状石皿が利用されている。この土壙のほぼ中央部分の覆土上部に人頭大の河原石が載っているがこの土壙墓に伴う可能性は少ないと考えられる。



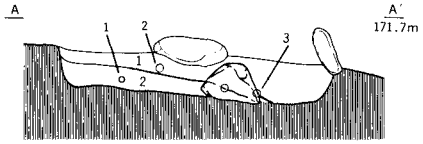
土層説明
1．7.5YR2/1(黒色土)砂質土、小礫を含む
2．7.5YR3/1(黒褐色土)砂質土、粘性強い
3．10YR3/3(暗褐色土)砂質土、根痕多い

0　2m

第72図　土坑群



土層設明
1．7.5YR2/1(黒色土)砂質土
2．10YR5/6(明黄褐色土)砂質土、やや粗い
遺物を含む



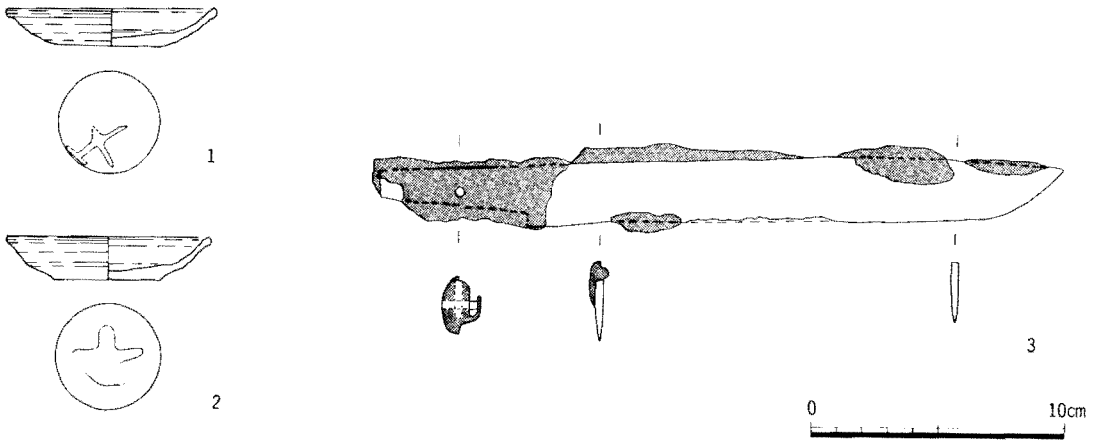
0　2m

第73図　土壙墓

出土遺物（第74図、図版21）

1・2とも器形は外面中程に明瞭な稜をもってひらく山皿である。底部内面中央に静止指撫調整が、底部外面に回転糸切り痕・板目を残す。底部外面に墨書が認められるが記号か文字かは不明である。3は鉄製の刀子である。全長27cm（刀身長21.2cm）・身元幅21.2cmを測る。錆着が激しいため確認はできないが、刀身の造りは切刃造りと考えられる。ただし、鎬はみられない。茎の構造は直角片関一文字尻中細茎である。茎尻より3.2cm、背より1.0cm程に目釘が残存している。また、刀身の背部分・刃部の一部・茎部分に材が残存しているが樹種同定[1)]の結果、鞘部分については針葉樹、柄部分については広葉樹であることが判明している。刀身は全体的にやや内反りしているが径年変化によるものと考える。

1）植田弥生氏（パレオ・ラボ）の報告による。



第74図　土壙墓出土遺物

第３節　包含層出土遺物

１　土　器

包含層出土土器は本遺跡の土層形成・残存状況から完形土器の出土は比較的少なく、図示した復元土器と破片により構成されるが、特に調査区東南側への底津川により開析された傾斜地（崖面）への土器・石器の流れ込みは非常に多い。土器の分類については、本遺跡出土土器が縄文時代早期後半に始まり、中期後半～末が出土量が多くなり後期前半まで続き竪穴住居址が帰属する時期幅より長い期間に属する土器が出土しているため従来の型式的編年に適宜対応させ大別して説明する。

第１群土器（第75図１～４、図版第21）

山形文、楕円文が回転施文される押型文土器を本群とする。１は口縁部が緩く外反し、口唇部に面をもつ。三条一組の山形文が帯状に施文される。２・３は胴部片であり、山形文が密接施文されるが、３は下部に重複が認められる。４は口縁部であり、やはり緩く外反すると思われ、口縁端部を丸くおさめている。楕円文が密接施文されるが、原体は４条一組と考えられる。

第２群土器（第75図５～19、図版第21・22）

地文に節の粗い特異な撚りの縄文を回転施文した一群を本群とする。口縁部は多くが平縁を呈するが波状縁も存在する。器壁は薄手であり、口縁がキャリパー状に大きく内弯するものである。文様構成により２類に分けられる。口唇部に面を形成し連続刺突を加えるもの（１類）、口縁部に低い貼付隆帯をもち連続爪形文を施すもの（２類）である。

１類（第75図５～９）

口縁端部に粘土紐を張り付けて肥厚させ内外両面から半截竹管状工具による連続刺突が施される。５のみ波状縁を呈する。器壁は薄手であり、硬く焼きしまっている。口縁部に地文として縄文ＲＬが横方向に回転押捺され、その上に低い隆帯を張り付けて爪形文を施す。また、口縁部内面にも縄文帯をもつ。

２類（第75図10～19）

１類と伴に薄手に仕上げられるが、10のように10㎜に達するやや厚手のものもある。地文に特異な撚りの原体を回転押捺した縄文をもち、低い隆帯を貼付し連続爪形文を施す。10及び14は他と比べやや厚手で黄褐色を呈し脆弱な感を受け、同一個体の可能性がある。11は口縁端部に狭小な平坦面をもち、内面に縄文帯をもつ。13は１類と同様に口唇部に平坦な面を形成するが、口縁端部及び内面は無

文である。17は頸部片と考えられ、やはり低い隆帯上に巾広な爪形文を横位に施し、更に下方へ垂下する異なる爪形文が認められる。19は波状口縁で、口縁端部を丸く収め内外面に縄文帯をもつ。低い隆帯上に刻み状の連続刺突を施しており、18と伴にやや退化の痕跡が窺える。

第3群土器（第75図20～27、図版第22）

半截竹管状工具による沈線、半隆起線文、連続爪形文を施す土器群である。**1類**　20は地文に縄文ＬＲを施文し、楕円区画間に縦位の沈線をおく。**2類**　口縁部はくの字状に内弯し、内面は丁寧な調整が認められる。口縁部は数段にわたる半截竹管状工具による横位の半隆起線文が並列し、基線となる隆帯には連続爪形文が施される(21)。**3類**　特徴的な蓮華文やＢ字状文がみられるものである(22～24)。**4類**　山形波状縁を呈し、25は口縁部に隆帯を貼付し、隆帯上及び隆帯直下に押し引きを施す。26は口縁部に押し引き、その下位に半隆起線文を横走させている。**5類**　細い貼付隆帯を縦位・横位に走らせ、貼付隆帯間及び隆帯両側裾部に半截竹管状工具による連続爪形文を押し引いている。赤褐色を呈し器壁は９㎜と厚い。コーナー部分には三叉状の彫刻が認められる。(27)

第4群土器（第75図28、図版第22）

貼付隆帯による施文を基調とする土器である。口縁形態はキャリパー形を呈する。１点のみ出土している。口縁部より数条の縦位の貼付隆帯を垂下させ、隆帯間には微かに櫛描沈線文が認められる。頸部に横走する一条の隆帯をめぐらし胴部文様との間に無文帯を形成していると考えられる。

第5群土器（第75図29、図版第22）

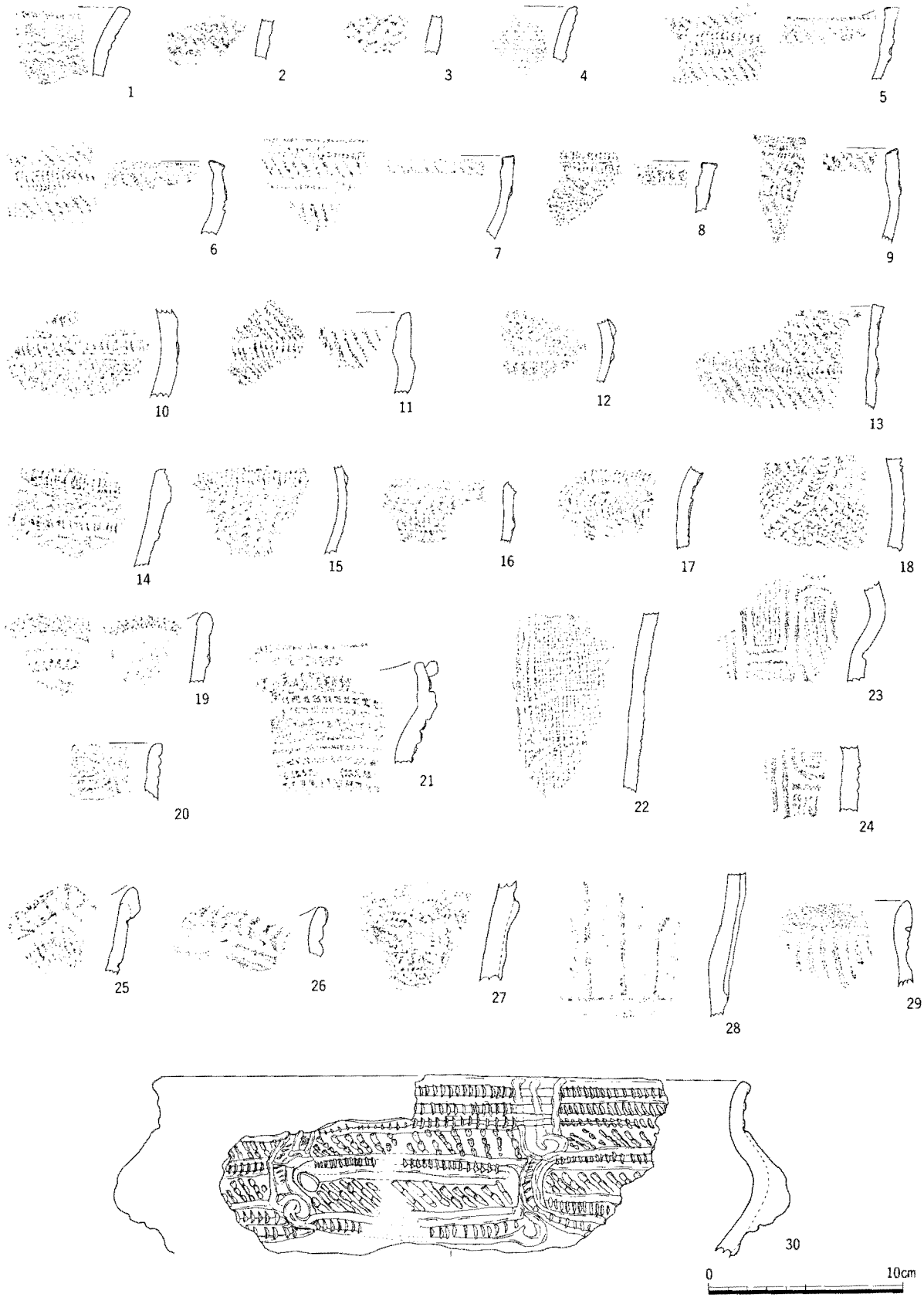
複合口縁部の下に横走する沈線と櫛描文風な縦位の沈線が施される土器である。１点のみ出土している。口縁端部、内面に丁寧な調整がみられる。

第6群土器（第75・76図30～49、図版第23）

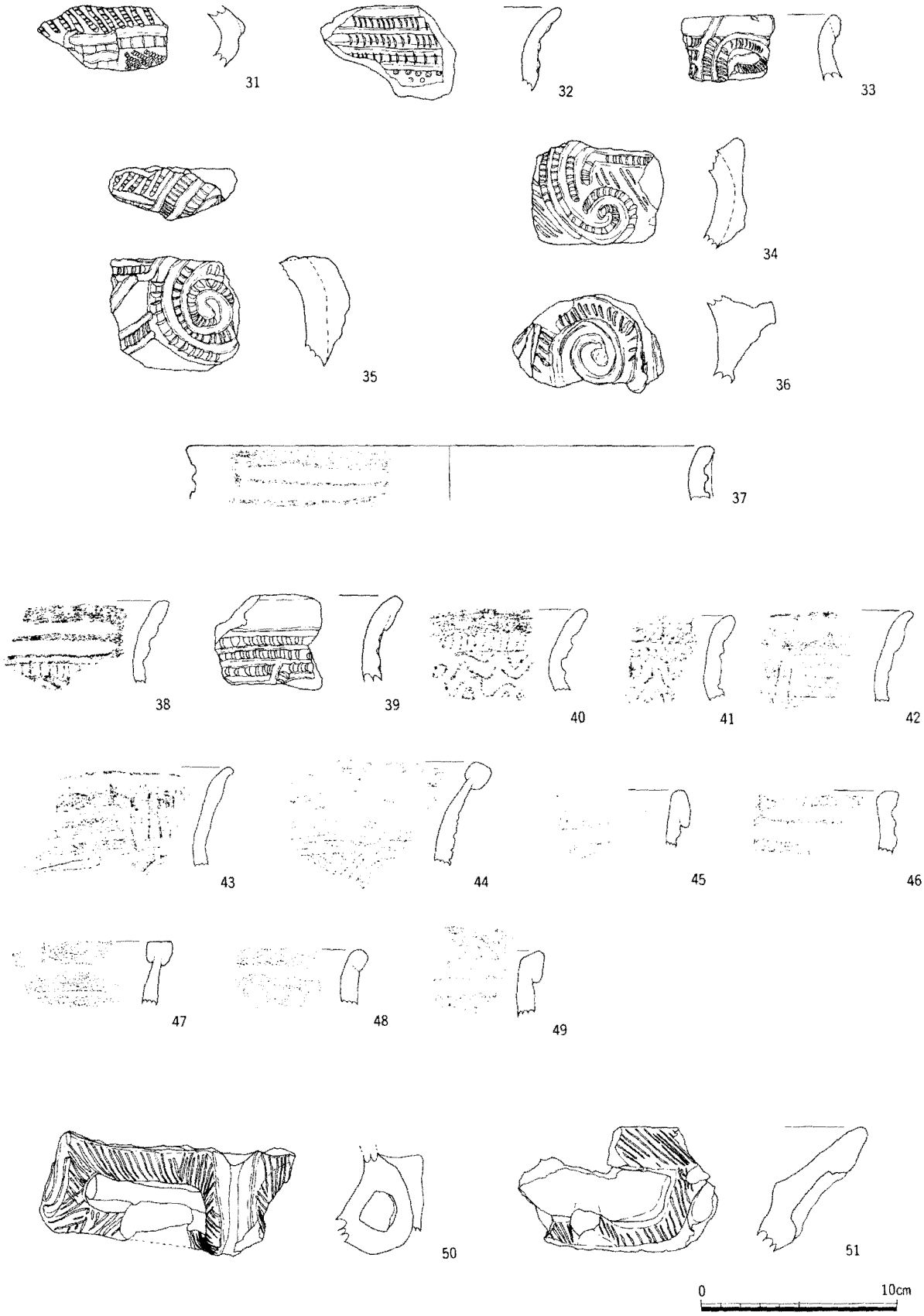
頸部が強くくびれ口縁部が大きく弯曲するキャリパー形を呈し、さらにはその弯曲部から外に開きながら口縁部が立ち上がるものを本群とする。全形をとどめる資料はなく口縁部資料が主体を占めるが、文様要素から４類に分けられる。素麺状の粘土紐＋刺突、押し引きで文様を描くもの（１類）、沈線＋押し引きで文様を描くもの（２類）、沈線のみのもの（３類）、無文のもの（４類）とする。

1類（第75・76図30～37）

30は外に開きながら立ち上がる口縁部は複合口縁とし、これに平行して３条の素麺状粘土紐を貼付しその間を半截竹管状工具による刺突で充塡する。基点として把手を設け、口縁端部より素麺状粘土紐を３条垂下させ把手上方部（口縁弯曲部上部）に渦巻を置く。把手間は上部に刺突を間にもつ２



第75図　包含層出土土器（1）



第76図　包含層出土土器（2）

条の素麺状粘土紐で、下部に把手をふちどって垂下してきた素麺状粘土紐が作る縦位の渦巻から刺突をもつ素麺状粘土紐を連弧状に連結させるが、連結部に横位の渦巻を置いている。これより左位の把手部分へは刺突をもつ3条の素麺状粘土紐が連弧状に延びており、把手3組で1セットの文様構成をとるものと考えられる。素麺状粘土紐間は右傾の押し引きで充填している。31～36も同様な資料と考えられるが、充填文様として縄文ＲＬ、刺突、無文を施しているものがある。34～36は口縁部にある渦巻部分がやや角張り俯瞰すると多角形状となる。また、37は口縁部の立ち上がり部分に素麺状粘土紐による渦巻を置き、紐間を押し引き、あるいは連続刺突で充填している。

2類（第76図38～41）

38は等間隔の縦位の沈線を基点として口縁に平行して2条の沈線を横走させ、その下位に全周する半截竹管状工具による押し引きを施す。弯曲部は棒状工具による押し引きが施される。39は口縁を折り返して複合口縁とし、横走する3条の押し引きを施す。40・41も複合口縁で、41は一部に縄文の圧痕が認められる。1条の押し引きの下位に2条の波状文を施す。

3類（第76図42～46）

42・43は口縁端部を丸くおさめ外に折り曲げており、その際の指頭痕を外面に残している。3条の縦位の沈線を基点とする3条の沈線を横走させる。沈線内には細かい条線が認められ巻貝？が施文具として用いられた可能性がある。46は口縁部を同様に折り曲げるが、口縁端部に平坦な面を形成している。口縁に沿い棒状器具による太い沈線を横走させる。44は複合口縁下に狭小な無文部を設けその下位に沈線で渦文を描くものと思われる。沈線間はヘラ状工具による左傾の短沈線で充填する。45も同様な文様構成をとるものであろう。

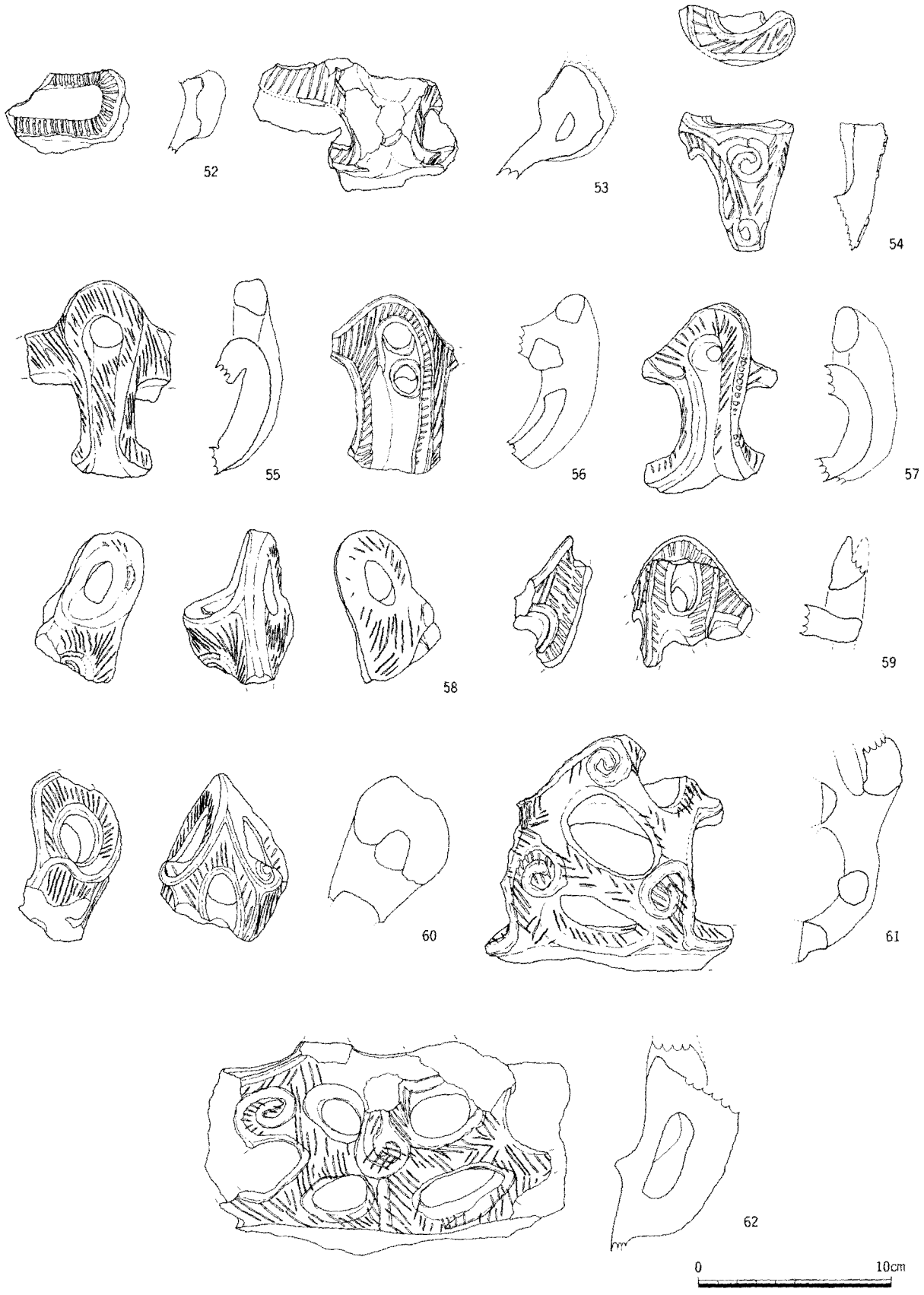
4類（第76図47～49）

立ち上がる口縁部を無文とするものである。すべて口縁部は折り返して複合口縁とするが、47は内面にも粘土紐を貼付して口縁端部に広い平坦面をもつ。また、49は内傾する口唇部に矢羽根状沈線を施している。

第7群土器（第76～78図50～69、図版第24・25）

口縁部に立体的な橋状把手、あるいは装飾的な把手をもつものを本群とする。ただし、これらは口縁内側に蓋受け状の隆帯をもつことも一つの大きなメルクマールであり、前述した装飾的な把手等をもたないが文様要素・構成が類似し口縁内側に蓋受け状の隆帯をもつものも本群に含めた。

1類（第76・77図50～53）



第77図　包含層出土土器（3）

いずれも口縁部に立体的な橋状把手がつく方形区画部分である。50・52・53は方形区画部分の上位に立ち上がる口縁をもつ。把手上は斜行する短沈線文が施されるが、53は素麺状粘土紐で把手をふちどりした後に短沈線文が施され、把手中央は欠失しており詳細は不明であるが素麺状粘土紐による刺突の施された渦文が置かれていたと考えられる。50は二つの方形区画が一組の文様配置を構成していると考えられ、両端の橋状把手状に沈線による一組の蕨手状文が縦位に描かれている。52は橋状把手部分の立体性にやや欠けるが文様構成が類似しており本類に含めておく。

2類（第77図54～60）

口縁端部に粘土紐を横方向に扇形状に張り付け立体的な橋状把手から上方へ延びていくループと結びつくものである。その結合方法にはバリエーションがみられ、縦、横方向に1～3個の穿孔をもつ。本質的には1類の一部が張り出すものである。把手上にはヘラ状工具による短沈線紋が施され、58・59のように素麺状粘土紐でふちどられるものもある。58は縦方向のループの左口縁上端部に面をつくり、欠失しているため詳細は不明であるが橋状把手を縁取る素麺状粘土紐が延び面上に渦巻を表現していた痕跡が窺える。

3類（第77図61・62）

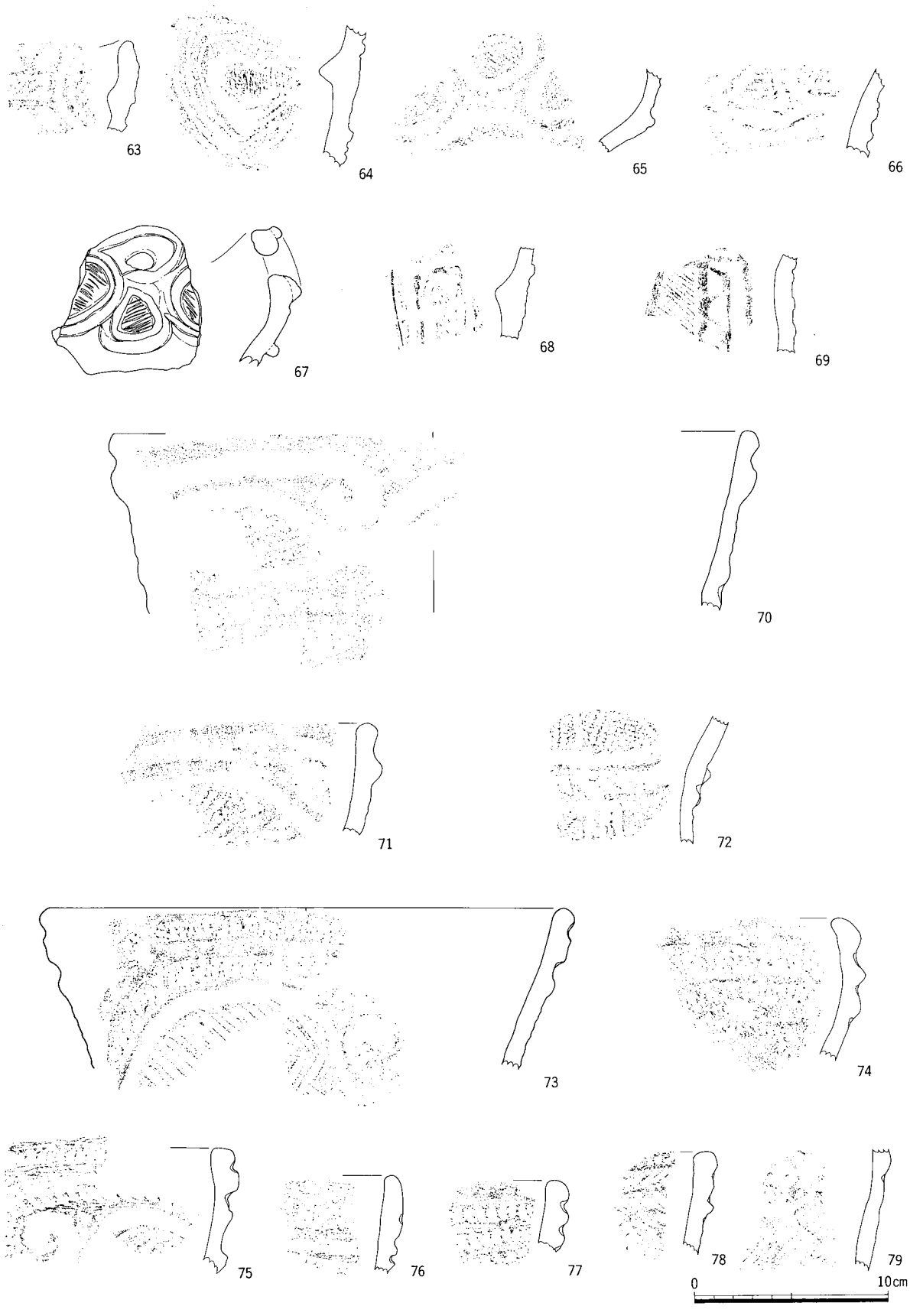
いわゆる「袋状把手」をもつものであり、ループが縦・横方向に複雑に結合するものを本類とする。61は2本の橋状把手間の中央に横位の、上方へはアーチ状に結合するループを延ばし、さらには欠失しているが、その上方へ縦位の穿孔をもつ口縁端部と結ぶループを延ばす。把手部は素麺状粘土紐で縁取り各結合部分に渦巻を置き矢羽根状沈線、あるいは短沈線で充填する。62は文様帯からさらに外に開きながら立つ口縁部をもち、胴部は球形状を呈するものと考えられる。縦、横のループを次々と連結させ「袋状把手」を作り出している。

4類（第78図63～69）

口縁内面に蓋受け状の隆帯をもつものである。63は口縁形態は波状縁を呈し、やや内弯する。細い貼付隆帯で区画文を作り、ヘラ状工具による短沈線文で充填している。64は巾広で低い隆帯で渦巻？＋楕円の区画を作り縦のヘラ描沈線で充填している。隆帯上には棒描沈線が走る。65～67は蓋受け状の隆帯をもたないが文様構成が63に類似するため本類に含めた。68は隆帯による逆U字状区画内を沈線＋短沈線で充填し、その横に垂下する隆帯がみられる。69は胴部片で文様構成がやはり類似するため本群に含めたが、口縁が大きく外に開く器形をとるものと思われ群を別にすべきかもしれない。

第8群土器（第78～81図70～127、図版第25～27）

口縁部に隆帯による渦巻文や曲線文をモチーフとする区画をもち、区画内を縄文、矢羽根状沈線文、



第78図　包含層出土土器（4）

斜行沈線文、刺突文で充填するものを本群とする。器形は口縁部が緩やかに弯曲するキャリパー形が主体である。多くの口縁部が平縁を呈するが、小波状縁となるものもある。これらを文様要素から10類に分ける。口縁部区画内を縄文で充填し、頸部に刺突列をめぐらすもの（１類）、口縁部区画隆帯間を刺突文でふちどるもの（２類）、口縁部区画隆帯を沈線でふちどるもの（３類）、区画隆帯上にキザミ、刺突を施すもの（４類）、口縁部区画隆帯上に沈線による文様をおくもの（５類）、１～３条の隆帯で口縁部区画帯をえがくもの（６類）、口縁部区画隆帯内側を短沈線文で充填するもの（７類）、口縁部隆帯が人体状モチーフを描き、条線文で充填するもの（８類）、隆帯＋刺突列で口縁部区画を描くもの（９類）、隆帯＋沈線で文様を描くもの（10類）があり、以下に説明する。

１類（第78図70～72）

口縁部に隆帯による渦巻＋楕円形区画をもち、区画内を縄文で充填するものである。70は区画内に縄文ＲＬを施した後区画内側を沈線でふちどっている。頸部に棒状工具による刺突列をもつ沈線が横走する。71はおそらく70と同一個体と考えられる。72は頸部から胴部上半にかけての資料である。区画内充填方法、頸部の刺突列をもつ沈線等70・71と同様な文様構成をもつ。胴部には区画文としての縦位２条一組の蕨手状沈線文がみられ口縁部区画と同様縄文ＲＬを施している。

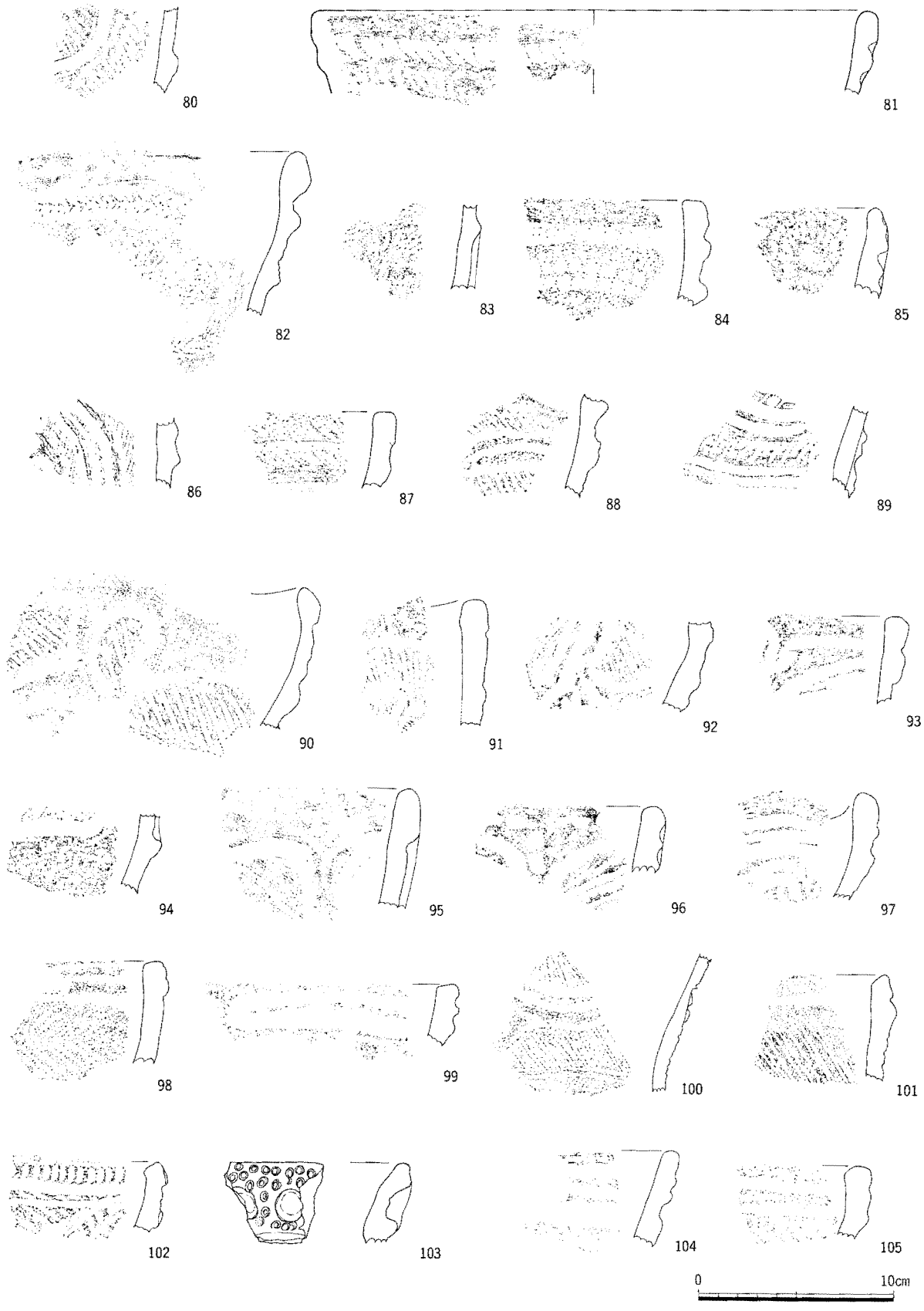
２類（第78・79図73～89）

口縁部区画隆帯間を刺突文でふちどるものを本類とするが、刺突には施文具及び文様にバリエーションがみられる。**１種**　半截竹管状、ヘラ状工具による刺突列（73～81）、**２種**　矢羽根状刺突列（82・83）、**３種**　竹管状工具による円環文刺突列（84）、**４種**　細い棒状工具による刺突列（85）、**５種**　ヘラ・棒状工具による短沈線列（86～89）。隆帯による文様構成は渦巻＋楕円区画であり、区画内を縄文、斜行するヘラ描沈線、無文で充填するが、73のように上位より異方向に斜行する棒描沈線で充填するものも存在する。また、87は口縁に沿う隆帯上に縄文ＲＬが施文されている。本類は全体的に焼成は良好で調整も丁寧である。

３類（第79図90～101）

口縁部区画隆帯を沈線でふちどるものを本類とするが、**１種**　沈線によるふちどりが区画隆帯内側にみられるもの（90～96）、**２種**　区画隆帯両側にみられるもの（97～100）、**３種**　区画隆帯外側にみられるもの（101）がある。口縁形態は平縁、小波状縁がある。隆帯により多くが渦巻＋楕円を描き区画内を棒状、あるいはヘラ状工具により矢羽根状沈線文や斜行沈線、格子目状沈線で充填する。ただし、90のように渦巻＋楕円の定型的文様が退化したもの、96の隆帯上の一部に刺突のみられるものもある。

４類（第79図102・103）



第79図　包含層出土土器（5）

第80図　包含層出土土器（6）

口縁部区画隆帯上に連続的なキザミ、あるいは刺突を施すものである。102は隆帯区画に沿った沈線区画がみられ、区画内に縄文ＲＬを施している。103は口縁に平行する２条の隆帯間を両側に大きな刺突状の凹部をもった縦位の隆帯で連結させる。隆帯上には竹管による円環状刺突が施される。

５類（第79・80図104～112）

幅広な区画隆帯上に沈線による文様を施すものを本類とする。多くが隆帯に沿う沈線を描く（104・105）が、曲線的なもの（106～109）、蕨手状となるもの（110）、渦巻を描くもの（111）、長狭な楕円区画のもの（112）がある。110は胴上部に沈線による充填が、100・108・111は頸部無文帯が確認できる。

６類（第80図113～118）

口縁部区画を１～３条の隆帯で描くものである。113は多くを欠失しているが、その痕跡が窺え胴部へも１条の隆帯が垂下している。隆帯により渦巻＋楕円区画を描くものの他渦巻が消失し隅丸の方形区画のみのものもある。区画内をヘラ、あるいは棒状工具による斜行する沈線、無文等で充填する。117は口縁部上部の隆帯は殆どみられず渦巻のみが縦位に配置される。118は同一個体資料であるが渦巻よりのびる隆帯が楕円区画を描き胴部との区画帯を形成している。なお、区画内は上位より異方向に斜行する沈線で充填されている。

７類（第80図119～122）

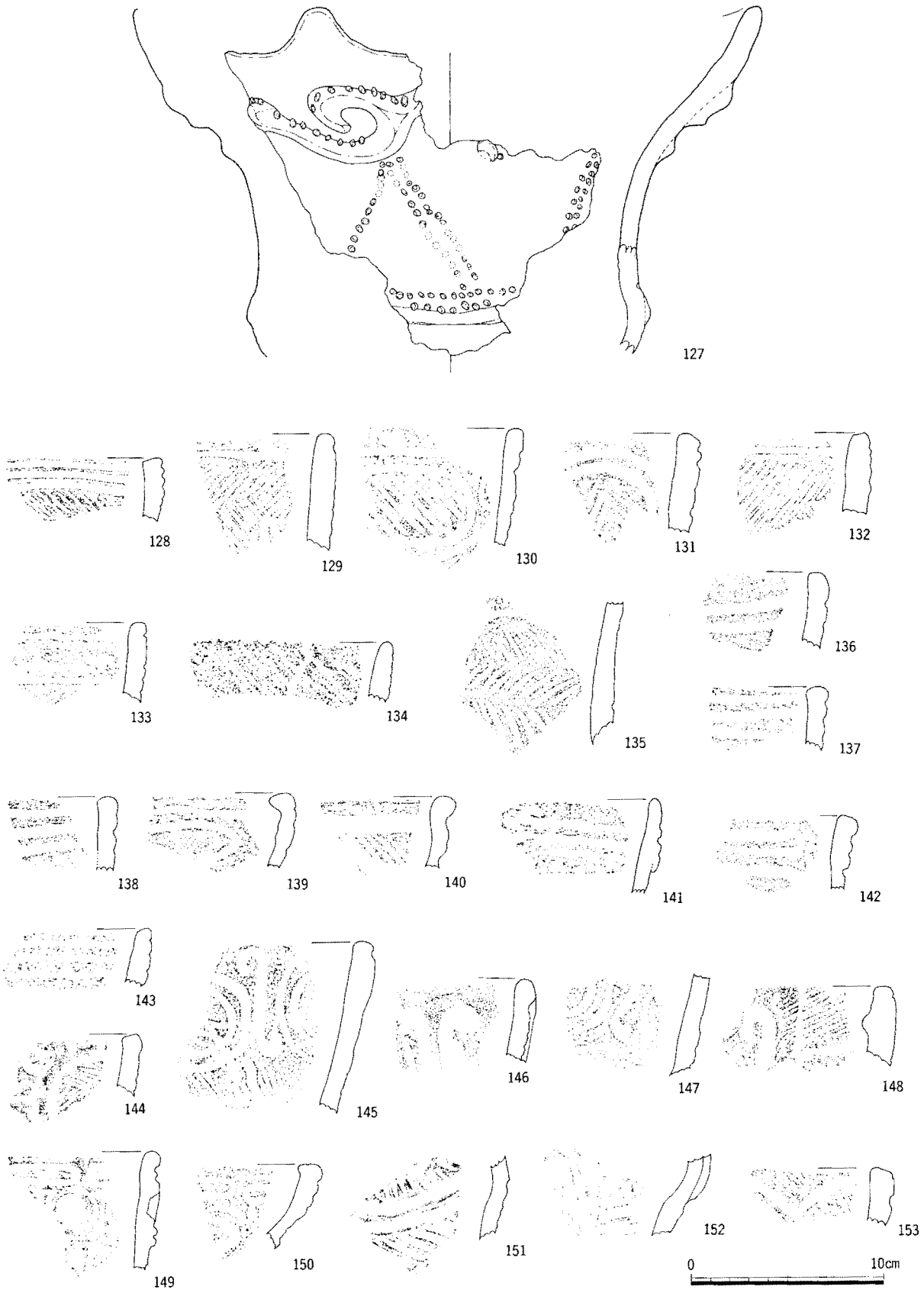
口縁部区画を隆帯による渦巻を中心として描き、ヘラ状工具による沈線（119・120・122）、あるいは櫛歯状工具による条線（121）で充填するものを本類とする。口縁部形態は外に開きながら立ち上がるものとやや内弯するものがある。122は隆帯でややくずれた渦巻＋方形区画を描き、区画内をヘラ状工具による深い沈線で充填する。胴部は棒状器具による沈線を３状垂下させヘラ状工具による斜行沈線で充填している。

８類（第80図123・124）

隆帯により人体状モチーフを描くものである。123・124は同一個体資料と思われ、口縁形態は小波状縁となる。口縁上部の隆帯上及び区画内を条線で充填し、縦に垂下する隆帯上には３個の刺突がみられる。

９類（第81図127）

隆帯による横位の渦巻を連結させ、渦巻部より頸部の隆帯に向けて２列の叉状の刺突列を垂下させ



第81図　包含層出土土器（7）

る。隆帯も１～２列の刺突列でふちどり、胴部にも刺突列で文様を描いているようである。口縁部形態は大きく外反しており、山形波状縁となる。

10類（第80図125・126）

隆帯＋沈線により曲線、渦巻、双頭渦文を描く。隆帯両側を沈線でふちどり頸部に１条の隆帯を横走させる。頸部隆帯より胴部へ縦位の隆帯を垂下させ胴部区画を形成している。

第９群土器（第81～82図128～167、図版第27～28）

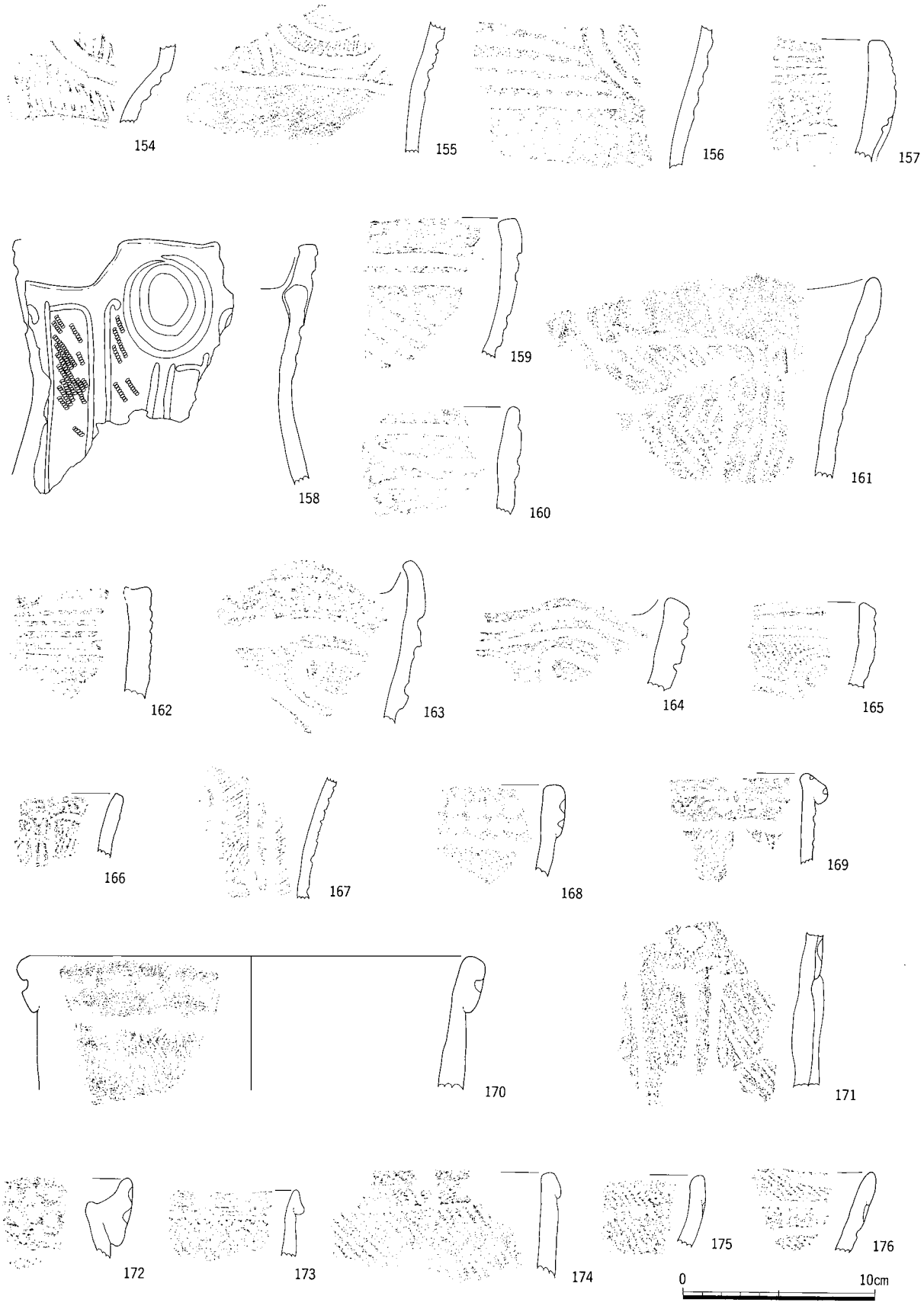
口縁部に沈線による区画文をもつものを本群とする。本群をさらに沈線が描く区画文により６類に分ける。楕円形区画のもの（１類）、円環文を基調とするもの（２類）、弧状文を連続させるもの（３類）、長方形区画のもの（４類）、渦巻＋楕円形区画のもの（５類）、その他（６類）である。器形は弱いキャリパー形を呈するものが多いが、口縁部が外に開くものやほぼ直立するものがある。口縁形態は、平縁・波状縁がある。

１類（第81図128～148）

口縁部に沈線による楕円形区画を基調として配されるものである。口縁に沿い１～２条の沈線が横走するものが主体的である。口縁部を内外に折り返し肥厚させるもの（139・140）、区画間に蕨手状文を施すものもある（144～148）。区画内を縦位、あるいは横位の矢羽根状沈線文・斜行沈線文・縄文ＲＬ？・無文で充填する。充填文は区画沈線に使用したものと同じ施文具が使われるが、充填文のみヘラ状工具に置き換えているものも認められる。129は充填文下端に蕨手状文？がみられ、133・134は口縁部上端、沈線間に斜行沈線文を施している。特異なものとして141～143は口縁部に幅広で薄い粘土帯を貼付し、沈線でヒゲ状沈線を描く。ヒゲ状沈線の接点には縦位の刺突列を置いている。おそらくこの下部に無文充填の楕円区画が配置されるのであろう。また、144・148は楕円区画の接点に蕨手状文をおくものであるが、148は黒褐色を呈し分厚で他とは異質な感じがあり、蕨手状文の左にハの字状文を施し、裏面に隆帯を１条横走させている。

２類（第81・82図149～158）

沈線による円環文を基調とするものである。文様構成により５種に細別する。**１種**　竹管の刺突をもつ円形の窪みを沈線で囲い、上部に長狭な楕円区画、下部に横位の蕨手状文を連結させるもの（149・150）、**２種**　円環文を曲線等で連結させ、沈線間にヘラ状・棒状工具による斜行沈線を施すもの（151～155）。155は頸部より胴部上半の資料であるが、胴部は無文としている、**３種**　おそらく二重の同心円環文を数条の横走する沈線で連結させるもの（156）。区画内には縄文ＲＬが施文される、**４種**　二重の同心円環文が独立？しているもの（157）。口縁直下に４条の沈線が横走する。**５種**　波頂部下に二



第82図　包含層出土土器（８）

重の同心円環文を置き、その下部は胴部文様帯となる。無文充填の逆U字状区画の両側に縦位の蕨手状文を配する。頸部でくびれ胴部はやや膨らむ器形を呈す（158）。

3類（第82図159・160）

口縁に沿い1～2条の沈線を横走させ、その下部に連弧状文を連続させるものである。160は連弧状文下部にヒゲ状沈線がみられる。

4類（第82図161・162）

口縁部に沈線による長方形区画をもつものである。161は区画の接点に蕨手状文を配している。区画内は矢羽根状沈線文（161）、横位の沈線文（162）で充填している。

5類（第82図163～165）

163・164は小山形波状縁で、沈線により渦巻＋楕円形区画をもつ。区画内はおそらく無文であろう。165は同類と考えられるが欠失しており詳細は不明である。口縁に平行する2条の沈線と区画文間に斜行沈線を充填する。口縁形態は平縁で、僅かに内弯する。

6類（第82図166・167）

その他のものを一括した。166は沈線による逆U字状区画が口縁部まで達し口縁部の区画文が消失している。逆U字区画内は縄文ＬＲが充填される。口縁部はほぼ直立する。167は外に開きながら立つ口縁部形態をもつ。沈線による渦巻間に蕨手状文を置き、沈線間を斜行する短沈線で充填する。薄手で黒褐色を呈する。

第10群土器（第82図168～176、図版第28）

口縁部を折り返し肥厚させる一群を大きく一括したが、**1種**　折り返し部分を口縁部文様帯とするもの(168～172)、**2種**　複合口縁とするもの(173・174)、**3種**　複合口縁下に文様帯をもつもの(175・176)に分けられる。1種と考えられる168～171は口縁部を大きく折り返し、1～2列の刺突列を横走させ、口縁部文様帯としている。胴部には垂下する隆帯、あるいは沈線による区画間を矢羽根状沈線文、無文で充填する。172は厚い断面三角形の粘土帯を貼り付け3列の刺突列をめぐらす。複合口縁と呼称するにはやや異質であるが本類に含めた。2種と考えられる173・174は全面に縄文ＲＬを施文するが、173は複合口縁部を無文としている。3種の175・176は複合口縁下に半截竹管状工具による刺突列、棒状器具による縦位の短沈線をおく。地文には縄文ＲＬを施すが、176は区画を形成する沈線がみられる。

第11群土器（第83図177～179、図版第29）

口縁部文様が横位の沈線となる等口縁部文様帯が縮小、あるいは退化したと考えられるものを本群とする。口縁部は緩やかに内弯し、口縁形態には平縁・波状縁がある。178は口縁部に長狭な楕円形区画文を配し、胴部は縦位の櫛描沈線文を施す。177は緩い波状縁を呈し、口縁部端をくの字状に内屈させる。口縁部に半截竹管状工具による２条の沈線を横走させ、全面に縄文ＬＬＲ？を施文する。キザミをもつ隆帯が沈線より垂下しているが欠失しており詳細は不明である。179は小山形波状縁で口縁部は弱く弯曲する。波頂部直下に刺突をもつ楕円形の粘土帯を貼付している。やや異質であるが口縁文様帯の退化という観点から本群に含める。

第12群土器（第83～85図180～212、図版第29～30）

縄文土器・櫛描沈線文土器・無文土器を一括して本群とする。

縄文土器（第83・84図180～191）

縄文の施される土器は大きく縦位帯縄文となるもの（180～185）、全面施文されるもの（186～191）に分けられる。縦位帯縄文を施す土器は頸部から緩やかに外反する口縁部を有し、口縁端部はやや平らな面状をなすものもあるが多くが丸くおさめている。ほとんどのものが縄文ＬＲを縦位に回転施文している。ただし、182は口縁部の一部に横位回転施文がみられ、その下位に縄文ＲＬを縦位に回転施文している。

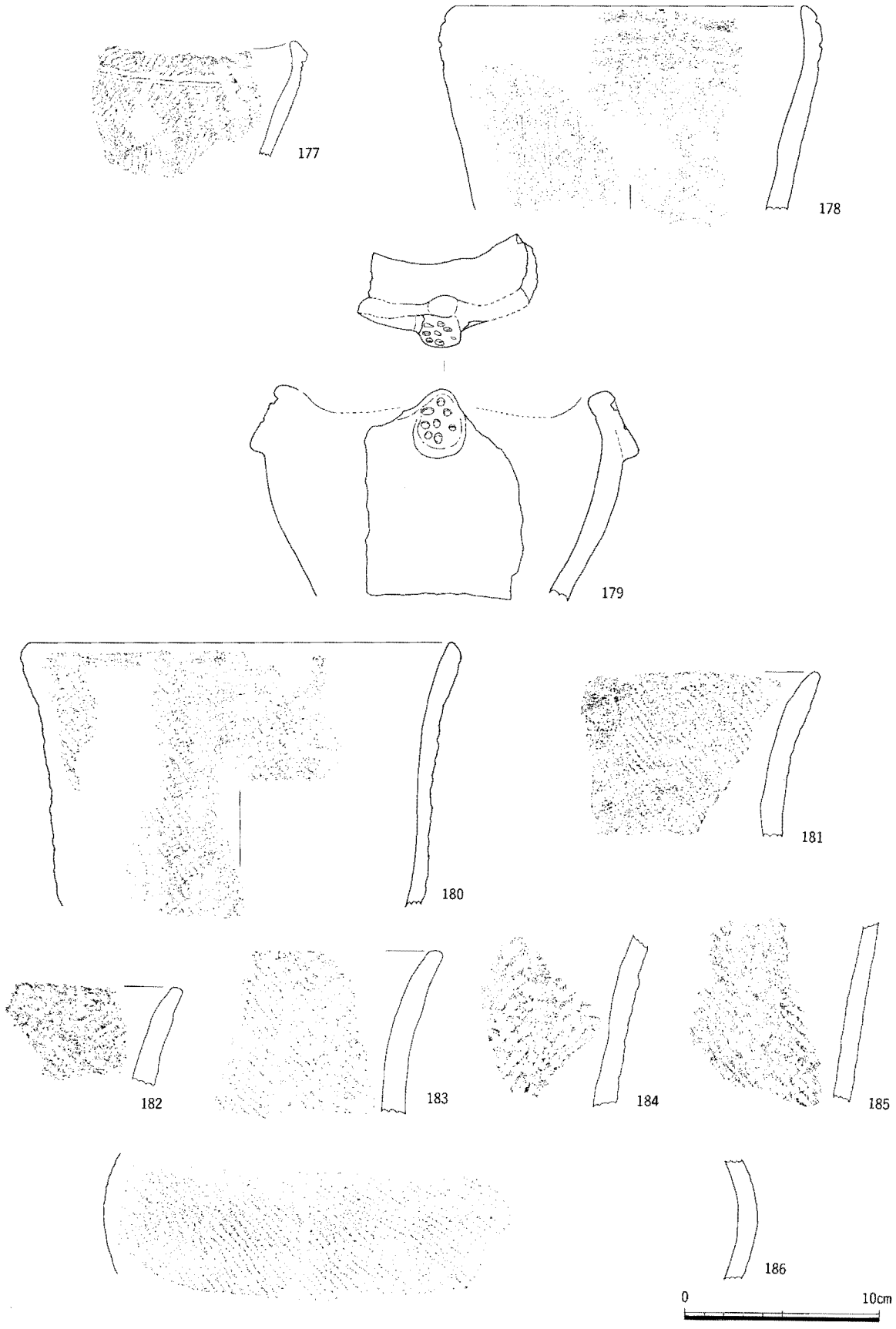
縄文が全面施文されるものは、おそらくやや張りのある胴部から緩やかに外反する口縁部にいたる器形と考えられるが口縁部を欠失しているので詳細は不明である。。187は縄文ＬＲを、189は縄文Ｌｒを施文する他は縄文ＲＬを横位に回転施文している。また、190は結節部が斜めに転がっているのが認められる。

櫛描沈線文土器（第84図192～206）

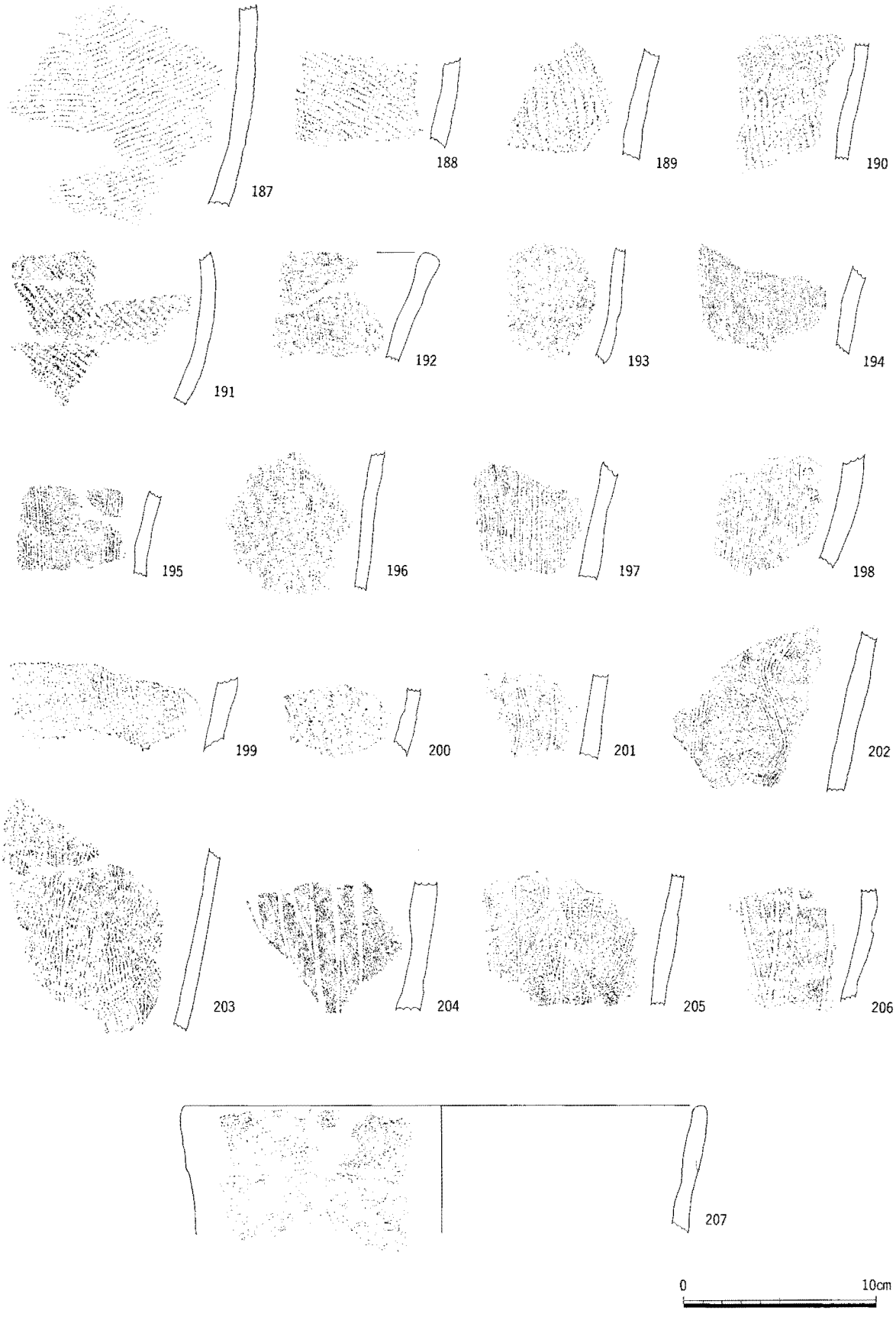
櫛描沈線文土器は、施文される櫛描沈線文様の相違から縦位の直線文を描くもの（192～198）・曲線文を描くもの（199～201）・曲線、直線文を併用するもの（202）・斜行線文を施すもの（203～206）に分けられる。直線文を施すものは帯状となるものと全面施文されるものに細別できる。また、204～206は細い棒状工具による沈線であるが文様構成の類似から本類に含めた。これらの器形は頸部が僅かにくびれ、やや外反する口縁部をもつものと考えられる。

無文土器（第84・85図207～212）

無文土器は口縁部がほぼ直立するもの（207・208）、緩やかに外反するもの（209・210）、胴部が球状にふくらみ頸部がくびれるもの（206・211）がある。207は口縁外面に粘土を貼付し肥厚帯を設け、



第83図　包含層出土土器（9）



第84図　包含層出土土器（10）

208は口縁端部を折り返し複合口縁とし、内外とも丁寧な調整を施している。211は頸部に1条の隆帯をめぐらす。外反して立ち上がる口縁部には加飾を加えず無文としている。212は同個体に付属する把手部であり、接続部分はないがおそらく隆帯上にくるものと考えられる。

第7～10群土器の胴部（第85～87図213～240、図版第31～32）

第7、8群土器および第9群と10群土器の一部に伴うと考えられる胴部片である。本来はそれぞれの各群・類に分離することが必要と考えられるが非常に困難であり、例えば胴部の基軸となる区画帯が隆帯、あるいは沈線かの区分が単純に型式差を示さない場合もありここに一括提示することにする。多くが胴部上半がやや膨らむ器形を呈す。胴部を垂下する区画帯が、隆帯によるもの（1類）・沈線によるもの（2類）・逆U字状区画をもつもの（3類）・唐草文のみられるもの（4類）・連弧文をもつもの（5類）に大別できる。

1類（第85・86図216～224）

1～2条の隆帯を垂下させ区画内を矢羽根状沈線文、無文で充填する。216・217は第8群に、218は第9群に伴う胴部片である。221は頸部隆帯上部に沈線による波状文がみられる。隆帯を断面三角形状にしているもの（223）、蛇行垂線のみられるもの（216）がある。

2類（第85・86図213・214・225～238）

胴部に2条一組、あるいは3条一組の沈線を垂下させ区画内を矢羽根状沈線文で充填する。蛇行垂線（225～228・236・238）のみられるもの、沈線間に狭小な方形区画を配しているもの（231）がある。また、213・214は垂下する沈線間に間隔をもつ2条一組の沈線を横走させており他とは異質である。

3類（第85図215）

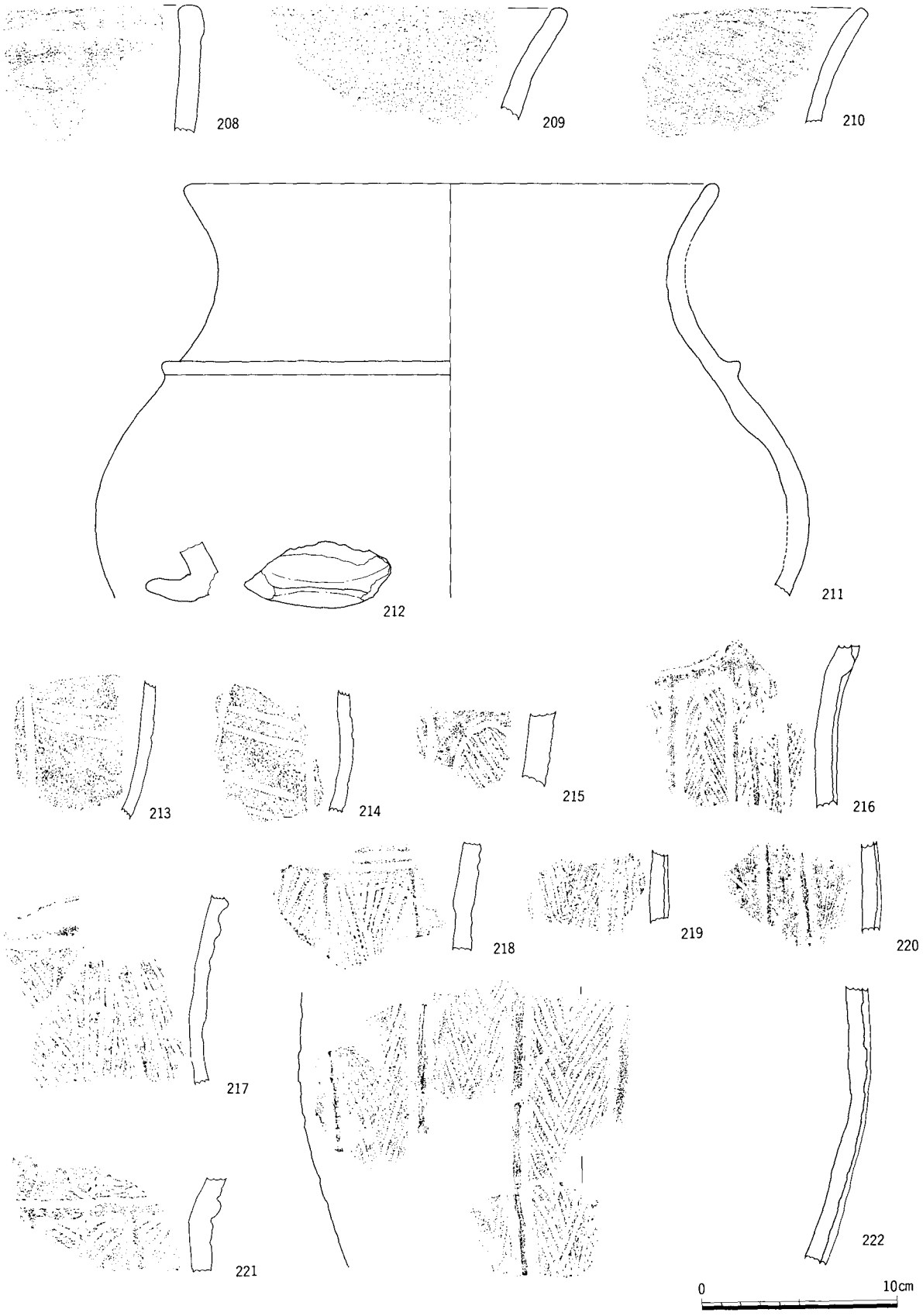
胴部に逆U字状区画をもち、右傾する沈線で充填するものである。器壁は厚い。

4類（第87図239）

胴部に隆帯による唐草文をもち、隆帯間を矢羽根状沈線文、あるいは斜行沈線で充填する。第7群土器に伴う胴部である。

5類（第87図240）

胴上部に7条一組の連弧文のみられるものである。第6群土器に伴う胴部である。



第85図　包含層出土土器（11）

第86図　包含層出土土器（12）

第13群土器（第87・88図241～275、図版第33）

口縁形態が平縁、あるいは波状縁を呈し、縦位・横位・斜位の沈線区画の内外に磨消文様をもつ土器を本群とする。本群は口縁部形態・文様構成等により4類に分類する。

1類（第87図241～244）

口縁形態は平縁で、磨消文様をもつ土器を本類とする。241～244は口縁部直下に無文区画を沈線により区画し、その下方に横位の縄文帯をもつ。243は横位縄文帯から下方に文様帯が垂下しているのが認められる。充填される縄文はＲＬ、ＬＲがみられる。

2類（第87図245～255）

口縁形態が波状縁を呈するものであるが、波状縁の発達度により2種に細別する。**1種**　緩やかな波状縁を呈するものである。波状縁直下に縄文帯をもつもの（245・249・250）と口縁部直下に無文帯を置きその下位に1条の横走沈線内に縄文充填帯をもつもの（246～248）がある。前後者の関係はネガ・ポジの関係となる。**2種**　1種に比べ波状の発達度の高いものである。251・252・254・255は横走する沈線は波頂部へは達しないが、253は波頂部より区画沈線を垂下させている。充填される縄文はＲＬ、ＬＲがあるが、252は擬縄文が施されている。また、254は波頂部下に穿孔をもつ。

3類（第87・88図256～274）

沈線による縦位・横位・曲線区画・矩形区画内外を磨消すものを一括した。250・257・259・260は横位の縄文帯から下方に釣手状の縄文帯が垂下しているのがみられるが、他の多くの文様構成は明らかではない。沈線の細広、磨消の部分・広狭よりかなりのバラエティーがあるものと考えられる。

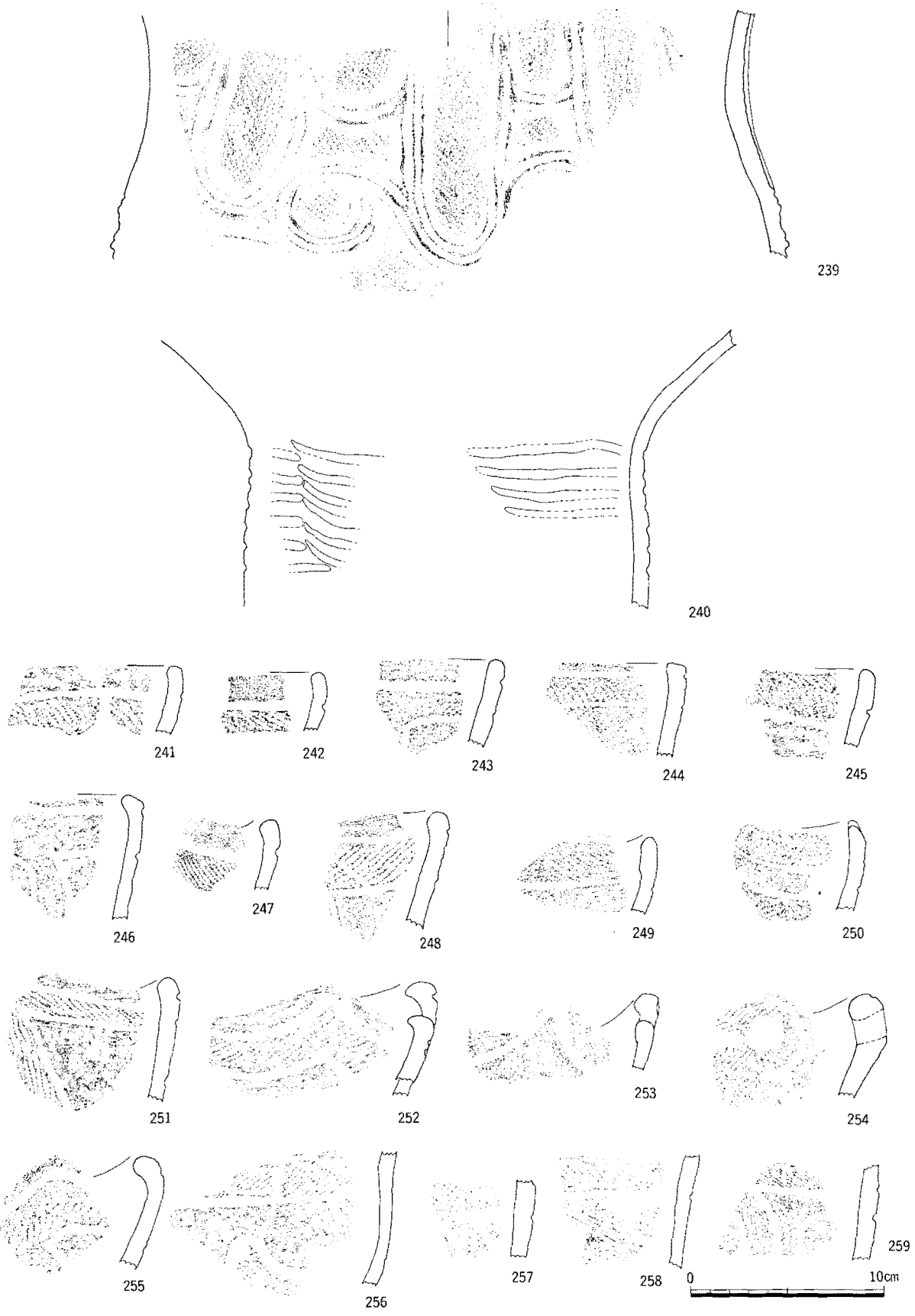
4類（第88図275）

注口土器と考えられるものである。横走する1条の縄文帯がみられ、1～3類に比較すると器壁は薄く黒褐色を呈する。

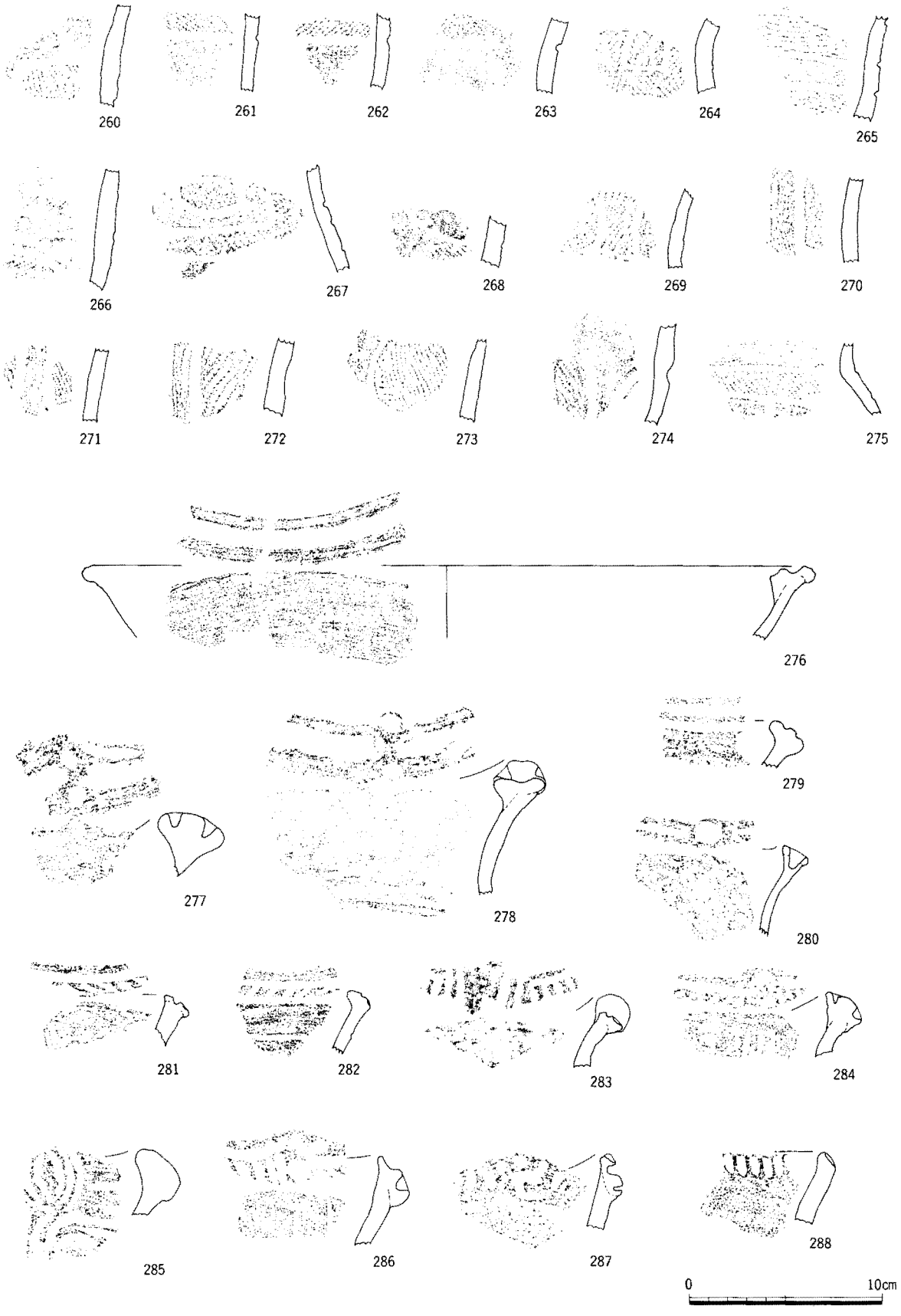
第14群土器（第88図276～288、図版第34）

口縁内外面に粘土帯を貼付し口縁端部を肥厚させ有段状とし、口縁上面・外面に文様を施文するものを本群とする。口縁形態は多くが波状縁を呈すと考えられるが平縁もある。

1類（第88図276～278）



第87図　包含層出土土器（13）



第88図　包含層出土土器（14）

276～278は肥厚させた口唇部に太い1条の沈線を巡らすものである。276・277は同一個体資料であり、278と伴にネジリ状の突起部をもち、突起上に2つの刺突を有する。内外面とも丁寧な調整が施されているが口唇部、口縁部とも無文としている。

2類（第88図279）

肥厚した口唇部に2条の沈線を巡らすものである。口唇上の沈線間には縄文ＲＬを施し縄文帯を形成している。口唇下は無文となると考えられる。

3類（第88図280～284）

平縁、あるいは波状縁と考えられる肥厚した口唇部に1条の沈線を巡らし、口縁外側端部を刻むものである。ただし、沈線の深浅・細太にはバリエーションがみられる。口唇下は無文のものが多いが、282は横走する沈線が、284は垂下する3条の沈線が認められる。280が円環状の突起部をもつ他、つまみ状の突起部をもつもの（283）、刺突を有すネジリ状の突起部をもつもの（284）がある。

4類（第88図285）

口唇内側に厚い粘土帯を貼付して断面を三角形状とし、対向連弧文風な文様構成が窺われるものである。口縁外側端部には節の細かい縄文ＲＬが施される。

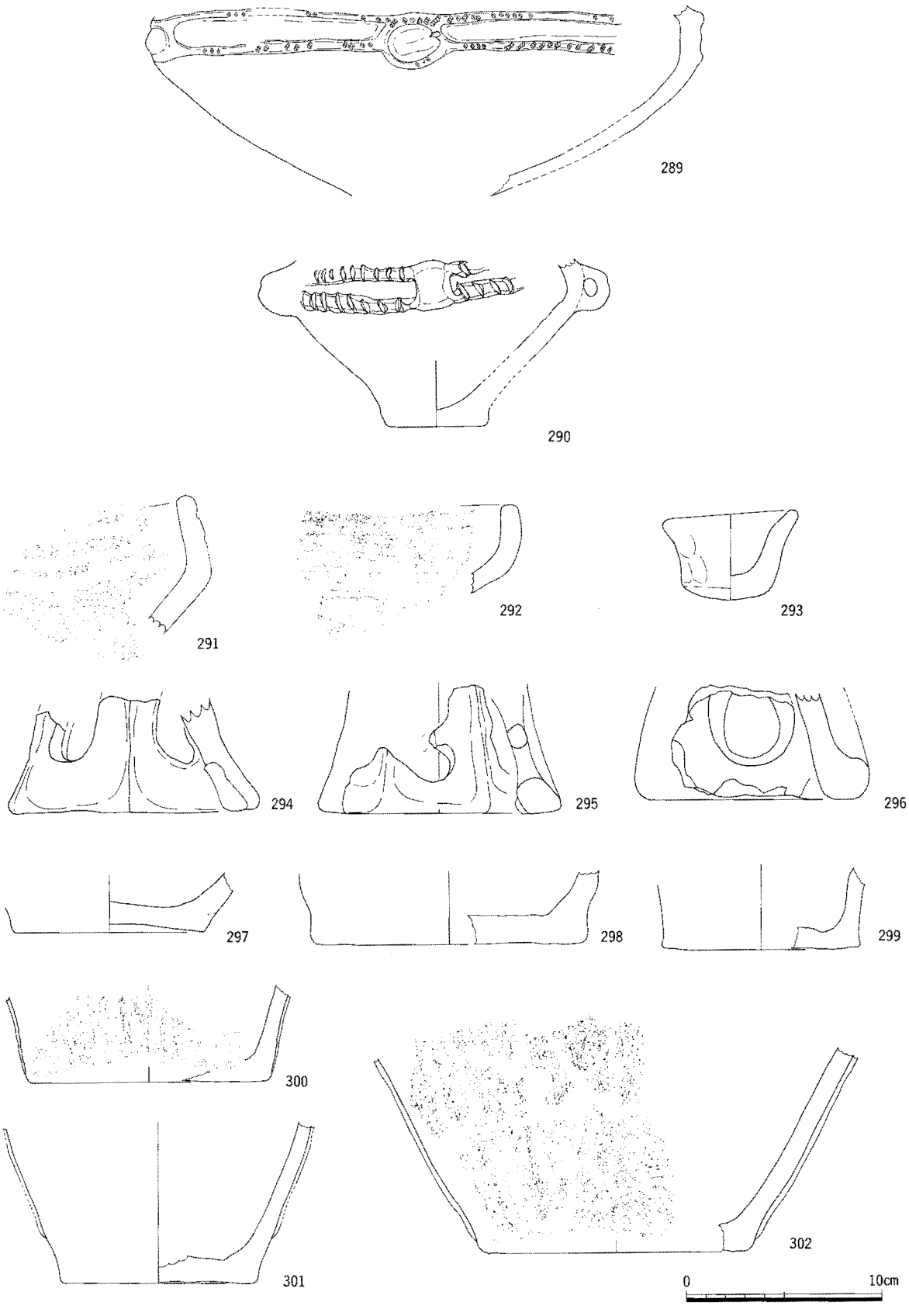
5類（第88図286～288）

口縁前面に粘土帯を貼付し肥厚させるものである。286は4類の284の上面施文が外面施文へ移行したものと考えられる。287は波頂下に「の」の字上の刺突をおき、口縁に沿い縦位の刻みを施す。288は肥厚部をもたず口縁端部を「く」の字形に内折させる。口縁端部に巻貝によると考えられる縦位の刻みをもつ。

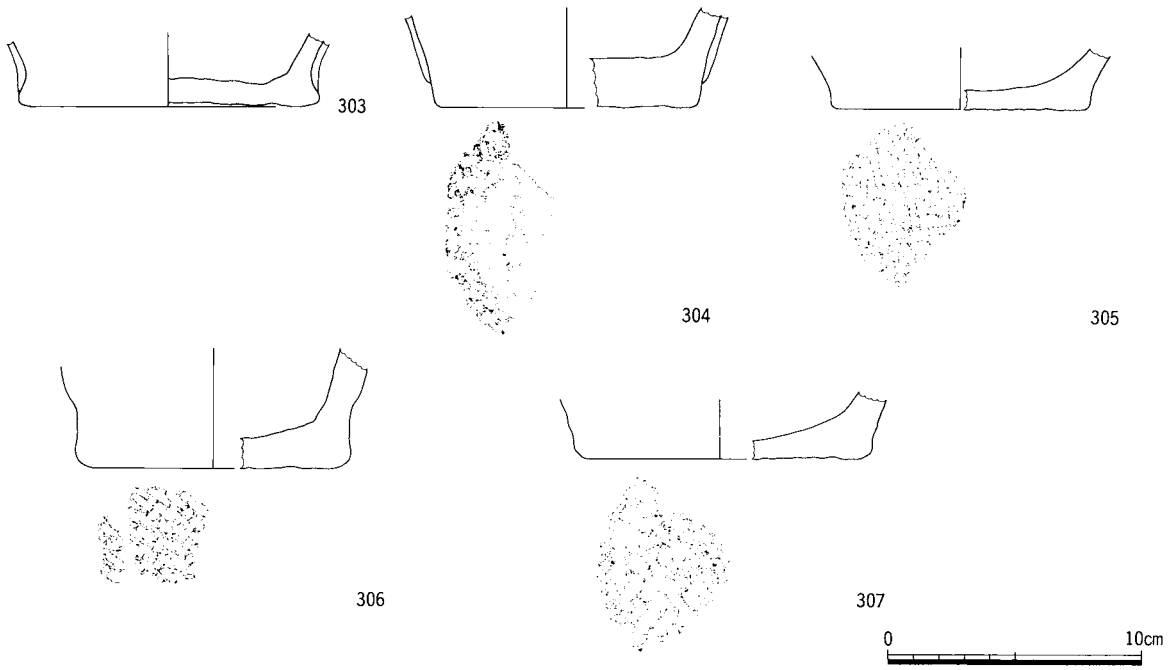
浅鉢形土器（第89図289～292、図版第34・35）

浅鉢形土器は4点出土しているが、大きく大型のもの（289・291・292）と小型のもの（290）に分けることができる。口縁部は大きく内弯するもの（289・290）とほぼ直立して受口状（291・292）となるものがある。289・290　はそれぞれ円環文、橋状把手を基点として2条の隆帯を口縁に沿い横走させており、290は隆帯上にキザミを施している。291は小さな波状縁を呈し、沈線による楕円形区画をもつ。胴部には垂下する沈線を施す。292は無文であるが非常に丁寧な調整が施されている。

手捏ね土器（第89図293）



第89図　包含層出土土器（15）



第90図　包含層出土土器（16）

外面に指頭圧痕が残る小型土器である。口径60㎜、器高43㎜を測り、口縁平面形は楕円形を呈する。

脚部・底部（第89・90図294～307）

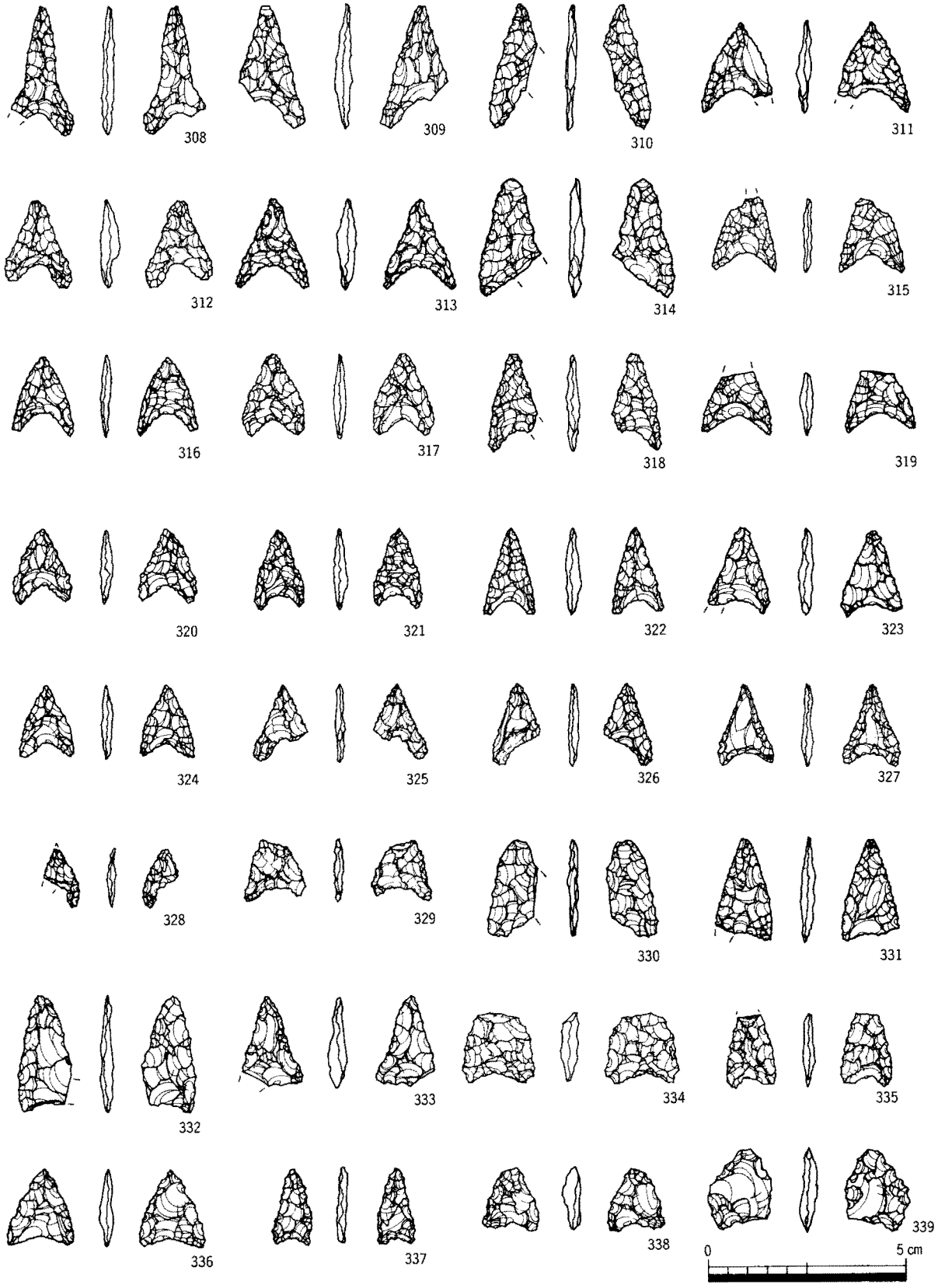
294～296は中空に仕上げられた脚部であり、いづれも楕円形、円形の透かし孔が穿孔される。第６群、あるいは第７群に伴うものと考えられる。

底部は上げ底ぎみのものが１点認められる以外はすべて平底である。底部圧痕には網代痕をもつもの（304～307）の他は無文である。胴部への立ち上がりについては、外に開きながら立ち上がるものが主体を占めるが、胴部下半がやや内弯するものがある。300～304については胴上部より垂下してきた隆帯がみられる。残存状況が悪く隆帯間の充填文については不明瞭なものが多いが、300・301には櫛描沈線文、302には斜行する沈線がわずかに認められる。

網代痕をもつものについては編み方が不明瞭なものが多いが、305は３本越え・３本潜り・１本送り、306は２本越え・２本潜り・交互に１本送り・２本送り、307は１本越え・１本潜り・１本送りである。

１　石　器

本遺跡の包含層から出土した石器は10,021点である。器種別内訳は石鏃108点、石錐７点、スクレイパー20点、ＲＦ７点、ＵＦ18点、クサビ形石器10点、礫器１点、石匙１点、異形石器１点、石製品１点、石核12点、石錘13点、打製石斧25点、磨製石斧４点、敲石５点、叩き石５点、凹石３点、磨石類１点、石皿２点、、剝片・砕片9,777点である。土器と伴に南側部分の傾斜地への流れ込みからの出土が非常



第91図　包含層出土石器（1）

に多い。以下、飛瀬遺跡分類に準じ説明を加える。

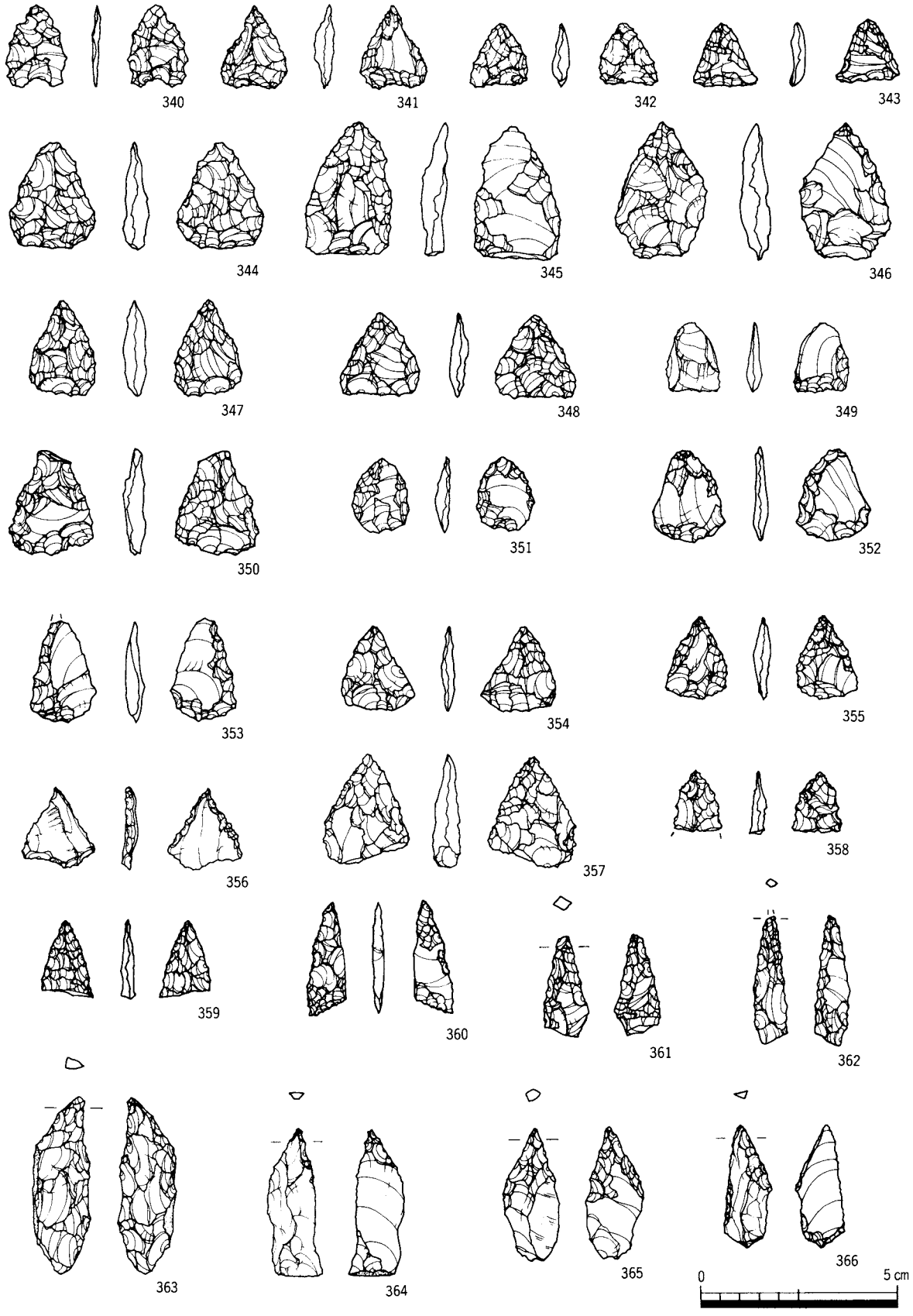
石　鏃（第91・92図308～360、図版35）

折損品等の一群を含め出土数は108点である。53点図示した。形態的分類ではⅠ類70点、Ⅱ類９点、Ⅲ類13点、Ⅳ類１点、Ⅴ類15点である。Ⅰ類は70点出土しており、34点図示した。（308～341）Ⅰ類は最も多く出土しているが短期間に属する資料と考えられ、その中の形態的バラエティーとして捉えられる。法量的には長さ1.5cm～2.5cm前後に集中し、重量は0.3～0.6ｇ前後と0.8～1.2ｇ前後と２つのグループに分かれる。その形態を作り出している素材剥片及び二次調整はまちまちである。先端角については25°～30°前後に中心があり、側辺部の形状も直線状に開くものが50点（71％）と本来は形態を反映する属性が近似している事から形態的バラエティーは少なくなるはずであるが、脚部及び基部の抉り込み部分の作り出しにその要因が認められそうである。抉り込み部分が５～８㎜と深く入るもの（309・310・312・313等）と2.5㎜以下と僅かに入るもの（337～339）に大別できる。またその抉り込み部分の形態が円形となるもの、「く」の字状となるもの、凹状の僅かな抉り込みのものに細別できる。「円形」と「く」の字の区分は二次調整の細かさが要因となる。326・327・339等から多くが貝殻状剥片を素材としているのが分かる。２点（下呂石）を除きすべてチャート製である。Ⅱ類は９点出土している。６点図示した。（350・351・353～356）大きな特徴は表裏に素材剥片（貝殻状剥片）のネガ、あるいはポジ面を残すような周辺部のみの二次調整を加え成形している点である。やや分類に問題があるかもしれないが、356のように折り取りのような加工も存在する。先端角は先端部が丸みをおびることから35°以上と大きな数値を示す。側辺部は凸状で基部付近で丸く、あるいはやや角度をもって基部につながる。356は基部を２回の切断で作り出した後、角度のある調整を加えている。逆三角形状を呈し茎部を意識しているようであるがⅡ類に含めた。Ⅲ類は13点出土している。８点図示した。（342～349）先端角のバラツキは大きいが、36°～42°に集中分布が認められそうである。側辺部の形状は直線上を呈し、Ⅰ類をひとまわり大きくした様相を呈する。やはり素材の剥離面を残存させるものが多い。345は基部にバルブ除去のための折断面をそのまま残すが正面側に折断面を打面とする調整が見られおそらく完成品であると思われる。349は貝殻状剥片を素材とし、裏面バルブ付近のみ調整を加え成形している。Ⅳ類とした352は基部中央に抉り状の調整を加えわずかな茎部を作出しているものである。あるいはⅡ類の範疇で考えるべき資料かもしれない。Ⅴ類は未製品・折損品を一括した。先端部及び脚部片が多い。先端部片には黒曜石製が２点含まれる。357～359は基部を折損、360はおそらく基部作製時に節理面より半損したものであろう。

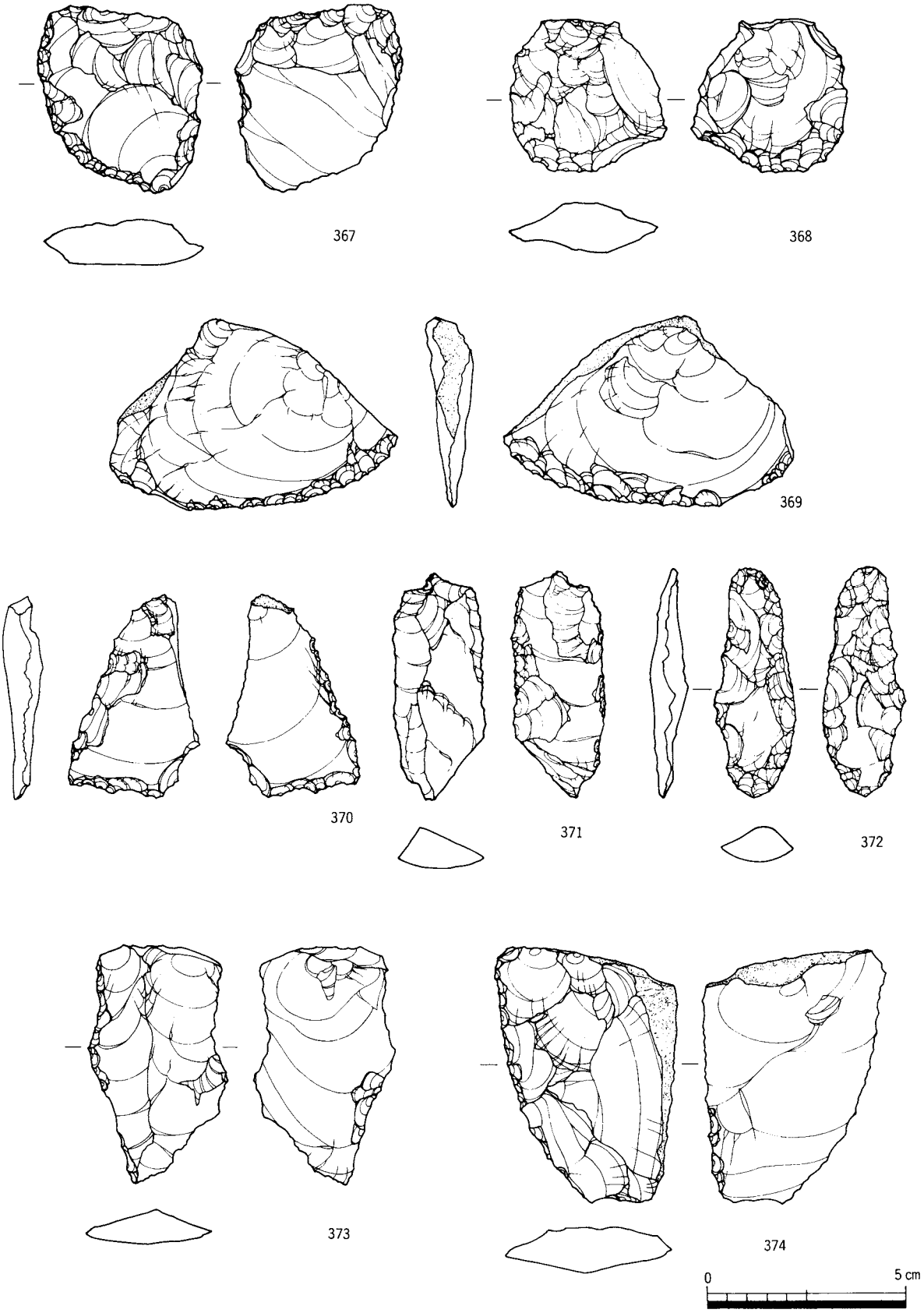
Ⅱ～Ⅵ類を通して認められることは、殆どがやや質の悪いチャートを素材としているためか二次調整が粗い、あるいは周辺のみに限られるものが多いことである。また、Ⅰ類中には328・338のように長さ15㎜以下、重量0.1ｇのものが２点存在するが、機能的に充分であったのだろうか疑問が残る。石材に関しては、下呂石製２点，黒曜石製２点の他はすべてチャート製（96％）を占め、飛瀬遺跡と同じ傾向をもつ。

石　錐（第92図361～366、図版36）

７点出土（６点図示）しており、すべてチャート製である。形態的には、Ⅰ類－４点（363～366）、



第92図　包含層出土石器（２）



第93図　包含層出土石器（3）

II類－３点（361・362）に分類できる。Ⅰ類は表面、あるいは側面に表皮、節理面をもつ粗悪な剥片を素材として、363を除き打点側を基部に、末端を刃部としている。365は入念な刃部を作出しているが、他は素材の形状を利用し形状を整える調整にとどまっている。363は側辺部に素材剥片が剥離された石核の打面部をとりこんでおり、表裏にその厚みを減じようとしている調整が一部加えられている。II類の361・362は細かな調整を加えて長い尖頭部を作り出し、先端には顕著な磨耗痕が観察される。361は尖頭部と基部との間に変換点を調整によって作り出している。Ⅰ・II類とも尖頭部分の断面は三角形、あるいは菱形を呈している。

スクレイパー類（第93・94図367～381、図版36）

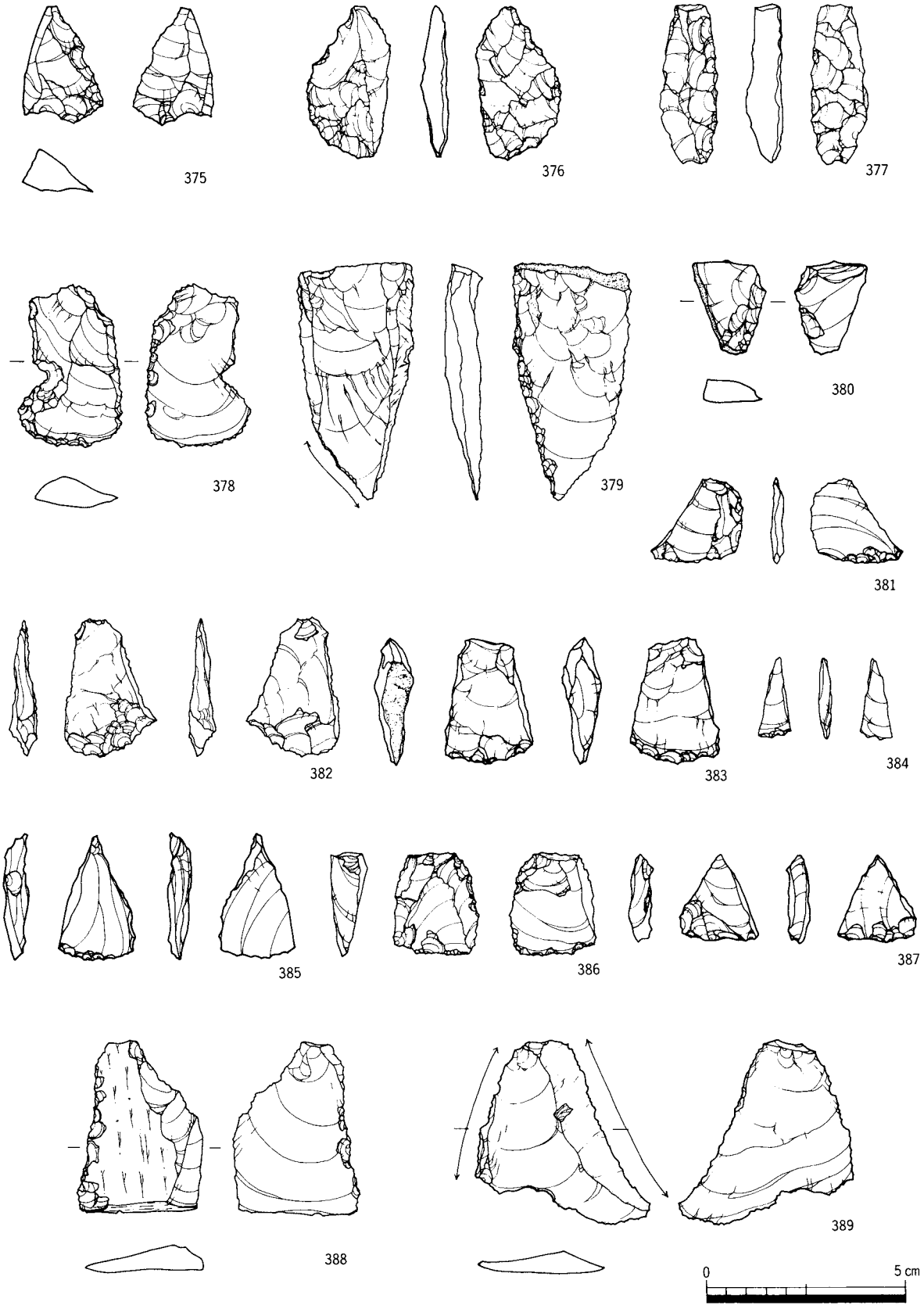
不揃いな調整が入るため明確に削器・掻器と区分するのが困難なものがあり、スクレイパー類として一括して取り上げる。20点出土しており、15点図示した。流紋岩製の分厚な大型剥片を素材とするものが出現してくるのが特徴であるが、主体はやはりチャート製である。その多くが不定形であり、用いられる素材、あるいは刃部の作出・位置関係に統一性は見られない。用いられる素材的観点からは、縦長の剥片を素材とするもの（370～379）と貝殻状の剥片、あるいは横長の剥片を素材とするもの（367～369・380・381）に分類できる。刃部は側縁部の一端、あるいは末端部に片面加工により作出されるものが多い。369・370・374は流紋岩製であり、369は横長剥片、他は縦長剥片を素材とする。調査時点において多くの流紋岩製の石核・剥片が検出されたが、それに量的にみあうような流紋岩製素材の定型的な剥片石器が無く、多くが剥片剥離段階のままの剥片使用に目的があったと考えられる。369は末端部に両面加工による刃部をもつが、左端部は剥片のもつ厚みのためやや急角度な刃部となる。370・374は左側縁部に腹面側からのやや大きめな調整による刃部をもつ。372はやや弯曲する剥片の左側縁部にはやや角度のある大きな調整を、他は細かな調整を加え両端部は丸く収めている。右側縁部の一部におそらく調整段階での折れ面をもつ。スクレイパー類に一応含めたが、他の機能をもつ可能性があるものである。375・377・380は不揃いな調整ではあるが急角度な刃部が作出されており掻器と呼んでもいいものであろう。378は３～４回の調整を加えノッチ状の刃部を作出している。

R　F（第94図382～387、図版36）

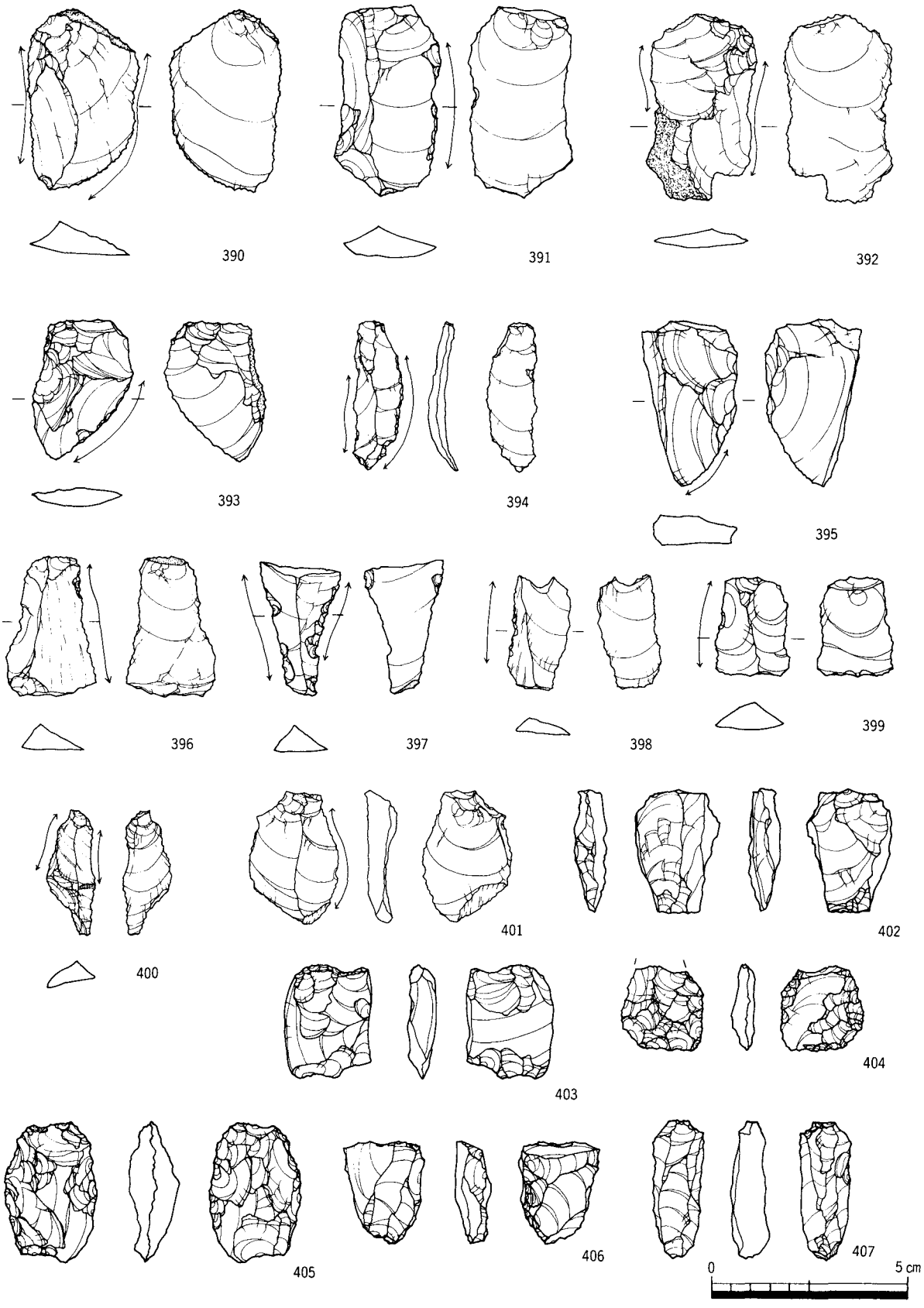
ここでＲＦとしたものは、ヘラ形石器と呼ぶものである。飛瀬遺跡では、一般に分類しているＲＦと伴に出土しているため別項を設けたが、底津遺跡においてはこのヘラ形石器のみ出土しているのでＲＦの一種としてここで説明する。ヘラ形石器とは基本的には縦長、あるいは貝殻状の剥片を素材として両側縁部を切断し平面形を台形、あるいは三角形状とし、鋭利な末端部に小剥離痕が認められるものである。７点出土している。384は小型の部類にはいるが、他は非常に定型的である。すべてチャート製である。

U　F（第94・95図388～401、図版36）

18点出土している。400の黒曜石製を除きすべてチャート製である。13点図示した。いわゆる「刃こぼれ」状の細かい非連続な剥離痕が認められるものであり、多くが縦長の剥片を素材とするが不



第94図　包含層出土石器（4）



第95図　包含層出土石器（５）

定形である。観察できる剥離痕は背面側に多く認められるが不揃いである。また、その切り合い関係も不規則であり以上より使用の結果と考えられる。400はややねじれをもつ黒曜石製の縦長状の剥片を素材とするものであり、両側縁に細かな剥離痕が観察される。

クサビ形石器（第95図402～407、図版36）

加撃と衝撃によるツブレ状の剥離痕が対象的な位置に認められる石器である。10点出土しているが、すべてチャート製である。6点図示した。上下端にツブレ状の剥離痕が著しいのは、405及び407のみで、他はバルブのあまり発達しない大きな剥離痕が入る。406は裏面左側縁部にツブレ状の剥離痕が密集しており、表面右側縁部にも僅かに横方向の小剥離が観察され、左右（横方向）にもクサビとして機能していたと考えられる。406はややねじれをもつ剥片を素材とし、上端は剥片の縁辺に沿って横方向の、下端は稜に沿って縦方向のツブレが発達している。

礫　器（第96図408、図版36）

1点出土している。砂岩製の河原石の長軸の一側縁に4～5枚の大きな調整を加え刃部を作り出した後、数回の細かな調整を施している。刃部には明確な磨耗痕や刃こぼれは認められず、作製時の鋭利な面を残存させている。

石　匙（第96図409、図版36）

1点出土している。横長の分厚な剥片を素材とする。つまみを素材剥離時の末端側に作出し、その下端の縁辺が刃部となる横形のものである。刃部は主に裏面側から表面側に向かって粗い調整を加え僅かに鋸歯縁状を呈する。両側からノッチ状の調整を入れつまみ部を作出しているが、やや寸詰まりな感を呈す。チャート製である。

異形石器（第96図410、図版36）

下端部に礫面を取り込む巾狭な剥片を素材としてつまみ部から約80°の開きで尖頭部分がのびる。尖頭部端を欠損するが、入念な調整を加え断面を菱形とする。また、つまみ部基部側にややノッチ状となる調整を施し紐掛かり部を作出しているように考えられる。

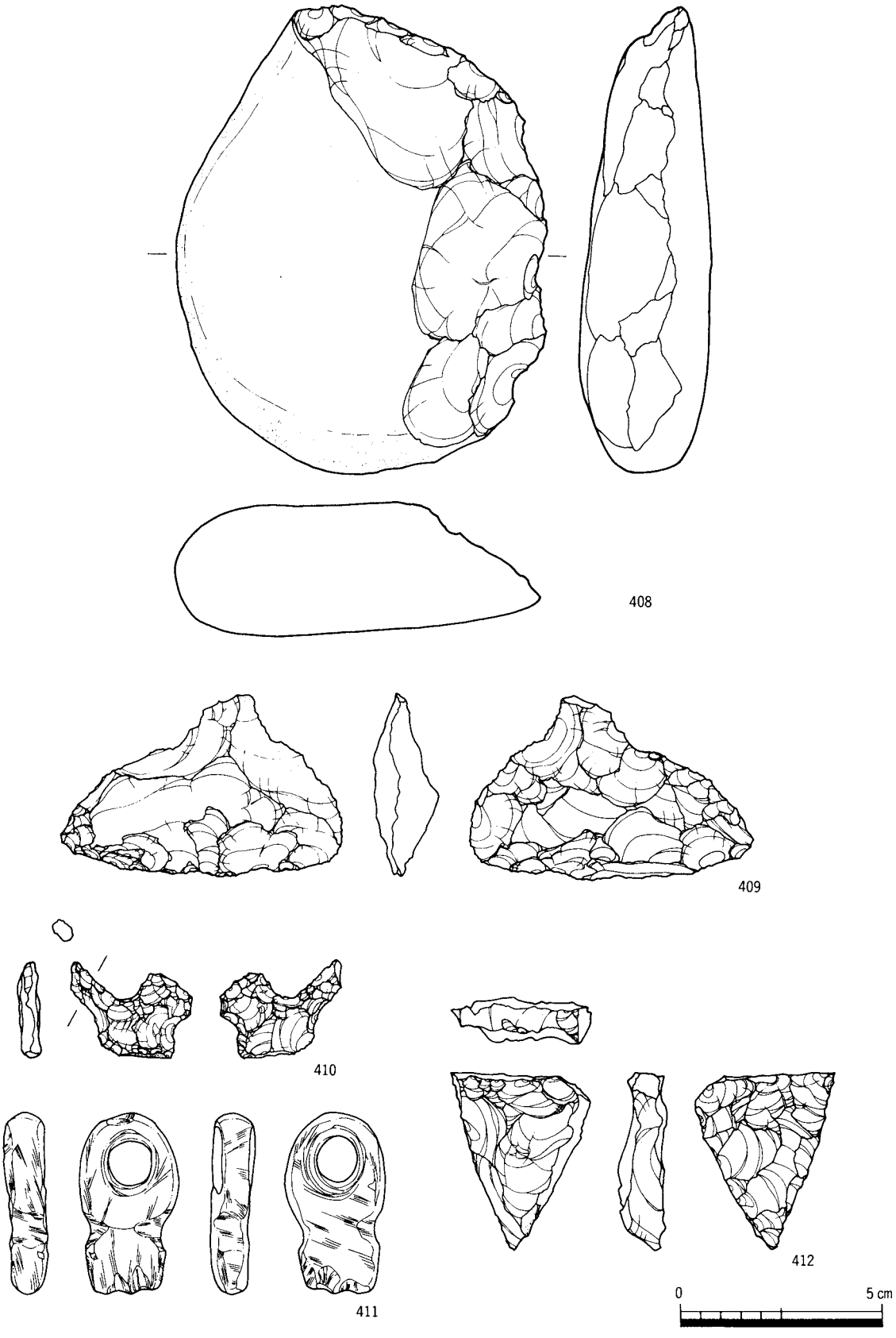
石製品（第96図411、図版36）

灰オリーブ色を呈する流紋岩質凝灰岩製である。軟質な感じをうける。鍵形を呈し、上端に径約15mmの穿孔をもつ。中央やや下端寄りにクビレ状、下端部に三つ指状の擦り込みを施している。

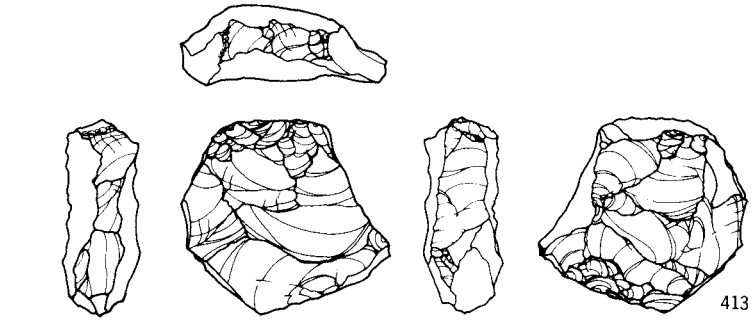
石　核（第96～98図412～416）

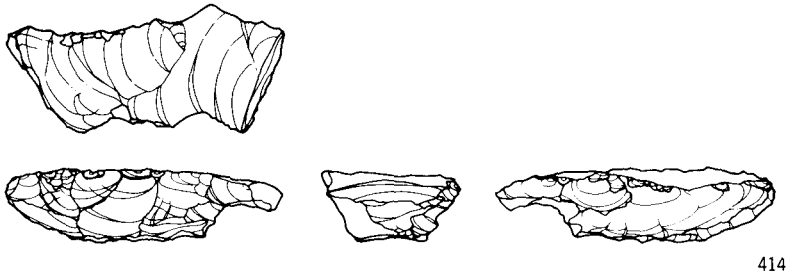
石核は12点出土している。石材はチャート製（9点）、流紋岩製（2点）、石英製（1点）が用いられている。他にコアブランクと考えられる拳大程度のチャート製及び流紋岩製の原石を4点検出している。ここでは、飛瀬遺跡での分類を参照とするが、一応以下にその概略を説明する。

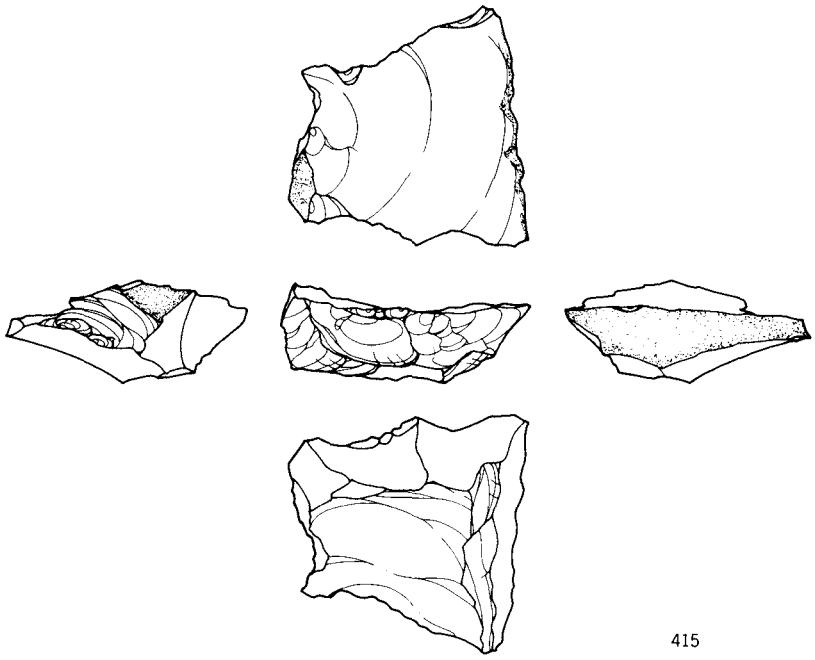
Ⅰ類　分割礫を素材とする。平坦な自然面（節理面）を打面として剥片剥離作業を行う。剥片剥



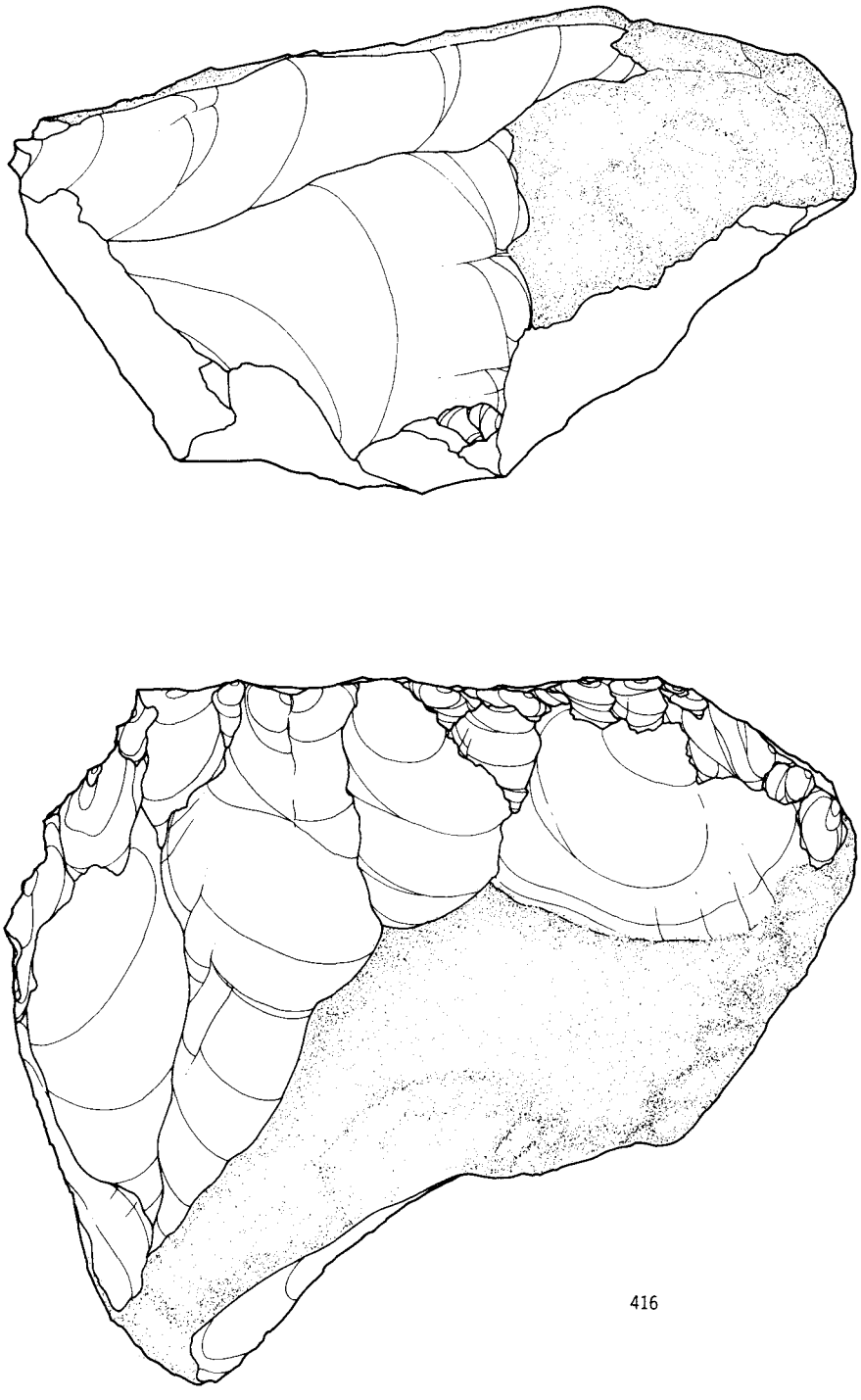
第96図　包含層出土石器（6）







第97図　包含層出土石器（7）



第98図　包含層出土石器（8）

離作業面の設定位置により以下に細分する。

Ⅰａ類　作業面が正面で行われるもの。

Ⅰｂ類　作業面が全周するもの。

Ⅱ類　板状剥片を素材とし、打面が１～２枚で、剥片剥離作業面が限定されるもの。

Ⅲ類　厚みのある板状剥片を素材として、打面転移が頻雑に認められ、剥片剥離作業面において切り合いがみられるもの。

底津遺跡ではチャート製のⅡ類及びⅢ類に属する小型の資料が多い。412はⅢ類に属し、上端の自然面を打面とし表裏で剥片剥離作業を行った後、裏面において90°打面を転移してやはり自然面を打面として剥片剥離作業を行っている。上端打面からの表裏の剥片剥離作業の前後関係は不明である。413～415はⅡ類に属する。413は上端の剥離面を打面として表裏で剥片剥離作業を行う。414、415は素材剥片のポジ面を打面としている。414はほぼ全周、415は前面のみで剥片剥離作業を行っている。前者は80°前後、後者は60～70°前後の打角をもつ。また、第13号住居址炉付近で417の石核を確認している。流紋岩製であり、原石の2/3程度のものと考えられる。ほぼ平らな自然面を打面として非常に大きな縦長の剥片を４枚程剥離している。現底津川でも同程度の大きさの原石が採集可能である。

石　錘（第99図417～428、図版37）

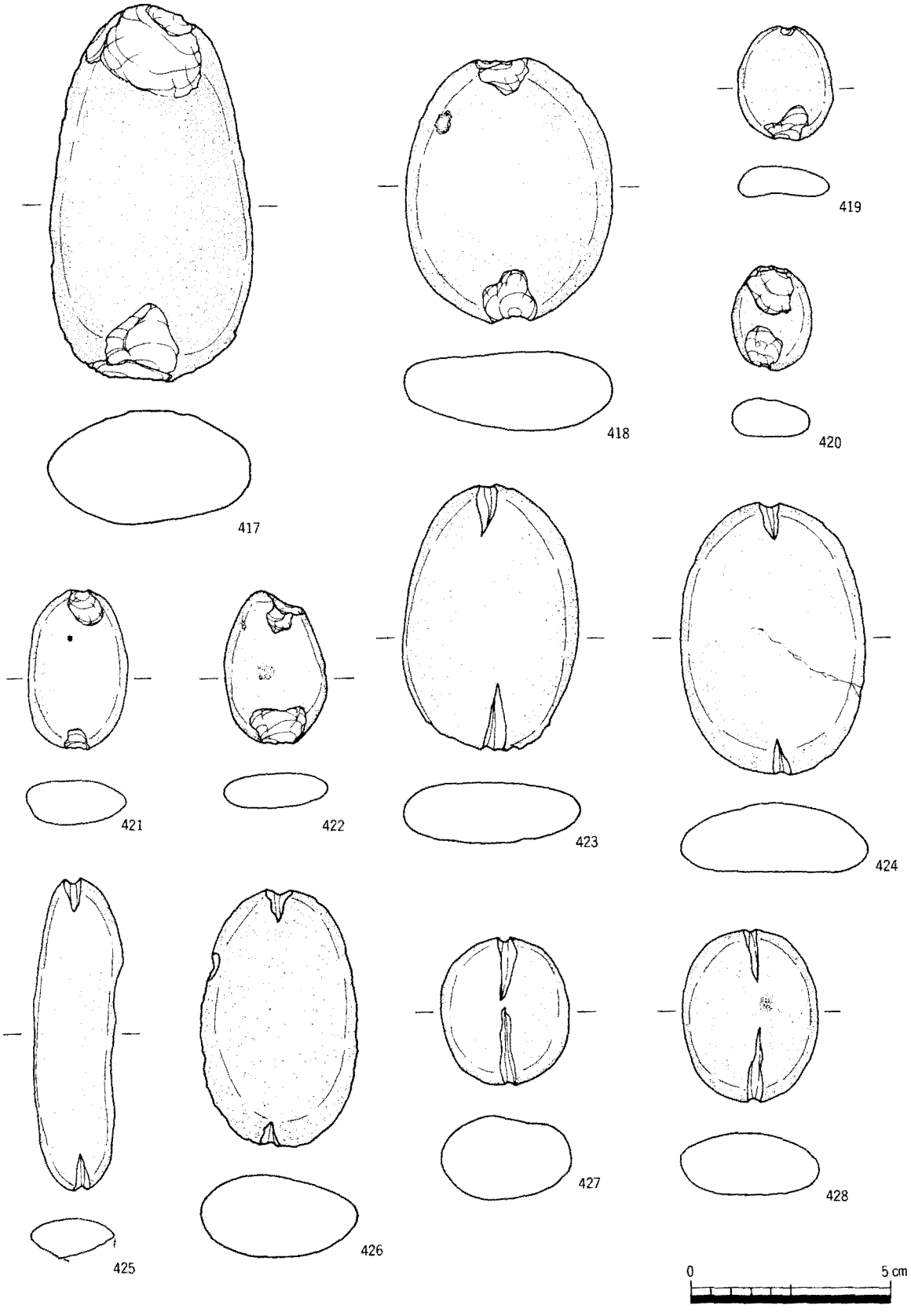
礫石錘７点、切目石錘６点の出土がある。石材は、砂岩・流紋岩・粘板岩が利用されている。礫石錘は重量が100ｇ以上のものと20ｇ以下のものに大別できる。打ち欠き部分は磨耗が観察される。切目石錘は平面形がやや長円形になるもの（425）を除き他は円形あるいは楕円形を呈するが、重量は65～96ｇに入るものと18～37ｇに入るものに大別できる。なお、425及び428は被熱している。

打製石斧（第100図429～436、図版37）

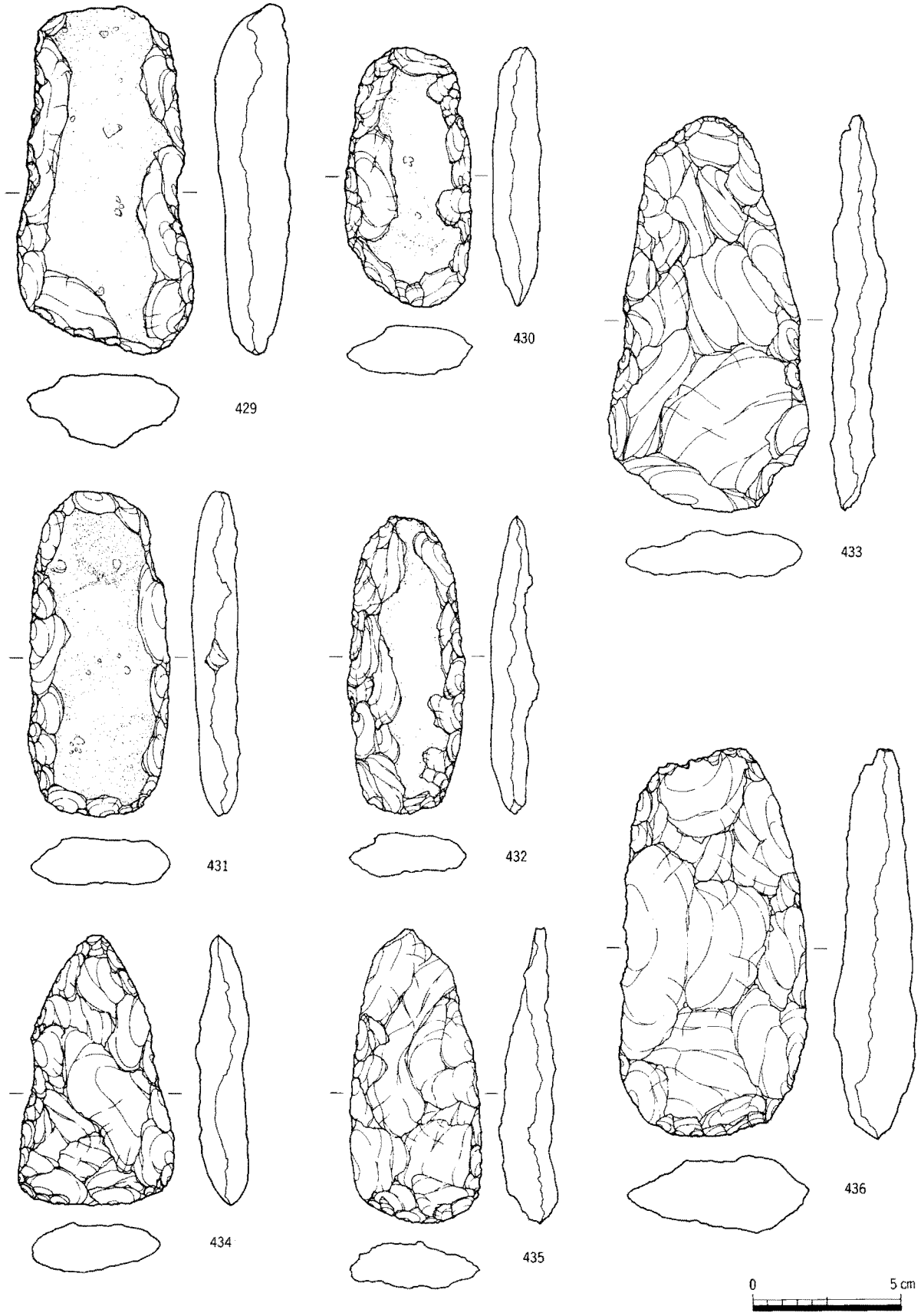
25点の出土があり、８点図示した。石材的には砂岩、流紋岩が用いられ、飛瀬遺跡にみられた粘板岩製は存在しない。飛瀬遺跡の分析に準ずるならば、背面（表面）に自然面をもつ例は15点存在し（60%）、ほぼ飛瀬遺跡同様な素材の獲得・剥片剥離作業・二次調整が行われたと考えられ、前述した第Ⅰ工程から第Ⅲ工程にわたる作業は存在した可能性が高い。また、縁辺部（体部、基部併せて）にツブレ状の敲打痕が認められる資料が17点（68%）存在し、やはり柄部等の装着と関連が強いと考えられる。刃部については、刃部を素材剥片剥離時に形成された縁辺をそのまま使用するもの５点、調整を加えるもの８点存在し、前者が刃角27°～38°、後者が30°～59°と飛瀬遺跡と同様差異が認められる。433～435は明らかに基部に向かうにしたがい大きめの調整を加え、撥形を意識していると考えられる。

磨製石斧（第101図437～440、図版37）

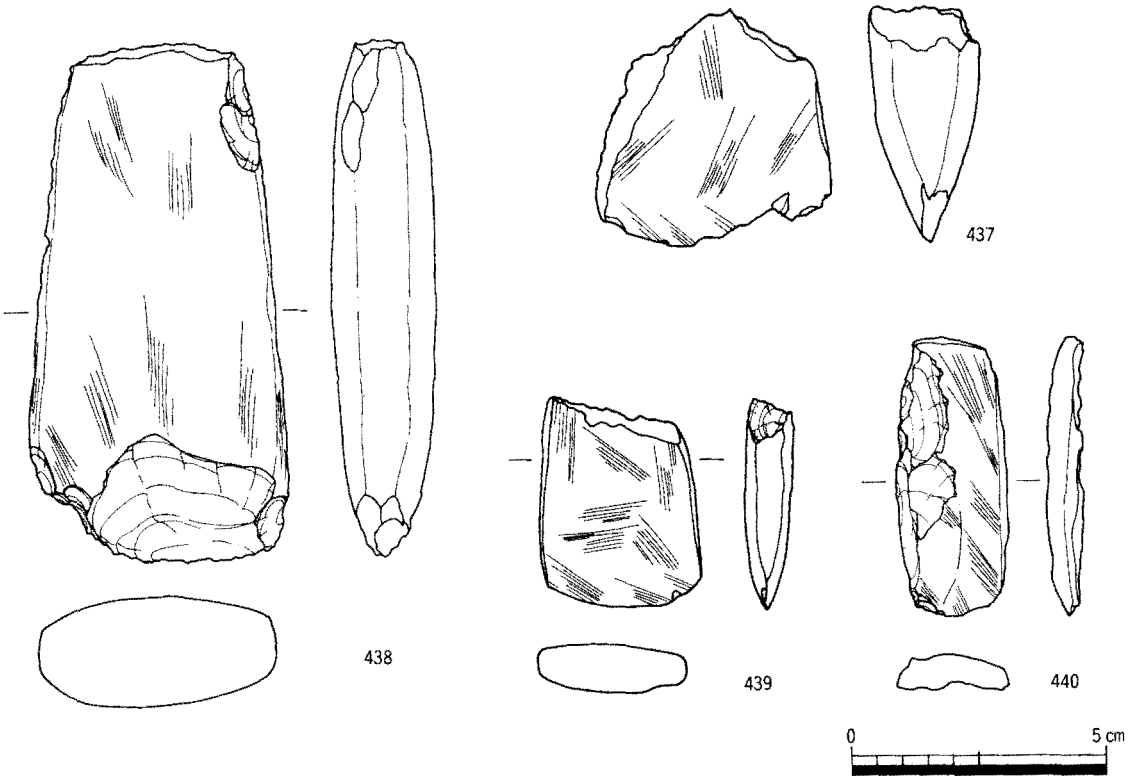
４点出土している。形態的にはすべて断面が隅丸長方形を呈する定角式の範疇に含まれると考えられる。438は玄武岩？製である。刃部は折れ、衝撃痕のような大きな剥離痕が刃部両面に観察され叩き石として転用されたのであろうか。437は刃部のみである。両刃の刃部形態を呈し、刃こぼれがみられる。結晶片岩製である。439・440は小型の部類に入る。439は基部を折損する。薄手で基部側

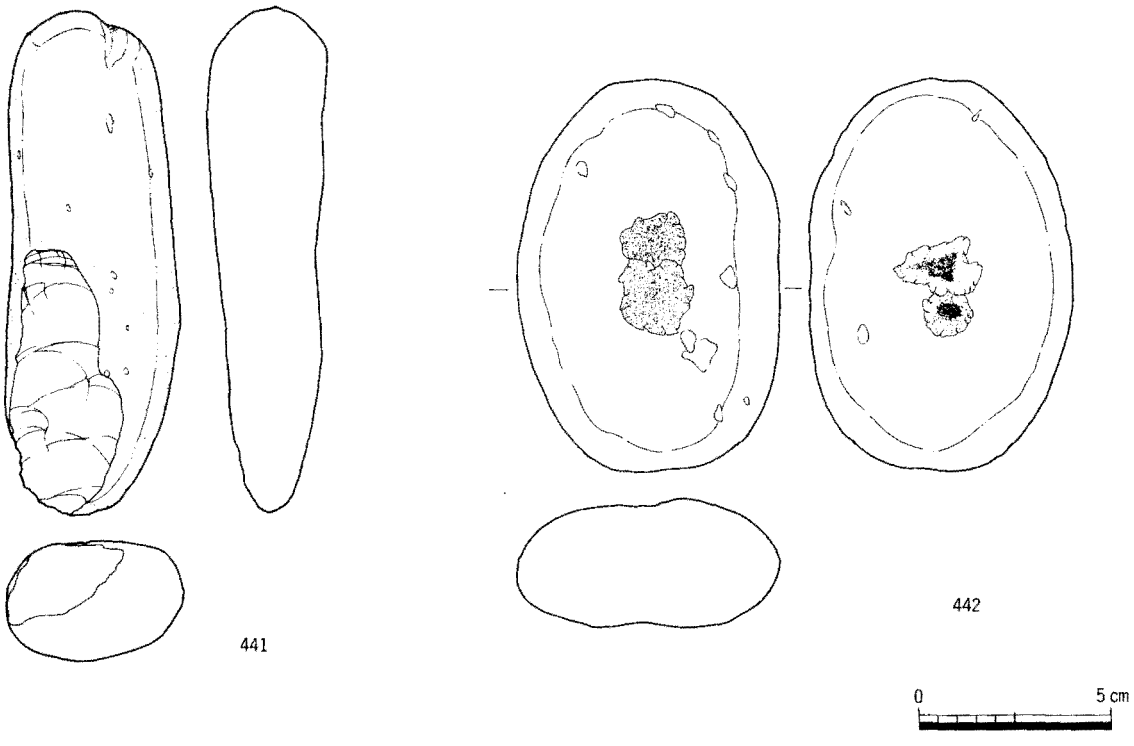


第99図　包含層出土石器（９）

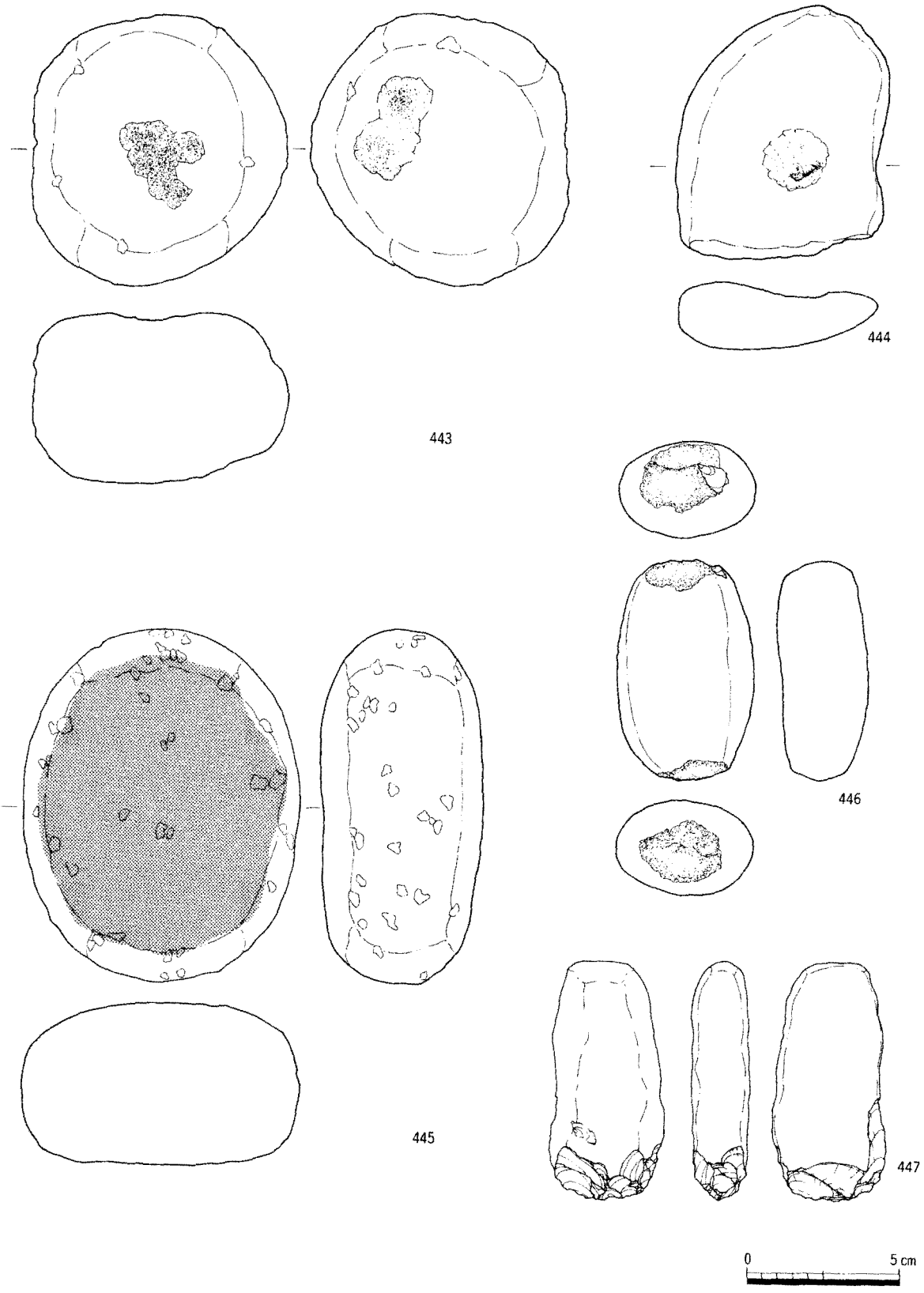


第100図　包含層出土石器（10）

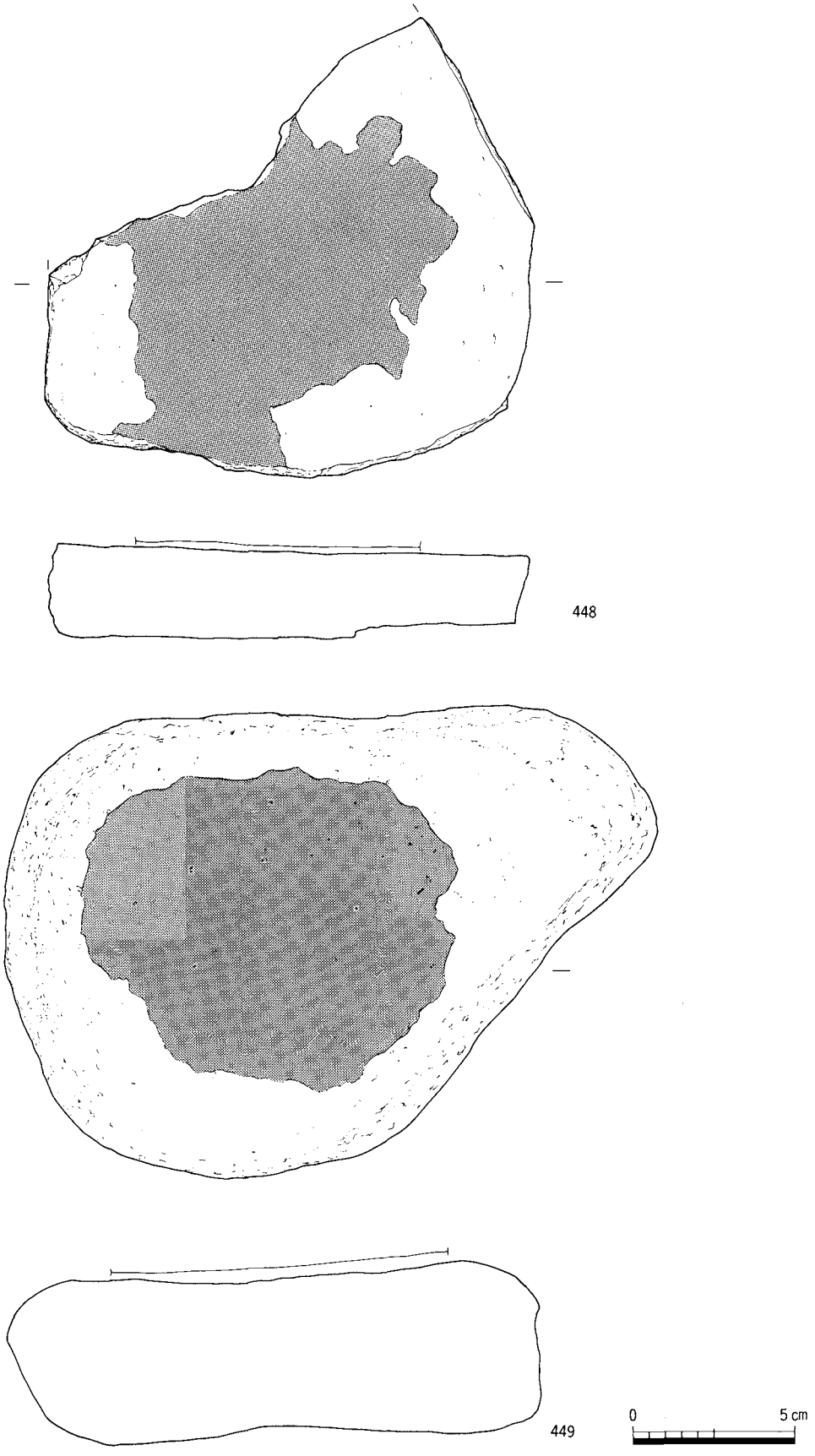




第101図　包含層出土石器（11）



第102図　包含層出土石器（12）



第103図　包含層出土石器（13）

がやや細くなるものと思われる。結晶片岩製である。440は全長55㎜、最大巾22㎜を測るが、被熱したと考えられ、裏面側が剝がれるように折損している。一部に敲打痕を残す。粘板岩製である。

敲　石（第102図446、図版37）

5点出土しており、すべて長楕円礫（砂岩製）である。446は上下端にアバタ状の敲打痕が認められ平坦な面を形成している。他は一端のみにアバタ状の敲打痕が認められる。

叩き石（第101・102図441・447、図版37）

一端に敲打による大きな剝離痕をもつものを叩き石とした。5点の出土がある。441は下端部に一枚の大きな剝離が入る。砂岩製。447は凝灰岩製であり、石核の可能性もあるが下端の先端部両面に剝離痕が集中する。

磨　石（第102図445、図版37）

1点出土している。445は花崗閃緑岩製であり、表裏面に平坦な磨面をもつ。

凹　石（第101・102図442～444、図版37）

3点出土している。安山岩製の円礫を用いて、表面に1ヶ所の凹みをもつもの（444）、表裏両面に連続した2ヶ所の凹みをもつもの（442・443）がある。凹み部分の平面形、深度等については共通性は窺われないが、いずれも敲打によるものと考えられ、底部部分にアバタ状の凹凸が観察される。特に444の凹みについては、他のように皿状ではなく浅いすり鉢状を呈する。

石　皿（第103図448・449、図版38）

2点出土している。448は凝灰岩製で板状を呈する。土壙墓の配石の1つとして使用されていたものである。表面側ににぶい光沢を有する磨耗面が不規則に広がるが、下端部で側辺部へと続いている。側辺の形状から欠損部分は全体の4/1程度と考えられる。重量約8kgである。449は河原石素材の石皿である。表面側にすり鉢状を呈する凹みをもつが上端側が高く下端側が低くなっている。流紋岩製である。重量約12kgである。

第Ⅴ章　自然科学分析

底津遺跡竪穴住居址炉址の熱残留磁化測定

藤　根　　久（パレオ・ラボ）

1．はじめに

底津遺跡は、武儀郡洞戸村栗原字底津地内に所在する縄文時代中期末に属する住居址などからなる。ここでは、これら住居跡の炉址について、その炉址焼土の熱残留磁化を測定し、記録される地磁気の方向から焼成された年代の推定を行う。

2．考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のＮ極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在の遺跡付近の偏角は約7.02°、伏角は約49.01°、全磁力（水平分力）は約30690.2（nT）である（理科年表、1993；いずれも1990年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁石になれる鉱物）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る（これが残留磁化である）。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉址の焼土の熱残留磁化の測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977；Shibuya、1980）。また、湖や浅海の堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている（Hyodo ほか、1993；図106）。

年代のよく分かっている遺跡の焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土の残留磁化測定を行い、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている遺跡焼土についても、遺物とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、^{14}Ｃ年代測定法などの他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から

得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、考古遺物等による推定年代が参考となる。

3．試料採取および残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、1）測定用試料の採取および整形、2）熱残留磁化測定および統計計算を行い、地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成時の年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認・検討するために、段階交流消磁も行う。熱残留磁化測定を行った試料は、6号住居址および7号住居址のそれぞれの炉址焼土である。

1）．測定用試料の採取および整形

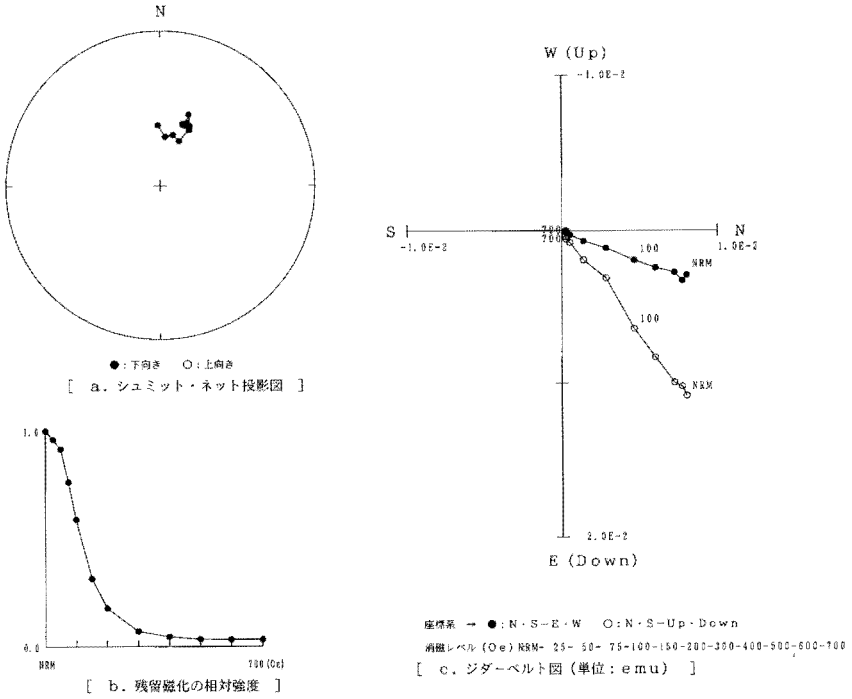
試料は、焼土面において、①一辺数cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや堅め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cmの立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、6号住居炉址が5個、7号住居炉址が9個である。ただし、6号住居炉址については、その焼土部分が小さく、統計上必要な試料数が得られないため、参考として測定した。

2）．段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算

試料の熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：㈱夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料（6号住居炉址はNo.04、7号住居炉址No.07）について交流消磁装置（DEM-8601：㈱夏原技研製）を用いて段階的に消磁し、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した（図104、図105）。その結果、磁化強度は10^{-3}emu前後と強く、磁化保持力は100Oe（エルステッド）においてNRMの約60～70%前後（NRM：自然残留磁化）を示している（b．残留磁化の相対強度）。また、磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録している（c．ジダーベルト図）。以上のことから、100Oeで消磁した時の残留磁化方向を、当時の地磁気の方向として採用した。また、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料についても、100Oe消磁後に残留磁化を測定し、各試料の磁化方向とした。

角炉跡の複数試料の測定から得た偏角（Di）、伏角（Ii）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（Dm、Im）を求めた（表10）。その結果、7号住居炉址では、偏角および伏角の各誤差は小さく、信頼度係数（k）も297.08と比較的高い数値を示している。ただし、6号住居炉址は、測定数が少ないため信頼度係数は低い。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地

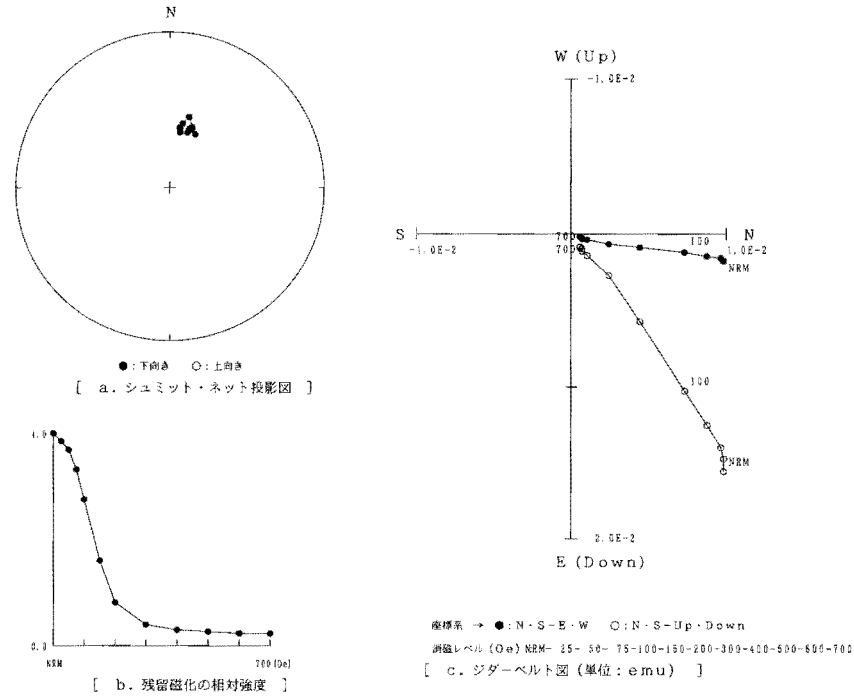


[a. シュミット・ネット投影図]

[c. ジダーベルト図（単位：emu）]

[b. 残留磁化の相対強度]

第104図　6号住居址（No.04）の段階交流消磁結果

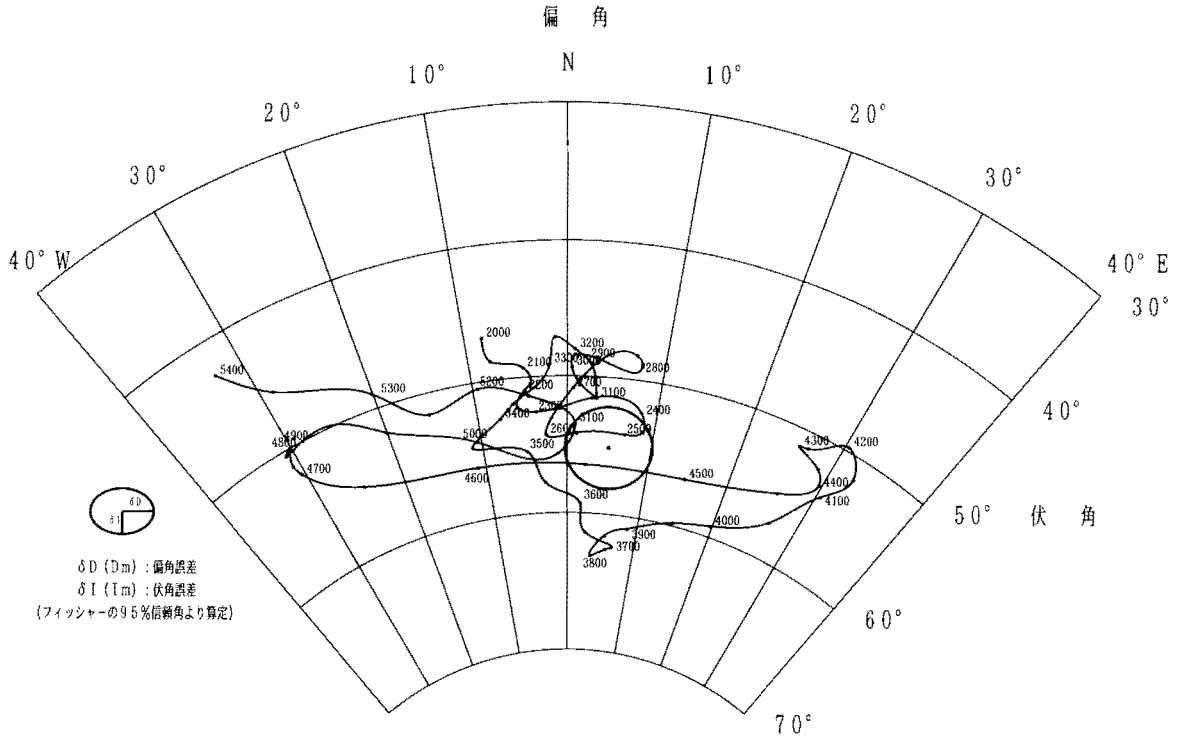


[a. シュミット・ネット投影図]

[c. ジダーベルト図（単位：emu）]

[b. 残留磁化の相対強度]

第105図　7号住居址（No.04）の段階交流消磁結果



第106図　7号住居址の残留磁化測定結果と永年変化曲線

理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した7.02°Wを使用した。その結果は、Hyodo ほか（1993）による地磁気変化曲線とともにプロットした（図106）。なお、地磁気変化曲線は、Hyodo ほか（1993）のデータをスプライン曲線で作成したものである。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差を示す。

4．焼成年代の推定

住居炉跡の熱残留磁化測定の結果は、7号住居炉址では9カ所の測定結果から、比較的誤差の小さい偏角・伏角値が計算された。この偏角・伏角値は永年変化曲線との比較から、概ね3年代値が推定できる。このうち遺物の年代（縄文時代中期末）に近い4,540±25 y.B.P.が最も有力な年代と考える。一方、6号住居址では統計的に必要な測定数が得られなかったため、焼成年代を推定するには至らなかった。ただし、測定数が少ないものの、4,550 y.B.P.前後（誤差70年程度）の年代を示している。

住居炉跡の地磁気年代推定結果

遺　構	出土土器	地磁気推定年代（y.B.P.）
6号住居炉址	加曽利E3式併行	4,550±70（参考値）
7号住居炉址	加曽利E3式併行	$2,515^{+50}_{-1,175}$、4,540±25、5,080±50

引 用 文 献

Fisher, R. A,. 1953 : Disparison on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, p.295-305.

広岡公夫、1977：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15, p.200-203

Hyodo, M., C. Itota and K. Yasukawa (1993) : Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetization of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan, J. Geomag. Geolectr., 45, p669-696.

理科年表、1993：国立天文台偏、丸善、p952.

Shibuya, H.1980 : Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p

第5表　底津遺跡石鏃属性表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	先端角	抉深(基長)	最大幅の位置	折損部位	基部形態	側縁部形態	備考
1	Dell	チャート	2.2	1.3	4.5	0.9	37	2.5	基部	—	凹基	A 1	322
2	Dell	チャート	(2.5)	(1.1)	3	0.7	34	5.5	基部	右脚・先端	凹基	A 2	318
3	Dell	チャート	(2.3)	(1.6)	3.5	1	34	4	基部	左脚・先端	凹基	A 1	323
4	Dell	チャート	(1.9)	(1.4)	4	0.9	35	1.5	基部	左脚	凹基	A 1	
5	C 6 III	チャート	3.3	(1.5)	4.5	1.7	33	8	基部	右脚	凹基	A 1	309
6	G5614	チャート	(2.4)	(1.3)	3	0.8	33	3	基部	左脚	凹基	A 2	
7	Dell	チャート	(3.0)	(1.4)	3.5	1.6	—	2	基部	左脚・先端	凹基	A 1	332
8	X 1 I	チャート	1.5	1.5	3	0.4	25	1.5	基部	—	凹基	A 1	
9	A 3 II	チャート	1.5	1.2	2.5	0.4	28	2	基部	—	凹基	A 1	
10	B5815	チャート	1.6	1.1	3.5	0.5	29	2.5	基部	—	凹基	A 1	
11	A02796	チャート	2.1	(1.5)	3	0.6	28	6	基部	左脚	凹基	A 1	316
12	D01215	チャート	(3.2)	(1.1)	2.5	0.6	27	9	基部	右脚	凹基	A 1	310
13	Dell	チャート	(1.8)	2.3	3	0.7	26	3.5	基部	先端	凹基	A 1	
14	Dell	チャート	1.9	1.4	3.5	0.6	28	4.5	基部	—	凹基	A 1	320
15	Dell	チャート	(1.9)	1.4	2.5	0.4	28	3.5	基部	先端	凹基	A 1	324
16	Dell	チャート	2	1.2	3.5	0.6	27	3	基部	—	凹基	A 1	321
17	Dell	チャート	1.7	1.2	3	0.4	27	4	基部	—	凹基	D	
18	Dell	チャート	1.8	1	3.5	0.5	2.7	4.5	基部	—	凹基	A 2	
19	Dell	チャート	(1.7)	(1.2)	3	0.4	25	3	基部	左脚	凹基	A 1	
20	Dell	チャート	1.9	(1.2)	3	0.5	24	3.5	基部	右脚	凹基	B	
21	Dell	チャート	(1.6)	(1.4)	3.5	0.6	—	5	基部	左脚・先端	凹基	A 1	
22	Dell	チャート	(1.6)	1.6	2.5	0.5	—	3.5	基部	先端	凹基	A 1	
23	Dell	チャート	1.8	(1.3)	2.5	0.3	27	6.5	基部	左脚	凹基	B	
24	C6580	チャート	(1.7)	(1.1)	2.5	0.4	26	(2.5)	基部	右脚・先端	凹基	A 1	
25	D 0 I	チャート	(1.3)	(1.3)	2	0.2	39	3	基部	左脚	凹基	A 1	
26	Dell	チャート	2.1	1.7	3.5	0.9	33	1.5	基部	—	凹基	A 1	336
27	Dell	チャート	(2.3)	(1.5)	3	0.8	—	6.5	基部	左脚・先端	凹基	A 1	
28	Dell	チャート	(2.2)	(0.8)	3.5	0.5	—	(6.0)	基部	右半部	凹基	C	
29	Dell	チャート	(2.3)	(1.4)	3	0.7	32	6	基部	左脚	凹基	C	
30	Dell	チャート	(1.4)	(0.8)	2	0.2	—	5	基部	左脚・先端	凹基	C	328
31	Dell	チャート	(1.5)	(1.4)	1.5	0.1	—	5	基部	左脚・先端	凹基	A 1	
32	Dell	チャート	(1.5)	(1.0)	3	0.3	—	(1.0)	基部	先端・基部	凹基	A 1	
33	Dell	チャート	2.1	(1.2)	4	0.8	—	3.5	基部	右脚	凹基	A 1	
34	Dell	チャート	(1.8)	(1.1)	4.5	0.8	—	—	基部	先端・基部	凹基	A 1	
35	Dell	チャート	(1.1)	(1.0)	2	0.1	—	4	基部	左脚・先端	凹基	A 1	
36	A 3 III1063	チャート	1.7	1.7	4	0.9	47	1	基部	—	凹基	A 1	
37	C0296	チャート	1.8	1.3	5	1.1	49	(1.0)	基部	—	凹基	A 1	
38	B 3 II941	チャート	2.8	2	6.5	3.2	丸	(2.0)	基部	—	凹基	A 1	
39	Dell	チャート	1.5	1.3	4	0.7	35	1.5	基部	—	凹基	A 1	
40	Dell	チャート	1.1	(0.7)	2	0.2	30	(1.0)	体部	基部	凹基	D	
41	E 6 II285	チャート	1.7	1.5	3.5	1.2	丸	(1.0)	基部	—	凹基	A 1	
42	A 4 II227	チャート	(2.3)	(1.6)	4.3	1.1	30	—	基部	左脚	凹基	A 1	333
43	G 1 I	チャート	(2.0)	1.7	2.6	0.7	—	5.5	基部	先端	凹基	B	315
44	D 0 I	チャート	(2.6)	(1.5)	3.7	1.3	36	1.5	基部	左脚	凹基	A 1	331
45	A12791	チャート	(1.7)	1.8	3.4	0.9	—	4.5	基部	先端	凹基	A 1	319
46	B 0 I	下呂石	(2.3)	(1.8)	3	0.9	30	6	基部	左脚	凹基	D	311
47	D 0 I	チャート	(3.0)	(1.4)	3.8	1.4	35	4.5	基部	左脚	凹基	A 1	314
48	B 5 II824	チャート	(2.4)	(1.6)	2.5	0.9	—	3	基部	左脚	凹基	A 1	330
49	A II3810	チャート	(2.1)	(1.6)	4.4	1.5	40	2.5		基部	凹基	A 1	339
50	8 II672	チャート	(3.4)	(1.6)	3.7	1.1	36	5.5	基部	左脚	凹基	A 1	308
51	C 5 II577	チャート	1.6	1.5	4	0.8	丸	2.5	基部		凹基	A 1	338
52	G 5 II629	チャート	(2.1)	1.6	3.2	0.9	37	4	基部	先端	凹基	C	317
53	Dell	チャート	2.4	1.7	5	1.2	37	5.5	体部	先端	凹基	A 1	312
54	B 0 II3012	チャート	(1.8)	1.9	4.4	1.6	—	2	基部	先端	凹基	A 1	334
55	A 2 II3359	チャート	2.3	1.8	5.6	1.4	—	6	基部	先端	凹基	A 1	313
56	G 8 II685	チャート	2.1	1.4	2.6	0.6	32	3	基部	—	凹基	A 1	327
57	A 2 II	チャート	2.1	1.3	2.4	0.5	30	5	基部	左脚	凹基	A 1	326
58	B 6 II178	チャート	(1.4)	1.4	2.9	0.6	—	2.5	基部	先端	凹基	A 1	
59	B 6 II181	チャート	1.5	(1.1)	2.2	0.3	—	3.5	基部	右脚・先端	凹基	B	
60	B 4 II1021	チャート	(1.9)	(1.4)	2.1	0.4	30	5.5	基部	左脚	凹基	A 1	325
61	C 5 II244	チャート	1.6	(1.0)	2.4	0.3	26	3.5	基部	—	凹基	A 1	
62	F 8 II1265	チャート	(1.3)	1.4	2.4	0.3	—	3.5	基部	先端	凹基	A 1	
63	E 4 II1017	下呂石	(1.8)	1.2	2.9	0.6	—	3	基部	左脚・先端	凹基	D	335
64	F 6 II1293	チャート	2.1	1.5	2.4	0.6	33	2.5		—	凹基	D	340
65	F 7 II1425	チャート	(2.0)	1	2.2	0.5	30	1.5	基部	先端	凹基	A 1	337
66	D 7 II594	チャート	(1.2)	(1.1)	2	0.2	24	3	基部	左脚	凹基	A 1	
67	G 5 II1352	チャート	(1.6)	1.6	2.4	0.6	—	3	基部	先端	凹基	A 1	329
68	E 3 II504	チャート	2.1	(1.4)	5	1	26	1	基部	—	凹基	C	341
69	F 7 II1251	チャート	1.8	1.4	2.8	0.8	48	1	—	—	平基	A 1	349
70	A 2 II2452	チャート	2.1	(1.9)	3	1	35	2	基部	—	有茎？	A 1	356
71	Dell	チャート	1.8	1.8	4	1.8	54	5	基部	—	円基	E	352
72	F 7 III1403	チャート	2.2	1.5	3.5	1.1	47	7	基部	先端	円基	C	
73	H 5 II635	チャート	2.1	1.6	4	1.2	43	3	基部	—	円基	D	355
74	Dell	チャート	2.2	1.9	4	1.2	38	3	基部	—	円基	E	354
75	C 0 I	チャート	2.6	1.7	5	1.8	35	4	基部	先端	凹基	E	353
76	E 3 II1495	チャート	(1.5)	2.3	4.5	2.4	—	—	—	未製品	円基	E	
77	B 5 III	チャート	(1.9)	(1.3)	3.5	1	—	3	基部	先端	円基	E	
78	F 6 II1289	チャート	2.5	(2.0)	7.5	3.1	34	—	基部	未製品	平基	A 1	
79	Dell	チャート	2.2	2.1	4.5	1.8	40	0	基部	—	平基	A 1	348
80	Dell	チャート	1.9	1.8	4.5	1.7	37	0	基部	—	平基	A 1	
81	Dell	下呂石	1.6	1.4	4.5	0.8	31	0	基部	—	平基	A 1	342
82	Dell	チャート	3.5	2.3	7	5.6	41	0	基部	基部未調整	平基	A 1	345
83	C 1 II	チャート	3.5	2.3	8.5	6.2	40	0	体部	—	平基	A 1	346

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	先端角	抉深(基長)	最大幅の位置	折損部位	基部形態	側縁部形態	備考
84	G 5 II624	チャート	2.7	2.2	7	3.5	55	4	基部	−	平基	A 1	
85	G 4 II1452	チャート	2.7	2.2	6.5	3.8	48	1	体部	−	平基	A 1	344
86	A 1 I	チャート	2.3	1.6	4.5	1.8	47	−	体部	−	平基	A 1	
87	C 7 III991	チャート	1.9	1.9	4.5	1.6	46	−	体部	基部	平基	A 1	
88	G 7 II1268	チャート	1.7	1.6	3.8	0.8	48	0	基部	−	折損品	A 1	343
89	B 3 III	チャート	2.2	1.6	5	1.2	42	−	基部	−	折損品	−	
90	Dell	チャート	2.1	1.8	3	0.9	37	−	基部	未製品	折損品	−	
91	Dell	チャート	(1.1)	(0.6)	(3.0)	0.1	−	−	−	未製品	折損品	−	
92	Dell	チャート	(1.6)	(1.2)	(5.0)	0.7	38	−	−	脚部	折損品	−	
93	B 3 II59	チャート	(2.8)	(2.2)	(7.0)	3.8	34	−	基部	折損品	折損品	A 1	357
94	B 3 II914	チャート	2.4	1.7	6	2.8	32	4	体部	−	折損品	A 1	347
95	D 1 II	チャート	(2.6)	(2.1)	7	3.3	32	5	基部	先端	折損品	A 1	350
96	Dell	チャート	(2.0)	(2.3)	(4.0)	0.7	38	−	−	折損品	折損品	−	
97	C 7 II271	チャート	2.9	(1.1)	(3.0)	0.9	−	−	−	折損品	凹基	A 1	
98	Dell	チャート	(1.2)	(1.2)	(2.0)	0.1	38	−	−	折損品	折損品	−	
99	G 4 II659	チャート	(2.7)	(1.5)	(5.0)	1.4	−	−	−	折損品	折損品	A 1	
100	D 0 I	チャート	(1.4)	(1.1)	(3.0)	0.5	39	−	−	折損品	折損品	−	358
101	Dell	チャート	(1.9)	(1.7)	(4.0)	0.7	39	−	−	折損品	折損品	−	359
102	A 4 III780	チャート	(1.8)	(1.1)	(3.0)	0.6	35	−	−	折損品	折損品	−	
103	A 3 III393	チャート	(1.9)	(1.9)	(5.0)	1.8	−	−	−	折損品	平基	A 1	
104	Dell	チャート	(1.6)	(0.9)	3	0.2	−	−	−	折損品	折損品	−	
105	Dell	チャート	1.9	1.4	0.4	1	50	7	体部	−	円基	C	351
106	C 6 II310	チャート	(2.1)	(1.5)	5	1.3	49	−	−	折損品	折損品	−	
107	Dell	チャート	(1.8)	(1.2)	4	0.8	−	2.5	基部	先端・右脚部	折損品	−	
108	Dell	チャート	(1.2)	(1.0)	4	0.2	39	−	−	折損品	折損品	−	

注：側縁部形態については以下のとおりである。A 1→/\ A 2→/\ B→)(C→( ) D→┌┐ E→〈 〉

第６表　底津石錐計測表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
No.	出土区	石材	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	尖頭部長さ(mm)	尖頭部幅(mm)	尖頭部厚さ(mm)	備考
1	G 4 II653	チャート	32	9	4	1.5	12	6	4	362
2	Dell	チャート	35	15	9	4.3	9	7	6	365
3	Dell	チャート	25	12	4	1.3	10.5	6	3	
4	Dell	チャート	26	12	4.5	1.6	9	9	4.5	361
5	C 5 II247	チャート	32	12	4	1.6	10.5	7	2.5	366
6	B 0 II3173	チャート	38	13	4	2.4	10	9	3	364
7	A 2 II945	チャート	47	15	10.5	7.6	11	10.5	6	363

第７表　底津遺跡クサビ形石器計測表

	A	B	C	D	E	F	G
No.	出土区	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	D 1 II	チャート	32	22	8	6.8	402
2	D 0 I	チャート	36	25	13	10.5	405
3	F4554	チャート	25	15	3.5	1.5	
4	X 0 I	チャート	29	23	7.5	7.5	406
5	Dell	チャート	36	14	8.5	4.4	407
6	X 0 I	チャート	26	20	8	5.6	403
7	C 7 II	チャート	43	32	9.5	22.6	
8	G 6 II	チャート	50	44	21	52.9	
9	B 0 I	チャート	(21)	20	6	4.8	
10	E 3 II	チャート	55	22	6.5	12.3	

第８表　底津遺跡石錘計測表

	A	B	C	D	E	F	G	H
No.	出土区	石材	長さ１(mm)	長さ２(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	Dell	砂岩	75	73	56	33	190.7	
2	Dell	流紋岩	68	66	53	20.5	102.4	418
3	Dell	砂岩	95	91	51	28	187.5	417
4	Dell	砂岩	26.5	25	21	10.5	7.8	420
5	Dell	砂岩	38.5	35	26	9	14	422
6	Dell	砂岩	29	28	24	10	10	419
7	A 3 II40	砂岩	68.5	67	47	17.5	95.8	424
8	B 3 II439	粘板岩	67.5	66	44.5	15.5	65.4	423
9	B 5 III1361	流紋岩	44	43	34.5	17	37.3	427
10	A 2 II107	砂岩	64.5	63	39	21.5	77	426
11	C 0 II	粘板岩	79	77	21	10.5	25.4	425
12	B 5 I	流紋岩	41	39	26.5	12.5	18.2	421
13	E 3 II501	粘板岩	38.5	37	34	22	35	428

注：計測方法については渡辺誠氏の提唱案に基づく

第9表　底津遺跡打製石斧属性表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
No.	出土区	石材	長	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	摩耗痕	備考
1	B 5　177	流紋岩	136	680	16.5	160	55	B	—	体部	
2	B 5　147	砂岩	94	570	17.5	100	38	A	—	体部	
3	A 2　1897	流紋岩	123	630	25.5	220	33	A	—	体部	自然画有
4	B 4	流紋岩	86	460	20	70	38	A	—	体部	
5	A 0	砂岩	11.7	52	19.5	140	—	C	刃部	基部	自然画有
6	B 6　190	流紋岩	10.2	47	17.5	90	—	B	—	体部	
7	A 0	流紋岩	11.5	46	20.5	110	30	A	—	体部	
8	A 2　93	流紋岩	72	57	16.5	80	59	B	—	基部	自然画有
9	A 0	砂岩	68	58	19	80	—	C	刃部	体部	自然画有
10	B 6	砂岩	136	63	26	270	46	B	—	基部	
11	X 1	流紋岩	121	48	23.5	170	49	B	—	体部	自然画有
12	A 0	流紋岩	105	47	18.5	120	—	C	刃部	基部	
13	C 6　301	流紋岩	114	49	16	120	55	C	—	体部	
14	A 0	砂岩	114	52	16	130	—	?	—	体部	自然画有
15	C 7　1643	流紋岩	105	46	16	90	30	B	—	—	自然画有
16	E 6　1275	流紋岩	103	43	12	60	—	C	刃部	体部	自然画有
17	A 0	砂岩	90	45	16	80	38	A	—	基部	自然画有
18	B 2	砂岩	94	48	21	110	—	A	基部	—	自然画有
19	B 4　523	流紋岩	110	50	20	120	—	C	刃部	—	自然画有
20	A 0	流紋岩	99	57	19	110	—	C	刃部	基部	自然画有
21	B 4　719	流紋岩	72	50	21	100	—	C	刃部	—	自然画有
22	B 0	流紋岩	107	59	12.5	110	—	C	刃部	—	
23	A 3　2459	砂岩	91	55	30.5	180	39	B	基部	—	自然画有
24	B 0	流紋岩	91	68	26	190	27	A	基部	—	自然画有
25	A 0	流紋岩	83	46	32	120	36	B	基部	体部	自然画有

注：刃部については以下のとおりである。A→素材時のままのもの　B→調整を加えるもの　C→欠損するもの

第10表　底津遺跡住居炉址の熱残留磁化測定(100 Oe 消磁後)

(偏角補正前)

遺　構	試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	強　度 ($\times10^{-3}$)	備　考	統計処理項目	統計値
7号住居炉址	01	−0.1	56.3	0.27		試料数 (n)	9
	02	15.6	53.4	2.92			
	03	9.2	59.9	0.54		平均偏角、Dm (°E)	11.99
	04	12.6	50.5	20.00			
	05				破　損	平均伏角、Im (°)	55.18
	06	18.9	52.3	8.09			
	07	9.4	54.3	12.64	交流消磁測定	誤差角(δD) (°)	5.24
	08	10.6	54.6	25.35			
	09	10.3	54.4	22.56		誤差角(δI) (°)	2.99
	10	21.2	59.7	0.64			
	11					信頼度係数 (k)	297.08
	12						
	13					平均磁化強度 ($\times10^{-3}$ emu)	10.33
	14						
6号住居炉址	01	19.8	58.1	25.53		試料数 (n)	5
	02	−3.1	64.9	6.40			
	03	11.0	58.4	15.77		平均偏角、Dm (°E)	9.91
	04	22.6	52.1	8.12	交流消磁測定		
	05	−2.0	47.2	2.05		平均伏角、Im (°)	56.61
	06						
	07					誤差角(δD) (°)	16.34
	08						
	09					誤差角(δI) (°)	8.99
	10						
	11					信頼度係数 (k)	73.39
	12						
	13					平均磁化強度 ($\times10^{-3}$ emu)	11.57
	14						

第Ⅵ章　まとめ

第１節　飛瀬遺跡出土の大鼻式土器について

飛瀬遺跡Ａ地区Ｇ７グリッドを中心に第Ⅴ層であるにぶい黄褐色土より縄文時代早期前半に属する押型文土器を中心とする資料が出土している。これは第13図５に代表され、三重県大鼻・坂倉遺跡出土土器を基準とする大鼻式に比定されるものである。５は口縁部より胴部上半にかけての資料であるが、口縁端部を折り返し肥厚させた後端面を平坦に調整し無節の縄文Ｌを施している。また、口縁部には枝回転文ふうの、頸部に縄文ＲＬ、胴部上半に枝回転文を施している。縄文帯の上部にゆるい波状の沈線が残存しており縄文を施文後上部の枝回転文類似の文様を施した可能性がある。頸部文様帯の存在は先の大鼻・坂倉遺跡にはない要素である。また、口径は約16cm程度で小型の部類に入る。６～12も口縁部資料であるが、５と比較すると屈曲が弱く、後続する大川式に近いがいずれも口縁端部の平坦面に縄文が施される。口縁部の文様は枝回転文・市松文・縄文がみられバリエーションが存在し、かなりの個体数を含む資料であろう。13以下は胴部資料であるが、縦長・横長等口縁部同様かなりのバリエーションをもつ。製作技法の点からも内面に顕著な指頭圧痕が認められる等基準資料に近い様相をもちながら、頸部の屈曲度、頸部文様帯の成立・胴部文様のバリエーションといった異質の特徴をもつこれらの資料が、同一型式内における細分の可能性を示すものか、あるいは地域差という言葉の範疇で片づけれるものか今後の課題となろうが、県内における最初の良好な資料となろう。24・25は胴部資料であるが、やや薄手で斜行する船形沈文がみられ、後続する大川式、あるいは神宮寺式に比定されるものであろう。これは第Ⅴ層という単一層内出土資料内に時間差（型式差）が存在することを示している。同層内よりは、いわゆる表裏縄文土器が出土しているが、先の大鼻式に必ずしも併存するものではないことは前述の理由に依るが、大きな隔たりをもつものではないと考えられる。１・２とも口縁部資料である。口縁はゆるく外反し、口縁端部は丸くおさめる例と角頭状となるものが存在するが、この表裏縄文土器のあり方は大鼻・坂倉遺跡出土資料と類似している。

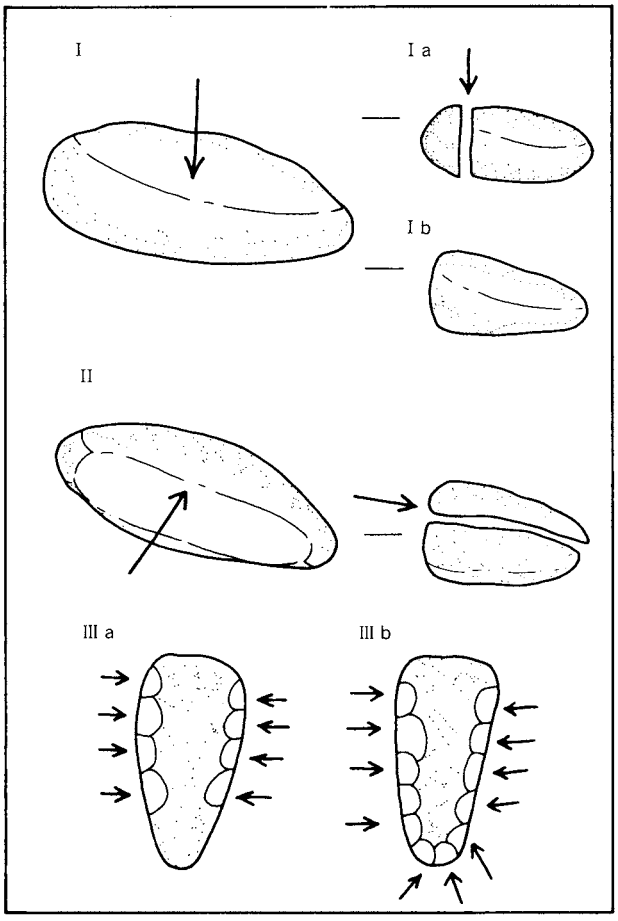
第２節　底津遺跡における集落の変遷について

今回確認した14軒の住居址は第一義的に伴う遺物が少なく時期決定に困難な状況を呈している。第Ⅳ章第２節においては、多くが覆土出土の遺物より住居址の時期を推定しているが必ずしも住居址が機能していた時期を示すものではない。底津遺跡においては縄文時代早期後半～同後期前半に属する土器が出土しているが、住居址に伴う土器は中期後半から後期前半にかけての資料である。美濃地域における中期後半における土器編年については、増子康真氏によるものが代表的な編年案として挙げられるが、氏の編年観対し、例えば一連の流れの中で解釈されている中富Ⅰ式から同Ⅴ式に対し別系統の土器型式の土器群の併行・変遷の可能性、取組式、あるいは島崎Ⅲ式とされる型式時期における加曽利Ｅ式系・曽利式系の影響の多寡についての考慮、山の神Ⅰ・Ⅱ式の細分、いわゆる石瀬式、林ノ峰Ⅰ式との相対的関係等種々の問題点が指摘されている。多くが包含層、あるいは住居址覆土の資料の土器群を前提として型式学的考察による組列がなされたため生じたことと考えられるが、今後の

層位学的事実に基づく組列の再証明、より細かい口縁部・胴部における文様構成要素の分析等型式学的考察により若干の修正を加えながらより具体的なものになると考えられる。以上の理由により本報告では多くの住居址が加曽利Ｅ式系・曽利式系の影響を非常に強く受けた加曽利Ｅ３・４式(曽利Ⅲ・Ⅳ式)に併行しているものと考え、加曽利Ｅ２式併行期を第Ⅰ期、加曽利Ｅ３古・新式併行期を第Ⅱ・Ⅲ期、加曽利Ｅ４古・新式併行期を第Ⅳ・Ⅴ期、後期前半期（中津式併行期～福田ＫⅡ、四ツ池式段階併行）をⅥ期として表記したが、基本的な流れは前述の増子氏編年観に依るところが大きい。包含層出土土器で具体的にみていくと、第６群は頸部が強くくびれ口縁部が大きく湾曲するキャリパー形を呈する咲畑式系土器群であり、第７群は口縁部に立体的な橋状把手、袋状把手をもつ一群であり加曽利Ｅ２式併行期として問題はないであろう。胴部資料である239・240はこの期に属すものである。ただし、第７群４類はやや時期が下がるか。第８群１・２類は、緩やかに湾曲するキャリパー形を呈し、口縁部に隆帯による渦巻＋楕円区画をもつ。区画内を縄文、あるいは沈線文で充填するが、前述の第Ⅰ期とは様相を変え、この美濃地域が加曽利Ｅ３式系、曽利Ⅲ・Ⅳ式系の影響下において大変容を示す時期のものと考える。区画内を充填する縄文・沈線の区分は加曽利式、あるいは曽利式的文様規制に基づくものと考えられ直接的に時期差を示すものではない。これに対し第８群３類は、渦巻と楕円区画の同一化、渦巻が消え楕円区画が中心となったり、区画内充填のやや簡素化が窺われ第Ⅲ期からⅣ期に移行していく段階のものと考えられる。第８群６類の117・118も同様であり、同第７類は櫛歯状工具による条線文がみられ第Ⅲ期、あるいは第Ⅳ期まで残存する可能性がある。第９群１類は口縁部に沈線による楕円形区画等をもつものであり、区画内は縄文・沈線・無文等で充填される。文様区画要素が隆帯から沈線に移行しているが必ずしも時期差を反映するものではなく第Ⅲ期としておくが、第Ⅳ期に下がるものも存在する。多くの胴部片資料がこの第Ⅲ・Ⅳ期に伴うものと考えるが、縦位の胴部区画線間に無文帯をもつものと無いもの、区画線間に充填される充填文の施文具、充填方法により時期差を示す事ができる可能性があると考えられ今後の検討課題としたい。ただし、縦位の区画線が隆帯であるのか、あるいは沈線であるのかは大まかな時間差を示す傾向はあるものの、絶対条件とは必ずしもなり得ないと考える。第９群159・160は横位の沈線下に連弧状の沈線がみられるが、第Ⅱ期のものの影響下ではなく別系統のものであろう。第９群第２類の158、同第３類・６類、第10群、第11群は第Ⅳ期、あるいは第Ⅴ期に属するものである。これらは口縁部文様帯の消失、逆Ｕ字形胴部文様のせりあがり、縄文施文土器の増加等の特徴が認められるがその細分には種々の問題点を内包しており、また、本遺跡出土資料中においてこれを良好に示すものはないが第11群土器は後出的様相をもつ。第12群土器とした縄文土器・櫛描沈線文土器・無文土器はこの第Ⅳ・Ⅴ期に伴う可能性をもつが前後に時期幅を広げる可能性もある。また、底部資料中に網代痕をもつ資料も同様であろう。211は第Ⅴ期に属するものであろう。第13群とした沈線区画の内外に磨消文様をもつ土器群、第14群とした口縁端部を肥厚させ有段状とし、口縁上面、あるいは外面に文様を施す土器群は中津式併行期～四ツ池式併行期に比定され細分も可能であるが、本遺跡においては量的に乏しく、第１・２号住居址とした竪穴状遺構より出土しているのみであり大きく第Ⅵ期として区分しておく。ただし、数点にとどまるが堀之内式系と考えられる資料も存在する。以上大局的にみてきたが、土器分類を文様構成・文様を施す施文具等を中心として大きく分類したために同分類内に上記の区分に必ずしも該当しない要素も存在している。また、時期区分となる型式分類について大略を述べたにすぎず説明不足を歪めない

がこれらの土器の分類から底津遺跡で確認した住居址群が短期間に収束する集落であることが判明し、未調査区を考慮に入れれば大集落の存在が予想され今後その展開等が明らかになることを期待したい。

第3節　飛瀬・底津遺跡における打製石斧の製作技法について



第107図　打製石斧製作工程模式図

飛瀬・底津遺跡より出土した打製石斧について特徴的な事項としてその背面に素材となった河原石の自然面（表皮）を残すものが非常に多いことであった。飛瀬遺跡では62%、底津遺跡では60%に達する。また、腹面側を観察すると、打製石斧に対して長軸側どちらか一方にバルブの厚みを残す資料が多く、以上の2点から打製石斧の製作技法について考察したい(第107図)。**第Ⅰ工程は円礫の採集・打面部の作出である。**両遺跡は板取川、あるいは底津川が眼前を流れており河原石（砂岩・流紋岩等）の採集は容易であったと考えられる。また、第Ⅰ工程に含めた打面部の作出については、実際は河原石の平坦な側面部をそのまま利用したケースが多かったと考えられる。背面に残る厚みのあるバルブの残存状況等から素材剥片剥離時の打面部は河原石の平坦な側面部の端にあったものではなく、以外と側面平坦部のやや中ほどに打点部があったと想定され、これは打製石斧の素材剥片を剥離しようとしている河原石の表面部と側面部の作る角度的な問題にその原因が求められる。このことにより前述の打面部の作出についてはⅠ－b工程が主体であると推察する。**第Ⅱ工程である打製石斧の素材剥片の剥離**については、河原石表面の自然面をもつやや湾曲部を取り込む横長剥片（平面的形状は楕円状、翼状となる。）を目的としている。また、湾曲せず直線的な資料については素材剥片を剥離した原材がかなり大きなものであった可能性がある。このような剥片剥離を目的とする要因として石器自身の強度、あるいは打製石斧製作後の機能効率にその前提があったものであろうか。ただし、この第1次剥片剥離後も連続的に剥片をとった工程も当然存在したものと考えられ、今後の検討が必要である。**第Ⅲ工程である打製石斧の整形**については、形態をある程度整えるものが主流であり、従来の平面形態の範疇にとどまるものは少ない。逆に平面形態はその素材剥片の形態に左右されている場合が多い。また、刃部の作出についても、素材剥片剥離時のままのものと、調整を加えたものの間に明らかな刃角の違いが認められ、機能的差異の可能性が存在したと考えられる。このような流紋岩、砂岩製等の河原石を素材とする打製石斧の製作について同時期の県内遺跡を概観してると、神明遺跡・牧野小山遺跡・山手宮前遺跡・塚原遺跡等において同様な傾向が窺え、飛瀬・底津両遺跡で考察した

ような従来より考えられていたような打製石斧の製作工程（第Ⅰ～Ⅲ工程）が普遍的に存在したと考えられる。その製作場所も遺跡内に打製石斧製作時の剥片がほとんど無い[4]ことから集落外である可能性が高いと考えられるが、今後のデータの蓄積をもってあらためて考察したい。

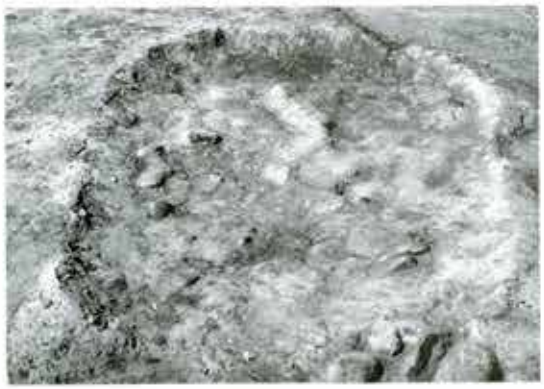
4）ただし、第98図416は打製石斧素材剥片を剥離した石核である可能性も考えられる。

図　　版

1　飛瀬遺跡　第1号建物址

2　飛瀬遺跡　第2号不明遺構検出状況

3　飛瀬遺跡　第2号不明遺構



4　飛瀬遺跡　SK1

5　飛瀬遺跡　SK2

6　飛瀬遺跡　SK3

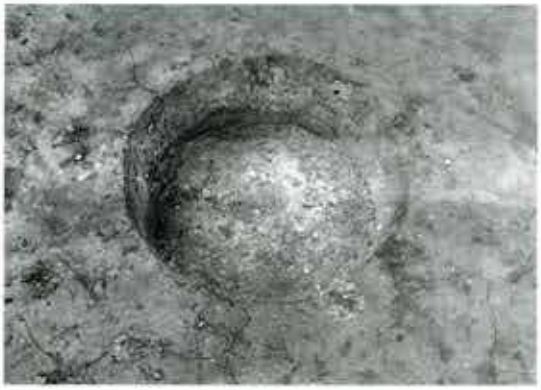
7　飛瀬遺跡　SK4

8　飛瀬遺跡　SK5

図　版　2

1　飛瀬遺跡　ＳＫ６

2　飛瀬遺跡　ＳＫ７



3　飛瀬遺跡　ＳＫ８

4　飛瀬遺跡　ＳＫ９

5　飛瀬遺跡　ＳＫ10

6　底津遺跡　調査前風景

7　底津遺跡　作業風景

8　底津遺跡　第１号住居址

1　底津遺跡　第2号住居址

2　底津遺跡　第3a・3b・4a・4b号住居址

3　底津遺跡　第3a号住居址石皿出土状況

4　底津遺跡　第3b号住居址埋甕

5　底津遺跡　第5号住居址

6　底津遺跡　第6号住居址

7　底津遺跡　第7号住居址

8　底津遺跡　第6号住居址炉

図　版　4

1　底津遺跡　第7号住居址炉

2　底津遺跡　第8号住居址

3　底津遺跡　第9号住居址

4　底津遺跡　第10号住居址

5　底津遺跡　第11・12号住居址

6　底津遺跡　第13号住居址炉

7　底津遺跡　第14号住居址

8　底津遺跡　土壙墓

1　飛瀬遺跡　ＳＫ１出土遺物

2　飛瀬遺跡　ＳＫ２出土遺物

3　飛瀬遺跡　ＳＫ３出土遺物

4　飛瀬遺跡　ＳＫ３出土遺物

5　飛瀬遺跡　ＳＫ３出土遺物

6　飛瀬遺跡　ＳＫ４出土遺物

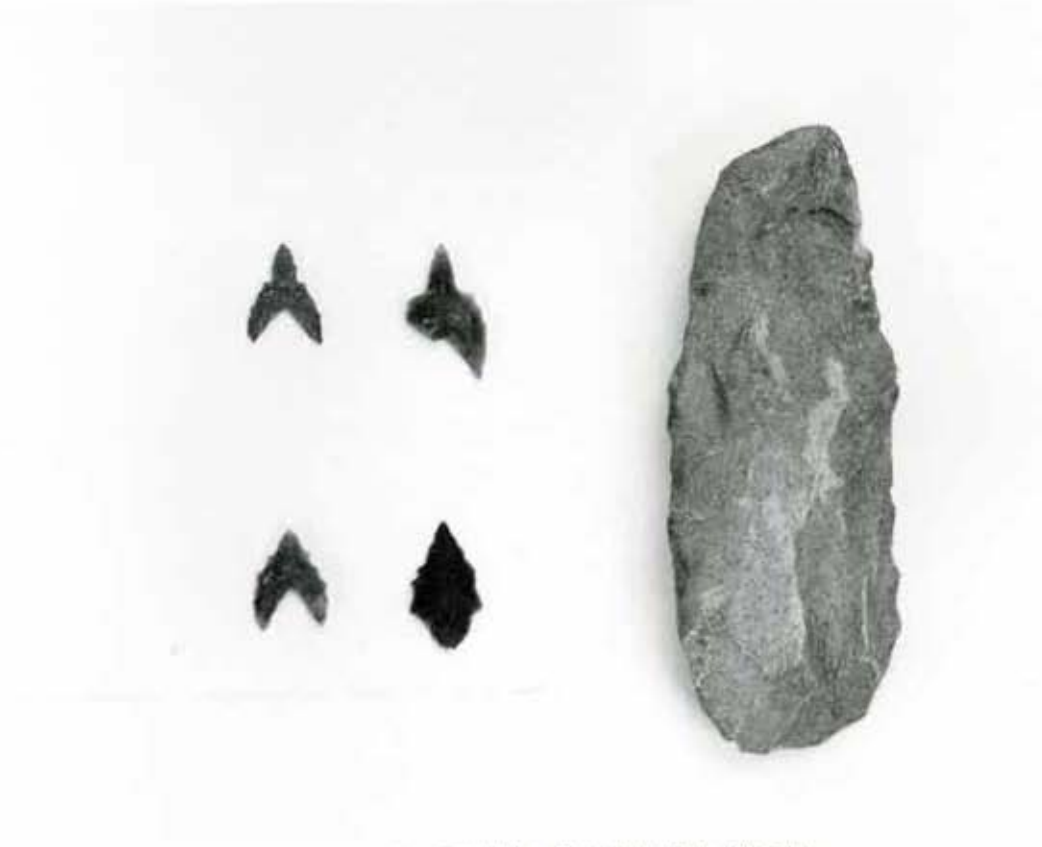
7　飛瀬遺跡　ＳＸ２出土遺物

8　飛瀬遺跡　ＳＸ２出土遺物

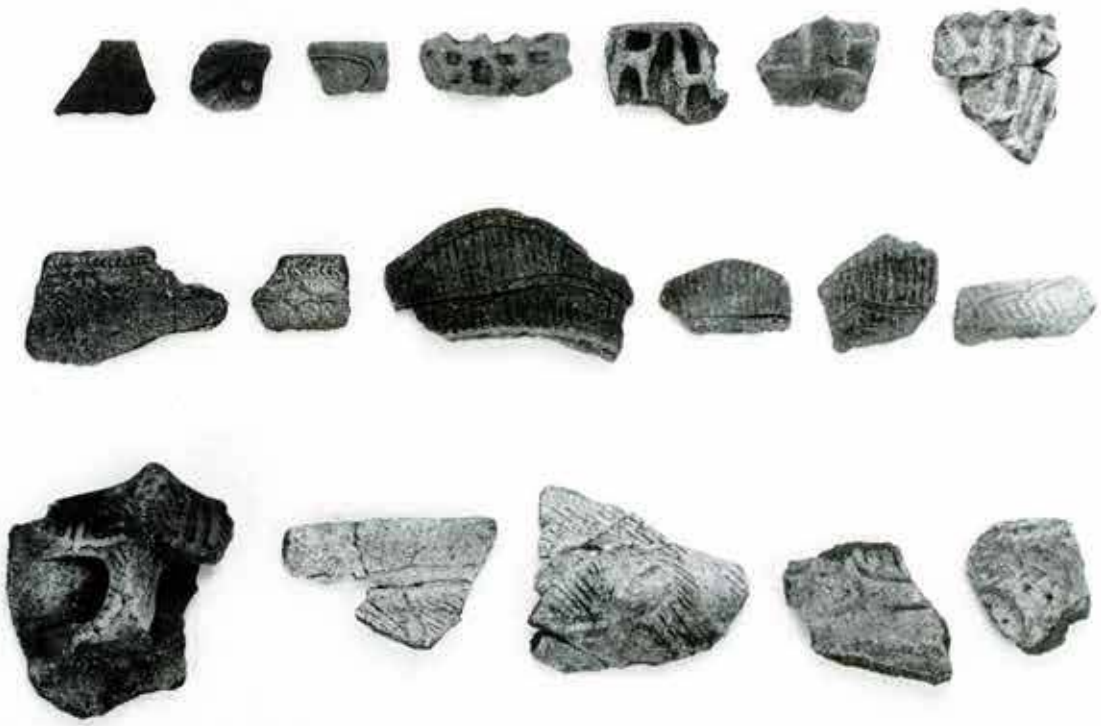
9　飛瀬遺跡　包含層出土常滑

10　飛瀬遺跡　包含層出土古瀬戸

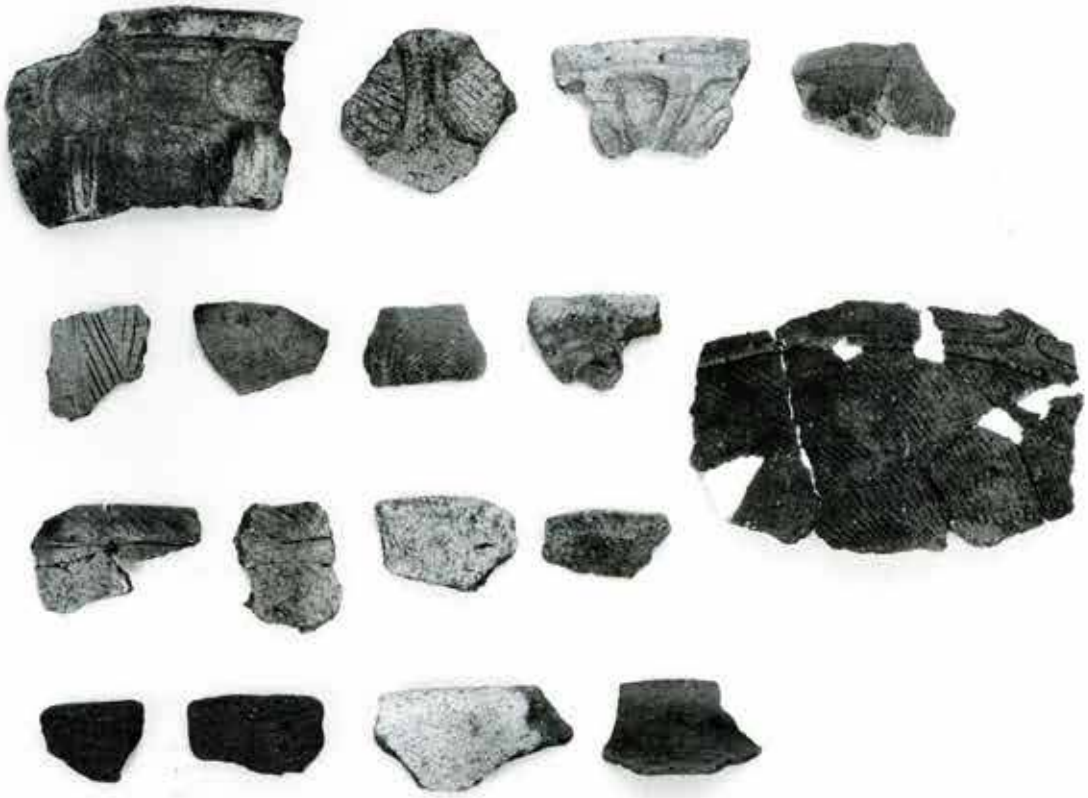
1　飛瀬遺跡　包含層出土土器（第Ⅰ期）



2　飛瀬遺跡　包含層出土石器（第Ⅰ期）

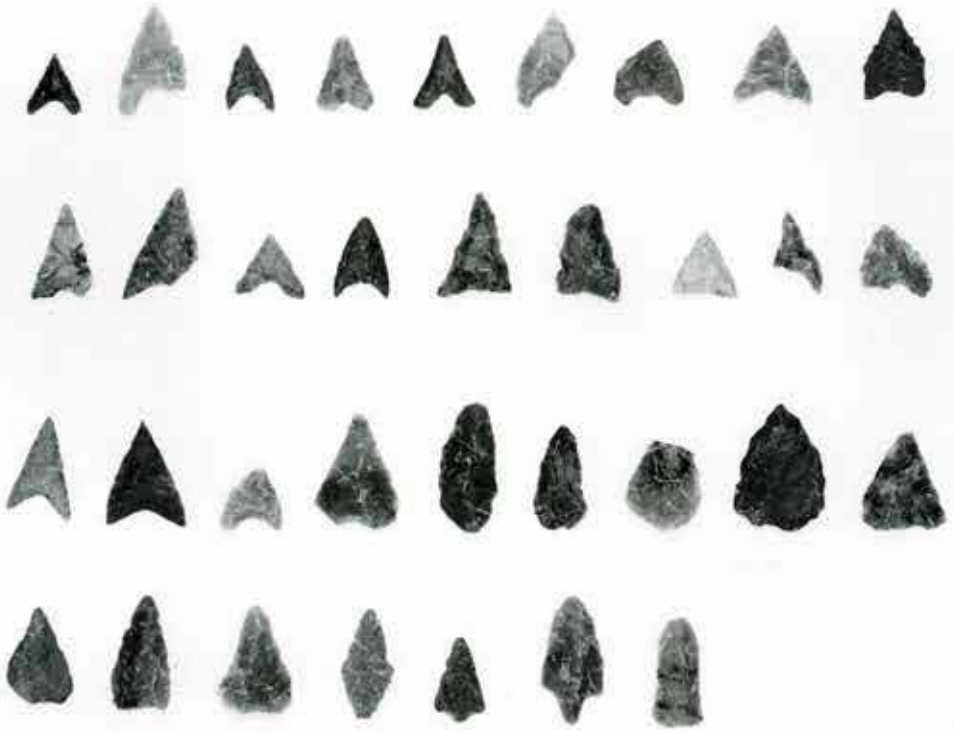


1　飛瀬遺跡　包含層出土土器（第II期）①



2　飛瀬遺跡　包含層出土土器（第II期）②

図　版　8



1　飛瀬遺跡　包含層出土石器（第II期）①

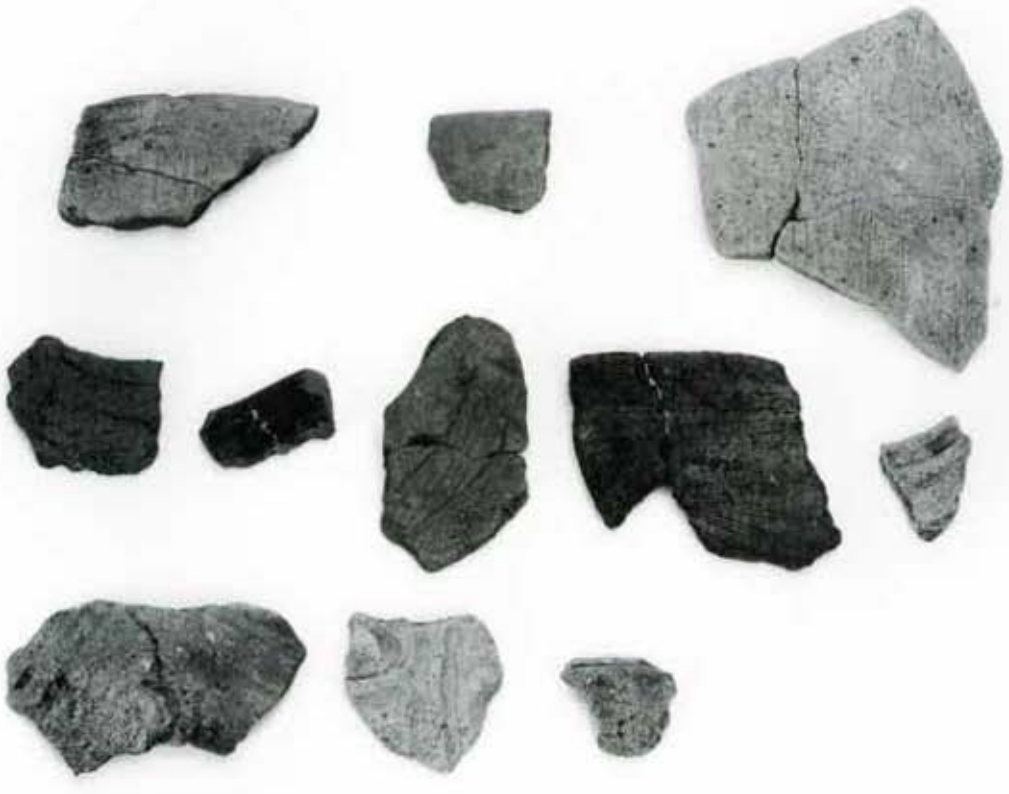
2　飛瀬遺跡　包含層出土石器（第II期）②

1　飛瀬遺跡　包含層出土石器（第II期）③

2　飛瀬遺跡　包含層出土石器（第II期）④

図　版　10

1　飛瀬遺跡　包含層出土石器（第II期）⑤



2　底津遺跡　第1号住居址出土土器

1　底津遺跡　第1号住居址出土石器

2　底津遺跡　第2号住居址出土土器

図　版　12

1　底津遺跡　第２号住居址出土石器

2　底津遺跡　第３a・３b号住居址出土土器①

1　底津遺跡　第3a・3b号住居址出土土器(2)

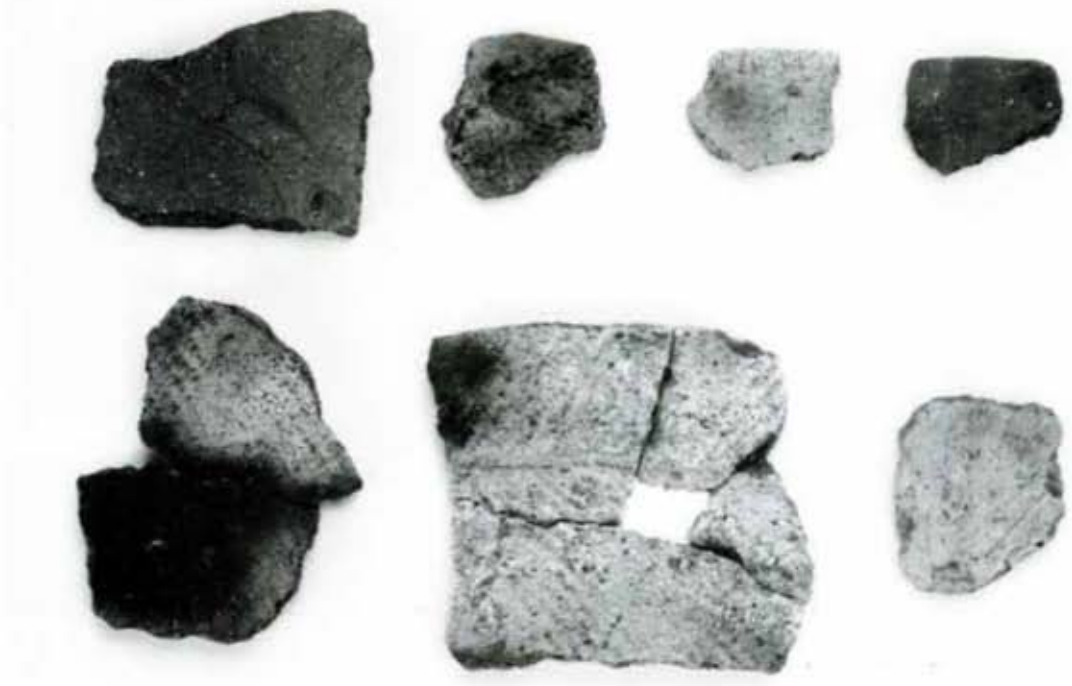
2　底津遺跡　第3a・3b号住居址出土土器(3)

図　版　14

1　底津遺跡　第３ｂ号住居址出土土器④（埋甕）

2　底津遺跡　第3a・3b号住居址出土石器①

1　底津遺跡　第3a・3b号住居址出土石器②



2　底津遺跡　第4a・4b号住居址出土土器

図　版　16

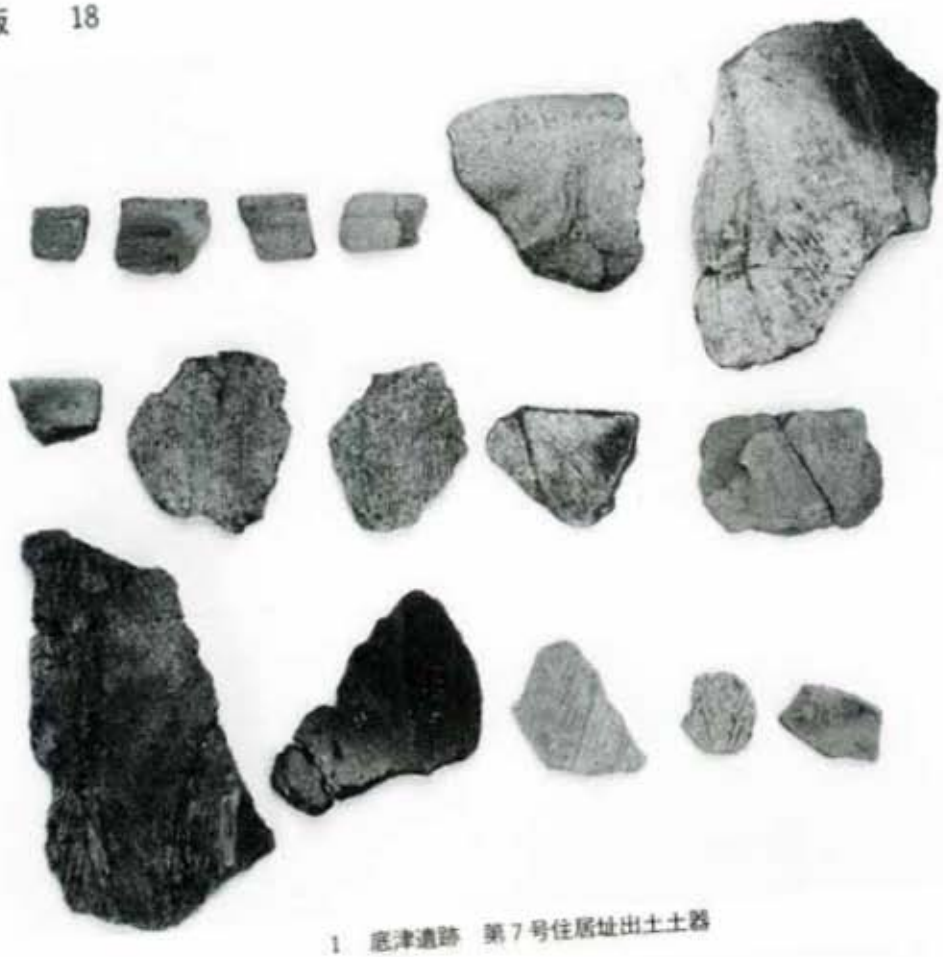
1　底津遺跡　第5号住居址出土土器

2　底津遺跡　第4a・4b・5号住居址出土石器

1　底津遺跡　第6号住居址出土土器1（埋甕）

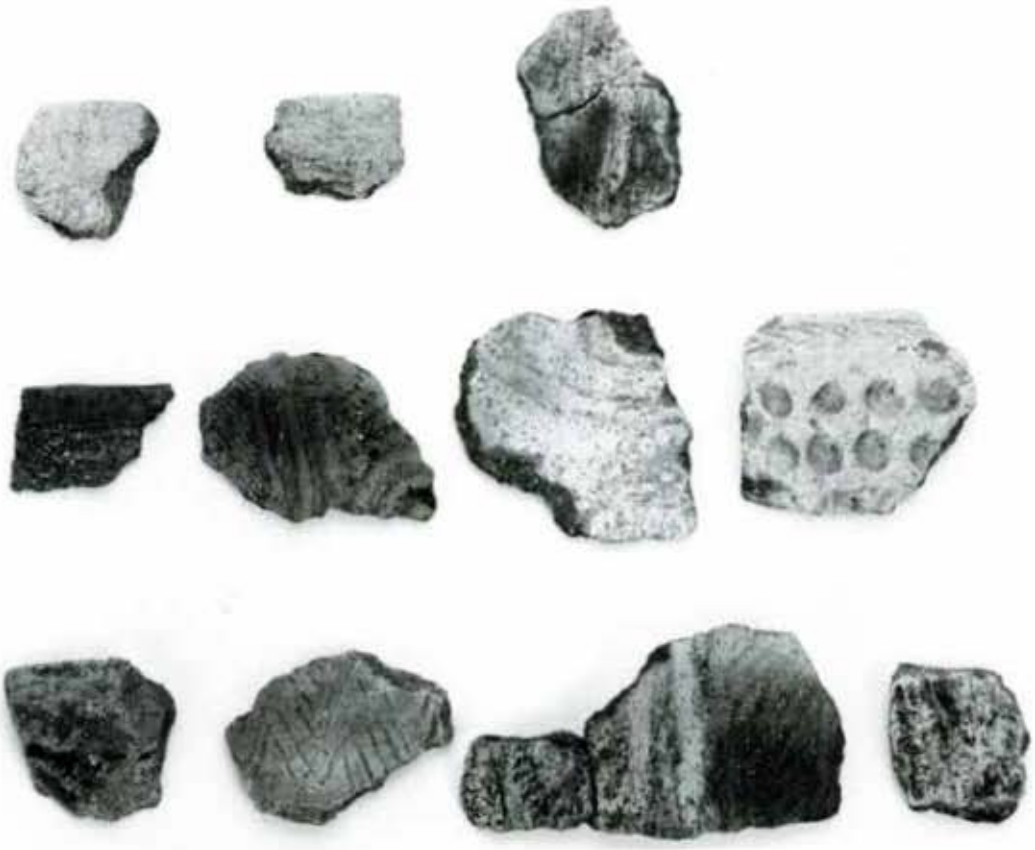
2　底津遺跡　第6号住居址出土土器2

図　版　18



1　底津遺跡　第７号住居址出土土器

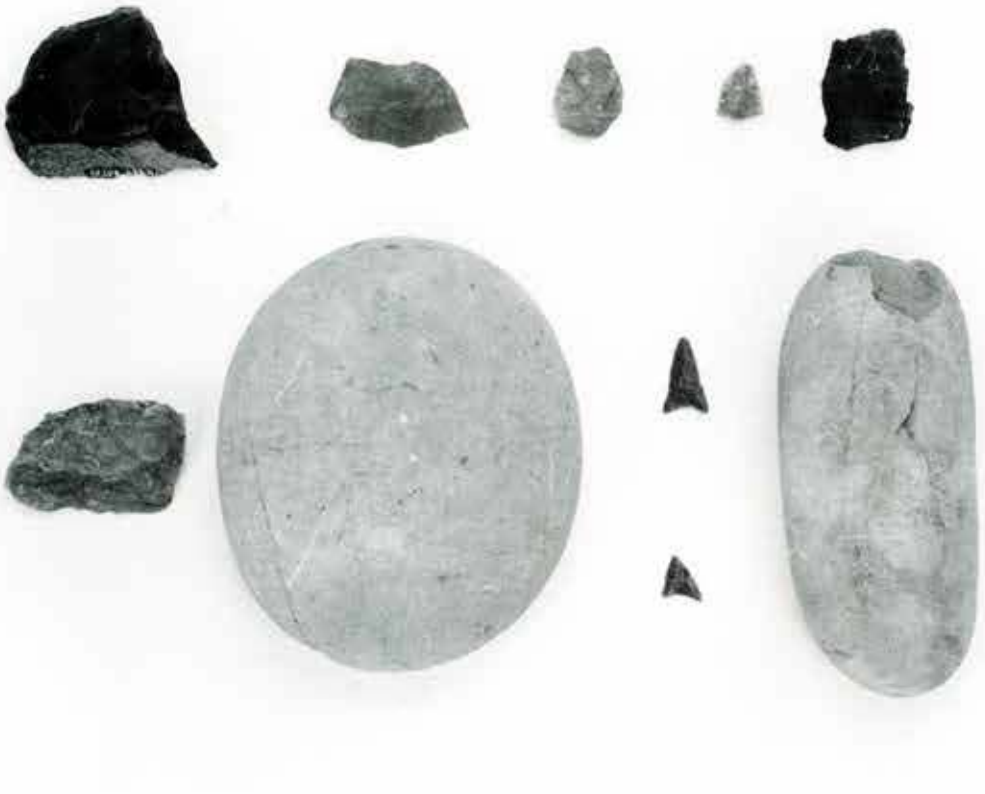
2　底津遺跡　第６・７号出土石器



1　底津遺跡　第8・9号住居址出土土器

2　底津遺跡　第10・11・12号住居址出土土器

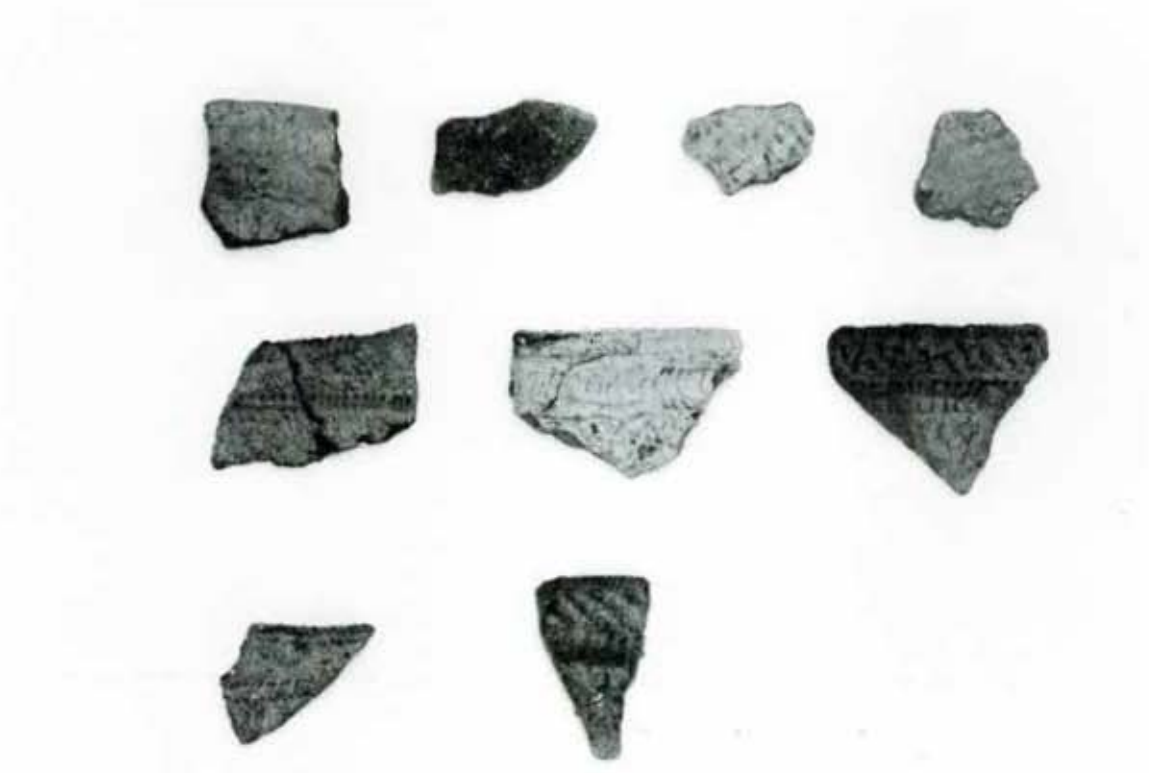
図　版　20



1　底津遺跡　第8・9・10・11号住居址出土石器

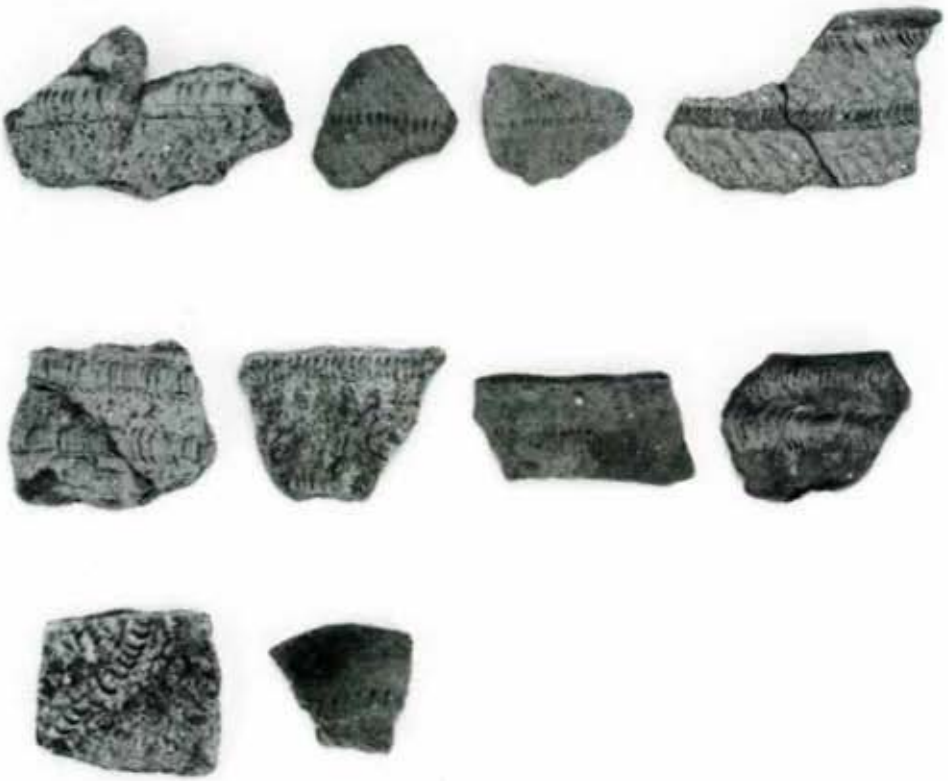
2　底津遺跡　第9号住居址出土石器

1　底津遺跡　土壙墓出土遺物



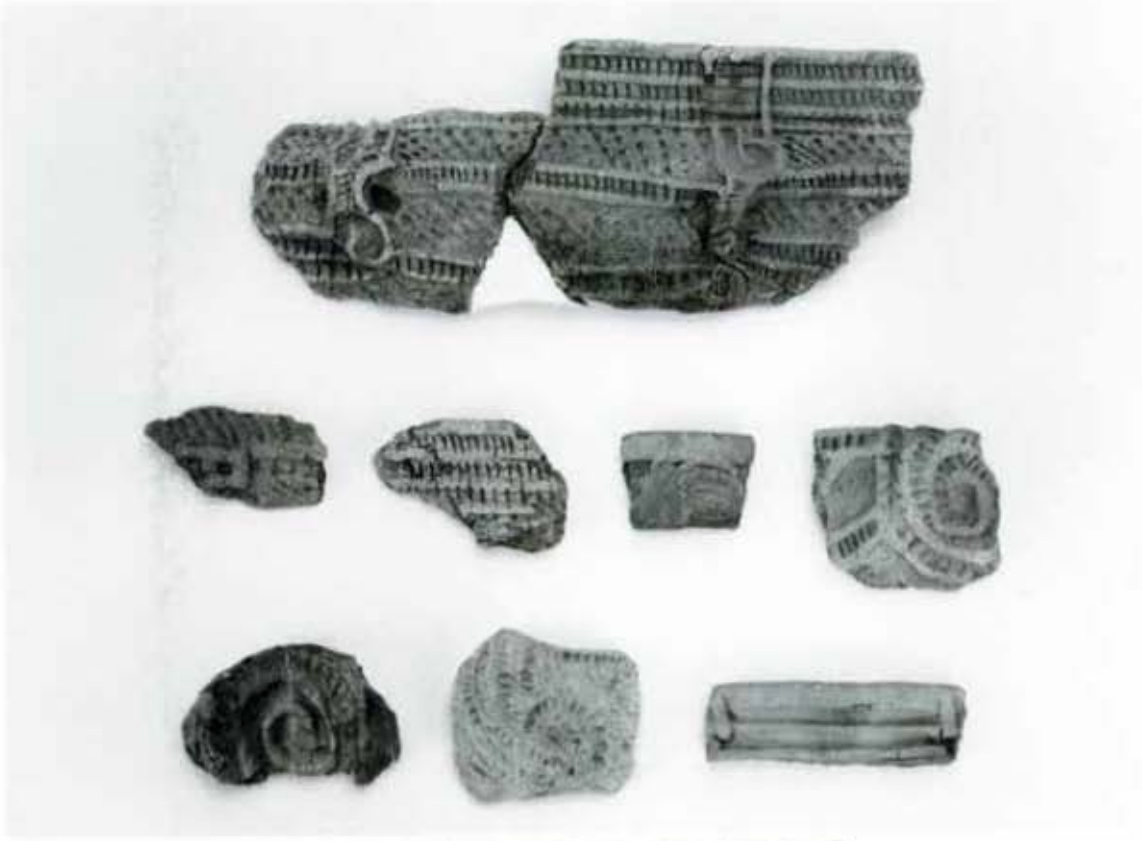
2　底津遺跡　包含層出土土器1（第1群・2群1類）

図　版　22

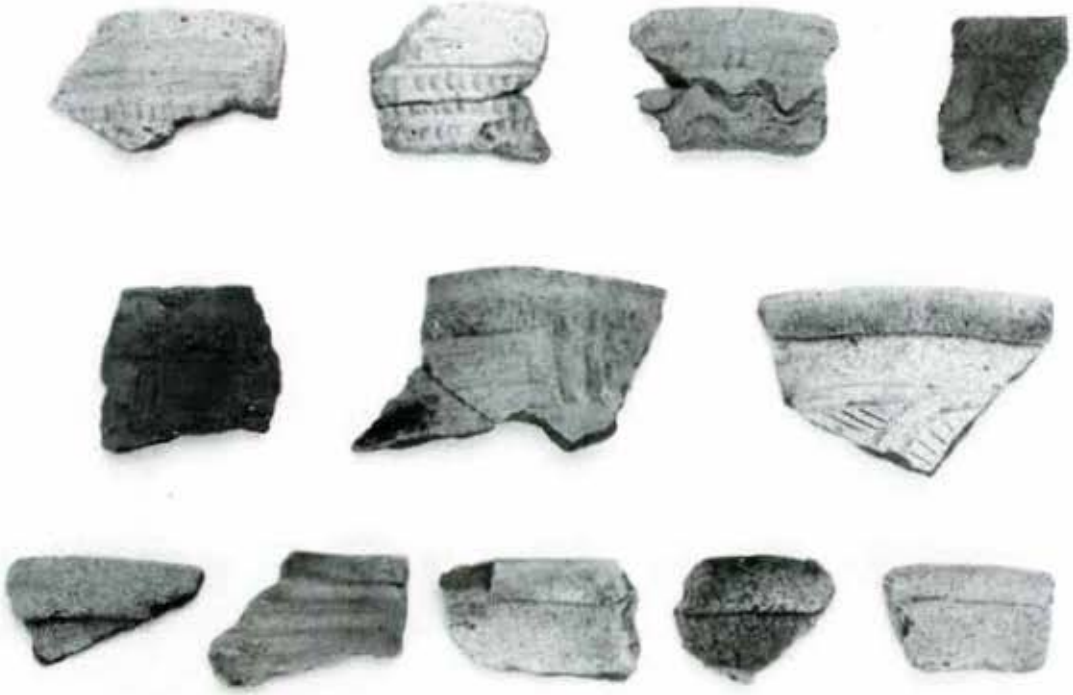


1　底津遺跡　包含層出土土器2（第2群2類）

2　底津遺跡　包含層出土土器3（第3群・4群・5群）



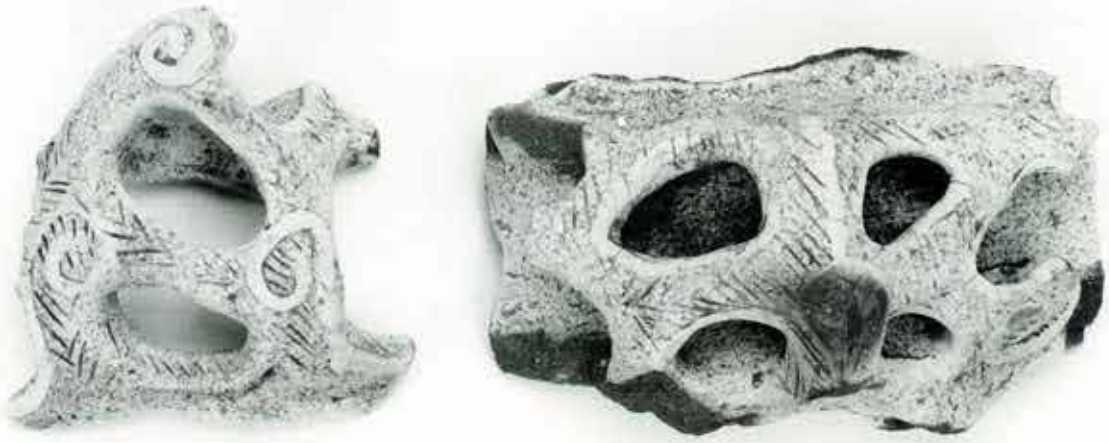
1　底津遺跡　包含層出土土器4（第6群1類）



2　底津遺跡　包含層出土土器5（第6群2・3・4類）

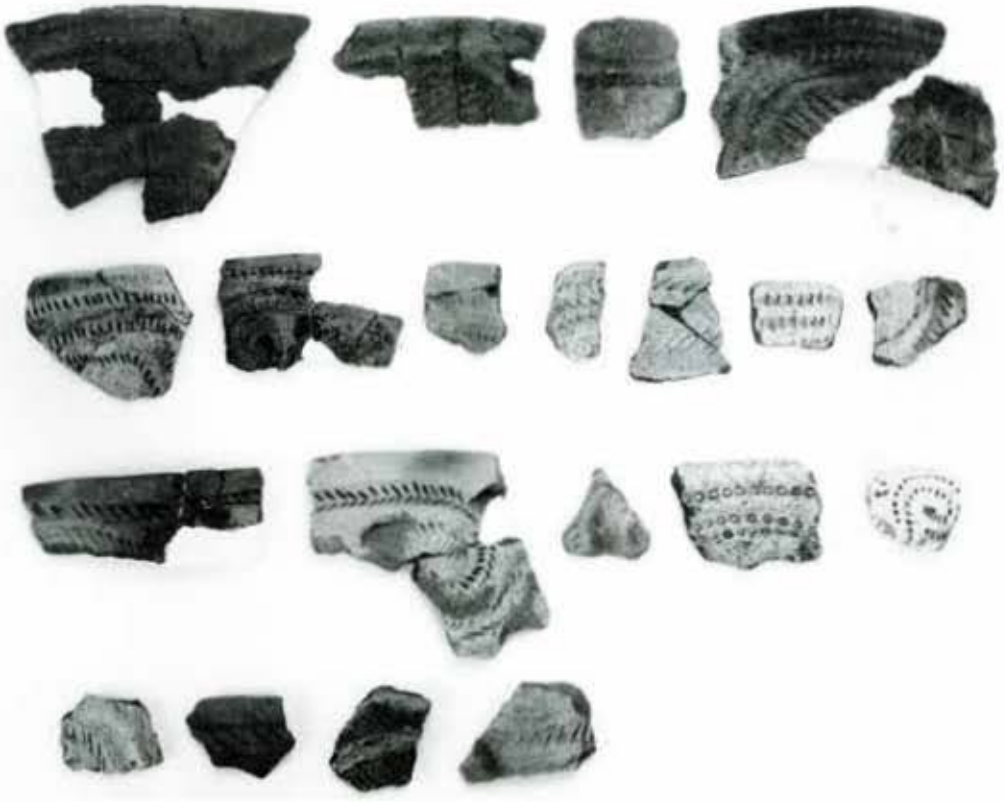
図　版　24

1　底津遺跡　包含層出土土器⑥（第７群１・２類）



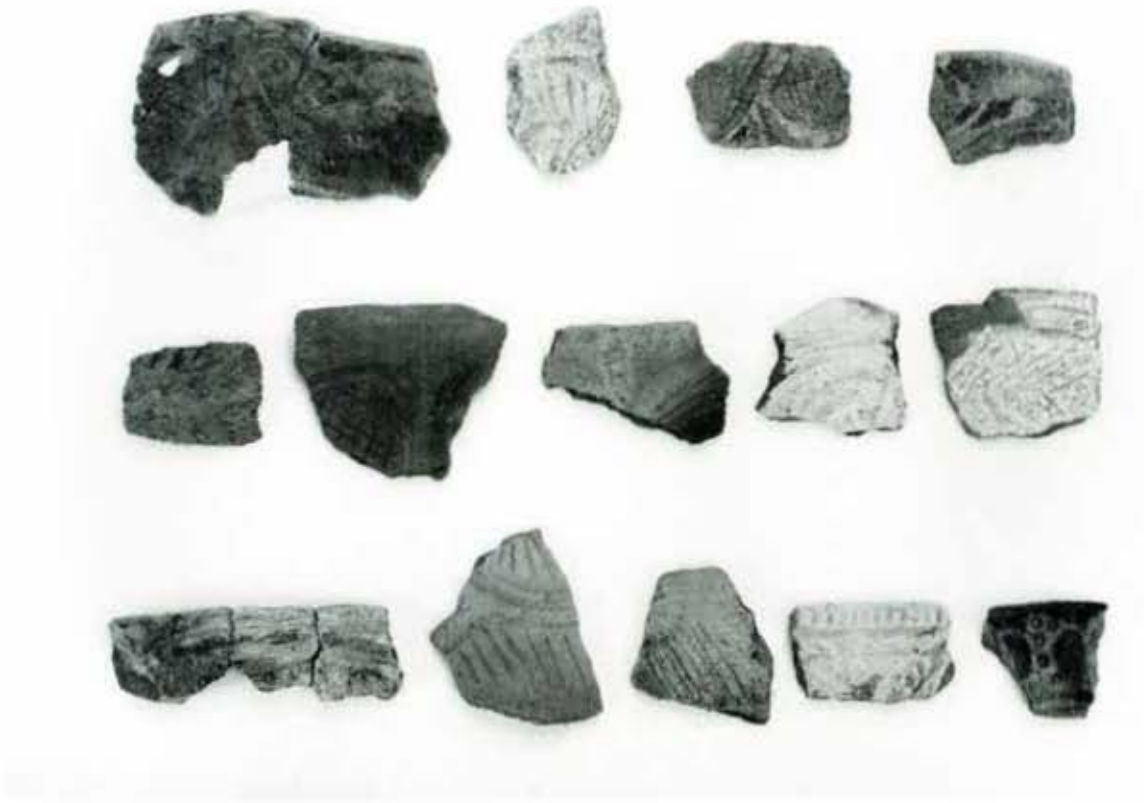
2　底津遺跡　包含層出土土器⑦（第７群３類）

1　底津遺跡　包含層出土土器⑧（第7群4類）

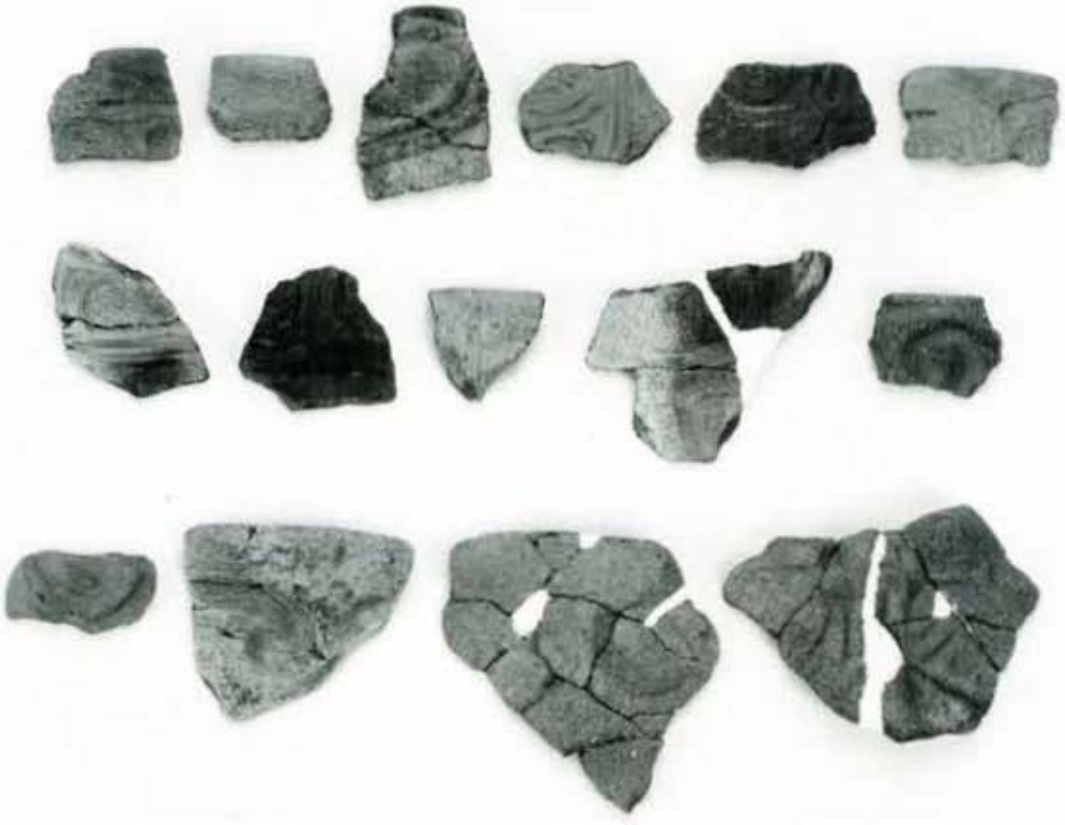


2　底津遺跡　包含層出土土器⑨（第8群1・2類）

図　版　26

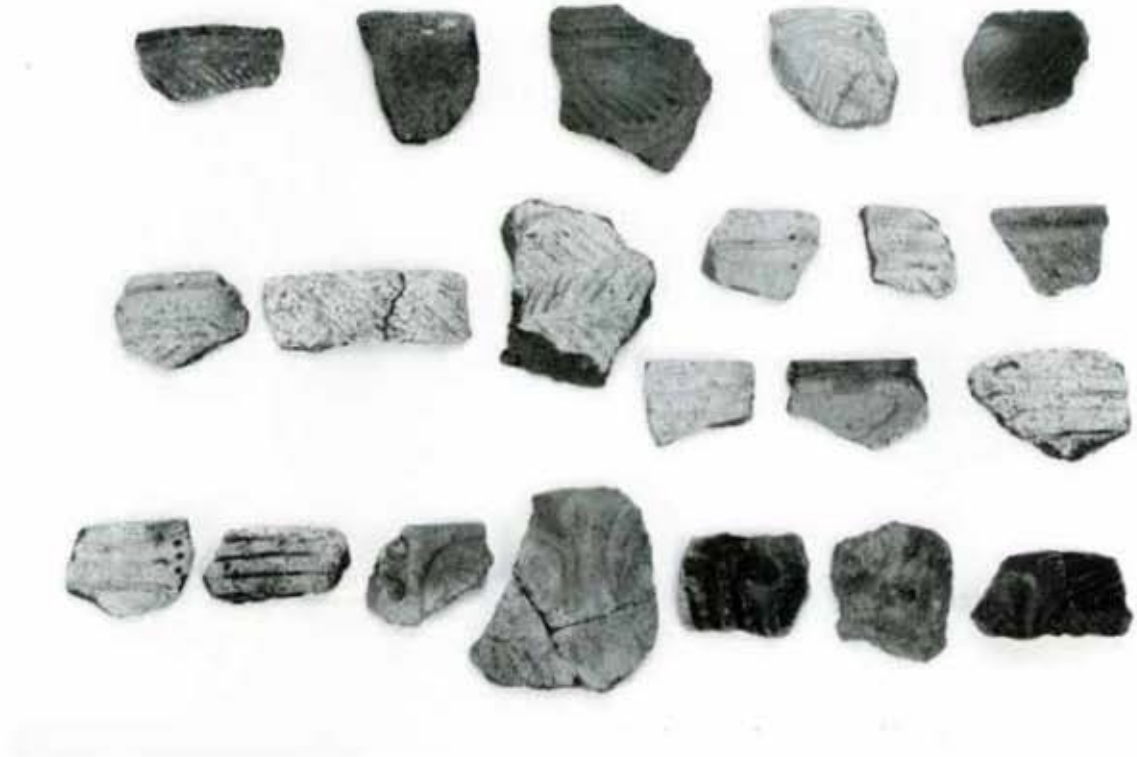


1　底津遺跡　包含層出土土器10（第8群3・4類）



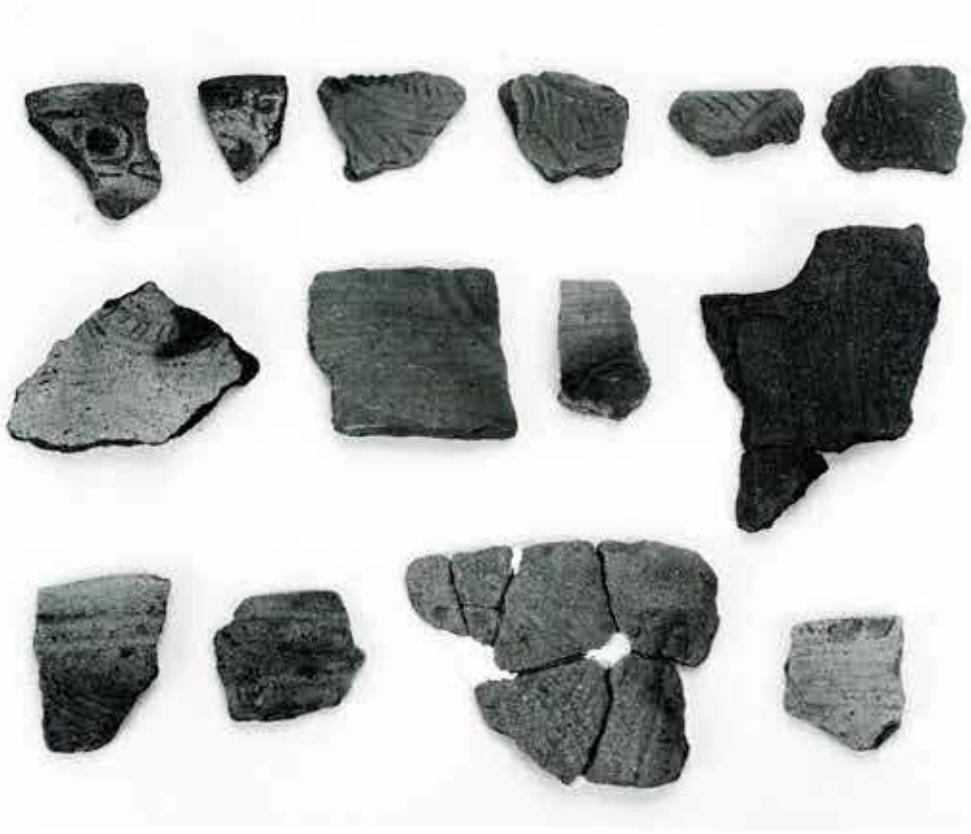
2　底津遺跡　包含層出土土器11（第8群5・6類）

1　底津遺跡　包含層出土土器(2)（第8群7・8・9・10類）

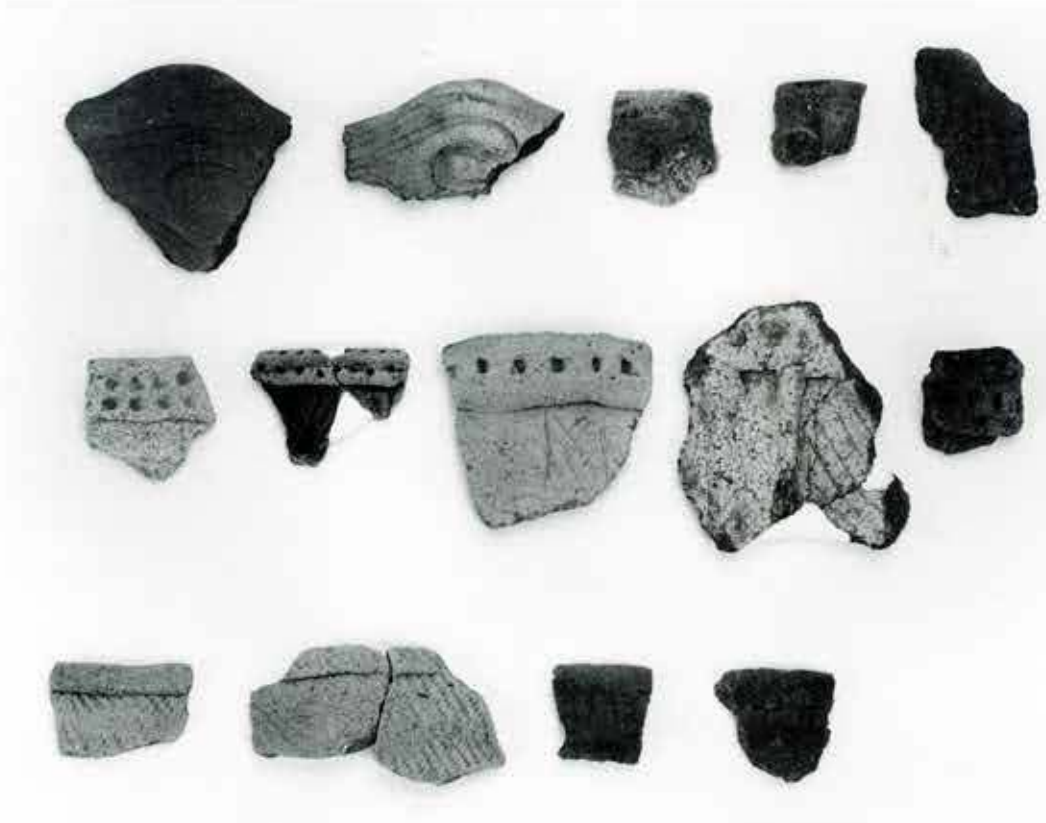


2　底津遺跡　包含層出土土器(3)（第9群1類）

図　版　28

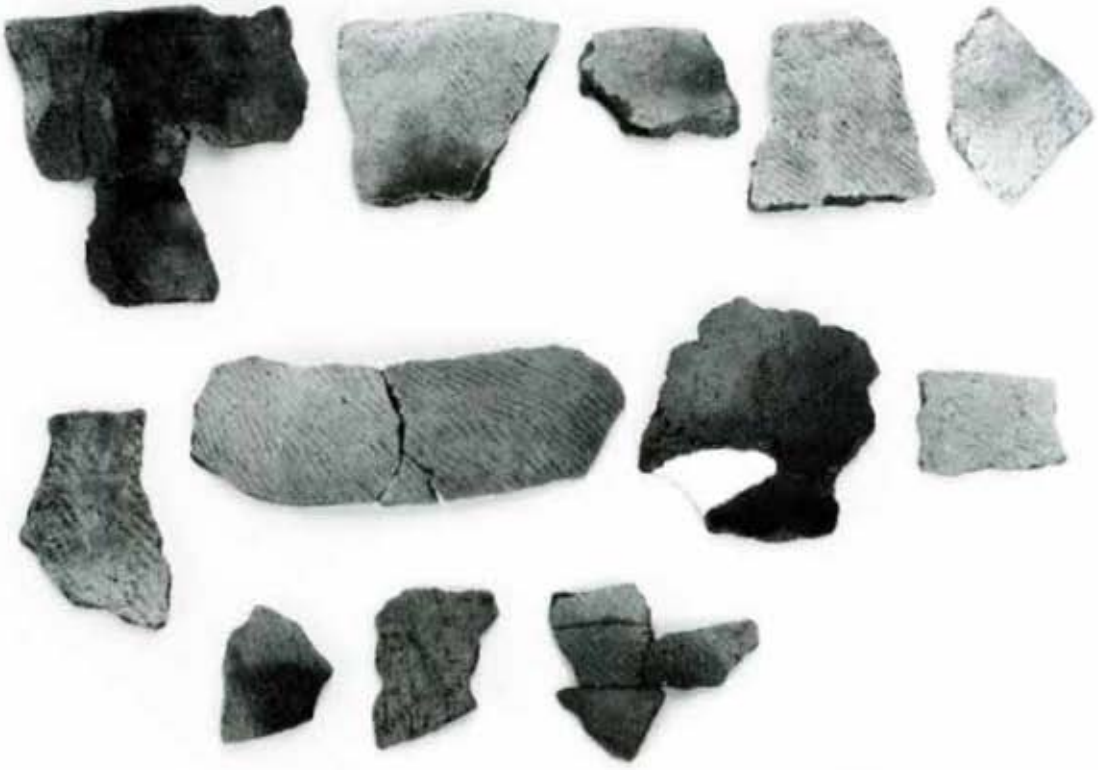


1　底津遺跡　包含層出土土器⑭（第9群2・3・4類）



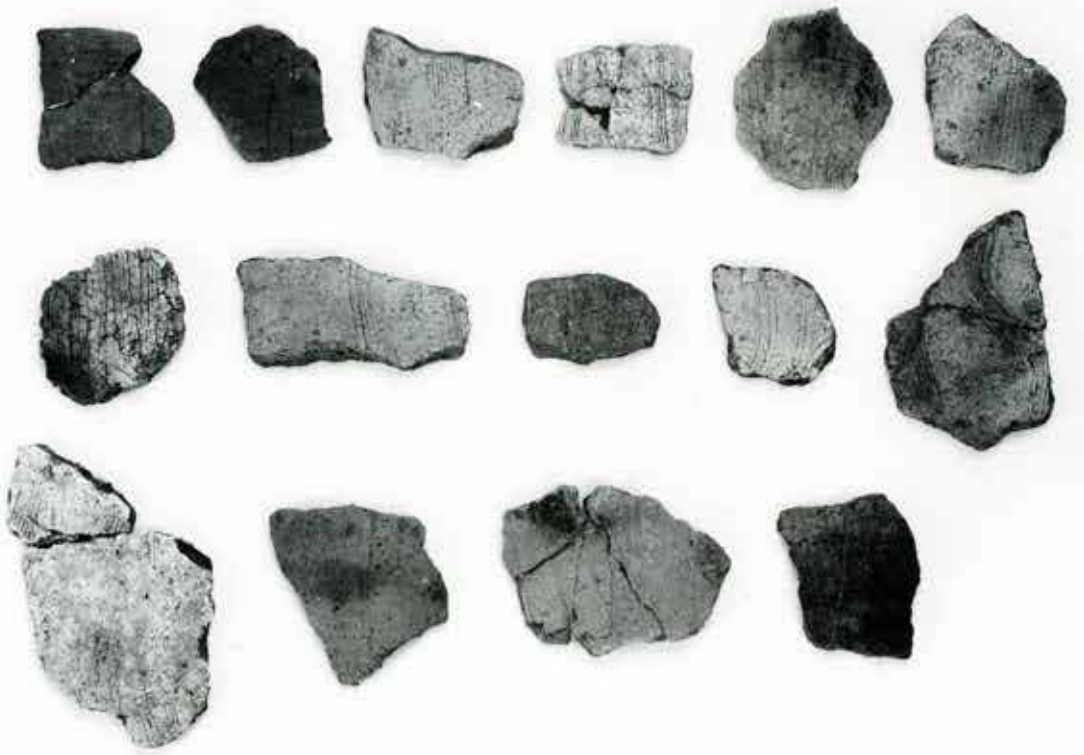
2　底津遺跡　包含層出土土器⑮（第9群5・6類，10群）

1　底津遺跡　包含層出土土器16（第11群）

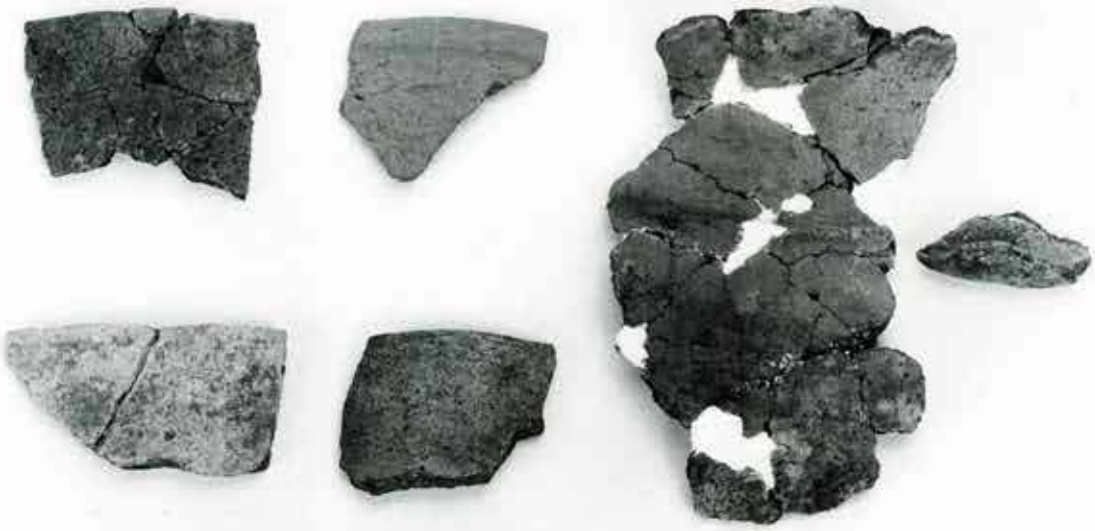


2　底津遺跡　包含層出土土器17（第12群縄文）

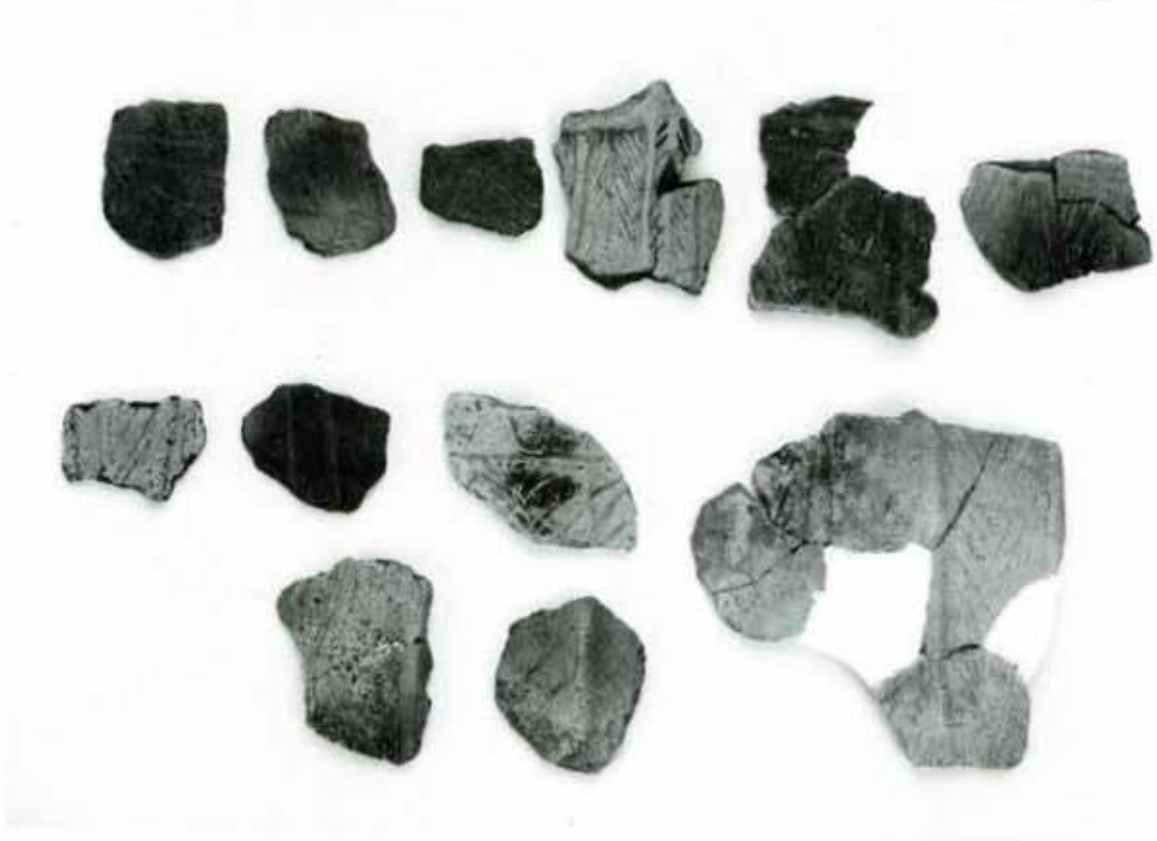
図　版　30



1　底津遺跡　包含層出土土器18（第12群櫛描）



2　底津遺跡　包含層出土土器19（第12群無文）

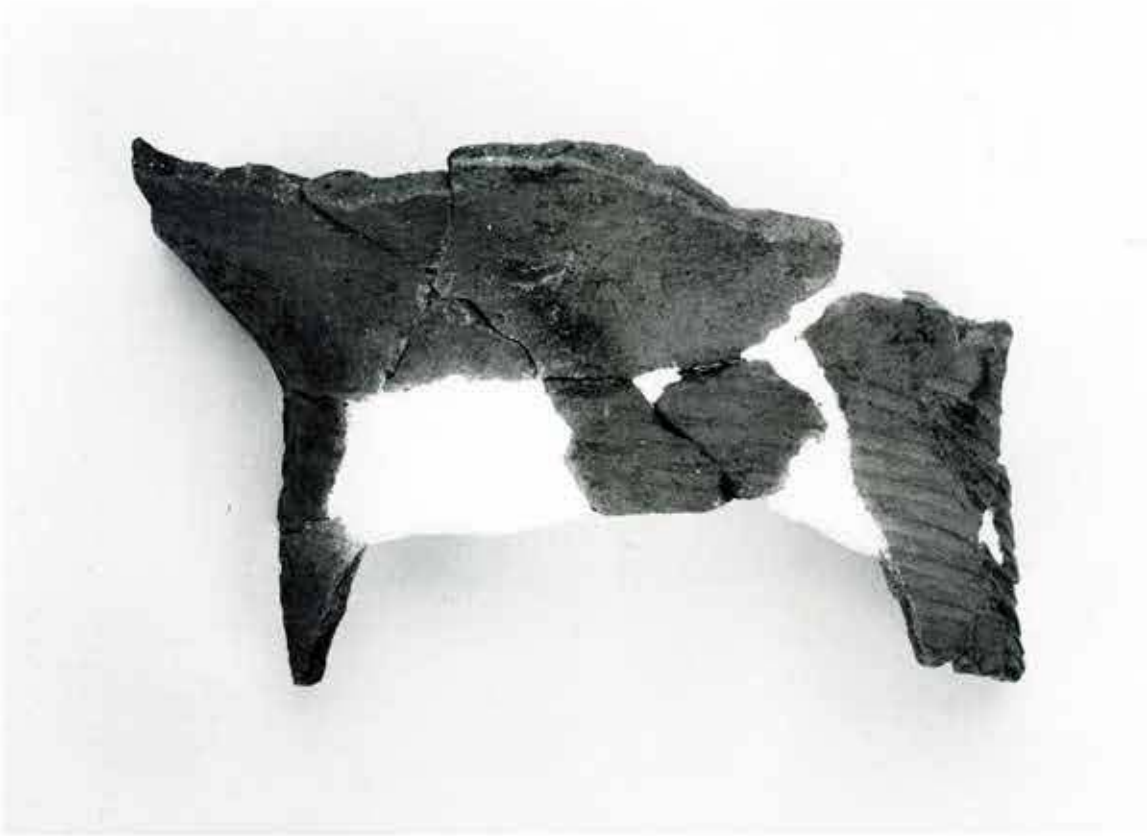


1　底津遺跡　包含層出土土器20（胴部1～3類）

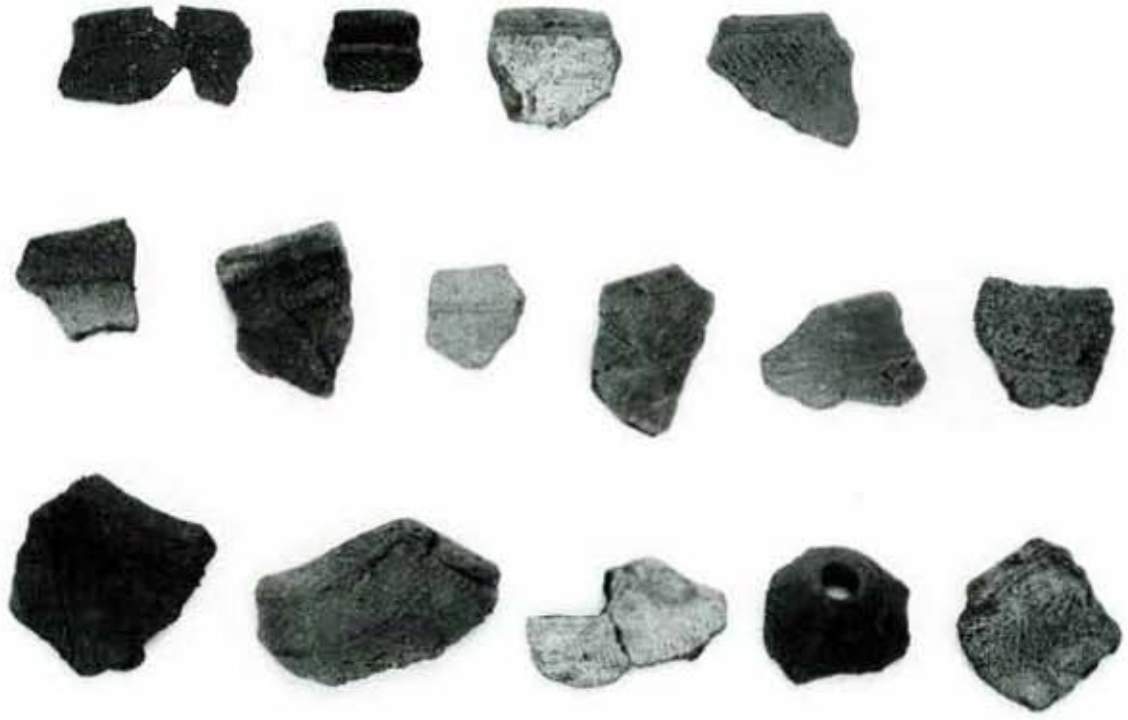
2　底津遺跡　包含層出土土器21（胴部2類）

図　版　32

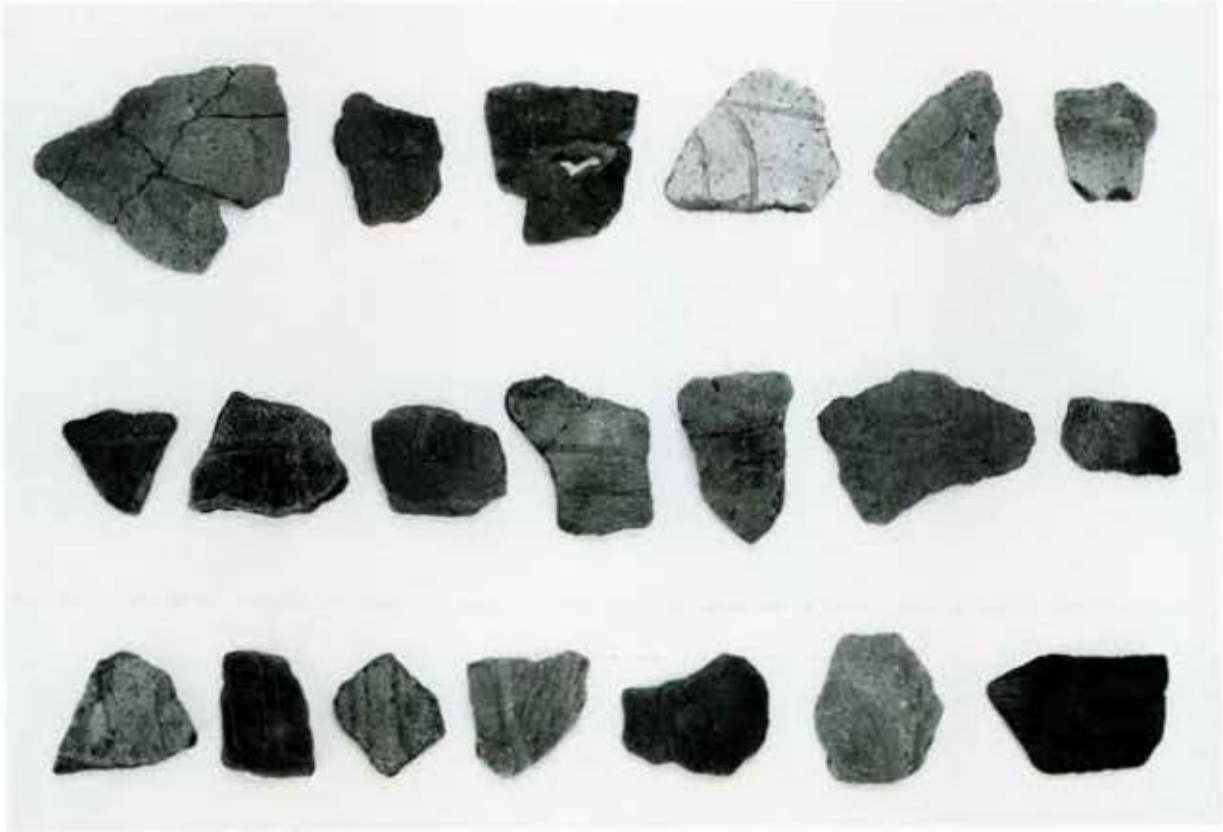
1　底津遺跡　包含層出土土器㉒（胴部 4 類）



2　底津遺跡　包含層出土土器㉓（胴部 5 類）

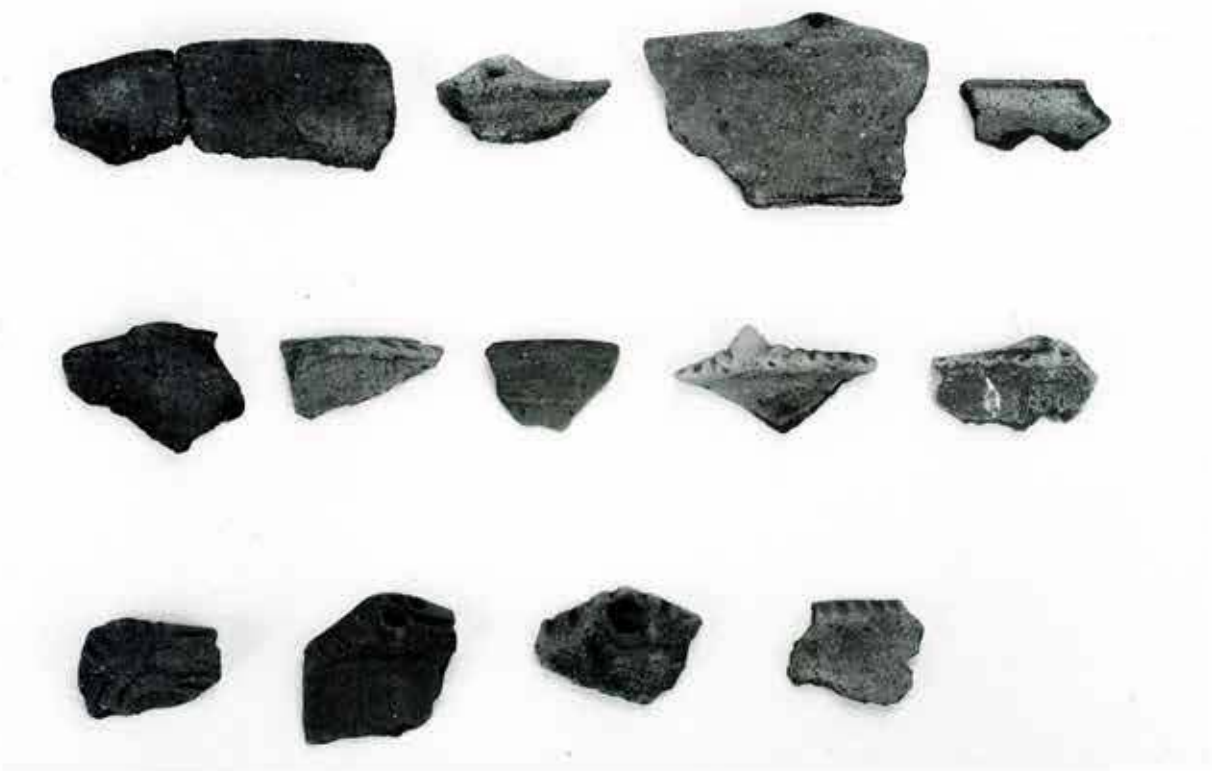


1　底津遺跡　包含層出土土器24（第13群１・２類）



2　底津遺跡　包含層出土土器25（第13群３・４類）

図　版　34



1　底津遺跡　包含層出土土器㉖（第14群）

2　底津遺跡　包含層出土土器㉗（浅鉢）

1　底津遺跡　包含層出土土器28（浅鉢）

2　底津遺跡　包含層出土石器1

図　版　36

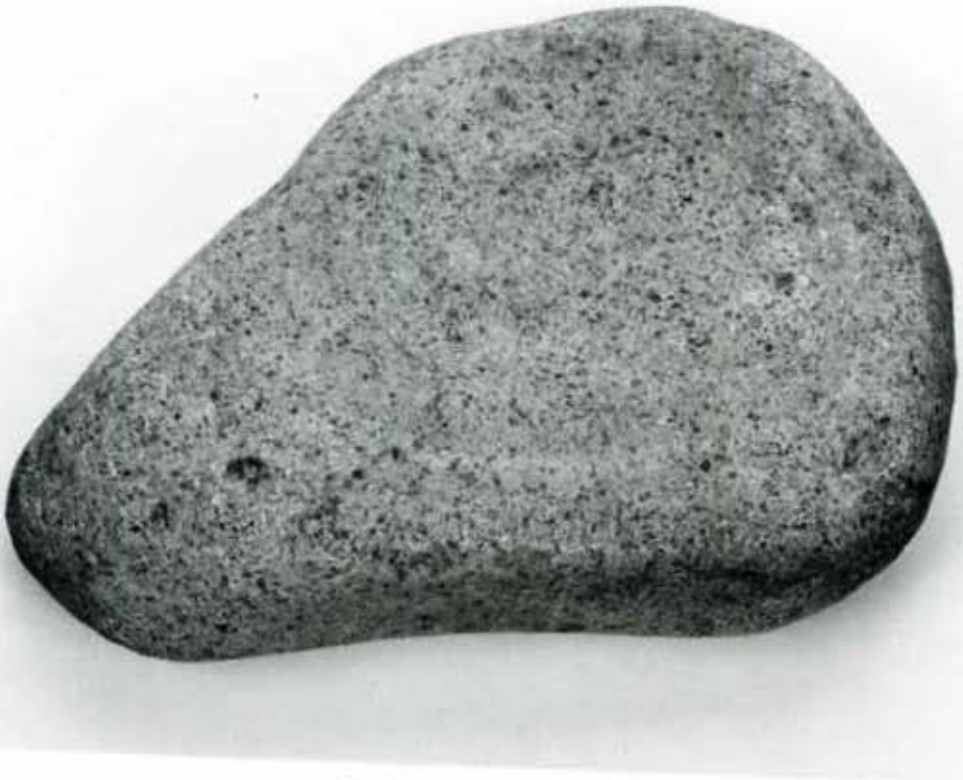
1　底津遺跡　包含層出土石器②

2　底津遺跡　包含層出土石器③

1　底津遺跡　包含層出土石器④

2　底津遺跡　包含層出土石器⑤

1　底津遺跡　包含層出土石器⑥



2　底津遺跡　包含層出土石器⑦

報告書抄録

ふりがな	ひせ・そこついせき
書名	**飛瀬・底津遺跡**
副書名	国道256号道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	佐野康雄
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒500　岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）Tel058(264)1111内線814
発効年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
飛瀬遺跡	岐阜県武儀郡洞戸村飛瀬オキドノ	461	G27H 01194	35° 36′ 55″	136° 48′ 29″	19930714 ～ 19940908	3,300㎡	国道256号道路改良工事に伴う。
底津遺跡	岐阜県武儀郡栗原字底津	461	G27H 06827	35° 36′ 54″	136° 48′ 35″	19930420 ～ 19931126	600㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飛瀬遺跡	遺物包蔵地	縄文時代早期前半～中期	集石遺構・土坑	押型文土器（縄文時代早期前半）	大鼻式に比定される良好な資料が出土し、同層中より表裏縄文土器も伴出している。
		中世	建物址・土壙	山茶碗・小皿 土師器皿・古瀬戸 常滑	
底津遺跡	集落跡	縄文時代早期後半～後期前半	住居址	縄文式土器（縄文時代中期後半～後期前半）	縄文時代中期後半～後期前半にかけての集落が展開している。また住居址内より注口部を1つもつ異形土器が出土している。
		中世	土壙墓	山皿・刀子	

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第23集

飛瀬・底津遺跡

国道256号道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書

1995年３月31日　印刷
1995年３月31日　発行

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）

印　　刷　株式会社　太　洋　社
岐阜県本巣郡北方町北方

『飛瀬・底津遺跡』調査報告書正誤表

ページ	訂正個所	誤	正
5	２６行目	現在１６ケ所の遺跡が	現在１７ケ所の遺跡が
抄録	１０段目	発効年月日	発行年月日
奥付け	１ 行 目	第２３集	第２１集